

---

---

# Oracle(R) Hyperion Enterprise Performance Management System

リリース 11.1.1.3

---

セキュリティ管理ガイド

**ORACLE**  
ENTERPRISE PERFORMANCE  
MANAGEMENT SYSTEM

EPM System セキュリティ管理ガイド, 11.1.1.3

Copyright © 2005, 2009, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

著者: EPM Information Development Team

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アSEMBル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントが、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供される場合は、次の Notice が適用されます。U.S. GOVERNMENT RIGHTS: Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する場合、このソフトウェアを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性 (redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことに起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

このソフトウェアおよびドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても、一切の責任を負いかねます。

---

# 目次

---

<b>第 1 章 EPM System セキュリティについて</b> .....	13
セキュリティ・コンポーネント .....	13
ユーザー認証 .....	13
認証コンポーネント .....	13
セキュリティ API .....	14
ネイティブ・ディレクトリ .....	14
ユーザー・ディレクトリ .....	14
EPM System 製品への直接シングル・サインオン .....	15
外部システムからのシングル・サインオン .....	16
プロビジョニング(役割ベースの認証) .....	17
役割 .....	18
グローバルな役割 .....	18
事前定義済役割 .....	19
集約役割 .....	19
ユーザー .....	19
グループ .....	19
<b>第 2 章 EPM System セキュリティの設定</b> .....	21
ユーザーの作成 .....	21
グループの作成 .....	21
Shared Services に対するユーザー・ディレクトリの特定 .....	22
<b>第 3 章 セキュリティ・エージェントでの SSO の使用可能</b> .....	23
概要 .....	23
サポートされている SSO メソッド .....	24
HTTP ヘッダー .....	24
カスタム・ログイン・クラス .....	24
getUserName メソッド .....	25
getPassword メソッド .....	25
HTTP 認証ヘッダー .....	25
HTTP 要求からリモート・ユーザーを取得 .....	25
Oracle Access Manager からの SSO .....	26
Oracle Application Server シングル・サインオン .....	26

前提条件	26
OSSO の構成	26
IIS の使用方法	27
前提条件	27
IIS を使用した OSSO の構成	28
SSO 用の EPM System 製品の保護	28
保護するリソース	29
保護しないリソース	30
SiteMinder からのシングル・サインオン	31
注意事項	32
SiteMinder ポリシー・サーバーの構成	32
SiteMinder Web エージェントの構成	33
EPM System で SiteMinder を使用可能にする	33
Kerberos シングル・サインオン	33
概要	34
サポート制約事項	35
前提条件	35
Oracle Application Server を使用した Kerberos SSO	35
前提条件	36
EPM System の構成	36
WebLogic Server を使用した Kerberos SSO	37
前提条件	37
EPM System における SSO の使用可能	38
WebSphere を使用した Kerberos SSO	38
前提条件	38
EPM System における SSO の使用可能	39
SSO 用の EPM System の構成	39
SSO 用の Shared Services の構成	39
SSO 用の EPM Workspace の構成	41
CMC における SSO 設定の入力	41
信頼できるパスワードの定義	42
SAP Enterprise Portal からのシングル・サインオン	43
ネストされた SAP グループ	44
配置場所	44
前提条件	45
<b>第 4 章 Shared Services Console</b>	<b>47</b>
Shared Services Console の起動	47
Shared Services Console の概要	48

Shared Services Console でのナビゲート .....	48
ユーザー、グループ、役割および委任リストの検索 .....	49
<b>第 5 章 ユーザー・ディレクトリの構成 .....</b>	<b>51</b>
ネイティブ・ディレクトリとしての Oracle Internet Directory の設定 .....	51
既存の OpenLDAP の OID への移行 .....	52
OID の新規インストールのネイティブ・ディレクトリとしての使用方 法 .....	53
ネイティブ・ディレクトリ構成の変更 .....	53
OpenLDAP データの OID へのインポート .....	55
Shared Services の再起動 .....	55
EPM System 製品の再起動 .....	55
カスタム認証モジュールの使用方法 .....	55
前提条件 .....	57
手順の概要 .....	57
EPM System ホスト・マシン上の共通の場所へのカスタム認証モジュールの 追加 .....	58
EPM System J2EE アプリケーション・アーカイブの準備 .....	58
Essbase クラスパスへのカスタム・モジュールの追加 .....	60
Financial Management クラスパスへのカスタム・モジュールの追加 .....	61
Reporting and Analysis コア・サービス・クラスパスへのカスタム・モジュール の追加 .....	61
Shared Services の手順 .....	62
ユーザー・ディレクトリ構成の更新 .....	62
セキュリティ・オプションの更新 .....	63
ユーザー・ディレクトリ構成に関連する操作 .....	63
MSAD 情報 .....	64
DNS 検索とホスト名検索 .....	64
グローバル・カタログ .....	64
OID、MSAD およびその他の LDAP ベースのユーザー・ディレクトリの構 成 .....	65
SAP R3 ネイティブ・リポジトリの構成 .....	74
リレーショナル・データベースをユーザー・ディレクトリとして構成する ...	76
ユーザー・ディレクトリの接続のテスト .....	79
ユーザー・ディレクトリ設定の編集 .....	80
NTLM 構成の更新 .....	81
UNIX アプリケーション環境での NTLM .....	81
複数の NTLM ドメインのサポート .....	82
NTLM 外部ユーザー・ディレクトリの構成の変更 .....	83
ユーザー・ディレクトリ構成の削除 .....	85

ユーザー・ディレクトリの検索順の管理 .....	85
ユーザー・ディレクトリの検索順への追加 .....	86
検索順の変更 .....	86
検索順の割当ての除去 .....	87
セキュリティ・オプションの設定 .....	87
特殊文字の使用方法 .....	89
<b>第 6 章 アプリケーション・グループおよびアプリケーションでの作業 .....</b>	<b>93</b>
概要 .....	93
アプリケーション・グループの使用 .....	93
アプリケーション・グループの作成 .....	94
アプリケーション・グループ・プロパティの変更 .....	94
アプリケーション・グループの削除 .....	95
アプリケーションの管理 .....	95
アプリケーションへのアクセス権の割当て .....	96
アプリケーションの移動 .....	97
アプリケーション間のプロビジョニング情報のコピー .....	97
複数のアプリケーションの削除 .....	97
アプリケーションの削除 .....	98
アプリケーションの参照 .....	98
<b>第 7 章 委任されたユーザー管理 .....</b>	<b>99</b>
委任されたユーザー管理について .....	99
管理者の階層 .....	99
Shared Services 管理者 .....	99
委任された管理者 .....	100
委任されたユーザー管理モードを使用可能にする .....	100
委任された管理者の作成 .....	101
プランニング・ステップ .....	101
委任された管理者のユーザー・アカウント .....	101
委任プランの作成 .....	101
委任された管理者のプロビジョニング .....	101
委任リストの作成 .....	102
委任リストの変更 .....	104
委任リストの削除 .....	105
委任されたレポートの表示 .....	106
<b>第 8 章 ネイティブ・ディレクトリの管理 .....</b>	<b>107</b>
ネイティブ・ディレクトリ情報 .....	107
ネイティブ・ディレクトリのデフォルトのユーザーおよびグループ .....	108

OID のネイティブ・ディレクトリとしての使用方法	108
ネイティブ・ディレクトリの管理	108
OID の管理	109
パスワード・ポリシーの設定	109
ネイティブ・ディレクトリのユーザー・パスワードの変更	110
OpenLDAP のネイティブ・ディレクトリとしての使用方法	110
インストール先	110
OpenLDAP の開始	111
OpenLDAP の標準モードでの開始	111
OpenLDAP のデバッグ・モードでの開始	111
OpenLDAP の停止	111
ネイティブ・ディレクトリ・ユーザーの管理	111
ユーザーの作成	112
ユーザー・アカウントの変更	113
ユーザー・アカウントの非アクティブ化	114
非アクティブ・ユーザー・アカウントのアクティブ化	114
ユーザー・アカウントの削除	115
ネイティブ・ディレクトリ・グループの管理	115
ネストされたグループ	116
グループの作成	116
グループの変更	118
グループの削除	120
役割の管理	120
集約役割の作成	121
集約役割の変更	122
集約役割の削除	123
OpenLDAP root ユーザー・パスワードの変更	123
OpenLDAP データベースのバックアップ	124
ネイティブ・ディレクトリ・データの回復	124
OpenLDAP データの回復	125
ネイティブ・ディレクトリの移行	126
<b>第9章 プロビジョニングの管理</b>	<b>127</b>
プロビジョニングについて	127
プロビジョニング・プロセスの開始する前に	127
プロビジョニング・ステップの概要	128
管理ユーザーのプロビジョニング	128
EPM System ユーザーのプロビジョニング	129
ユーザーとグループのプロビジョニング	130

ユーザーとグループのプロビジョニング解除 .....	131
監査セキュリティ・アクティビティおよび LCM アーチファクト .....	131
監査データの削除 .....	132
アプリケーションおよびアプリケーション・グループレベルの監査オブジェクトの選択 .....	133
レポートの生成 .....	133
プロビジョニング・レポートの生成 .....	134
監査レポートの生成 .....	135
移行ステータス・レポートの生成 .....	136
ネイティブ・ディレクトリ・データのインポートとエクスポート .....	137
<b>第 10 章 ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティの使用法</b> .....	<b>139</b>
ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティについて .....	139
ネイティブ・ディレクトリの古いデータの消去 .....	139
一意の ID 属性を使用するための Shared Services のアップグレード .....	140
重要な考慮事項 .....	140
アップグレードの手順 .....	141
ユーザー・ディレクトリ全体のユーザーとグループの移行 .....	142
前提条件 .....	142
移行中に行われる処理 .....	143
ユーザー・ディレクトリ間でユーザーおよびグループの移動を処理するためにネイティブ・ディレクトリを更新する .....	143
移行後の手順 .....	144
実行される操作 .....	144
ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティのインストール .....	144
ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティの実行 .....	145
ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティのオプション .....	146
ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティのログ・ファイル .....	146
個々の製品の更新 .....	147
Essbase .....	147
Planning .....	148
Financial Management .....	149
Reporting and Analysis .....	149
Strategic Finance .....	150
<b>第 11 章 EPM System の保護のガイドライン</b> .....	<b>151</b>
SSL の実装 .....	151
デフォルトの管理パスワードの変更 .....	151
ネイティブ・ディレクトリ・パスワードの変更 .....	152
OpenLDAP .....	152
OID .....	152



アプリケーション・サーバー管理者パスワードの変更	152
SSO 暗号化キーの再生成	154
セキュリティ構成への HTTP アクセスの使用不可	155
データベース・パスワードの変更	155
Cookie の保護	156
WebLogic Server	156
Oracle Application Server	156
Embedded Java コンテナ	157
WebSphere	157
OID のネイティブ・ディレクトリとしての使用	157
SSO トークンのタイムアウトの低減	157
セキュリティ・レポートの確認	157
認証システムの強力な認証としてのカスタマイズ	158
UDL ファイルの暗号化(Financial Management)	158
デバッグ・ユーティリティを使用不可にする	158
EPM Workspace	158
Performance Scorecard	159
デフォルトの Apache 情報の非表示	160
デフォルトの Web サーバー・エラー・ページの変更	161
サードパーティ製ソフトウェアのサポート	161
<b>付録 A. 製品の役割</b>	<b>163</b>
Shared Services 役割	163
Essbase の役割	165
Essbase Studio 役割	166
Reporting and Analysis 役割	167
Performance Management Architect 役割	169
Financial Management の役割	169
Planning 役割	171
Business Rules 役割	172
Business Modeling 役割	173
Profitability and Cost Management 役割	173
トランザクション・マネージャ役割	174
Performance Scorecard 役割	174
Essbase Provider Services 役割	175
Data Integration Management 役割	175
FDM の役割	175
ERP Integrator	176

<b>付録 B. Shared Services の役割と許可されたタスク</b> .....	177
<b>付録 C. Essbase のユーザー・プロビジョニング</b> .....	179
Shared Services Console の Essbase からの起動 .....	179
Essbase の役割 .....	180
Essbase の役割階層 .....	180
<b>付録 D. Essbase Studio のプロビジョニング</b> .....	181
前提条件 .....	181
Essbase Studio からの Shared Services Console の起動 .....	181
Essbase Studio 役割 .....	182
Essbase Studio 役割履歴 .....	182
役割別 Essbase Studio アーチファクト権限 .....	182
<b>付録 E. Reporting and Analysis のユーザー・プロビジョニング</b> .....	185
Shared Services Console の EPM Workspace からの起動 .....	185
Reporting and Analysis のプロビジョニング .....	185
前提条件 .....	185
Shared Services .....	186
Essbase .....	186
Reporting and Analysis .....	186
プロビジョニング・プロセス .....	186
Reporting and Analysis オブジェクトのアクセス制御の設定 .....	187
Reporting and Analysis 役割 .....	187
Reporting and Analysis 役割階層 .....	187
コンテンツ・マネージャの分岐 .....	188
スケジュール・マネージャの分岐 .....	188
役割の組合せの例 .....	189
<b>付録 F. Performance Management Architect のユーザー・プロビジョニング</b> .....	193
Performance Management Architect 役割 .....	193
Performance Management Architect アクセス・レベル .....	193
<b>付録 G. Profitability and Cost Management のユーザー・プロビジョニング</b> .....	195
前提条件 .....	195
EPM Workspace .....	195
Shared Services .....	195
Essbase .....	195
Profitability and Cost Management .....	196
Profitability and Cost Management からの Shared Services Console の起動 .....	196
Profitability and Cost Management 役割 .....	197

<b>付録 H. Financial Management のユーザー・プロビジョニング</b> .....	199
Shared Services Console の EPM Workspace からの起動 .....	200
Financial Management の役割 .....	200
ユーザーおよびグループの Financial Management アプリケーションへの割当て .....	201
Financial Management アプリケーションのセキュリティ・クラスの設定 .....	201
セキュリティ・クラスの作成 .....	201
セキュリティ・クラスの削除 .....	202
セキュリティ・クラスを選択 .....	202
セキュリティ・クラスへのアクセス権の割当て .....	202
Financial Management アプリケーションのセキュリティ・レポートの実行 .....	204
Financial Management ユーザーの Shared Services セキュリティへの移行 .....	204
<b>付録 I. Planning のユーザー・プロビジョニング</b> .....	205
手順の概要 .....	205
前提条件 .....	205
Shared Services .....	205
Essbase .....	206
Reporting and Analysis .....	206
EPM Workspace .....	206
Planning .....	206
プロビジョニング・プロセス .....	207
EPM Workspace からの Shared Services Console の起動 .....	208
Planning でのユーザーとグループのリフレッシュ .....	208
ユーザーとグループ ID の移行 .....	208
Planning 役割 .....	209
Essbase におけるデータへの書込みアクセス権 .....	209
Planning と Business Rules 間の役割 .....	209
Planning および Essbase 間のアクセス権 .....	210
接続タイプと Planning について .....	210
<b>付録 J. Business Rules のユーザー・プロビジョニング</b> .....	211
プロビジョニングの概要 .....	211
Shared Services Console の起動 .....	212
Business Rules のユーザー役割 .....	212
Business Rules ・ユーザーの Shared Services ・セキュリティへの移行 .....	212
<b>付録 K. Performance Scorecard のプロビジョニング</b> .....	213
概要 .....	213
要件 .....	213
セキュリティの割当て .....	214

提供されるセキュリティの役割 .....	215
カスタム・セキュリティの役割 .....	216
ドメイン .....	216
従業員 .....	216
<b>付録 L. Provider Services のユーザー・プロビジョニング</b> .....	217
Shared Services における管理者役割のプロビジョニング .....	217
Analytic Provider Services Users ユーザーの Shared Services への移行 .....	218
<b>付録 M. FDM</b> .....	219
前提条件 .....	219
FDM の役割 .....	219
FDM ユーザーのプロビジョニング .....	219
FDM ユーザーの Shared Services セキュリティへの移行 .....	220
<b>用語集</b> .....	223
<b>索引</b> .....	251

# 1

# EPM Systemセキュリティについて

## この章の内容

セキュリティ・コンポーネント .....	13
ユーザー認証.....	13
プロビジョニング(役割ベースの認証).....	17

## セキュリティ・コンポーネント

Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System アプリケーション・セキュリティは、ユーザー・アクセスと権限を制御する 2 つの独特かつ補足的なレイヤーから構成されています。

- 13 ページの「ユーザー認証」
- 17 ページの「プロビジョニング(役割ベースの認証)」

## ユーザー認証

ユーザー認証により、各ユーザーのログイン情報を検証することで EPM System 製品全体でシングル・サインオン(SSO)機能が使用可能になり、認証済ユーザーが判別されます。ユーザー認証は、製品固有の承認とともに、EPM System 製品にユーザーがアクセスするのを許可します。承認はプロビジョニングにより許可されます。

SSO は、EPM System 製品のユーザーが、セッションの開始時にログイン情報を 1 度のみ入力して、複数の製品にアクセスできるようにするセッションおよびユーザー認証プロセスです。SSO では、ユーザーがアクセスする各製品に別々にログインする必要がなくなります。

## 認証コンポーネント

次の項では、SSO をサポートするコンポーネントについて説明します。

- 14 ページの「セキュリティ API」
- 14 ページの「ネイティブ・ディレクトリ」
- 14 ページの「ユーザー・ディレクトリ」

## セキュリティ API

セキュリティ・アプリケーション・プログラミング・インタフェース(セキュリティ API)は、ユーザーを検証し、EPM System 製品へのユーザーのアクセスを解釈するメイン・インタフェースです。Java API により、EPM System 製品は Oracle Hyperion(R) Shared Services で構成されたユーザー・ディレクトリに対してユーザーを認証できます。また、Oracle Access Manager および CA SiteMinder などのセキュリティ・エージェントとの統合、および名前と ID に基づきユーザーとグループの取得も可能になります。各 EPM System アプリケーションは、セキュリティ API を使用し、ユーザー認証をサポートします。

## ネイティブ・ディレクトリ

ネイティブ・ディレクトリは、プロビジョニングをサポートするために Shared Services で使用される、Lightweight Directory Access Protocol (LDAP)を使用可能なユーザー・ディレクトリを参照します。EPM System 製品は、Oracle Internet Directory (OID)または OpenLDAP をネイティブ・ディレクトリとして使用できます。OpenLDAP は、Shared Services でバンドルされ構成される、オープンソース LDAP ベースのユーザー・ディレクトリです。OID は、スケーラビリティ、高可用性、および Oracle データベースのセキュリティ機能を活用する、LDAP バージョン 3 に準拠したユーザー・ディレクトリです。OID により、セントラル・ユーザー・リポジトリとしての機能が果たされ、Oracle 環境のユーザー管理が簡素化されます。OID は、Shared Services でバンドルされないため、別々にインストールされる必要があります。

ネイティブ・ディレクトリ機能:

- EPM System 製品で必要なデフォルトの Shared Services ユーザー・アカウントを保持および管理するために使用されます。
- すべての EPM System プロビジョニング情報用セントラル・ストレージです。ここで、ユーザー、グループおよび役割間の関係が保管されます。

ネイティブ・ディレクトリは、Oracle Hyperion(R) Shared Services Console を使用して、アクセスおよび管理されます。ユーザーのプロビジョニングの詳細は、[第 8 章「ネイティブ・ディレクトリの管理」](#)を参照してください。

## ユーザー・ディレクトリ

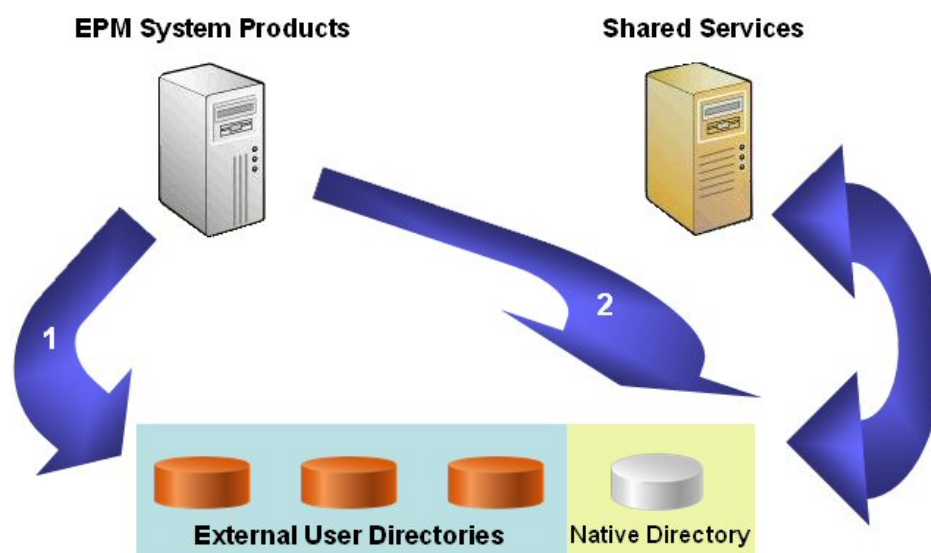
ユーザー・ディレクトリは、コーポレート・ユーザーおよび Shared Services に準拠した ID 管理システムを参照します。EPM System 製品は、OID、Sun Java システム・ディレクトリ・サーバー(以前の SunONE ディレクトリ・サーバー)、Microsoft Active Directory、および LDAP バージョン 3 を実装するカスタムビルドのユーザー・ディレクトリなどの、LDAP ベースのユーザー・ディレクトリを含む、数個のユーザー・ディレクトリ上でサポートされます。リレーショナル・データベース、Windows NT LAN マネージャ(NTLM)、および SAP ネイティブ・リポジトリもユーザー・ディレクトリとしてサポートされます。

ネイティブ・ディレクトリに加え、1 つ以上のユーザー・ディレクトリを EPM System 製品のユーザー情報プロバイダとして構成できます。

EPM System 製品とともに使用されるユーザー・ディレクトリには、EPM System 製品にアクセスする各ユーザーのアカウントが含まれている必要があります。ユーザーは、プロビジョニングを促進するグループに割り当てられます。

## EPM System 製品への直接シングル・サインオン

EPM System 製品は、直接認証で使用可能なユーザー・ディレクトリに接続され、ログイン画面で入力されたユーザー名およびパスワード(ログイン情報)が確認されます。



1. ユーザーは、ブラウザ経由で EPM System 製品ログイン画面にアクセスし、ユーザー名とパスワードを入力します。

EPM System 製品で実装されたセキュリティ API では、構成済ユーザー・ディレクトリ(ネイティブ・ディレクトリなど)に問合せが行われ、ユーザーのログイン情報が確認されます。検索順で、検索の順序が確立されます。ユーザー・ディレクトリで一致したユーザー・アカウントが見つかった場合、検索は中止され、ユーザー情報が EPM System 製品に戻されます。

ユーザー・アカウントがどのユーザー・ディレクトリにもない場合、アクセスは拒否されます。

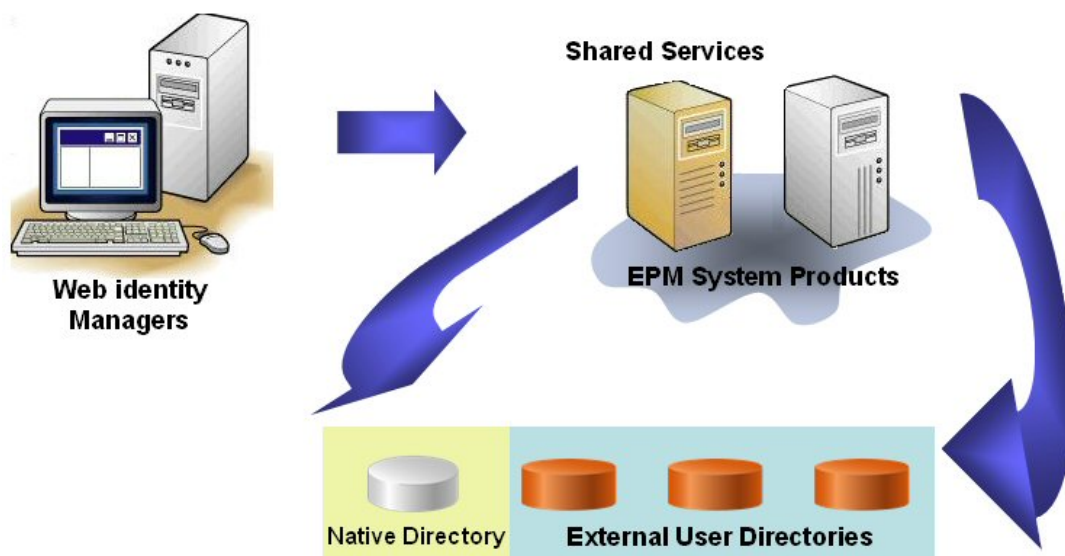
2. 取得したユーザー情報を使用して、EPM System 製品では、ネイティブ・ディレクトリへの問合せが行われ、ユーザーのプロビジョニングの詳細が入手できます。
3. EPM System 製品では、製品でアクセス制御リスト(ACL)がチェックされ、ユーザーが製品内でアクセスできるオブジェクトが決定されます。

ネイティブ・ディレクトリからプロビジョニング情報を受け取る際は、EPM System 製品ではユーザーが使用可能です。この時点で、SSO は、ユーザーがプロビジョニングされる EPM System 製品すべてで使用可能です。

## 外部システムからのシングル・サインオン

EPM System 製品では、SSO を使用可能にするには、Oracle Access Manager、Oracle Application Server シングル・サインオン(OSSO)、CA SiteMinder および SAP Enterprise Portal など、外部ソースによってすでに認証されているユーザーを受け入れるように構成できます。外部システムからの SSO は、EPM System Web アプリケーションのみで使用可能です。このシナリオでは、EPM System 製品は信頼済外部ソースによって提供されるユーザー情報を使用し、ユーザーのアクセス権を判別します。セキュリティを強化するには、サーバーへの直接のアクセスがファイアウォールでブロックされることをお勧めします。また、すべての要求が SSO ポータル経由でルーティングされる必要があります。

外部ソースを使用した SSO は、条件を満たした SSO メカニズム経由で認証済のユーザー・ログイン情報を受け入れることによりサポートされます。24 ページの「サポートされている SSO メソッド」を参照してください。外部システムでは、ユーザーが認証され、ユーザーのログイン名が EPM System に渡され、ここで構成済のユーザー・ディレクトリに対してログイン名がチェックされます。このコンセプトの説明は次のとおりです。



1. ブラウザを使用して、ユーザーは、Web ID 管理ソリューション(Oracle Access Manager など)、または SAP Enterprise Portal のログイン画面にアクセスします。ユーザー名とパスワードを入力します。これらは、ユーザーの信頼性を確認するために、Web ID 管理ソリューションで構成済ユーザー・ディレクトリに対して検証されます。EPM System 製品は、これらのユーザー・ディレクトリと連動するようにも構成されています。

認証済ユーザーに関する情報は、EPM System 製品に渡され、この製品で、この情報が有効なものとして受け入れられます。

ユーザーが SAP Portal にログオンした場合、SAP ログオン・チケットが EPM System 製品に渡されます。この製品では、SAP 証明書を使用して SAP ログオン・チケットが復号化されます。

Web ID 管理ソリューションでは、条件を満たした SSO メカニズムを使用して、ユーザーのログイン名(表 8 のログイン属性の説明を参照)が EPM System 製



品に渡されます。24 ページの「サポートされている SSO メソッド」を参照してください。

2. ユーザーのログイン情報を確認するには、EPM System 製品では、ユーザー・ディレクトリでユーザーの検索が試みられます。一致するユーザー・アカウントが見つかった場合、ユーザー情報は EPM System 製品に戻されます。Shared Services セキュリティでは、EPM System 製品全体で SSO を使用可能にする SSO トークンが設定されます。
3. 取得したユーザー情報を使用して、EPM System 製品では、ネイティブ・ディレクトリへの問合せが行われ、ユーザーのプロビジョニングの詳細が入手できます。

ユーザー・プロビジョニング情報を受け取る際は、EPM System 製品ではユーザーが使用可能です。SSO は、ユーザーがプロビジョニングされる EPM System 製品すべてで使用可能です。

**注：** SAP を使用した SSO は、SAP ログオン・チケットを受け入れることでサポートされます。SAP ネイティブ・リポジトリで定義されたユーザーは、SAP Portal と EPM System 製品間で移動できます。SAP BW または R/3 ネイティブ・リポジトリは、Shared Services の外部ディレクトリとして構成される場合、ユーザーは、SAP システムに保管されているユーザー ID とパスワードを使用して EPM System 製品にログインできます。

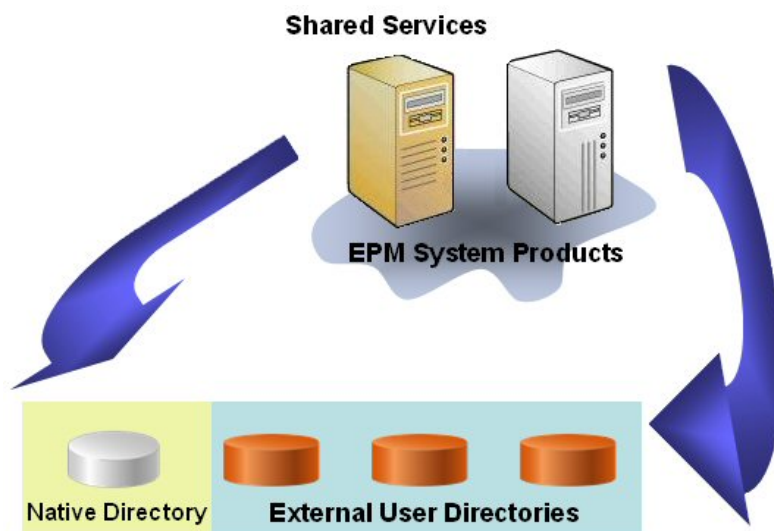
## プロビジョニング(役割ベースの認証)

EPM System アプリケーション・セキュリティでは、役割のコンセプトを使用して製品へのユーザー・アクセス、製品機能へのユーザー・アクセスを判別する権限が決定されます。一部の EPM System 製品は、オブジェクトへのユーザー・アクセスをさらに改善するために、オブジェクトレベルの ACL を順守させます。

各 EPM System 製品では、様々な業務上の必要に対して調整された数個のデフォルトの役割が提供されます。Shared Services で登録された各 EPM System アプリケーションからの事前定義済役割は、Shared Services Console から使用可能です。これらの役割はプロビジョニングで使用されます。特定の要件に合うように、デフォルトの役割を集約する追加の役割も作成できます。EPM System リソースに、ユーザーとグループ固有のアクセス権を許可するプロセスは、プロビジョニングと呼ばれます。

ネイティブ・ディレクトリおよび構成済ユーザー・ディレクトリは、プロビジョニング(認証)プロセス用のユーザーとグループ情報のソースです。Shared Services Console からのすべての構成済ユーザー・ディレクトリから、ユーザーとグループを参照およびプロビジョニングできます。また、プロビジョニング・プロセスのネイティブ・ディレクトリで作成されたアプリケーション固有の集約役割も使用できます。

このイラストレーションは承認プロセスの概要を示しています。



1. ユーザーが認証されたら、EPM System 製品では、ユーザー・ディレクトリへの問合せが行われ、ユーザーのグループが判別されます。
2. EPM System 製品では、グループとユーザー情報が使用され、Shared Services からユーザーのプロビジョニング・データを取得されます。この製品ではこのデータが使用され、ユーザーがアクセスできるリソースが決定されます。

製品固有のアクセス制御を設定するなどの製品固有のプロビジョニング・タスクは、各製品から完成されます。このデータは、プロビジョニング・データと組み合されて、ユーザーの製品アクセスを決定します。

EPM System 製品の役割ベースのプロビジョニングでは、これらのコンセプトが使用されます。

## 役割

役割は、EPM System リソースで機能を実行するユーザーとグループに許可されるアクセス権を定義する構築(アクセス制御リストに類似)です。役割は、リソースまたはリソース・タイプ(レポートなどのユーザーがアクセスできるもの)と、ユーザーがリソース(表示や編集など)で実行できるアクションの組合せです。

EPM System アプリケーション・リソースへのアクセスは制限されています。アクセスを提供する役割がユーザー、またはユーザーが属するグループに割り当てられてからのみ、ユーザーはこれらのリソースにアクセスできます。役割に基づいたアクセス制限では、管理者は、アプリケーション・アクセスを制御および管理できます。付録 A 「製品の役割」を参照してください。

## グローバルな役割

複数の製品に及ぶ Shared Services であるグローバルな役割により、ユーザーは Shared Services Console 内の特定のタスクを実行できます。Shared Services のグローバルな役割の完全なリストは、付録 B 「Shared Services の役割と許可されたタスク」に関する説明を参照してください。

## 事前定義済役割

事前定義済役割は、EPM System 製品における組込みの役割です。これらの役割を製品から委任できません。事前定義済役割は、アプリケーション登録プロセス中に、Shared Services に登録されます。

## 集約役割

カスタムの役割という名でも知られる集約役割では、EPM System 製品内の複数の製品の役割が集約されます。集約役割は、他の集約役割を含む、複数の役割から構成されています。たとえば、Shared Services 管理者またはプロビジョニング・マネージャは、プランナおよび表示ユーザーの役割を集約役割に組み合わせるプランニングの役割を作成できます。役割の集約では、数個の粒度の高い役割を含む製品の管理を簡素化できます。グローバル Shared Services の役割は、集約役割に含めることができます。製品を補う集約役割は作成できません。

## ユーザー

ユーザー・ディレクトリには、EPM System 製品にアクセスできるユーザーに関する情報が保管されています。認証および承認プロセスの双方でユーザー情報が使用されます。ネイティブ・ディレクトリ・ユーザーを作成して管理できるのは、Shared Services Console からのみです。

すべての構成済ユーザー・ディレクトリからのユーザーは、Shared Services Console から確認できます。これらのユーザーは、Shared Services に登録された EPM System 製品でアクセス権を許可するように個別にプロビジョニングできます。個別ユーザーへのプロビジョニングはお勧めしません。

## グループ

グループは、ユーザーまたは他のグループのコンテナです。Shared Services Console からネイティブ・ディレクトリ・グループを作成して、管理できます。すべての構成済ユーザー・ディレクトリからのグループは、Shared Services Console に表示されます。これらのグループをプロビジョニングして、Shared Services に登録された EPM System 製品の権限を許可できます。



# 2

## EPM Systemセキュリティの設定

### この章の内容

ユーザーの作成 .....	21
グループの作成 .....	21
Shared Services に対するユーザー・ディレクトリの特定 .....	22

EPM System 製品のセキュリティ環境は、認証と承認という 2 つの補完的なレイヤーで構成されています。

次の項に記載の様々な手順を実行して、ユーザーを直接認証するための EPM System セキュリティを設定します。

[21 ページの「ユーザーの作成」](#)

[21 ページの「グループの作成」](#)

[22 ページの「Shared Services に対するユーザー・ディレクトリの特定」](#)

## ユーザーの作成

EPM System 製品のセキュリティ環境では、認証プロセスの一環としてユーザーのログイン情報をユーザー・ディレクトリに対して確認する必要があります。これは、各 EPM System アプリケーション・ユーザーが、ユーザー・ディレクトリにアカウントを持つことを要求します。ユーザー・ディレクトリで定義されているユーザー識別子(通常はユーザー名)は、EPM System アプリケーション・セキュリティが構築される基礎です。

ほとんどの配置シナリオでは、既存のユーザー・ディレクトリ(ユーザー・アカウントを持つ)はユーザー認証をサポートするために使用されます。ユーザー・アカウントの作成については、ベンダーのドキュメントを参照してください。ネイティブ・ディレクトリ・ユーザーの作成については、[112 ページの「ユーザーの作成」](#)を参照してください。

## グループの作成

ユーザー・ディレクトリ上のユーザー・アカウントは、ユーザーの機能や地理的な場所などの共通の特徴に基づいてグループへのメンバーシップが承認されます。たとえば、ユーザーを組織内の機能に基づいてスタッフ、マネージャ、セールス、Western\_Sales などのグループに分類できます。ユーザーは、ユーザー・ディレク

トリの1つ以上のグループに属することができます。これは、プロビジョニング・プロセスを促進するための重要な考慮点です。

グループを作成し、グループ・メンバーシップを割り当てる手順は、ユーザー・ディレクトリによって異なります。グループの作成およびグループ・メンバーシップの割当て方法については、ベンダーのドキュメントを参照してください。ネイティブ・ディレクトリ・グループの作成方法については、[115 ページの「ネイティブ・ディレクトリ・グループの管理」](#)を参照してください。

## Shared Services に対するユーザー・ディレクトリの特定

Shared Services のインストールおよび配置プロセスは、ネイティブ・ディレクトリを EPM System 製品のデフォルト・ユーザー・ディレクトリとして設定および構成します。ユーザー認証および SSO をサポートするために使用する追加のユーザー・ディレクトリは、Shared Services Console を使用して別々に構成する必要があります。

ユーザー・ディレクトリの構成中に、各ユーザー・ディレクトリの検索順を割り当てます。この順序によって、ユーザー・ログイン情報に一致するユーザー・アカウントを検索するために、認証プロセスが構成済ユーザー・ディレクトリ内を検索するシーケンスが判別されます。デフォルトでは、EPM System アプリケーション・セキュリティは、一致するユーザー・アカウントが見つかったときに検索プロセスを終了するように構成されます。複数のユーザー・ディレクトリを使用する場合、ユーザー・アカウントをユーザー・ディレクトリ間で正規化することをお勧めします。

ユーザー・ディレクトリの構成方法の詳細:

- [65 ページの「OID、MSAD およびその他の LDAP ベースのユーザー・ディレクトリの構成」](#)
- [74 ページの「SAP R3 ネイティブ・リポジトリの構成」](#)
- [83 ページの「NTLM 外部ユーザー・ディレクトリの構成の変更」](#)

# 3

## セキュリティ・エージェント でのSSOの使用可能

### この章の内容

概要 .....	23
サポートされている SSO メソッド.....	24
Oracle Access Manager からの SSO .....	26
Oracle Application Server シングル・サインオン.....	26
SSO 用の EPM System 製品の保護.....	28
SiteMinder からのシングル・サインオン.....	31
Kerberos シングル・サインオン.....	33
SSO 用の EPM System の構成.....	39
SAP Enterprise Portal からのシングル・サインオン.....	43

## 概要

EPM System 製品は、Oracle Access Manager、OSSO、CA SiteMinder、Kerberos などの Web ID 管理ソリューションから SSO 用の認証されたユーザー・ログイン情報を受け入れるように構成できます。Web ID 管理ソリューションは、認証されたユーザーのログイン情報を EPM System 製品にシードし、Shared Services で構成されたユーザー・ディレクトリに対してそのログイン情報を確認します。ユーザーが構成済のユーザー・ディレクトリで使用できる場合、EPM System セキュリティは、ユーザーがプロビジョニングされるすべての製品へのユーザー・アクセスを付与する SSO トークンを発行します。

Web ID 管理ソリューションから SSO が実装される場合、ユーザーは、クライアント・システムへログインする際、または EPM System 製品などの保護されているリソースへアクセスする際のいずれかに、Web ID 管理ソリューションによって課題を出されます。EPM System 製品は、Web ID 管理ソリューションによって渡された ID を信頼することで、SSO をサポートしています。

SSO を使用可能にするには、Web ID 管理ソリューションおよび EPM System 製品が同じセットのユーザー・ディレクトリを使用するように構成する必要があります。また、Shared Services で構成されたユーザー・ディレクトリをシングル・サインオン用に Web ID 管理ソリューションをサポートするように設定する必要があります。87 ページの「セキュリティ・オプションの設定」を参照してください。

**注：** Shared Services で構成された企業ユーザー・ディレクトリは、Web ID 管理ソリューションからの SSO が使用可能になっている場合は信頼する必要があります。

# サポートされている SSO メソッド

SSO では、Web ID 管理ソリューションで、認証済ユーザーのログイン名が EPM System 製品に渡される必要があります。次のメソッドを使用できます。

## HTTP ヘッダー

Oracle Access Manager または SiteMinder (またはカスタム SSO プロバイダ) を Web ID 管理ソリューションとして使用中の場合、HTTP ヘッダーを使用して、認証済ユーザーのログイン名を EPM System 製品に渡します。

EPM System 製品ユーザーのログイン名は、Shared Services でユーザー・ディレクトリを構成中に指定されるログイン属性によって判別されます。表 8 を参照してください。

HTTP ヘッダーには、ログイン属性として設定される属性の値が含まれている必要があります。たとえば、uid がログイン属性値である場合、HTTP ヘッダーは、uid 属性の値を持っている必要があります。

カスタム HTTP ヘッダーの定義および発行の詳細は、Web ID 管理ソリューションのドキュメントを参照してください。

EPM System 製品に実装されたセキュリティ API により、HTTP ヘッダーが分析され、Shared Services で構成されたユーザー・ディレクトリに対して持っているログイン名が検証されます。

## カスタム・ログイン・クラス

ユーザーがログインすると、Web ID 管理ソリューションでは、ユーザーがディレクトリ・サーバーに対して認証され、SSO メカニズムで認証済ユーザーのログイン情報が要約されて、他のシステムで SSO が使用可能になります。Web ID 管理ソリューションで、EPM System 製品によってサポートされないメカニズムが使用されるか、ログイン属性の値が SSO メカニズムで使用できない場合、カスタム・ログイン・クラスを使用し、ログイン属性の値を導いて EPM System 製品に渡します。

認証メカニズムとしてカスタム・ログイン・クラスを使用すると、標準 Shared ServicesAPI を使用して、EPM System 製品と、Web ID 管理ソリューション間の SSO インタフェースを定義する必要があります。カスタム・ログイン・クラスでは、ログイン属性の値が EPM System 製品に渡される必要があります。表 8 を参照してください。

カスタム・ログイン・クラスを使用するには、`com.hyperion.css.CSSSecurityAgentIF` インタフェースの実装をこのクラスパスで使用できる必要があります。CSSSecurityAgentIF では、ユーザー名とパスワードを取得するゲッター・メソッドが定義されます(オプション)。インタフェースで `null` のパスワードが戻される場合、セキュリティ認証ではプロバイダが信頼済として扱われ、構成済プロバイダにおけるユーザーの存在が確認されます。インタフェースでパスワードの `null` 以外の値が戻される場合、EPM System では、この実装により戻されるユーザー名とパスワードを使用して要求の認証が試みられます。



CSSSecurityAgentIF は、`getUserName` と `getPassword` の 2 つのメソッドから構成されています。

## getUserName メソッド

このメソッドでは、認証用のユーザー名が戻されます。

```
java.lang.String getUserName(  
    javax.servlet.http.HttpServletRequest req,  
    javax.servlet.http.HttpServletResponse res)  
    throws java.lang.Exception
```

`req` パラメータでは、ユーザー名を判別するために使用される情報を持つ HTTP 要求が識別されます。`res` パラメータは使用されません(下位互換性にプリセット)。

## getPassword メソッド

このメソッドでは、認証用のクリアテキストのパスワードが戻されます。パスワードの取得はオプションです。

```
java.lang.String getPassword(  
    javax.servlet.http.HttpServletRequest req,  
    javax.servlet.http.HttpServletResponse res)  
    throws java.lang.Exception
```

`req` パラメータでは、パスワードを判別するために使用される情報を持つ HTTP 要求が識別されます。`res` パラメータは使用されません(下位互換性にプリセット)。

## HTTP 認証ヘッダー

Web ID 管理ソリューションで HTTP 認証ヘッダーが使用されている場合にこのオプションを選択して、ログイン属性の値を EPM System 製品に渡します。EPM System 製品は、認証ヘッダーを分析して、ユーザーのログイン名を取得します。

## HTTP 要求からリモート・ユーザーを取得

Web ID 管理ソリューションで、HTTP 要求の `setRemoteUser` の値に対して、ログイン属性の値を EPM System 製品に渡すことができる場合、このオプションを選択します。

このメソッドは、OSSO、および Integrated Windows Authentication と統合された Oracle Application Server に対して使用されます。

## Oracle Access Manager からの SSO

Oracle Access Manager を使用した SSO では、Oracle Access Manager がログイン属性 (表 8 を参照) の値を含む HTTP ヘッダーを EPM System に渡す必要があります。

Oracle Access Manager との統合により、EPM System 製品の Oracle Access Manager 認証を使用可能にする必要があります。

- 39 ページの「SSO 用の Shared Services の構成」
- 41 ページの「SSO 用の EPM Workspace の構成」

**注：** Oracle Access Manager が Shared Services で外部ユーザー・ディレクトリとしてユーザーを認証するために使用するユーザー・ディレクトリを構成してください。65 ページの「OID、MSAD およびその他の LDAP ベースのユーザー・ディレクトリの構成」を参照してください。

## Oracle Application Server シングル・サインオン

OSSO により、OID で定義されたユーザー名とパスワードを使用して、EPM System 製品にログインできます。

### 前提条件

ここでは次の内容を前提としています。

- 完全な機能が備わった Oracle Identity Management Infrastructure (OID、Oracle Database および Oracle Application Server)。Oracle Application Server 10.1.2.0.2 をインストールする、Identity Management Suite 10.1.4.0.1 を使用します。
- Oracle Identity Management Infrastructure をサポートする OID には、EPM System 製品にアクセスする必要があるすべてのユーザーが含まれます。
- EPM System 製品をホストするための完全な機能が備わった Oracle Application Server のインスタンス。このインスタンスは、Oracle Identity Management Infrastructure にインストールされている Oracle Application Server とは異なります。サポートされている Oracle Application Server バージョンは、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』を参照してください。

### OSSO の構成

OSSO との統合では、Shared Services で OSSO 認証を使用可能にする必要があります。

▶ OSSO を構成するには、次の手順に従います:

- 1 SSO 用に EPM System 製品を構成します。次のトピックを参照してください。
  - 39 ページの「SSO 用の Shared Services の構成」

- [41 ページの「SSO 用の EPM Workspace の構成」](#)

**注：** Oracle Identity Management Infrastructure の OID を Shared Services の外部ユーザー・ディレクトリとして構成する必要があります。[65 ページの「OID、MSAD およびその他の LDAP ベースのユーザー・ディレクトリの構成」](#)を参照してください。

- 2 少なくとも 1 つの OID ユーザーを Shared Services 管理者としてプロビジョニングします。
- 3 Shared Services を再起動します。
- 4 Oracle Application Server インスタンスを SSO 用に構成します。  
詳細は、Oracle Application Server 管理者ガイドの [10.1.4](#) または [10.1.2 Oracle Identity Management](#) を使用するためのインスタンスの構成に関する説明を参照してください。
- 5 OID を含む Oracle Identity Management Infrastructure を再起動します。
- 6 EPM System 製品、および Shared Services セキュリティ API を使用するカスタム・アプリケーションを再起動します。

**注：** Shared Services で構成済の外部のユーザー・ディレクトリが EPM System 製品を開始する前に必ず実行しているようにします。

## IIS の使用方法

- [27 ページの「前提条件」](#)
- [28 ページの「IIS を使用した OSSO の構成」](#)

### 前提条件

ここでは次の内容を前提としています。

- 完全な機能が備わった Oracle Identity Management Infrastructure (OID、Oracle Database および Oracle Application Server)。Oracle Application Server 10.1.2.0.2 をインストールする、Identity Management Suite 10.1.4.0.1 を使用します。
- Oracle Identity Management Infrastructure のインストールは、IIS をホストするサーバーで使用可能です。OSSO では、Identity Management Infrastructure でインストールされる一部のバイナリが必要です。Oracle Identity Management Infrastructure サービスを使用不可にできます。
- Oracle Identity Management Infrastructure をサポートする OID には、EPM System 製品にアクセスする必要があるすべてのユーザーが含まれます。
- IIS をアプリケーション・サーバーとして使用しない EPM System 製品は、Oracle Application Server でホストされます。サポートされている Oracle Application Server のバージョンは、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』を参照してください。

## IIS を使用した OSSO の構成

Oracle Application Server に Shared Services をインストールおよび配置して、開始します。詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照してください。

**注：** 認証システムを保護するには、OSSO プラグインを実行中の Web サーバーと OC4J 間の通信は、2 方向の SSL を使用する必要があります。

▶ IIS を使用した OSSO を構成するには、次の手順に従います：

- 1 Oracle Application Server を使用する製品用に OSSO を構成します。26 ページの「OSSO の構成」を参照してください。
- 2 IIS ホスト・マシンで、IIS プラグインを構成します。詳細は、Oracle HTTP Server 管理者ガイドの [Oracle Application Server SSO プラグインの使用法](#)に関する説明を参照してください。
- 3 IIS\_WPG、NETWORK および NETWORK\_SECURITY には、次のディレクトリで確実に読み取りおよび実行の権限があるようにします。[Oracle シングル・サインオン向け Oracle Fusion Middleware 管理者ガイド](#)の依存関係ライブラリ・エラーのある Microsoft IIS リスナーが失敗した場合の Oracle SSO プラグインに関する説明を参照してください。
  - oracle\_osso.dll が保管されるディレクトリ
  - ORACLE\_HOME/bin
  - ログ・ファイルおよび構成ファイルが保管されるディレクトリ
- 4 ORACLE\_HOME/bin のパスが PATH 環境変数の最初の入力になるようにします。

**注：** IIS プラグインを使用して、IIS と連携するアプリケーションを保護できます。Oracle Application Server SSO プラグインの使用法の詳細は、Oracle HTTP Server 管理者ガイドの [リソースの保護](#)に関する説明を参照してください。

## SSO 用の EPM System 製品の保護

ユーザーからの SSO 要求がセキュリティ・エージェント(OAS、OSSO または SiteMinder)にリダイレクトされるように、EPM System リソースを保護する必要があります。

Oracle HTTP サーバーでは、mod\_osso を使用して OSSO サーバーにユーザーがリダイレクトされます。ユーザーは、要求する URL が保護される mod\_osso で構成される場合にのみ、リダイレクトされます。Oracle HTTP Server 管理者ガイドの [セキュリティの管理](#)に関する説明を参照してください。

SiteMinder SSO のリソース保護は、SiteMinder のドキュメントを参照してください。

## 保護するリソース

表 1 では、保護される必要のあるコンテキストがリストされます。OSSO 用にリソースを保護する構文(例として interop を使用)は、次のとおりです。

```
<Location /interop>
Require valid-user
AuthType Basic
order deny,allow
deny from all
allow from myServer.example.com
satisfy any
</Location>
```

allow from パラメータでは、コンテキストの保護をバイパスできる開始サーバーを指定します。

Oracle Enterprise Performance Management Workspace, Fusion Edition、Oracle Hyperion Financial Reporting, Fusion Edition、および Oracle Hyperion(R) Web Analysis では、次の例で示されているパラメータのみを設定する必要があります。

```
<Location /workspace>
Require valid-user
AuthType Basic
</Location>
```

表 1 保護する EPM System リソース

EPM System 製品	保護するコンテキスト
Shared Services	/interop
EPM Workspace	/workspace
Financial Reporting	/hr
Web Analysis	/WebAnalysis
Oracle Hyperion EPM Architect, Fusion Edition	/awb
Oracle Hyperion Planning, Fusion Edition	/HyperionPlanning
Oracle Smart Space, Fusion Edition	/SmartSpace
Oracle Hyperion Performance Scorecard, Fusion Edition	● /HPSWebReports ● /HPSAlerter
Oracle Hyperion Reporting and Analysis	/biplus_webservices*
Oracle Hyperion Strategic Finance, Fusion Edition	/HSFWebServices
Oracle Hyperion Provider Services	/aps/SmartView

\*Smart Space が配置および構成されている場合にのみ必要です。

## 保護しないリソース

表 2 では、保護する必要のないコンテキストがリストされます。OSSO 用にリソースを保護しない構文(例として /interop/framework(.\*) を使用)は、次のとおりです。

```
<LocationMatch /interop/framework(.*)>
Require valid-user
AuthType Basic
allow from all
satisfy any
</LocationMatch>
```

表 2 保護しない EPM System リソース

EPM System 製品	保護しないコンテキスト
Shared Services	<ul style="list-style-type: none"> <li>● /interop/framework(.*)</li> <li>● /interop/Audit(.*)</li> <li>● /interop/content(.*)</li> <li>● /interop/taskflow*</li> <li>● /interop/WorkflowEngine/*</li> <li>● /interop/TaskReceiver</li> <li>● /framework/lcm/HSSMigration</li> </ul>
Performance Management Architect	<ul style="list-style-type: none"> <li>● /awb/ces.executeAction.do</li> <li>● /awb/lcm.executeAction.do</li> <li>● /awb/appmanager.deployStatusUpdate.do</li> <li>● /awb/jobstask.updateJobStatus.do</li> </ul>
EPM Workspace* †	<ul style="list-style-type: none"> <li>● /workspace/browse/listXML</li> <li>● /workspace/wsrp4j(.*)</li> <li>● /workspace/ResourceProxy(.*)</li> </ul>
Web Analysis*	<ul style="list-style-type: none"> <li>● /WebAnalysis/wsrp4j(.*)</li> <li>● /WebAnalysis/ResourceProxy(.*)</li> </ul>
Financial Reporting*	<ul style="list-style-type: none"> <li>● /hr/common/HRLogon.jsp</li> <li>● /hr/wsrp4j(.*)</li> <li>● /hr/ResourceProxy(.*)</li> </ul>
Smart Space	/SmartSpace/ClickOnce(.*)
Hyperion Calculation Manager	/common.performAction.do (Performance Management Architect 用)
Oracle Essbase Administration Services	<ul style="list-style-type: none"> <li>● /eas</li> <li>● /easconsole</li> <li>● /hbrilauncher</li> <li>● /easdocs</li> </ul>

EPM System 製品	保護しないコンテキスト
	<ul style="list-style-type: none"> <li>● /eas?op=com.essbase.eas.essbase.defs.awb.AWBCommands* (Performance Management Architect 用)</li> </ul>
Performance Management Architect	/awb/lcm.executeAction.do
Oracle Hyperion Financial Management, Fusion Edition	/EIE/EIListener.asp (Performance Management Architect 用)
Planning	<ul style="list-style-type: none"> <li>● /HyperionPlanning/servlet/HspLCMServlet</li> <li>● /HyperionPlanning/servlet/HspAppManagerServlet (Performance Management Architect 用)</li> </ul>
Performance Scorecard	<ul style="list-style-type: none"> <li>● /HPSWebReports/wsrp4j(.*)</li> <li>● /HPSWebReports/ResourceProxy(.*)</li> <li>● /HPSWebReports/action/lcmCallBack</li> </ul>
データの同期	/services*
Strategic Finance	<ul style="list-style-type: none"> <li>● /HSFWebServices/HSFWebService.asmx</li> <li>● /HSFWebServices/HSFEntityWebService.asmx</li> </ul>
Oracle Hyperion Profitability and Cost Management, Fusion Edition	/HPMApplicationListener
Provider Services	<ul style="list-style-type: none"> <li>● /aps/JAPI</li> <li>● /aps/XMLA</li> </ul>

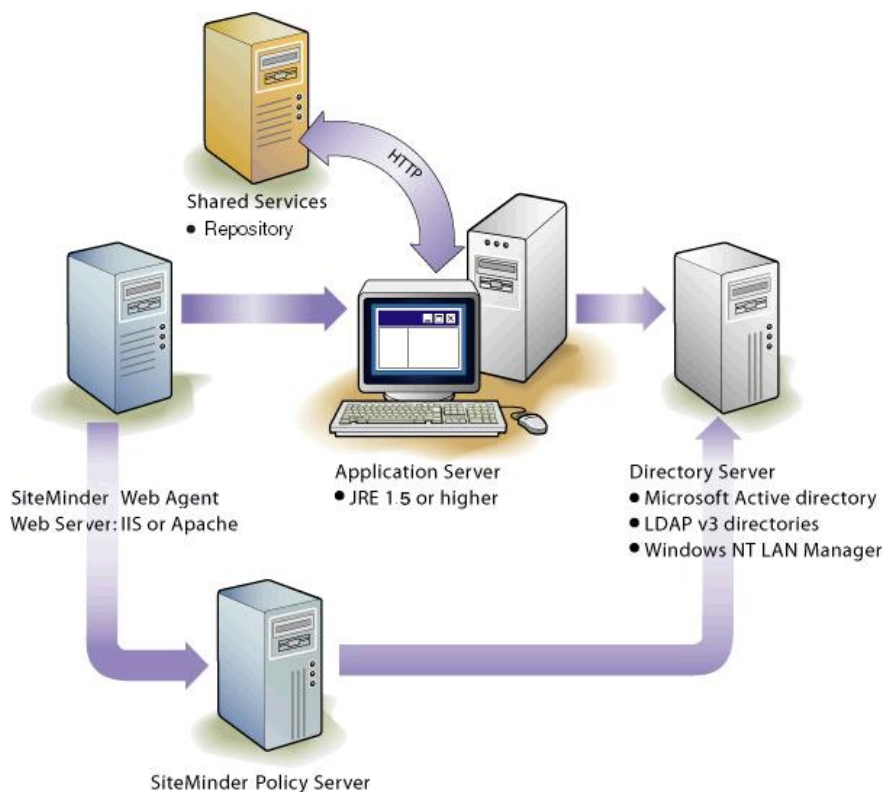
\*SAP Portal を使用する EPM Workspace、Web Analysis または Financial Reporting でセキュリティ・エージェントが使用可能なときは、wsrp4j の URL (/workspace/wsrp4j、/WebAnalysis/wsrp4j および/hr/wsrp4j)のみ保護を解除します。さらに、EPM Workspace、Web Analysis および Financial Reporting の Web アプリケーション配置で、`WEB-INF/classes/auth-handlers.config` から

`com.hyperion.portlet.sso.filter.SMAuthHandler` 行を除去します。このシナリオでは、SAP トークンを使用してポートレット認証が行われます。他のポータルについては、セキュリティ・エージェントで wsrp4j の URL を保護します。

†ポートレット用の Oracle Web Center または Oracle Portal を使用している場合、Oracle Access Manager などのセキュリティ・エージェントを使用してシステムを保護することをお勧めします。このシナリオでは、セキュリティ・エージェントを使用して wsrp4j の URL も保護する必要があります。

## SiteMinder からのシングル・サインオン

SiteMinder を使用可能な SSO の総括:



**注：** Shared Services で構成された企業ユーザー・ディレクトリは、SiteMinder からの SSO が使用可能になっている場合は信頼する必要があります。

保護する必要のある EPM System リソースについては、[28 ページの「SSO 用の EPM System 製品の保護」](#)を参照してください。

## 注意事項

SiteMinder は Web 専用のソリューションです。デスクトップ・アプリケーションおよびそのアドイン(たとえば、Microsoft Excel や Report Designer)は、SiteMinder からの認証を使用できません。ただし、Oracle Hyperion Smart View for Office, Fusion Edition では、SiteMinder 認証を使用できます。

EPM System 製品は、NTLM および LDAP ベースのユーザー・ディレクトリ (MSAD を含む)でのみサポートされます。

## SiteMinder ポリシー・サーバーの構成

SiteMinder 管理者は、EPM System 製品に SSO が使用可能になるようにポリシー・サーバーを構成する必要があります。

構成プロセスは次のとおりです。

- EPM System 製品の Web リソースの保護を設定します。
- EPM System アプリケーションにログイン属性の値を提供するカスタム・ヘッダーを追加する応答を構成します。[表 8](#) のログイン属性を参照してください。



詳細は、『Netegrity Policy Design Guide』の応答と応答グループに関するトピックを参照してください。SiteMinder 管理者はログイン時に指定されているユーザー名である、SM\_USERLOGINNAME(SiteMinder バージョン 6 の場合は SMUSER)にヘッダーを構成することもできます。

## SiteMinder Web エージェントの構成

Web エージェントは、アプリケーション・サーバー上の JSP、ASP、HTML ファイルなどの EPM System アプリケーション Web リソースに対する要求をインターセプトする Web サーバー上にインストールされます。これらの Web リソースが保護されている場合、Web エージェントは認証されていないユーザーに対して課題を出します。ユーザーが認証されると、ポリシー・サーバーは認証されたユーザーのログイン名を追加し、そのログイン名はヘッダーで運ばれます。その後、HTTP 要求が EPM System アプリケーションの Web リソースに渡され、ログイン名がヘッダーから抽出されます。

SiteMinder は、異種の Web サーバー・プラットフォーム上で実行されている EPM System 製品全体の SSO をサポートしています。EPM System 製品が異なる Web サーバーを使用する場合、SiteMinder Cookie を同じドメイン内の Web サーバーに確実に渡せるようにする必要があります。各 Web サーバーの WebAgent.conf ファイルの Cookiedomain の値として適切な EPM System アプリケーション・ドメインを指定して、これを行います。

『Netegrity SiteMinder Agent Guide』の Web Agents の構成に関する章を参照してください。

**注：** Shared Services はそのコンテンツを保護するために基本的な認証を使用するため、Shared Services への要求をインターセプトする Web サーバーは、SiteMinder を使用した SSO をサポートできるように基本的な認証を使用可能にする必要があります。

## EPM System で SiteMinder を使用可能にする

SiteMinder との統合により、EPM System 製品の SiteMinder 認証を使用可能にする必要があります。

- [39 ページの「SSO 用の Shared Services の構成」](#)
- [41 ページの「SSO 用の EPM Workspace の構成」](#)

## Kerberos シングル・サインオン

- [34 ページの「概要」](#)
- [35 ページの「サポート制約事項」](#)
- [35 ページの「前提条件」](#)
- [35 ページの「Oracle Application Server を使用した Kerberos SSO」](#)

- 37 ページの「WebLogic Server を使用した Kerberos SSO」
- 38 ページの「WebSphere を使用した Kerberos SSO」

## 概要

EPM System 製品は、EPM System 製品をホストするアプリケーション・サーバーが Kerberos 認証用に設定されている場合は、Kerberos SSO をサポートします。

Kerberos は、各 Kerberos クライアントはその他の Kerberos クライアント(ユーザー、ネットワーク・サービスなど)の ID が有効であると信頼する、信頼済認証サービスです。Kerberos の中心部分は、Kerberos レルムのすべてのユーザーおよびサービスのデータベースである、Key Distribution Center (KDC)です。KDC は Kerberos クライアントの詳細とその秘密鍵を維持します。Kerberos はチケットの概念に基づきます。チケットは、暗号キーおよびその他いくつかの情報をラップするデータ構造です。KDC は Kerberos チケットを認証されたクライアントに配布します。

ネットワーク上のコンピュータは、KDC を暗黙的に信頼するように構成されます。ユーザーは、サーバーで確認可能な、KDC からの暗号化された情報を持つチケットを提示することでネットワーク・リソースにアクセスできます。KDC はすべての暗号化キーを認識する唯一のエンティティであるため、ユーザーの信頼性を安全に確認できます。また、各クライアントは KDC を信頼するため、KDC が安全なかぎり、ネットワーク全体が安全です。

Simple and Protected GSSAPI Negotiation Mechanism (SPNEGO)プロトコルは、クライアントとサーバー間の認証メカニズムを判別するために使用されます。統合 Windows 認証が使用可能なブラウザは、SPNEGO を使用して、まず認証に Kerberos 5 プロトコルを試みます。アプリケーション・サーバーは、ブラウザなどのクライアントと認証をネゴシエートするために、SPNEGO フィルタを提供します。Generic Security Services API (GSSAPI)は、機密性、メッセージ統合、認証などの機能を提供します。

EPM System 製品にユーザーがアクセスする場合に行われる処理は、次のとおりです:

- Windows コンピュータで、ユーザーが Kerberos レルムにログインします。
- 統合 Windows 認証を使用するように構成されているブラウザを使用して、ユーザーはアプリケーション・サーバー上で実行されている EPM System 製品にログインします。
- アプリケーション・サーバーは要求をインターセプトし、ブラウザの認証ヘッダーから Kerberos 情報とともに SPNEGO トークンを取得します。
- アプリケーション・サーバーは、EPM System 製品にユーザーに関する情報を渡すために、その ID ストアに対してトークンからユーザーのアイデンティティを検証します。EPM System 製品は MSAD に対してユーザー名を検証します。EPM System 製品は、すべての EPM System 製品間で SSO をサポート可能な SSO トークンを発行します。

## サポート制約事項

Kerberos SSO は、すべての EPM System 製品に対してサポートされています。次の例外があります。

- Kerberos SSO は、Embedded Java コンテナ(Tomcat)に配置されている EPM System 製品に対してサポートされていません。
- Kerberos SSO は、シック・クライアント(Smart View および Oracle Smart Space, Fusion Edition)に対してサポートされていません。
- IIS が埋め込まれた EPM System 製品の Kerberos SSO サポート(Financial Management など)は、EPM Workspace を介してのみ使用可能です。Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Fusion Edition への SSO アクセスは、Financial Management を介して提供されます。

## 前提条件

このドキュメントは次のことを前提とします。

- フル機能の Kerberos が使用可能なネットワーク環境
  - EPM System 製品をホストするアプリケーション・サーバーおよび HTTP サーバー・マシンが、Kerberos レalm内にあります。
  - EPM System 製品にアクセス可能なマシンが Kerberos レalmを構成しています。
  - EPM System 製品にアクセスするために使用するブラウザが、統合された Windows 認証用に構成されています。統合された Windows 認証を使用可能にする方法については、次を参照してください。

Internet Explorer 6 のドキュメント: [Microsoft Help and Support Web サイト](#) 上。

Firefox のドキュメント: [Firefox Support Web サイト](#)上。

- EPM System 製品ユーザーがドメイン内のクライアント・マシンにログインできる Kerberos ログイン情報を持ちます。

## Oracle Application Server を使用した Kerberos SSO

EPM System 製品用の Kerberos SSO は、OSSO を使用してアプリケーションと Kerberos 間の ID を解決します。EPM System 製品は、OSSO のパートナ・アプリケーションとして登録されます。OSSO で使用する OID は、ID リポジトリとみなされます。この OID は Kerberos が使用するアクティブ・ディレクトリと同期する必要があります。OSSO は、Kerberos を使用してユーザーの ID を解決した後で、ユーザーに関する情報を EPM System 製品に渡し、SSO をサポートするために、すべての EPM System 製品で使用される SSO トークンを発行します。

## 前提条件

ネットワーク環境に関連した前提条件については、[35 ページの「前提条件」](#)を参照してください。

- OSSO は構成され、実行されています。
- Kerberos で使用される Active Directory は、OSSO で使用される OID と同期化されます。Oracle Identity Management Integration ガイドの [Microsoft Active Directory との統合](#)に関する説明を参照してください。

次の変更がマッピング・ファイル(activeCfgImp.map)で行われることを確認します。

- マッピング・ファイルの sn 属性は、ルール SAMAccountName: :  
:user:sn: : person:を使用した値とともに移入されます。
- uid 属性は、レルムまたはドメイン接尾辞や接頭辞なしで、ユーザー名にマッピングされます。これは、ルール userPrincipalName: :  
:user:uid: :inetorgperson:sAMAccountName を使用して行うことができます。
- OSSO は、ユーザー・ログイン情報を解決するために、Kerberos と交渉するように構成されます。Oracle Security and Identity Management コラテラルの、[Windows 統合: インポート・コネクタの構成](#)に関する説明を参照してください。
- オプション:外部認証は、MSAD に保管されているログイン情報を使用してユーザーが認証できるように構成されます。Oracle Security and Identity Management コラテラルの、[Windows 統合: 外部認証の構成](#)に関する説明を参照してください。

## EPM System の構成

Kerberos SSO の統合では、EPM System 製品で SSO 認証を使用可能にする必要があります。

- ▶ Oracle Application Server を使用して Kerberos SSO を構成するには、次の手順に従います:

- 1 Kerberos SSO 用に EPM System を構成します。次のトピックを参照してください。

- [39 ページの「SSO 用の Shared Services の構成」](#)
- [41 ページの「SSO 用の EPM Workspace の構成」](#)

**注:** Oracle Identity Management Infrastructure の OID を Shared Services の外部ユーザー・ディレクトリとして構成する必要があります。[65 ページの「OID、MSAD およびその他の LDAP ベースのユーザー・ディレクトリの構成」](#)を参照してください。

- 2 少なくとも 1 つの OID ユーザーを Shared Services 管理者としてプロビジョニングします。
- 3 Shared Services を再起動します。

#### 4 Oracle Application Server インスタンスを SSO 用に構成します。

詳細は、[Oracle Application Server 管理者ガイド](#)の 10.1.4 または 10.1.2 Oracle Identity Management を使用するためのインスタンスの構成に関する説明を参照してください。

#### 5 OID を含む Oracle Identity Management Infrastructure を再起動します。

#### 6 EPM System 製品、および Shared Services セキュリティ API を使用するカスタム・アプリケーションを再起動します。

**注：** Shared Services で構成済の外部のユーザー・ディレクトリが EPM System 製品を開始する前に必ず実行しているようにします。

## WebLogic Server を使用した Kerberos SSO

Oracle WebLogic Server Kerberos SSO は、Microsoft クライアントを使用した SSO が使用可能になるように、SPNEGO トークンをネゴシエートおよびデコードするため Negotiate Identity Asserter を使用します。WebLogic Server は Kerberos チケットを取得するために SPNEGO トークンをデコードし、そのチケットを WebLogic Server ユーザーにマップします。WebLogic Server の MSAD 認証は、WebLogic Server ユーザーのユーザー・ディレクトリとして MSAD を構成するために Negotiate Identity Asserter と一緒に使用できます。

ブラウザが EPM System 製品へのアクセスを要求する場合、KDC はそのブラウザに Kerberos チケットを発行し、それによって、サポートされる GSS トークン・タイプを含む SPNEGO トークンが作成されます。Negotiate Identity Assertion プロバイダは SPNEGO トークンをデコードし、GSSAPI を使用して、セキュリティ・コンテキストを受け入れます。要求を開始したユーザーの ID はユーザー名にマップされ、WebLogic Server に渡されます。WebLogic Server は、ユーザーが属するグループも決定します。この段階で、要求された EPM System 製品はユーザーに使用できるようになります。

**注：** ユーザーは SPNEGO をサポートするブラウザ(たとえば、Internet Explorer や Firefox など)を使用して、WebLogic Server で実行している EPM System 製品にアクセスできます。WebLogic Server は UNIX または Windows プラットフォームで実行できます。

認証プロセスから取得されたユーザー ID を使用して、EPM System 製品認証プロセスはプロビジョニング・データをチェックします。EPM System 製品へのアクセスは、プロビジョニングに基づいて制限されます。

## 前提条件

ネットワーク環境に関連した前提条件については、[35 ページの「前提条件」](#)を参照してください。

- MSAD セキュリティ・グループおよびユーザーは、MSAD ハンド・シェークのため WebLogic Server をサポートするために使用可能です。Server 9.2 ドキュ

メンテーションの「[Microsoft のクライアントに対するシングルサインオンのコンフィグレーション](#)」を参照してください。

MSAD ユーザーは、パワー・ユーザーとして、できれば WebLogic Server 管理者として WebLogic Server にログインする必要があります。ユーザー・アカウントは、次のオプションを選択して更新します。

- このアカウントにDES暗号化を使う
- Kerberos事前認証を必要としない

詳細は、Microsoft のドキュメントを参照してください。

構成は、Kerberos サービス・プリンシパル名として Web サーバー DNS 名(リバース・プロキシ)の使用をサポートする必要があります。

- WebLogic Server ドメインの myrealm セキュリティ・レルムは、認証プロバイダとして MSAD を追加するために変更されます。詳細は、WebLogic Server のドキュメントを参照してください。

## EPM System における SSO の使用可能

WebLogic Server を使用した Kerberos SSO では、EPM System 製品に対して SSO を使用可能にする必要があります。次のトピックを参照してください。

- [39 ページの「SSO 用の Shared Services の構成」](#)
- [41 ページの「SSO 用の EPM Workspace の構成」](#)

## WebSphere を使用した Kerberos SSO

ユーザーは、WebSphere サーバーで実行している EPM System 製品にアクセスするために、SPNEGO をサポートするブラウザ(たとえば、Internet Explorer や Firefox)を使用する必要があります。

### 前提条件

ネットワーク環境に関連した前提条件については、[35 ページの「前提条件」](#)を参照してください。

- Kerberos が使用可能なユーザー・ディレクトリ
- フル構成された WebSphere インストール:
  - Kerberos が使用可能なユーザー・ディレクトリは、すべての EPM System 製品ユーザー用の ID ストアとして構成されています。

構成は、Kerberos サービス・プリンシパル名として Web サーバー DNS 名(リバース・プロキシ)の使用をサポートする必要があります。

ユーザー・ディレクトリのアカウントは、ID ストアの構成後、WebSphere にログオンするために必要です。

- アプリケーション・セキュリティが使用可能になっています。
- トラスト・アソシエーションが使用可能になっています。

- SPNEGO Trust Association Interceptor が構成されています。
- EPM System 製品の保護されている URL が構成されています。
- SSO ドメインが構成されています。
- **オプション:** SPNEGO および Kerberos をデバッグするための JVM オプションが設定されています。
- keytab ファイルがドメイン・コントローラから抽出され WebSphere サーバー・マシンにコピーされています。ホスト・キーの暗号化されたローカル・コピーである keytab ファイルは、クライアントによって送信されたサービス・チケットを復号するために必要です。

## EPM System における SSO の使用可能

WebSphere を使用した Kerberos SSO では、EPM System 製品に対して SSO を使用可能にする必要があります。次のトピックを参照してください。

- [39 ページの「SSO 用の Shared Services の構成」](#)
- [41 ページの「SSO 用の EPM Workspace の構成」](#)

## SSO 用の EPM System の構成

EPM System 製品は、SSO 用にセキュリティ・エージェントをサポートするために構成する必要があります。Shared Services で指定した構成により、すべての EPM System 製品に次のことが決定されます。

- セキュリティ・エージェントから SSO を受け入れるかどうか
- SSO を受け入れる認証メカニズム

SSO を使用可能な環境において、ユーザーが最初にアクセスする EPM System 製品では、SSO メカニズムが分析され、ここに含まれている認証済ユーザー ID が取得されます。EPM System 製品では、Shared Services で構成されたユーザー・ディレクトリに対してユーザー ID がチェックされ、ユーザーが有効な EPM System ユーザーであることが決定されます。また、EPM System 製品全体で SSO を使用可能にするトークンも発行されます。

EPM System 製品の SSO メカニズムを設定するには、次のトピックを参照してください。

- [39 ページの「SSO 用の Shared Services の構成」](#)
- [41 ページの「SSO 用の EPM Workspace の構成」](#)

## SSO 用の Shared Services の構成

Shared Services で指定される構成により、SSO が使用可能になり、すべての EPM System 製品に対して SSO を受け入れる認証メカニズムが決定されます。Shared Services で SSO を構成してから、SSO 用に EPM System 製品の構成を完了する必要があります。

▶ Web ID 管理ソリューションから SSO を使用可能にするには、次の手順に従います:

- 1 Shared Services Console を起動します。47 ページの「Shared Services Console の起動」を参照してください。Shared Services 管理者としてログインします。
- 2 管理、ユーザー・ディレクトリの構成の順に選択します。  
「定義済ユーザー・ディレクトリ」画面が表示されます。
- 3 Web ID 管理ソリューションにより使用されるユーザー・ディレクトリが Shared Services で外部のユーザー・ディレクトリとして構成されることを確認します。第 5 章「ユーザー・ディレクトリの構成」を参照してください。
- 4 セキュリティ・オプションを選択します。  
「セキュリティ・オプション」タブが開きます。
- 5 詳細オプションの表示を選択します。
- 6 「定義済ユーザー・ディレクトリ」画面のシングル・サインオン構成で、次の手順に従います:
  1. SSO の使用可能を選択します。
  2. SSO プロバイダ/エージェントから、Web ID 管理ソリューションを選択します。Kerberos で SSO を構成している場合、その他を選択します。  
推奨される SSO メカニズムが自動的に選択されます。表 3 を参照してください。24 ページの「サポートされている SSO メソッド」を参照してください。

**注:** 推奨される SSO メカニズムを使用していない場合、SSO プロバイダ/エージェントで「その他」を選択する必要があります。たとえば、SiteMinder の HTTP ヘッダー以外のメカニズムを使用する場合、SSO プロバイダ/エージェントの「その他」を選択してから、SSO メカニズムで使用する SSO メカニズムを選択します。

表 3 Web ID 管理ソリューションに適した SSO メカニズム

Web ID 管理ソリューション	推奨 SSO メカニズム
Oracle Access Manager	カスタムHTTPヘッダー*
Oracle Application Server シングル・サインオン(OSSO)	HTTP要求からリモート・ユーザーを取得
SiteMinder	カスタムHTTPヘッダー
Kerberos	Oracle Application Server: HTTP要求からリモート・ユーザーを取得 WebLogic Server: カスタムHTTPヘッダー WebSphere: カスタムHTTPヘッダー

\*デフォルトの HTTP ヘッダー名は、HYPLOGIN です。カスタム HTTP ヘッダーを使用中の場合、名前を置き換えます。

- 7 OK をクリックします。



## SSO 用の EPM Workspace の構成

EPM Workspace では、SSO を処理するプロセスが EPM Workspace コア・サービスに委任されます。このプロセスを使用可能にするには、EPM Workspace と EPM Workspace コア・サービス間で信頼を確立するための設定を構成する必要があります。次のタスクを完了する必要があります：

- Configuration and Monitoring Console (CMC)における SSO 設定の入力
- 信頼できるパスワードの定義

### CMC における SSO 設定の入力

CMC を使用して、ユーザー名とパスワード・ポリシーを構成し、EPM Workspace で EPM Workspace と EPM Workspace コア・サービス間の信頼が確立される必要があります。CMC の使用方法に関する詳細は、『Oracle Enterprise Performance Management Workspace 管理者ガイド』を参照してください。

▶ CMC で SSO 設定を定義するには、次の手順に従います：

- 1 CMC を開始し、CMC を管理者としてログインします。
- 2 現在のビューで、Web アプリケーション構成を選択します。
- 3 Workspace Web アプリケーションを右クリックし、プロパティを選択します。
- 4 ユーザー・インタフェースを開きます。
- 5 ログインで、ユーザー名とパスワード・ポリシーを設定します。詳細は、オンライン・ヘルプを参照してください。

表 4 推奨されるポリシーの設定

セキュリティ・エージェント*	ユーザー名ポリシー	パスワード・ポリシー
OAM	\$SECURITY_AGENT\$	\$TRUSTEDPASS\$
OSSO	\$REMOTE_USER\$	\$TRUSTEDPASS\$
Kerberos	\$REMOTE_USER\$	\$TRUSTEDPASS\$
SiteMinder	\$SECURITY_AGENT\$	\$TRUSTEDPASS\$
HTTP (Web サーバー)	\$HTTP_USER\$	\$HTTP_PASSWORD\$

\*EPM Workspace でカスタム・ログイン・クラスを使用し、ユーザー名とパスワードを確認してから、EPM セキュリティにこれらの値を渡すことができます。42 ページの「EPM Workspace カスタム・ログイン・クラスの使用法」に関する説明を参照してください。

- 6 OK をクリックします。
- 7 EPM Workspace Web アプリケーションを再起動します。

## EPM Workspace カスタム・ログイン・クラスの使用法

カスタム・ログイン・クラスを使用して、クラスの値を EPM セキュリティに渡す前に、ユーザー名とパスワードをチェックする場合、CMC でカスタム・ログイン・クラスを構成する必要があります。

▶ SSO 用にカスタム・ログイン・クラスを構成するには、次の手順に従います:

- 1 CMC を開始し、CMC を管理者としてログインします。
- 2 現在のビューで、Web アプリケーション構成を選択します。
- 3 Workspace Web アプリケーションを右クリックし、プロパティを選択します。
- 4 ユーザー・インタフェースを開きます。
- 5 ログインで情報を入力します。表 5 を参照してください。

表 5 カスタム・ログイン・クラスの推奨する設定

フィールド	説明
LoginPolicyClass For	\$CUSTOM_LOGIN\$ の LoginPolicy クラスにおける Java クラス名 (com.oracle.customLogin など、.class の拡張子のない完全なパッケージ名)
ユーザー名ポリシー	\$CUSTOM_LOGIN\$
パスワード・ポリシー	\$CUSTOM_LOGIN\$*

\*\$TRUSTEDPASS\$またはその他にできます。

- 6 OK をクリックします。
- 7 EPM Workspace Web アプリケーションを再起動します。

## 信頼できるパスワードの定義

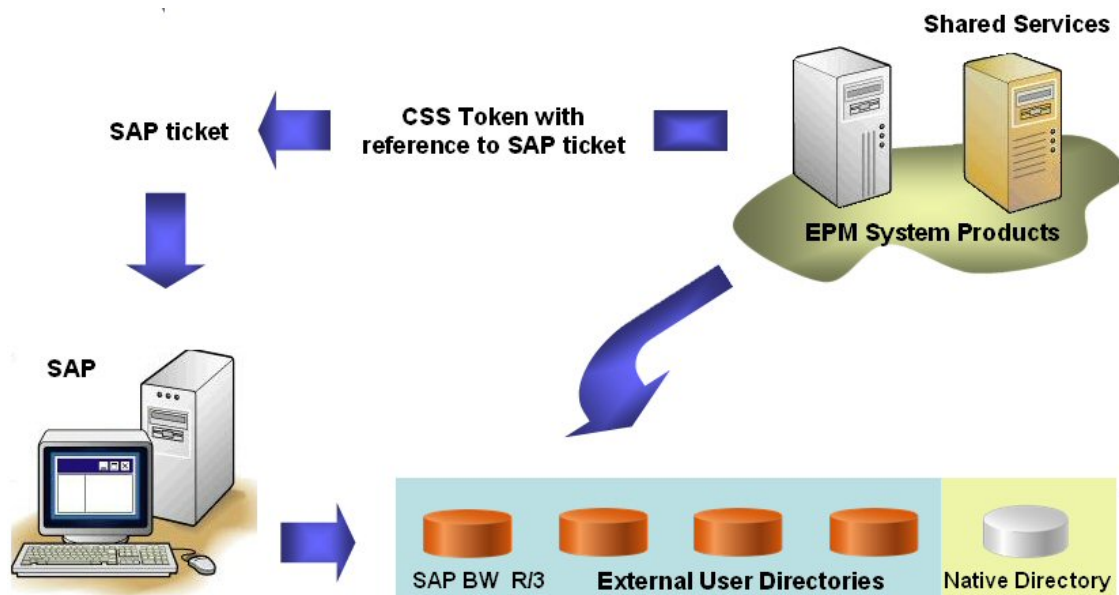
信頼できるパスワードを使用して、EPM Workspace Web アプリケーションと、EPM Workspace コア・サービス間の信頼関係を構築します。

▶ 信頼できるパスワード:を定義するには、次の手順に従います:

- 1 EPM Workspace を起動し、および管理者としてログインします。
- 2 ナビゲートから管理者、次に認証を選択します。
- 3 信頼できるパスワードの使用可能を選択します。
- 4 パスワードおよびパスワードの確認で、使用する信頼できるパスワードを入力します。
- 5 OK をクリックします。
- 6 Workspace Core Service を再起動します。
- 7 EPM Workspace Web アプリケーションを再起動します。

# SAP Enterprise Portal からのシングル・サインオン

EPM System 製品は、SAP ログオン・チケットを発行することにより、SAP Enterprise Portal に対し SSO を処理します。このアクションにより、EPM System 製品にログインするユーザーは、SAP アプリケーションにシームレスに移動できます。この概念を図で示すと、次のようになります。

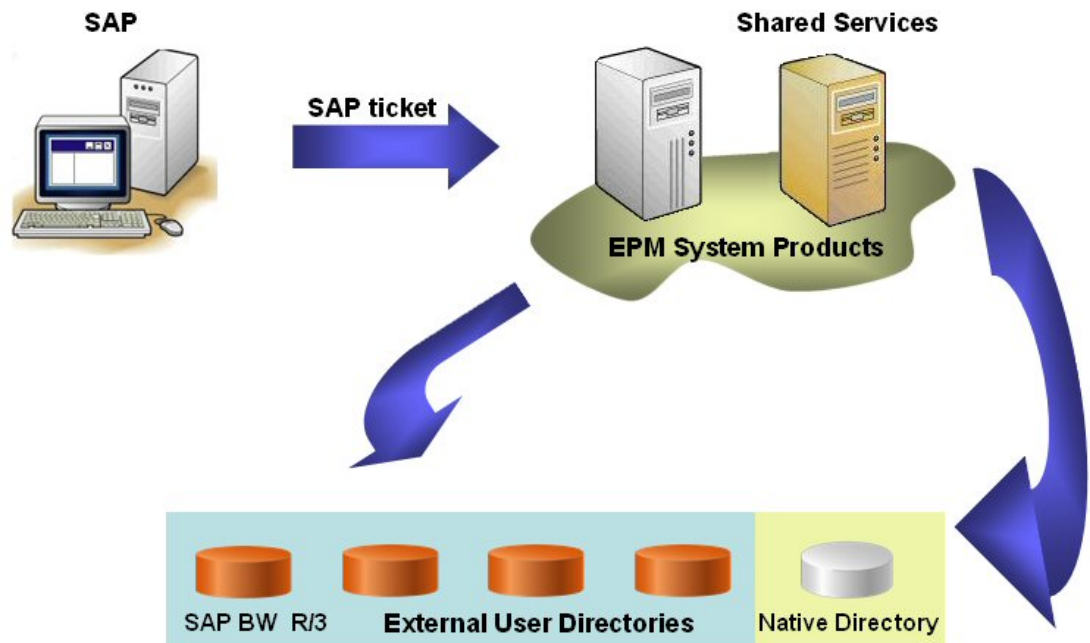


ユーザーがログインする際に、EPM System 製品は、ネイティブ・ディレクトリを含む構成済のユーザー・ディレクトリに対してユーザーを認証し、EPM System ログオン・トークンを発行します。このトークンにより EPM System 製品に対する SSO が使用可能になります。また、SAP ログオン・チケットも生成されます。

**注：** SAP を使用した SSO が機能するには、Shared Services 上の外部ユーザー・ディレクトリとして SAP ネイティブ・ディレクトリを構成する必要があります。

ユーザーがその後 SAP システムに移動するか、SAP データ・ソースを使用する場合、EPM System トークンに含まれている SAP ログオン・チケットが、SSO を使用可能にするために SAP に渡されます。SAP システムは、SAP ログオン・チケットのログイン情報を検証する責任があると想定されています。

EPM System 製品は、SAP ログオン・チケットを受け取ることにより、SAP Enterprise Portal から SSO を処理します。このアクションにより、SAP Enterprise Portal にログインするユーザーは、SAP と EPM System 製品間をシームレスに移動できるようになります。この概念を図で示すと次のようになります。



ユーザーが SAP Enterprise Portal にログインすると、SAP はユーザーを認証します。

ユーザーが EPM System 製品に移動する際に、SAP チケットが EPM System 製品に渡されます。Shared Services サーバー・マシン上に保管されている SAP 証明書を使用して EPM System がユーザー名を取得し、これにより有効なユーザーであると信用されます。EPM System 製品は、ユーザー・ディレクトリをクエリーしてユーザーのグループを特定します。グループ情報を使用して、EPM System 製品がプロビジョニング情報を取得します。

**注：** このプロセスが機能するには、Shared Service のユーザー・ディレクトリとして SAP プロバイダを構成する必要があります。

## ネストされた SAP グループ

SAP ユーザー・ディレクトリを構成した後で、使用可能な SAP ユーザーおよびグループが Shared Services Console に表示されます。Shared Services は、SAP 役割が企業ディレクトリ・サーバーによって作成されたグループの役割と等価であると見なします。SAP ユーザー・ディレクトリからの各役割は、Shared Services Console に固有のグループとして表示されます。ただし、Shared Services は、SAP ユーザー・ディレクトリ内の単一役割と複合役割間の関係は取得しません。必要に応じて、ネストされたグループをネイティブ・ディレクトリに作成し、SAP ユーザー・ディレクトリの単一役割と複合役割間にすでに存在する関係を模倣できます。

## 配置場所

配置場所の規則

- HYPERION\_HOME は、EPM System 製品がインストールされるルート・ディレクトリを示します。このディレクトリの場所は、インストール・プロセス中に指定されます。例: C:\Hyperion(Windows)および /vol1/Hyperion(UNIX)
- HSS\_HOME は Shared Services ルート・ディレクトリを示します。例:  
C:\Hyperion\deployments\App\_Server\_Name\SharedServices9 (Windows)  
および /vol1/Hyperion/deployments/App\_Server\_Name/SharedServices9 (UNIX)

## 前提条件

- SAP ランドスケープ内のすべての SAP システムは、SAP ログイン・チケットを使用した SSO に対して設定する必要があります。1 つの SAP システム内の 1 人のユーザー名がすべての SAP システムの同じユーザーを参照するように、ユーザー名を標準化する必要があります。詳細は、SAP のドキュメントを参照してください。
- SAP JCo バイナリまたは共有ライブラリを HYPERION\_HOME/common/SAP/bin ディレクトリにコピーまたはダウンロードします。  
JCo バイナリおよび共有ライブラリは、SAP 配置内で使用可能です。登録されている SAP ユーザーは、SAP Web サイト <https://service.sap.com/connectors> からダウンロードできます。
- SAP JCo アーカイブ(.jar ファイル)および共有ライブラリを HYPERION\_HOME/common/SAP/lib ディレクトリにコピーまたはダウンロードします。  
JCo アーカイブおよび共有ライブラリは、SAP 配置内で使用可能です。登録されている SAP ユーザーは、SAP Web サイト <https://service.sap.com/connectors> からダウンロードできます。  
次のライブラリは、EPM System 製品に提供された SAP SSO チケットを確認するために必要です。この手順は、EPM System 製品が SAP Enterprise Portal に接続されている場合にのみ必要です。
  - com.sap.security.core.jar
  - com.sap.security.api.jar
  - sapjco.jar
  - sap.logging.jar
  - iaik\_jce.jar
  - iaik\_jce\_export.jar (エクスポート・バージョンの IAIK-JCE ライブラリを使用している場合)
- HYPERION\_HOME/common/SAP/lib ディレクトリで使用可能な explodejar を実行して、各 SAP .jar ファイルのコンテンツを展開します。
- Shared Services Console を使用して、Shared Services の外部ユーザー・ディレクトリとして SAP ネイティブ・リポジトリを構成します。詳細は、[74 ページ](#)の「SAP R3 ネイティブ・リポジトリの構成」を参照してください。

- SAP デジタル証明書(SAP X509 証明書、SAP.keystore)を便利な場所にインストールします。この証明書を HSS\_HOME/config にインストールすることをお勧めします。例: C:\Hyperion\deployments\9\SharedServices9\config (Windows)または/vol1/Hyperion/deployments/9/SharedServices9/config (UNIX)
- Shared Services Console を使用して、EPM System 製品に適切なアクセス権を提供するために SAP ユーザーおよびグループをプロビジョニングします。第9章「[プロビジョニングの管理](#)」を参照してください。

# 4

## Shared Services Console

### この章の内容

Shared Services Console の起動 .....	47
Shared Services Console の概要 .....	48
Shared Services Console でのナビゲート .....	48
ユーザー、グループ、役割および委任リストの検索 .....	49

## Shared Services Console の起動

Shared Services Console を起動するには、次の手順に従います:

- ブラウザを使用して、Shared Services Console にアクセスします。
- Windows ではスタートを選択し、すべてのプログラム、Oracle EPM System、Foundation Services の順に選択し、Shared Services Console を選択します。
- EPM System の製品インタフェースの使用

▶ URL から Shared Services Console を起動するには、次の手順に従います:

### 1 ブラウザを使用して、次の URL にアクセスします:

`http://server_name:port_number/interop`

URL の中で、`server_name` は Shared Services をホストするアプリケーション・サーバーが実行しているコンピュータの名前を示し、`port_number` は Shared Services が使用するサーバー・ポートを示します。`http://myserver:28080/interop` のようになります。

**注:** ポップアップ・ブロックが原因で Shared Services Console が開かない場合があります。

### 2 ログオン画面でユーザー名とパスワードを入力してください。

最初は、Shared Services Console へアクセスできる唯一のユーザーは `admin` (`admin` のデフォルト・パスワードは `password`) です。

### 3 ログオンをクリックします。

**注:** 有効な SAP ユーザーがログオン中に、SAP アカウントがロックされると、`CSSAuthenticationException` エラー・メッセージが表示される場合があります。SAP 管理者に問い合わせ、アカウントのロック解除を依頼してください。

Microsoft Internet Explorer の使用中に Shared Services Console で Java 仮想マシン (JVM)エラーが表示される場合は、Internet Explorer のインストール済環境で、Microsoft XML パーサー(MSXML)バージョン 4 が含まれていることを確認してください。MSXML は Internet Explorer 6.0 にバンドルされています。

MSXML のバージョンが正しいことを確認するには、次のファイルを調べます。

```
c:\¥winnt¥system32¥msxml4.dll
```

このファイルがない場合は、Internet Explorer 6.0 以降をインストールしてください。

## Shared Services Console の概要

Shared Services Console は、ビュー・ペインとタスク・タブで構成されています。初めにログインすると、Shared Services Console にはビュー・ペインと「参照」タブが表示されます。

ビュー・ペインは、オブジェクト(ユーザー・ディレクトリ、ユーザー、グループ、役割、プロジェクトおよびアプリケーション)を選択できるナビゲーション・フレームです。通常、現在の選択項目の詳細は、「参照」タブに表示されます。実行するタスクに従って、必要なタスクのタブが開きます。たとえば、レポートを生成する場合は、「レポート」タブが開き、ユーザー・ディレクトリを構成する場合は、「構成」タブが開きます。

現在の構成に応じて、Shared Services Console のビュー・ペインには既存のオブジェクトが一覧表示されます。これらのオブジェクトを展開すると、詳細を表示できます。たとえば、「ユーザー・ディレクトリ」オブジェクトを展開すると、構成済のすべてのユーザー・ディレクトリが一覧表示されます。構成済のユーザー・ディレクトリでユーザーとグループを検索することもできます。

オブジェクトを右クリックすると表示されるショートカット・メニューは、ビュー・ペイン上のオブジェクトに関連付けられています。

**注：** [Oracle Technology Network](#) では、現在のリリースの最新の製品ドキュメントを提供します。

## Shared Services Console でのナビゲート

ビュー・ペインでオブジェクトに対するアクションを実行する場合、オブジェクトを右クリックすると、ショートカット・メニューにアクセスできます。これらのメニューのオプションは、選択した対象に従って動的に変更されます。ショートカット・メニューに表示されるコマンドは、メニュー・バーのメニューでも使用可能です。使用可能なメニュー・オプションを表すボタンがツールバーに表示されます。

**注：** ネイティブ・ディレクトリは Shared Services Console から管理されるため、ネイティブ・ディレクトリのショートカット・メニューで使用可能なメニュー・オプションの中には、他のユーザー・ディレクトリには使用できないものがあります。



# ユーザー、グループ、役割および委任リストの検索

Shared Services Console では、構成されたユーザー・ディレクトリへのユーザーおよびグループの検索、ネイティブ・ディレクトリに登録されたアプリケーションの役割の検索を使用可能にします。

ユーザーを検索する場合、指定できる検索パラメータは、選択するユーザー・ディレクトリのタイプによって異なります。たとえば、ネイティブ・ディレクトリでは、すべてのユーザー、アクティブなユーザーまたは非アクティブなユーザーを検索できます。

「参照」タブに表示される検索ボックスは、ビュー・ペイン内の選択項目に基づいて検索コンテキストを表します。

▶ ユーザー、グループ、役割または委任リストを検索するには、次の手順に従います:

- 1 ビュー・ペインで、ユーザー・ディレクトリを展開します。
- 2 検索するユーザー・ディレクトリから、次のいずれかを選択します。
  - ユーザー
  - グループ
  - 役割
  - 委任リスト

**注:** 役割および委任リストオプションは、ネイティブ・ディレクトリへの検索でのみ使用可能です。

使用可能な検索フィールドが「参照」タブに表示されます。

3 ユーザーを検索するには、次の手順に従います:

1. ユーザー・プロパティで、検索するユーザー・プロパティを選択します。

選択できるユーザー・プロパティは、選択したユーザー・ディレクトリのタイプによって異なります。たとえば、LDAP ベースのユーザー・ディレクトリを選択した場合は、ユーザー名、名、姓、説明および電子メール・アドレスを検索できます。ネイティブ・ディレクトリでは、すべてのユーザー、アクティブなユーザーまたは非アクティブなユーザー(他のユーザー・ディレクトリのユーザーを検索中は使用できないオプション)を検索できます。

検索可能なユーザー・プロパティ:

- LDAP ベースのユーザー・ディレクトリ: ユーザー名、名、姓、説明および電子メール・アドレス
  - NTLM: ユーザー名、名および姓
  - SAP およびデータベース・プロバイダ: ユーザー名
2. オプション: ユーザー・フィルタでは、特定のユーザーを識別するためのフィルタを指定します。パターン検索では、アスタリスク(\*)をワイルドカードとして使用します。

3. **オプション:** グループ内では、検索を実行するグループ(Group1;Group2 のフォーマットを使用)を指定します。パターン検索では、アスタリスク(\*)をワイルドカードとして使用します。複数のグループを検索するには、セミコロンを使用してグループ名を区切ります。
4. **ネイティブ・ディレクトリのみ:** 表示から、検索テキストすべて、アクティブまたは非アクティブを選択します。
5. 検索をクリックします。

#### 4 グループを検索するには、次の手順に従います:

1. グループ・プロパティで、検索するプロパティを選択します。このプロパティがユーザー・ディレクトリに指定されていない場合、検索はレコードを取得しません。

**注:** Shared Services は、ユーザー・ディレクトリ内のグループと等価な、Oracle、SQL Server および SAP の役割を考慮します。Oracle の役割は、他の役割(役割の階層の作成)を含むことができます。Shared Services は、データベースの役割間の関係は検索結果に表示しません。ただし、それらの関係はプロビジョニング中に使用します。SQL Server の役割はネストできません。DB2 データベース・プロバイダを選択した場合、DB2 は役割をサポートしないため、Shared Services は、グループを表示しません。

2. グループ・フィルタでは、検索フィルタを入力します。パターン検索では、アスタリスク(\*)をワイルドカードとして使用します。
3. 検索をクリックします。

#### 5 役割を検索するには、次の手順に従います:

役割の検索は、ネイティブ・ディレクトリでのみサポートします。

1. 役割プロパティで、検索するプロパティを選択します。このプロパティがネイティブ・ディレクトリに指定されていない場合、検索はレコードを取得しません。
2. 役割フィルタでは、検索フィルタを入力します。パターン検索では、アスタリスク(\*)をワイルドカードとして使用します。

#### 6 検索をクリックします。

#### 7 委任リストを検索するには、次の手順に従います:

1. リスト名では、検索文字列を入力します。パターン検索では、アスタリスク(\*)をワイルドカードとして使用します。
2. 検索をクリックします。

# 5

## ユーザー・ディレクトリの構成

### この章の内容

ネイティブ・ディレクトリとしての Oracle Internet Directory の設定 .....	51
カスタム認証モジュールの使用法 .....	55
ユーザー・ディレクトリ構成に関連する操作 .....	63
MSAD 情報 .....	64
OID、MSAD およびその他の LDAP ベースのユーザー・ディレクトリの構成 .....	65
SAP R3 ネイティブ・リポジトリの構成 .....	74
リレーショナル・データベースをユーザー・ディレクトリとして構成する .....	76
ユーザー・ディレクトリの接続のテスト .....	79
ユーザー・ディレクトリ設定の編集 .....	80
NTLM 構成の更新 .....	81
ユーザー・ディレクトリ構成の削除 .....	85
ユーザー・ディレクトリの検索順の管理 .....	85
セキュリティ・オプションの設定 .....	87
特殊文字の使用法 .....	89

## ネイティブ・ディレクトリとしての Oracle Internet Directory の設定

OpenLDAP は、Shared Services をインストールおよび配置する際にネイティブ・ディレクトリとして自動的に構成されます。Oracle Internet Directory (OID) は Shared Services インストールの一部としてインストールされません。

**注意** EPM System 11.1.1.3 および System 9 製品で構成される混在環境でネイティブ・ディレクトリとして OID は使用できません。たとえば、System 9 製品 (バージョン 9.3.1 または 9.2.x) が Shared Services バージョン 11.1.1.3 に登録されている場合は、OID をネイティブ・ディレクトリとして使用できません。

OID をネイティブ・ディレクトリとして構成する場合、Shared Services はネイティブ・ディレクトリのスキーマを OID にシードします。ネイティブ・ディレクトリ・スキーマは OID のルート DN 内の新規レルム (dc=css, dc=example, dc=com) に作成されるため、構成プロセスは既存のスキーマに影響を与えません。

**注：** OID をネイティブ・ディレクトリとして使用する場合、OID データベースの構成設定を調整することでパフォーマンスを改善できます。OID に関する推奨される最低限の構成設定については、『[Oracle Internet Directory のチューニングと構成クイック・リファレンス・ガイド](#)』を参照してください。

新パスワード・ポリシーは、OID 管理者が変更可能なネイティブ・ディレクトリ・レルムに実施されます。このポリシーは `dc=css,dc=example,dc=com` レルムにのみ適用されます。

ネイティブ・ディレクトリの使用方法の詳細は、[第 8 章「ネイティブ・ディレクトリの管理」](#)を参照してください。

## 既存の OpenLDAP の OID への移行

Shared Services バージョン 11.1.1.3 をアップグレードし、OID を OpenLDAP のかわりにネイティブ・ディレクトリとして使用する手順は、次のとおりです：

**注：** 製品をアップグレードする方法については、『[Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド](#)』を参照してください。

- Shared Services をアップグレードします。
- 現在のプロビジョニング関係を一覧表示するプロビジョニング・レポートを生成します。[134 ページの「プロビジョニング・レポートの生成」](#)を参照してください。
- ライフサイクル管理ユーティリティを使用して、既存の OpenLDAP からデータを抽出します。『[Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ライフサイクル管理ガイド](#)』のネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の移行に関するトピックを参照してください。
- OID をネイティブ・ディレクトリとして識別できるように、ネイティブ・ディレクトリ構成を変更します。[53 ページの「ネイティブ・ディレクトリ構成の変更」](#)を参照してください。
- Shared Services を再起動します。
- Shared Services の再起動が完了したら、Shared Services セキュリティ API を使用するその他の EPM System 製品とカスタム・アプリケーションを再起動します。
- ライフサイクル管理ユーティリティを使用して、データを OID にインポートし、ネイティブ・ディレクトリとして構成します。『[Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ライフサイクル管理ガイド](#)』のネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の移行に関するトピックを参照してください。

---

**注意** OpenLDAP データをパスワードポリシーが使用可能な OID に移行すると、OpenLDAP に設定されているパスワードがパスワード・ポリシー

に従っていない場合は失敗します。既存の OpenLDAP パスワードの移行が正常に行われたかどうかを確認するには、ネイティブ・ディレクトリ・レルムのパスワード・ポリシー制限を除去する必要があります。パスワード・ポリシー制限を削除する方法については、Oracle Internet Directory のドキュメントを参照してください。移行が完了したら、ネイティブ・ディレクトリのパスワード・ポリシーを復元します。

- すべてのプロビジョニング関係を一覧表示するプロビジョニング・レポートを生成し、それをネイティブ・ディレクトリを再構成する前に生成したプロビジョニング・レポートと比較します。134 ページの「[プロビジョニング・レポートの生成](#)」を参照してください。

## OID の新規インストールのネイティブ・ディレクトリとしての使用方法

新規の Shared Services バージョン 11.1.1.3 をインストールする場合に、OID をネイティブ・ディレクトリとして使用するには、次の手順に従います:

- OID をネイティブ・ディレクトリとして識別できるように、ネイティブ・ディレクトリ構成を変更します。53 ページの「[ネイティブ・ディレクトリ構成の変更](#)」を参照してください。
- Shared Services を再起動します。
- Shared Services セキュリティ API を使用するその他の EPM System 製品とカスタム・アプリケーションを再起動します。

## ネイティブ・ディレクトリ構成の変更

デフォルトでは、ネイティブ・ディレクトリ構成設定は、Shared Services とともにインストールされた OpenLDAP インスタンスをポイントします。ネイティブ・ディレクトリとして使用する OID をポイントするように、ネイティブ・ディレクトリを変更する必要があります。

- ▶ ネイティブ・ディレクトリ設定を変更するには、次の手順に従います:
  - 1 Shared Services Console を起動します。47 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。Shared Services 管理者としてログインします。
  - 2 管理、ユーザー・ディレクトリの構成の順に選択します。  
「定義済ユーザー・ディレクトリ」画面が表示されます。
  - 3 ネイティブ・ディレクトリを選択します。
  - 4 編集をクリックします。  
「ネイティブ接続情報」画面が表示されます。

5 表 6 の説明に従ってパラメータを変更します。

表 6 OID の接続情報

ラベル	説明
ディレクトリ・サーバー	Oracle Internet Directory を選択します
ホスト名	OID をホストするサーバー名 <b>例:</b> MyServer
ポート	OID を実行中のサーバー・ポート番号 <b>例:</b> 13060
最大サイズ	ユーザー、グループ、および役割の検索により戻される結果の最大数 検索条件を満たすすべてのユーザーおよびグループを取得するには、この値を空白のままにします。委任された管理モードで Shared Services を構成する場合は、この値を 0 に設定します。
ソケットのタイムアウト	Shared Services が OID からの要求を待機する最大時間
ユーザー DN	Shared Services が OID との接続を確立するために使用するユーザー・アカウント OID でスキーマの変更を行えるユーザー・アカウントを使用します。orcladmin または同様のアカウントを使用することをお勧めします。 特殊文字はユーザー DN 値には使用できません。89 ページの「 <a href="#">特殊文字の使用方法</a> 」を参照してください。 <b>例:</b> cn=orcladmin
パスワード	ユーザー DN で指定されたアカウントのパスワード。 <b>例:</b> UserDNpassword

## 6 保存をクリックします。

ネイティブ・ディレクトリを再構成する方法の詳細情報は、`SharedServices_Security.log` に書き込まれます。

## OpenLDAP データの OID へのインポート

**注：** この手順は、EPM System 製品ユーザーおよびグループをプロビジョニングするために、前に OpenLDAP を使用したことがある場合にのみ必要です。これが新しい Shared Services の配置である場合は、このタスクを実行しないでください。

ライフサイクル管理ユーティリティを使用して、OpenLDAP から OID にプロビジョニング情報を移行します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ライフサイクル管理ガイド』を参照してください。

**注：** データをパスワードポリシーが使用可能な OID にインポートすると、OpenLDAP パスワードがパスワード・ポリシーに従っていない場合は失敗します。OpenLDAP パスワードの移行が正常に行われたかどうかを確認するには、ネイティブ・ディレクトリ・レルムのパスワード・ポリシー制限を除去してください。

## Shared Services の再起動

すべての変更を有効にするには、Shared Services Web アプリケーションを再起動します。

---

**注意** Shared Services を再起動する前に OID が実行されていることを確認します。

---

## EPM System 製品の再起動

Shared Services の再起動が完了したら、Shared Services セキュリティ API を使用するその他の EPM System 製品とカスタム・アプリケーションを再起動します。

## カスタム認証モジュールの使用方法

EPM System 製品(シック・クライアントとシン・クライアント)は、ユーザー名とパスワードを受け入れます。これらは、ユーザー認証に使用されます。デフォルトの EPM System 認証を上書きするカスタム認証モジュールを記述できます。

CSSCustomAuthenticationIF Java インタフェースを実装することにより、このモジュールを使用してユーザーをどのシステムでも認証できるようになります。このインタフェースは、標準の Shared Services API の一部として `com.hyperion.css` パッケージで定義されます。

カスタム認証モジュールは、ユーザーが EPM System 製品にアクセスするために入力したログイン情報を使用します。カスタム認証モジュールは、ユーザー・ディレクトリに対して使用可能な場合、その独自のコードを使用してユーザーを認証します。ユーザーを正常に認証した場合は、カスタム・モジュールがユーザー名を戻します。

CSSCustomAuthenticationIF は、authenticate メソッドを構成し、入力パラメータとしてユーザー名とパスワードを受け入れます。ユーザーがカスタム・モジュールによって認証された場合、このメソッドは認証されたユーザーのユーザー名を戻します。ユーザーが見つからない場合は、java.lang.Exception がスローされます。次に、カスタム認証を実装する Java コードのサンプルを示します：

```
package com.hyperion.css.custom;

import java.util.Map;
import com.hyperion.css.CSSCustomAuthenticationIF;
import org.apache.log4j.Logger; // imports Log4j's Logger

public class CustomAuthenticationImpl implements
CSSCustomAuthenticationIF{

    //get the Logger to log exception or debug information
    // Log information is written to the security log

    static Logger
logger=Logger.getLogger("com.hyperion.css.custom.CustomAuthenticationImpl");
    public String authenticate(Map context,String userName, String
password)throws Exception{

        try {
            /* Your custom code goes here. Your code should do the following:
            // for authenticated users, set authenticationSuccessFlag = true
            // return authenticated userName (return value format can be
userName@providerName
            // if authentication fails, ensure debug is enabled using
logger.isDebugEnabled()
            // log an authentication failure
            // return a null value for userName or throw an exception */

        }catch (Exception e){

            /* Your custom code goes here. It should
            // catch authentication exception
            // create new exception, set the root cause
            // set any custom error message
            // return the exception to the caller
            */ }

            return authenticatedUserName;
        }
    }
}
```

**注：** カスタム・モジュールは、カスタム・モジュールが使用可能なユーザー・ディレクトリに存在するユーザー名を戻す必要があります。さらに、戻されるユーザー名に\* (アスタリスク)が含まれないことを確認してください。



カスタム認証クラスを、クラスパスに含める必要があります。カスタム認証 Java アーカイブを J2EE Web アプリケーションのクラスパスに追加する最も簡単な方法は、配置する前にエンタープライズ(.ear)またはアプリケーションの Web アーカイブ(.war)に追加することです。

デフォルトでは、カスタム認証は、ネイティブ・ディレクトリを除くすべてのユーザー・ディレクトリで使用可能です。デフォルトの動作を上書きして、特定の外部ユーザー・ディレクトリに対してカスタム認証を使用不可にしたり、ネイティブ・ディレクトリに対して使用可能にしたりできます。

カスタム認証クラスは、Shared Services の「セキュリティ・オプション」画面でグローバル・レベルで特定されます。1つの配置で使用できるカスタム認証モジュールは1つのみです。カスタム・モジュール・クラス名が、グローバル・レベルで指定されない場合、EPM System セキュリティは、

`com.hyperion.css.custom.CustomAuthenticationImpl` という名前のカスタム認証モジュールのクラスパスを自動的に検索します。見つからない場合、デフォルトの EPM System 認証が、ユーザー認証に使用されます。カスタム認証モジュールでデフォルトのクラス名またはパッケージ名が使用されない場合、グローバル・レベルで特定する必要があります。

すべての製品の配置プロセスを同時に完了する必要があります。これは、すべての EPM System 製品の認証プロセスが、配置プロセスの影響を受けるからです。このプロセスでは EPM System 製品を使用できないため、カスタム認証モジュールを配置する前に、メンテナンスの時間を十分に確保することをお勧めします。

## 前提条件

- 十分にテストされた Java アーカイブ。例: カスタム認証モジュール・ライブラリを含んでいる `customAuth.jar`
- Shared Services 管理者としての Shared Services へのアクセス権

## 手順の概要

カスタム認証モジュールを実装するには、カスタム認証モジュールの Java アーカイブを EPM System 製品のクラスパスに追加する必要があります。次の手順を完了する必要があります:

- EPM System 製品を停止します。これには、Shared Services と Shared Services API を使用するシステムが含まれます。
- カスタム認証モジュールの Java アーカイブを次の場所に含めます:
  - 各 EPM System ホスト・マシン上の共通の場所。58 ページの「[EPM System ホスト・マシン上の共通の場所へのカスタム認証モジュールの追加](#)」を参照してください。
  - EPM System 製品のクラスパス。J2EE アプリケーションの場合、これは、エンタープライズ・アーカイブ(.ear)または Web アーカイブ(.war)を更新してから、アプリケーションを再配置することによって行われます。58 ページの「[EPM System J2EE アプリケーション・アーカイブの準備](#)」を参照してください。

J2EE アプリケーション以外の場合には、次の製品固有の手順を実行する必要があります。参照先は次のとおりです：

- 60 ページの「[Essbase クラスパスへのカスタム・モジュールの追加](#)」
- 61 ページの「[Financial Management クラスパスへのカスタム・モジュールの追加](#)」
- 61 ページの「[Reporting and Analysis コア・サービス・クラスパスへのカスタム・モジュールの追加](#)」
- オプション: Shared Services でユーザー・ディレクトリ設定を更新します。62 ページの「[Shared Services の手順](#)」を参照してください。
- Shared Services を開始してからその他の EPM System 製品を開始します。

## EPM System ホスト・マシン上の共通の場所へのカスタム認証モジュールの追加

カスタム・モジュールの Java アーカイブを EPM System 製品をホストする各マシン上の共通の場所に追加する必要があります。

- ▶ カスタム認証モジュールを共通の場所に追加するには、次の手順に従います：
  - 1 マシン上で実行されている EPM System 製品をすべて停止します。
  - 2 各 EPM System 製品のホスト・マシンで、カスタム認証モジュールの Java アーカイブ (.jar)を `HYPERION_HOME/common/CSS/9.5.0.0/lib` にコピーします。

## EPM System J2EE アプリケーション・アーカイブの準備

この手順は、次のものを除く各 EPM System 製品に対して実行する必要があります：

- Oracle Essbase
- Reporting and Analysis コア・サービス
- Financial Management

**注：** クラスパスにカスタム・モジュールを追加した後、Shared Services のための追加手順を実行する必要があります。62 ページの「[Shared Services の手順](#)」を参照してください。

**注：** この項で説明する手順では、jar コマンドを使用してエンタープライズ・アーカイブおよび Web アーカイブを作成します。jar コマンドを効果的に使用するには、システムのクラスパスに JDK が存在する必要があります。

▶ EPM System J2EE アプリケーションのクラスパスにカスタム認証モジュールを追加するには、次の手順に従います:

- 1 EPM System 製品が実行中でないことを確認します。
  - 2 配置用に準備する EPM System J2EE アプリケーション・アーカイブの場所を特定します。通常は、アーカイブは `HYPERION_HOME/products/PRODUCT_NAME/AppServer/InstallableApps/common` にあります。たとえば、**Planning エンタープライズ・アーカイブ**(`HyperionPlanning.ear`)の場所は、`HYPERION_HOME/products/Planning/AppServer/InstallableApps/common` です。**Shared Services Web アーカイブ**(`interop.war`)の場所は、`HYPERION_HOME/products/Foundation/AppServer/InstallableApps/common` です。
  - 3 アプリケーション・アーカイブのバックアップ・コピーを作成します。
  - 4 一時ディレクトリを2つ作成します。たとえば、`temp1` と `temp2` です。
  - 5 アプリケーション・アーカイブを一時ディレクトリ(`temp1` など)にコピーします。
  - 6 **オプション:** この手順を実行するのは、カスタム認証モジュールをエンタープライズ・アーカイブ(`HyperionPlanning.ear` など)のクラスパスに追加する場合のみです:
    1. `jar` コマンドを使用して、エンタープライズ・アーカイブのコンテンツを一時ディレクトリ(`temp1`)に抽出します。
    2. エンタープライズ・アーカイブを一時ディレクトリから削除します。
  - 7 `jar` コマンドを使用して、Web アーカイブのコンテンツを一時ディレクトリ(`temp2`)に抽出します。
  - 8 Web アーカイブを一時ディレクトリ(`temp1`)から削除します。
  - 9 カスタム認証 Java アーカイブ(`customAuth.jar` など)を `WEB-INF/lib` ディレクトリにコピーします。これは、一時ディレクトリ(`temp2/WEB-INF/lib`)内にあります。
  - 10 `jar` コマンドを使用して、一時ディレクトリ(`temp2`)のコンテンツの Web アーカイブを作成します。Web アーカイブの名前が元のアプリケーション・アーカイブ(`HyperionPlanning.war` など)と同じであることを確認します。
- 注:** 作成した Web アーカイブまたはエンタープライズ・アーカイブがディレクトリ構造を維持していることを確認します。
- 11 **オプション:** 製品のエンタープライズ・アーカイブを再作成します:
    1. Web アーカイブ(`HyperionPlanning.war` など)を `temp1` にコピーします。
    2. `jar` コマンドを使用して、一時ディレクトリ(`temp1`)のコンテンツのエンタープライズ・アーカイブを作成します。エンタープライズ・アーカイブの名前が元のアプリケーション・アーカイブ(`HyperionPlanning.ear` など)と同じであることを確認します。
  - 12 `HYPERION_HOME/products/PRODUCT_NAME/AppServer/InstallableApps/common` にある既存のアプリケーション・アーカイブを置換します。
    - EPM System システム製品が、Web アーカイブを配置する場合、[手順 10](#) の Web アーカイブを使用します。

たとえば、Shared Services Web アーカイブ(interop.war)を HYPERION\_HOME/products/Foundation/AppServer/InstallableApps/common にコピーします。

- EPM System 製品が、エンタープライズ・アーカイブを配置する場合、**手順 11** のエンタープライズ・アーカイブを使用します。

たとえば、Planning エンタープライズ・アーカイブ(HyperionPlanning.ear)を HYPERION\_HOME/products/Planning/AppServer/InstallableApps/common にコピーします。

- 13 Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System** コンフィグレータを使用して、アプリケーション・アーカイブをアプリケーション・サーバーに配置します。配置の手順については、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management インストールおよび構成ガイド』を参照してください。

---

**注意** データベース構成プロセス時にも既存のアプリケーション・データが確実に保持されるようにするため、アプリケーション・アーカイブの再配置中に「前に構成したデータベースに接続」を選択します。また、既存のデータベース接続パラメータを変更しないでください。

---

- 14 オプション: Shared Services 構成を変更します。** [62 ページの「Shared Services の手順」](#)を参照してください。
- 15 EPM System 製品を開始します。**

## Essbase クラスパスへのカスタム・モジュールの追加

カスタム認証を使用可能にするには、Essbase が使用するカスタム認証クラス・ファイルを css-9\_5\_0.jar ファイルに追加する必要があります。

- ▶ カスタム・モジュールを Essbase クラスパスに追加するには、次の手順に従います:
  - 1 Essbase サーバーがシャットダウンしていることを確認します。**
  - 2 Essbase サーバーをホストしているサーバー上で、HYPERION\_HOME/common/CSS/9.5.0.0/lib/css-9\_5\_0.jar のバックアップ・コピーを作成します。**
  - 3 カスタム認証モジュールを既存の css-9\_5\_0.jar に追加します:**
    1. jar コマンドを使用して、css-9\_5\_0.jar のコンテンツを一時ディレクトリ(temp1 など)に抽出します。
    2. css-9\_5\_0.jar を一時ディレクトリから削除します。
    3. カスタム認証モジュール・クラス・ファイルを、css-9\_5\_0.jar のコンテンツを抽出した一時ディレクトリにコピーします。

クラス・ファイルのパッケージ構造に合ったディレクトリにファイルをコピーしてください。com.yourcompany.customauth という名前のパッケージを使用した場合、クラスが com/yourcompany/customauth フォルダにコピーされることを確認します。

4. jar コマンドを使用し、一時ディレクトリ temp1 のコンテンツを使用して css-9\_5\_0.jar を作成します。
- 4 前の手順で作成した css-9\_5\_0.jar を HYPERION\_HOME/common/CSS/9.5.0.0/lib にコピーします。
- 5 Essbase サーバーを開始します。

## Financial Management クラスパスへのカスタム・モジュールの追加

Financial Management のクラスパスにカスタム・モジュールを追加するには、カスタム・モジュールの場所および名前を Oracle Hyperion Shared Services レジストリを更新する必要があります。

- ▶ カスタム・モジュールを Financial Management クラスパスに追加するには、次の手順に従います:

- 1 すべての Financial Management プロセス(特に CASecurity.exe)を停止します。
- 2 カスタム認証モジュールの Java アーカイブ(customAuth.jar など)が、HYPERION\_HOME/common/CSS/9.5.0.0/lib にあることを確認します。58 ページの「EPM System ホスト・マシン上の共通の場所へのカスタム認証モジュールの追加」を参照してください。
- 3 カスタム・モジュール Java アーカイブ(%HYPERION\_HOME%\COMMON\css\9.5.0.0\lib\customAuth.jar など)の場所を次のキーの Financial Management 値データに追加します。既存の値データと追加するパスを必ずセミコロン(;)で区切ってください。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Hyperion Solutions\Hyperion Financial Management\Server\Authentication\ClassPath
```

## Reporting and Analysis コア・サービス・クラスパスへのカスタム・モジュールの追加

カスタム認証モジュールが、EPM Workspace クラスパスにあることを確認します。58 ページの「EPM System J2EE アプリケーション・アーカイブの準備」を参照してください。

- ▶ カスタム認証モジュールを Reporting and Analysis コア・サービス・クラスパスに追加するには、次の手順に従います:

- 1 EPM Workspace と Reporting and Analysis コア・サービスがシャットダウンしていることを確認します。
- 2 カスタム認証モジュールの Java アーカイブ(customAuth.jar など)が、Reporting and Analysis コア・サービスが配置されるマシン上の HYPERION\_HOME/common/CSS/9.5.0.0/lib にあることを確認します。58 ページの「EPM System ホスト・マシン上の共通の場所へのカスタム認証モジュールの追加」を参照してください。
- 3 クラスパスにカスタム認証 Java アーカイブを追加します:

1. テキスト・エディタを使用して、HYPERION\_HOME/common/workspacert/9.5.0.0/bin/workspace.app を開きます。
  2. カスタム認証 Java アーカイブの次のようなエントリを追加します:  

```
 ${home}/common/CSS/9.5.0.0/lib/customAuth.jar。ここで、  
 customAuth.jar はカスタム認証モジュールの Java アーカイブの名前です。
```
  3. workspace.app を保存して閉じます。
- 4 Reporting and Analysis コア・サービスと EPM Workspace を開始します。

## Shared Services の手順

デフォルトでは、カスタム認証は、ネイティブ・ディレクトリを除くすべてのユーザー・ディレクトリで使用可能です。EPM System のセキュリティ機能によって、com.hyperion.css.custom.CustomAuthenticationImpl という名前のカスタム認証モジュールについてクラスパスが自動的に検索されます。

デフォルトの動作を上書きして、カスタム認証を特定の外部ユーザー・ディレクトリで使用不可にしたり、ネイティブ・ディレクトリで使用可能にしたりできます。

## ユーザー・ディレクトリ構成の更新

ユーザー・ディレクトリ構成を更新する必要があるのは、次のシナリオの場合のみです:

- 検索順序に含まれる外部ユーザー・ディレクトリでカスタム認証を使用不可(または使用可能)にする。
- ネイティブ・ディレクトリでカスタム認証を使用可能(または使用不可)にする。

▶ ユーザー・ディレクトリ構成を更新するには、次の手順に従います:

- 1 Shared Services を開始します。
- 2 Shared Services Console に Shared Services 管理者としてログインします。
- 3 管理、ユーザー・ディレクトリの構成の順に選択します。  
「定義済ユーザー・ディレクトリ」画面が開き、ネイティブ・ディレクトリを含むすでに構成済のすべてのユーザー・ディレクトリが表示されます。
- 4 カスタム認証設定を変更するユーザー・ディレクトリを選択します。

**注:** EPM System は、検索順序に含まれたユーザー・ディレクトリのみを使用します。

- 5 編集をクリックします。
- 6 詳細オプションの表示を選択します。
- 7 カスタム・モジュールで、次のいずれかを実行します:

- 認証モジュールの使用の選択を解除して、現在のユーザー・ディレクトリでカスタム・モジュールを使用不可にします。
  - 認証モジュールの使用を選択して、現在のユーザー・ディレクトリでカスタム・モジュールを使用可能にします。
- 8 終了をクリックします。
  - 9 この手順を繰り返して、検索順序に含まれる他のユーザー・ディレクトリの構成を更新します。

## セキュリティ・オプションの更新

カスタム認証モジュールでデフォルトのクラス名またはパッケージ名が使用されない場合、セキュリティ・オプションを更新する必要があります。

**注：** カスタム・モジュールの Java アーカイブ(customAuth.jar など)がクラスパスにあることを確認してから、次の手順を実行してください。Shared Services はこれを動的に検索するからです。58 ページの「EPM System ホスト・マシン上の共通の場所へのカスタム認証モジュールの追加」および 58 ページの「EPM System J2EE アプリケーション・アーカイブの準備」を参照してください。

▶ セキュリティ・オプションを更新するには、次の手順に従います:

- 1 Shared Services Console に Shared Services 管理者としてログインします。
- 2 管理、ユーザー・ディレクトリの構成の順に選択します。
- 3 セキュリティ・オプションを選択します。
- 4 詳細設定オプションを選択します。
- 5 認証モジュールで、カスタム認証モジュールの完全修飾 Java クラス名を入力します。このクラス名は、カスタム認証モジュールが選択されるすべてのユーザー・ディレクトリでユーザーの認証に使用される必要があります。
- 6 OK をクリックします。

## ユーザー・ディレクトリ構成に関連する操作

デフォルトで OpenLDAP がインストールされ、ネイティブ・ディレクトリとして構成されます。OID をネイティブ・ディレクトリとして使用するには、51 ページの「ネイティブ・ディレクトリとしての Oracle Internet Directory の設定」を参照してください。

SSO と承認をサポートするには、外部ユーザー・ディレクトリを構成する必要があります。Shared Services Console から、ユーザー・ディレクトリの構成と管理に関連する複数のタスクを実行できます。これらのトピックは、次の手順に示されています。

- ユーザー・ディレクトリの構成:

- 65 ページの「OID、MSAD およびその他の LDAP ベースのユーザー・ディレクトリの構成」
- 74 ページの「SAP R3 ネイティブ・リポジトリの構成」
- 76 ページの「リレーショナル・データベースをユーザー・ディレクトリとして構成する」
- 79 ページの「ユーザー・ディレクトリの接続のテスト」
- 80 ページの「ユーザー・ディレクトリ設定の編集」
- 83 ページの「NTLM 外部ユーザー・ディレクトリの構成の変更」
- 85 ページの「ユーザー・ディレクトリ構成の削除」
- 85 ページの「ユーザー・ディレクトリの検索順の管理」
- 87 ページの「セキュリティ・オプションの設定」

## MSAD 情報

この項では、このドキュメントで使用されるいくつかの MSAD の概念について説明します。

### DNS 検索とホスト名検索

Shared Services が静的ホスト名検索または DNS 検索を行って MSAD を識別できるように MSAD を構成できます。静的ホスト名検索は、Shared Services で MSAD 構成をアップデートしない場合は、MSAD フェイルオーバーをサポートしません。

DNS 検索を使用すると、MSAD が確実に高可用性を実現するように複数のドメイン・コントローラ上で構成されるシナリオでは、MSAD の高可用性が確実に実現されます。DNS 検索を実行するように構成される場合、Shared Services は DNS サーバーに登録されているドメイン・コントローラを識別するようにクエリーを行い、最大の重量でドメイン・コントローラに接続します。Shared Services が接続されるドメイン・コントローラが失敗すると、Shared Services は最大の重量で次に使用可能なドメイン・コントローラに動的に切り替えます。

**注：** DNS 検索は、フェイルオーバーをサポートする冗長 MSAD 設定が使用可能な場合のみ構成できます。詳細は、Microsoft のドキュメントを参照してください。

### グローバル・カタログ

グローバル・カタログは、フォレスト内のすべての MSAD オブジェクトのコピーを保管するドメイン・コントローラです。そのホスト・ドメインのディレクトリ内のその他すべてのドメインのすべてのオブジェクトの完全なコピーおよびフォレスト内のその他すべてのドメインのすべてのオブジェクトの部分コピーを保管し、これらは通常ユーザー検索操作で使用されます。グローバル・カタログの設定については、Microsoft のドキュメントを参照してください。



グローバル・カタログを使用する場合、次のメソッドのいずれかを使用して、MSAD ユーザー・ディレクトリを構成します。

- 外部ユーザー・ディレクトリとしてグローバル・カタログ・サーバーを構成する(推奨)
- 個別の外部ユーザー・ディレクトリとして各 MSAD ドメインを構成する

個々の MSAD ドメインではなく、グローバル・カタログを構成することにより、EPM System 製品がフォレスト内のローカルおよびユニバーサル・グループにアクセスできます。

## OID、MSAD およびその他の LDAP ベースのユーザー・ディレクトリの構成

この項で示す手順を使用して、OID、MSAD、Sun Java System Directory Server、IBM Tivoli Directory Server などの LDAP ベースの企業ユーザー・ディレクトリを構成します。あるいは、構成画面に示されない LDAP ベースのユーザー・ディレクトリを構成します。

**注：** データベースの使用のために構成される Oracle 仮想ディレクトリを、LDAP ベースの外部のユーザー・ディレクトリとして Shared Services に構成できます。

▶ OID、MSAD および他の LDAP ベースのユーザー・ディレクトリを構成するには、次の手順に従います:

1 Shared Services Console を起動します。47 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。

2 管理、ユーザー・ディレクトリの構成の順に選択します。

「定義済ユーザー・ディレクトリ」画面が開き、ネイティブ・ディレクトリを含むすでに構成済のすべてのユーザー・ディレクトリが表示されます。

3 追加をクリックします。

4 ディレクトリ・タイプで、次のいずれかのオプションを選択します。

- LDAP (Lightweight Directory Access Protocol): MSAD ではなく、LDAP ベースのユーザー・ディレクトリを構成します。
- MSAD (Microsoft Active Directory): MSAD を構成します。

5 次へをクリックします。

選択したユーザー・ディレクトリ・タイプの接続情報画面が開きます。

1. MSAD Connection Information > 2. MSAD User Configuration > 3. MSAD Group Configuration >

Server Information

Directory Server: Microsoft

\* Name:

DNS Lookup  Host Name

\* Host Name:

\* Port:

SSL Enabled:

\* Base DN:

ID Attribute:

Maximum Size:

Trusted:

Anonymous Bind:

\* User DN:   Append Base DN

\* Password:

Show Advanced Options

CSS Cache Refresh Interval:  mins

LDAP Options

Referrals:

Dereference Aliases:

Connection Pooling

Support Connection Pooling

Max Connections:

Time Out:  ms

Evict Interval:  mins

Allowed Idle Connection Time:  mins

Grow Connections:

Help

6 必要なパラメータを入力します。

表 7 「接続情報」画面

ラベル	説明
ディレクトリ・サーバー	<p>ユーザー・ディレクトリを選択します。表示された製品ではなく、LDAPバージョン2 (またはそれ以降)の製品を使用している場合は、「その他」を選択します。</p> <p><b>ID 属性値が、選択した製品の推奨される一定の ID 属性に変わります。</b></p> <p><b>注：</b> 基底になるデータベースで構成される既存の Oracle 仮想ディレクトリを構成するには、「その他」を選択します。</p> <p><b>例:</b> Oracle Internet Directory</p>
名前	<p>ユーザー・ディレクトリのわかりやすい名前。複数のユーザー・ディレクトリが構成されている場合は、特定のユーザー・ディレクトリを識別するために使用します。</p> <p><b>例:</b> MY_OID</p>
DNS 検索	<p><b>MSAD のみ:</b> このオプションを選択して DNS 検索を使用可能にします。64 ページの「DNS 検索とホスト名検索」を参照してください。</p> <p><b>注：</b> グローバル・カタログを構成している場合は、このオプションを選択しないでください。</p>

ラベル	説明
ホスト名	<p><b>MSAD のみ:</b> このオプションを選択して静的なホスト名検索を使用可能にします。<a href="#">64 ページの「DNS 検索とホスト名検索」</a>を参照してください。</p>
ホスト名	<p>ユーザー・ディレクトリ・サーバーの名前。SiteMinder から SSO をサポートするためにユーザー・ディレクトリを使用する場合は、完全修飾のドメイン名を使用します。</p> <p>MSAD に DNS 検索を使用している場合は、DNS サーバー名を指定します。<a href="#">64 ページの「DNS 検索とホスト名検索」</a>を参照してください。</p> <p><b>注:</b> MSAD グローバル・カタログを構成している場合は、グローバル・カタログ・サーバーのホスト名を指定します。<a href="#">64 ページの「グローバル・カタログ」</a>を参照してください。</p> <p><b>例:</b> MyServer</p>
ポート	<p>ユーザー・ディレクトリが実行するポート番号。</p> <p><b>注:</b> MSAD グローバル・カタログを構成している場合は、グローバル・カタログ・サーバーが使用するポート(デフォルトは 3268)を指定します。<a href="#">64 ページの「グローバル・カタログ」</a>を参照してください。</p> <p><b>例:</b> 389</p>
SSL 使用可能	<p>このユーザー・ディレクトリとの SSL (Secure Socket Layer)通信を使用可能にするチェック・ボックス。ユーザー・ディレクトリは、セキュア通信として構成する必要があります。</p>
ベース DN	<p>ユーザーおよびグループの検索を開始するノードの識別名(DN)。また、DN のフェッチボタンを使用して、使用可能なベース DN のリストを表示し、そのリストから適切なベース DN を選択できます。</p> <p><b>注:</b> グローバル・カタログを構成している場合は、フォレストのベース DN を指定します。</p> <p>特殊文字の使用上の制限については、<a href="#">89 ページの「特殊文字の使用方法」</a>を参照してください。</p> <p>EPM System 製品のすべてのユーザーとグループを含む最下位の DN を選択することをお勧めします。</p> <p><b>例:</b> dc=example,dc=com</p>
ID 属性	<p>一意のユーザー属性。この属性の推奨値が自動的に、OID (orclguid)、SunONE (nsuniqueid)、IBM Directory Server (Ibm-entryUuid)、Novell eDirectory (GUID)および MSAD (ObjectGUID)に設定されます。必要に応じてデフォルト値を変更できます。</p> <p><b>例:</b> orclguid</p>
最大サイズ	<p>検索が戻す結果の最大数。ユーザー・ディレクトリ設定でサポートする値よりもこの値が大きい場合は、ユーザー・ディレクトリ値がこの値を上書きします。</p> <p>MSAD 以外の LDAP ベースのユーザー・ディレクトリの場合、これを空白にすると、検索条件を満たすすべてのユーザーとグループが取得されます。</p> <p>MSAD の場合、この値を 0 に設定すると、検索条件を満たすすべてのユーザーとグループが取得されます。</p> <p>委任された管理モードで Shared Services を構成している場合は、この値を 0 に設定します。</p>
信頼済	<p>このプロバイダが信頼できる SSO ソースであることを示すチェック・ボックス。信頼できるソースの SSO トークンにはユーザーのパスワードは含まれません。</p>

ラベル	説明
匿名のバインド	<p>Shared Services で匿名をユーザー・ディレクトリにバインドしてユーザーおよびグループを検索できることを示すチェック・ボックス。ユーザー・ディレクトリが匿名のバインドを許可する場合にのみ使用できます。このオプションを選択しない場合は、ユーザー情報が保管されたディレクトリを検索するのに十分なアクセス権を持つアカウントをユーザー DN に指定する必要があります。</p> <p>匿名のバインドの使用はお勧めしません。</p> <p>注： 匿名のバインドは OID ではサポートされません。</p>
ユーザー DN	<p>匿名のバインドが選択されている場合、このボックスは使用不可です。</p> <p>Shared Services がユーザー・ディレクトリとのバインドに使用するユーザーの識別名。この識別名はベース DN 内に読み取りアクセス権を持つ必要があります。</p> <p>ユーザー DN の値には特殊文字は禁止されています。制限については、<a href="#">89 ページの「特殊文字の使用方法」</a>を参照してください。</p> <p>例: cn=admin,dc=example,dc=com</p>
ベース DN の追加	<p>ベース DN をユーザー DN に追加するためのチェック・ボックス。ディレクトリ・マネージャ・アカウントをユーザー DN として使用している場合は、ベース DN を追加しないでください。</p> <p>「匿名のバインド」オプションが選択されている場合、このチェック・ボックスは使用不可です。</p>
パスワード	<p>ユーザー DN パスワード。</p> <p>「匿名のバインド」オプションが選択されている場合、このボックスは使用不可です。</p> <p>例: UserDNpassword</p>
詳細オプションの表示	<p>詳細オプションを表示するチェック・ボックス。</p>
CSS キャッシュのリフレッシュ間隔	<p>ユーザー・ディレクトリのユーザーおよびグループ情報を含む Shared Services のキャッシュをリフレッシュするための間隔(分)。ユーザー・ディレクトリ内の新しく追加されたユーザーおよびグループのプロビジョニング情報を Shared Services で使用できるのは、キャッシュの次のリフレッシュの後のみです。このため、新しいユーザーや新しいグループのメンバーは、リフレッシュの間にはプロビジョニングされた役割を取得しません。</p> <p>例: 75</p>
参照	<p><b>MSAD のみ:</b></p> <p>「従う」を選択すると、LDAP 参照に自動的に従います。「無視」を選択すると、参照は使用されません。</p>
別名の逆参照	<p>Shared Services の検索で使用するメソッドを選択すると、ユーザー・ディレクトリの別名が逆参照されます。これにより、別名の DN が指すオブジェクトが検索で取得されます。選択:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 常時: 常に別名を逆参照します</li> <li>● なし: 別名を逆参照しません</li> <li>● 検索中: 名前解決の間にのみ別名を逆参照します</li> <li>● サーチ中: 名前解決の後にのみ別名を逆参照します</li> </ul>

ラベル	説明
接続プーリングのサポート	このユーザー・ディレクトリに対して接続プーリングを使用可能にするチェック・ボックス
最大接続数	プール内の最大接続数。LDAP ベースのディレクトリ (MSAD を含む) の場合、デフォルトは 100 です。ネイティブ・ディレクトリの場合は 300 です。
タイムアウト	プールから接続を取得するまでのタイムアウト。この期間が過ぎると例外が発生します。デフォルトは、300,000 ミリ秒 (5 分) です。
削除間隔	<b>オプション:</b> 削除プロセスを実行してプールを消去するための間隔。削除プロセスによって、アイドル状態の接続許容時間を超えたアイドル状態の接続が除去されます。デフォルトは 60 分です。
アイドル状態の接続許容時間	<b>オプション:</b> 削除プロセスがプール内のアイドル状態の接続を除去するまでの許容時間。デフォルトは 120 分です。
接続の拡大	このオプションは、接続プールが最大接続数を超える接続を保持できるかどうかを示します。デフォルトで選択されています。接続プールの拡大を禁止した場合、タイムアウトで設定された時間内に接続が有効にならないとエラーが発生します。
認証モジュールの使用	カスタム認証モジュールの使用を使用可能にして、このユーザー・ディレクトリで定義されたユーザーを認証するためのチェック・ボックス。認証モジュールの完全修飾 Java クラス名は、セキュリティ・オプション画面で指定する必要があります。 <a href="#">87 ページの「セキュリティ・オプションの設定」</a> を参照してください。 <a href="#">55 ページの「カスタム認証モジュールの使用方法」</a> を参照してください。

## 7 次へをクリックします。

ユーザー構成画面が開きます。Shared Services は、この画面に設定されたプロパティを使用して、ユーザーの検索を開始するノードの特定に利用されるユーザー URL を作成します。この URL を使用すると、検索効率が向上します。

**注意** ユーザー URL は別名をポイントできません。EPM System のセキュリティでは、ユーザー URL が別名ではなく実際のユーザーをポイントすることが求められます。

画面の「自動構成」領域を使用して、必要な情報を取得することをお勧めします。

**注：** ユーザー構成で使用できる特殊文字のリストについては、89 ページの「特殊文字の使用法」を参照してください。

- 8 自動構成テキスト・ボックスに、フォーマット `attribute=identifier` を使用して、一意のユーザー識別子を入力します。例: `uid=jdoe`。

ユーザーの属性は、「ユーザー構成」領域に表示されます。

OID を構成している場合は、OID のルート DSE がネーミング・コンテキスト属性内にエントリを含まないため、ユーザー・フィルタを自動的に構成できません。『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』のネーミング・コンテキストの管理に関する説明を参照してください。

**注：** 「ユーザー構成」領域のテキスト・ボックスに、必要なユーザー属性を手動で入力できます。

**表 8 「ユーザー構成」画面**

ラベル	説明
ユーザー RDN	ユーザーの相対的な識別名。DN の各コンポーネントは RDN と呼ばれ、ディレクトリ・ツリー内の分岐を表します。ユーザーの RDN は一般に、 <code>uid</code> または <code>cn</code> と同じです。  制限については、89 ページの「特殊文字の使用法」を参照してください。  例: <code>ou=People</code>
ログイン属性	ユーザーのログオン名を保管する属性。ユーザーは、EPM System 製品にログインするとき、この属性の値をユーザー名として使用します。

ラベル	説明
	<p><b>注：</b> Kerberos 環境の Oracle Application Server に配置された EPM System 製品の外部ユーザー・ディレクトリとして OID を構成している場合は、このプロパティを userPrincipalName に設定する必要があります。</p> <p><b>例:</b> uid</p>
名の属性	<p>ユーザーの名を保管する属性。</p> <p><b>例:</b> givenName</p>
姓の属性	<p>ユーザーの姓を保管する属性。</p> <p><b>例:</b> sn</p>
電子メール属性	<p><b>オプション:</b> ユーザーの電子メール・アドレスを保管する属性。</p> <p><b>例:</b> mail</p>
オブジェクト・クラス	<p>ユーザーのオブジェクト・クラス(ユーザーに関連付けられる必須とオプションの属性)。Shared Services は、この画面に表示されたオブジェクト・クラスを検索フィルタに使用します。これらのオブジェクト・クラスを使用して、Shared Services は、プロビジョニングされたすべてのユーザーを検索する必要があります。</p> <p>オブジェクト・クラスは、必要に応じて手動で追加できます。オブジェクト・クラスを追加するには、オブジェクト・クラスボックスにオブジェクト・クラス名を入力し、追加をクリックします。</p> <p>オブジェクト・クラスを削除するには、オブジェクト・クラスを選択し、削除をクリックします。</p> <p><b>例:</b> person, organizationalPerson, inetorgperson</p>
詳細オプションの表示	<p>フィルタの使用を使用可能にして、検索操作時にユーザーを取得するためのチェック・ボックス。</p>
ユーザーを制限するフィルタ	<p>EPM System 製品の役割がプロビジョニングされるユーザーのみを取得する LDAP クエリー。たとえば、LDAP クエリー (uid=Hyp*) は、名前の先頭が接頭辞 Hyp で始まるユーザーのみを取得します。</p> <p>ユーザー構成画面はユーザー RDN を検証します。必要な場合は、ユーザー・フィルタの使用をお勧めします。</p> <p>ユーザー・フィルタを入力して、フィルタの実行をクリックすると、クエリーが検証されます。検証は、フィルタを使用して取得されるユーザー数のカウントを得ることで行われます。</p> <p>ユーザー・フィルタは、クエリーで戻されるユーザー数を制限するために使用します。ユーザー RDN によって識別されるノードが、プロビジョニングされる必要のない多くのユーザーを含む場合に特に重要です。ユーザー・フィルタは、プロビジョニングされる必要のないユーザーを除外するために使用できます。これにより、パフォーマンスが向上します。</p>

## 9 次へをクリックします。

グループ構成画面が開きます。Shared Services は、この画面に設定されたプロパティを使用して、グループの検索を開始するノードを判別するグループ URL を作成します。この URL を使用すると、検索効率が向上します。

---

**注意** グループ URL は別名をポイントできません。EPM System のセキュリティでは、グループ URL が別名ではなく実際のグループをポイントすることが求められます。

---

**注意** グループの別名を使用する Novell eDirectory を構成している場合、グループ URL 内でグループの別名とグループ・アカウントを使用できる必要があります。

---

**注：** グループ構成画面のデータ入力はオプションです。グループ URL の設定を入力しない場合、Shared Services は、ベース DN 内を検索してグループを見つけます。これは特に、ユーザー・ディレクトリに多くのユーザーが含まれている場合に悪影響をパフォーマンスに及ぼします。

LDAP Connection Information | LDAP User Configuration | **LDAP Group Configuration**

Support Groups

Group Configuration

Enter the Unique Identifier of a Group in the Directory and click Auto Configure to detect Group Configuration

Group RDN:

Name Attribute:

Object Class:

Show Advanced Options

Filter to Limit Groups

- 10** グループのプロビジョニングを予定していない場合、またはユーザーがユーザー・ディレクトリでループに分類されない場合は、グループのサポートを選択解除します。このオプションを選択解除すると、この画面のフィールドは使用不可になります。

グループをサポートしている場合は、自動構成機能を使用して、必要な情報を取得することをお勧めします。

OID をユーザー・ディレクトリとして構成している場合は、自動構成機能を使用できません。理由は、OID のルート DSE がネーミング・コンテキスト属性内にエントリを含まないからです。『[Oracle Internet Directory 管理者ガイド](#)』のネーミング・コンテキストの管理に関する説明を参照してください。

- 11** 自動構成テキスト・ボックスに、一意のグループ識別子を入力し、検索をクリックします。

グループ識別子は、フォーマット `attribute=identifier` で指定する必要があります。例: `cn=western_region`。

グループの属性は、「グループ構成」領域に表示されます。



**注：** 必要なグループ属性は、「グループ構成」テキスト・ボックスに手動で入力できます。

**注意** ノード名に/(スラッシュ)または¥(バックスラッシュ)を含むユーザー・ディレクトリにグループ URL が設定されていない場合、ユーザーおよびグループの検索は失敗します。たとえば、ユーザーおよびグループが存在するノード内(OU=child¥ou, OU=parent/ou または OU=child/ou, OU=parent ¥ ou など)のユーザー・ディレクトリにグループ URL が指定されていない場合、ユーザーまたはグループを表示する操作は失敗します。

**表 9 「グループ構成」画面**

ラベル	説明
グループ RDN	<p>グループの相対的な識別名。DN の各コンポーネントは RDN と呼ばれ、ディレクトリ・ツリー内の分岐を表します。ベース DN に相対的なこの値は、グループ URL として使用されます。</p> <p>グループ RDN を指定します。これにより、プロビジョニングする予定のすべてのグループが使用可能な最下位のユーザー・ディレクトリ・ノードが識別されます。</p> <p>グループ RDN はログインと検索のパフォーマンスに重大な影響を及ぼします。グループ RDN はすべてのグループ検索の開始点であるため、EPM System 製品のすべてのグループが使用可能な最下位ノードを識別する必要があります。最適なパフォーマンスを保証するには、グループ RDN 内に存在するグループのメンバーが 10,000 を超えないようにする必要があります。これより多くのグループが存在する場合は、グループ・フィルタを使用して、プロビジョニングするグループのみを取得します。</p> <p><b>注：</b> グループ URL 内の使用可能なグループ数が 10,000 を超えると、Shared Services は警告を表示します。</p> <p>制限については、<a href="#">89 ページの「特殊文字の使用方法」</a>を参照してください。</p> <p><b>例:</b> ou=Groups</p>
名前 の 属 性	<p>グループの名前を保管する属性。</p> <p><b>例:</b> cn</p>
オブ ジェ ク ト・ ク ラ ス	<p>グループのオブジェクト・クラス。Shared Services は、この画面に表示されたオブジェクト・クラスを検索フィルタで使用します。これらのオブジェクト・クラスを使用して、Shared Services は、ユーザーに関連付けられたすべてのグループを検索する必要があります。</p> <p>オブジェクト・クラスは、必要に応じて手動で追加できます。オブジェクト・クラスを追加するには、「オブジェクト・クラス」テキスト・ボックスにオブジェクト・クラス名を入力し、追加をクリックします。</p> <p>オブジェクト・クラスを削除するには、オブジェクト・クラスを選択し、削除をクリックします。</p> <p><b>例:</b> groupofuniquenames?uniquemember</p>
詳細 オブ シ ョ ン の 表 示	<p>フィルタの使用を使用可能にして、検索操作時にグループを取得するためのチェック・ボックス。</p>

ラベル	説明
グループを制限するフィルタ	<p>EPM System 製品の役割がプロビジョニングされるグループのみを取得する LDAP クエリー。たとえば、LDAP クエリー (<code>  (cn=Hyp*) (cn=Admin*)</code>) は、名前の先頭が接頭辞 Hyp または Admin で始まるグループのみを取得します。</p> <p>グループ・フィルタを入力して、フィルタの実行をクリックすると、フィルタが検証されます。検証は、フィルタを使用して取得されるグループ数のカウントを得ることで行われます。</p> <p>グループ・フィルタは、クエリーで戻されるグループ数を制限するために使用します。グループ RDN によって識別されるノードが、プロビジョニングされる必要のない多くのグループを含む場合に特に重要です。フィルタは、プロビジョニングされる必要のないグループを除外するために使用できます。これにより、パフォーマンスが向上します。</p>

- 12 終了をクリックします。  
Shared Services は構成を保存して、「定義済ユーザー・ディレクトリ」画面に戻ります。この画面には、今構成したユーザー・ディレクトリが表示されます。
- 13 構成をテストします。79 ページの「ユーザー・ディレクトリの接続のテスト」を参照してください。
- 14 必要に応じて、検索順の割当てを変更します。詳細は、85 ページの「ユーザー・ディレクトリの検索順の管理」を参照してください。
- 15 必要に応じて、セキュリティ・オプションを指定します。87 ページの「セキュリティ・オプションの設定」を参照してください。

## SAP R3 ネイティブ・リポジトリの構成

次の手順を開始する前に、45 ページの「前提条件」に記載されているすべての前提条件を満たしている必要があります。

デフォルトでは、SAP キーストア・ファイルを解決するためのタイムアウトは 10 秒です。

- ▶ SAP ネイティブ・リポジトリを構成するには、次の手順に従います:
  - 1 Shared Services Console を起動します。47 ページの「Shared Services Console の起動」を参照してください。
  - 2 管理、ユーザー・ディレクトリの構成の順に選択します。  
「定義済ユーザー・ディレクトリ」画面が表示されます。
  - 3 追加をクリックします。
  - 4 ディレクトリ・タイプ画面で、SAP、次への順に選択します。  
「SAP 接続情報」画面が開きます。

5 「SAP 接続情報」画面で、構成パラメータを入力します。

表 10 「SAP 接続情報」画面

ラベル	説明
名前	SAP プロバイダの一意的構成名。この名前を使用して、複数の SAP プロバイダが Shared Services で定義されている状況で、SAP プロバイダを識別します。 <b>例:</b> MY_SAP_DIRECTORY
SAP サーバー名	SAP サーバーが実行されているコンピュータのホスト名(または IP アドレス)、または SAP ルーター・アドレス。 <b>例:</b> myserver
クライアント番号	接続する SAP システムのクライアント番号。 <b>例:</b> 001
システム番号	接続する SAP システムのシステム番号。 <b>例:</b> 00
ユーザー ID	Shared Services が SAP へのアクセスに使用する必要があるユーザー名。このユーザーは、SAP への接続およびユーザーやアクティビティ・グループ、関連データへのアクセスを可能にするための、リモート・ファンクション・コール(RFC)を使用するアクセス権を持っている必要があります。 <b>例:</b> my_sap_user
パスワード	「ユーザー ID」ボックスでユーザーを識別するパスワード。 <b>例:</b> my_sap_password
最大入力数	SAP プロバイダへのクエリーが戻せる最大入力数。委任された管理モードで Shared Services を構成する場合、この値を 0 に設定します。

ラベル	説明
	<b>例:</b> 100
プール・サイズ	JCo 接続プール・サイズ。 <b>例:</b> 10
プール名	Shared Services と SAP 間のリンクを設立するために使用しなくてはならない接続プール用の一意の名前。 <b>例:</b> HYPERION_SAP_POOL
言語	SAP が発行するエラー・メッセージなどのメッセージの言語。デフォルトでは、Shared Services をホストしているサーバーのシステム・ロケールから読み取ります。 <b>例:</b> EN
SAP デジタル認証の場所	使用する SAP X.509 証明書。EPM System 製品は、この証明書を使用して、SAP ログイン・チケットを解析し、SSO をサポートするのに必要なユーザー ID を抽出します。SAP Enterprise Portal にプラグインしている EPM System 製品にのみ必要です。 <b>例:</b> Hyperion/common/SAP/bin/SAP_cert_name
SSL 使用可能	Shared Services と SAP プロバイダ間の通信用セキュア・ソケット・レイヤー(SSL)を使用可能にするチェック・ボックス。
信頼済	このプロバイダが信頼できる SSO ソースであることを指定できるチェック・ボックス。信頼できるソースからの SSO トークンには、ユーザーのパスワードは含まれません。

## 6 保存をクリックします。

Shared Services は、構成を保存し、構成した SAP プロバイダを一覧表示する「定義済ユーザー・ディレクトリ」画面に戻ります。

- 7 SAP ネイティブ・ディレクトリ構成をテストします。79 ページの「ユーザー・ディレクトリの接続のテスト」を参照してください。
- 8 必要に応じて、検索順の割当てを変更します。詳細は、85 ページの「ユーザー・ディレクトリの検索順の管理」を参照してください。
- 9 必要に応じて、セキュリティ・オプションを指定します。87 ページの「セキュリティ・オプションの設定」を参照してください。

## リレーショナル・データベースをユーザー・ディレクトリとして構成する

Oracle、SQL Server、および IBM DB2 リレーショナル・データベースのシステム・テーブルからのユーザーおよびグループ情報を使用して、プロビジョニングをサポートできます。グループ情報がデータベースのシステム・スキーマから取得できない場合、Shared Services はそのデータベース・プロバイダからのグループのプロビジョニングはサポートしません。たとえば、Shared Services は、データベースがオペレーティング・システム上で定義されているグループを使用するため、IBM DB2 からグループ情報を抽出できません。ただし、ネイティブ・ディレクトリのグループにこれらのユーザーを追加して、このグループをプロビジョニングできます。

ユーザーおよびグループのリストを取得するには、データベース管理者、たとえば、Oracle SYSTEM ユーザーとしてデータベースに接続できるように Shared Services を構成する必要があります。

**注：** Shared Services は、プロビジョニングに対してアクティブなデータベース・ユーザーのみ取得できます。非アクティブでロックされているデータベース・ユーザー・アカウントは無視されます。

▶ データベース・プロバイダを構成するには、次の手順に従います：

- 1 Shared Services Console を起動します。47 ページの「Shared Services Console の起動」を参照してください。
- 2 管理、ユーザー・ディレクトリの構成の順に選択します。  
構成済ユーザー・ディレクトリを一覧表示する「定義済ユーザー・ディレクトリ」画面が開きます。
- 3 追加をクリックします。
- 4 ディレクトリ・タイプ画面で、リレーショナル・データベース(Oracle、DB2、SQL Server)を選択します。
- 5 次へをクリックします。

The screenshot shows a configuration window titled '2. Advanced Database Configuration'. Under 'Server Information', the 'Database Type' is a dropdown menu set to 'Oracle'. Below it are several fields: '\* Name:' (highlighted in yellow), '\* Server:', '\* Port:' (with '1521' entered), '\* Service/SID:', '\* User Name:', and '\* Password:'. At the bottom, there is a 'Trusted:' checkbox which is checked. At the very bottom of the window are buttons for 'Help', '< Back', 'Next >', 'Finish', and 'Cancel'.

- 6 「データベースの構成」タブで、構成パラメータを入力します。

表 11 「データベースの構成」タブ

ラベル	説明
データベース・タイプ	リレーショナル・データベース・プロバイダ。Shared Services は、データベース・プロバイダとして Oracle、IBM DB2、および SQL Server データベースのみサポートしています。 <b>例:</b> Oracle
名前	データベース・プロバイダの一意の構成名。この名前を使用して、複数のデータベース・プロバイダが Shared Services で定義されている場合に、データベース・プロバイダを確認します。 <b>例:</b> Oracle_DB_FINANCE
サーバー	データベース・サーバーが実行されているコンピュータのホスト名(または IP アドレス)。

ラベル	説明 例: myserver
ポート	データベース・サーバーのポート番号。 例: 1521
サービス/ SID (Oracle のみ)	システム識別子 (デフォルトは orcl)。 例: orcl
データベ ース(SQL Server およ び DB2 の み)	Shared Services が接続する必要があるデータベース。 例: master
ユーザー名	Shared Services がデータベースへのアクセスに使用するユーザー名。このデータベース・ユーザーには、データベース・システム・テーブルへのアクセス権が必要です。Oracle データベースにはシステム・アカウント、SQL Server および IBM DB2 データベースにはデータベース管理者のユーザー名を使用することをお勧めします。 例: SYSTEM
パスワード	ユーザー名でユーザーを識別するパスワード。 例: system_password
信頼済	このプロバイダが信頼できる SSO ソースであることを指定するチェック・ボックス。信頼できるソースからの SSO トークンにはユーザーのパスワードは含まれません。

## 7 オプション: 接続プールを構成するには、次へをクリックします。

「詳細なデータベース構成」タブが開きます。

1. Database Configuration > 2. Advanced Database Configuration >

Connection Pool Configuration

Max Connections: 50

Initial Size: 20

Allowed Idle Connection Time: 600 sec

Evict Interval: 300 sec

Grow Connections:

Use Authentication Module:

Help < Back Next > Finish Cancel

## 8 「詳細なデータベース構成」タブで、接続プールのパラメータを入力します。

表 12 「詳細なデータベース構成」タブ

ラ ベ ル	説明
最 大	プールの最大接続数。デフォルトは 10 です。

ラベル	説明
接続数	
初期サイズ	プールを初期化する場合に使用可能な接続数。デフォルトは 10 です。
アイドル状態の接続許容時間	<b>オプション:</b> プール内アイドル接続が削除プロセスによって除去されるまでの時間。デフォルトは 300 秒です。
削除間隔	<b>オプション:</b> プールを消去するために削除プロセスを実行する間隔。削除プロセスはアイドル状態の接続許容時間を超えたアイドル接続を除去します。デフォルトは 60 分です。
接続の拡大	接続プールが最大接続数を超える接続を保持できるかどうかを示します。デフォルトでは、このオプションは選択解除されており、接続は保持できないことを示します。接続プールが接続を保持できず、接続がタイムアウトに設定された時間内に使用不可の場合はシステムでエラーが発生します。

- 9 終了をクリックします。
- 10 「定義済ユーザー・ディレクトリ」画面に戻るには、OK をクリックします。
- 11 データベース・プロバイダ構成をテストします。79 ページの「ユーザー・ディレクトリの接続のテスト」を参照してください。
- 12 必要に応じて、検索順の割当てを変更します。詳細は、85 ページの「ユーザー・ディレクトリの検索順の管理」を参照してください。
- 13 必要に応じて、セキュリティ設定を指定します。87 ページの「セキュリティ・オプションの設定」を参照してください。
- 14 Shared Services を再起動します。
- 15 Shared Services の再起動が完了したら、Shared Services セキュリティ API を使用するその他の EPM System 製品とカスタム・アプリケーションを再起動します。

## ユーザー・ディレクトリの接続のテスト

ユーザー・ディレクトリの構成後、Shared Services が現在の設定を使用してユーザー・ディレクトリに接続できることを確認するため、接続をテストします。

**注：** テスト接続が正常に確立されても、Shared Services でそのディレクトリを使用するというわけではありません。Shared Services は検索順を割り当てられているディレクトリのみを使用します。

- ▶ ユーザー・ディレクトリ接続をテストするには、次の手順に従います：
  - 1 Shared Services Console を起動します。47 ページの「Shared Services Console の起動」を参照してください。
  - 2 管理、ユーザー・ディレクトリの構成の順に選択します。  
「定義済ユーザー・ディレクトリ」画面が表示されます。
  - 3 ユーザー・ディレクトリのリストから、テストするディレクトリを選択します。
  - 4 テストをクリックします。  
テスト結果を示すステータス・メッセージが表示されます。
  - 5 OK をクリックします。

## ユーザー・ディレクトリ設定の編集

ユーザー・ディレクトリ構成の名前ではなく、パラメータを変更できます。プロビジョニング用に使用されているユーザー・ディレクトリの構成データは編集しないことをお勧めします。

---

**注意** たとえば、ユーザー・ディレクトリ構成のベースDNなどのいくつかの設定を編集すると、プロビジョニング・データが使用不可になります。プロビジョニングされたユーザー・ディレクトリの設定を変更する場合は、十分注意してください。

---

- ▶ ユーザー・ディレクトリ構成を編集するには、次の手順に従います：
  - 1 Shared Services Console を起動します。47 ページの「Shared Services Console の起動」を参照してください。
  - 2 管理、ユーザー・ディレクトリの構成の順に選択します。
  - 3 定義済ユーザー・ディレクトリ画面から、編集するユーザー・ディレクトリを選択します。
  - 4 編集をクリックします。
  - 5 必要に応じて、構成設定を変更します。

**注：** 構成名は変更できません。LDAP ユーザー・ディレクトリ構成を変更する場合、異なるディレクトリ・サーバーや「ディレクトリ・サーバー」リストからその他(カスタム LDAP ディレクトリ)を選択できます。

編集可能なパラメータの説明については、次のテーブルを参照してください。

- MSAD およびその他の LDAP ベースのユーザー・ディレクトリ：



- 表 7
  - 表 8
  - 表 9
  - SAP ネイティブ・リポジトリ: 表 10
  - データベース: 表 11
  - NTLM: 表 13
- 6 終了をクリックして、変更を保存します。

## NTLM 構成の更新

Windows NT LAN Manager (NTLM)が外部ユーザー・ディレクトリとして構成されたリリースからアップグレードされた場合、Shared Services では、外部ユーザー・ディレクトリとして NTLM を使用できます。NTLM 構成のパラメータを更新できますが、新規 NTLM 構成は定義できません。

これらの条件に基づいて、NTLM を使用するには追加の手順を実行する必要があります。

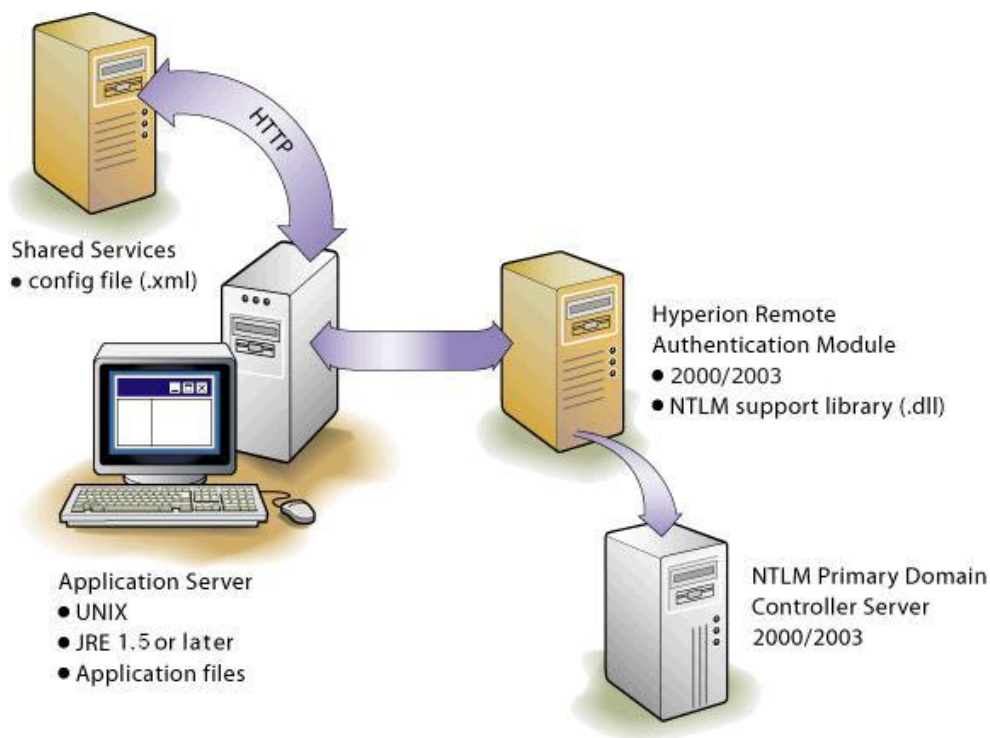
- NTLM は、Shared Services および EPM System 製品が UNIX 環境で実行されている場合にユーザーの認証およびプロビジョニングを行うために使用されます。このシナリオでは、Oracle Hyperion(R) Remote Authentication Module が、ユーザー・アカウントを含む Windows ドメインに配置される必要があります。
- Shared Services および EPM System 製品は Windows 環境で実行されていますが、ユーザーは、Shared Services ホスト・マシンのドメイン上で信頼されていない Windows NTLM ドメイン内に存在します。このシナリオの前提条件は、Shared Services ホスト・マシンのドメインによって信頼されていない各ドメイン上に Remote Authentication Module を配置することです。

**注：** Remote Authentication Module を使用する場合、このモジュールが使用する `css.jar` が Shared Services が使用するものと同一であることを確認してください。

すべてのユーザーが Shared Services ホスト・マシンがインストールされている NTLM ドメインに属する場合、または信頼関係が Shared Services ホスト・マシンがインストールされているドメインと、ユーザーが属する NTLM ドメイン間に確立されている場合は、Remote Authentication Module を実装しないでください。

## UNIX アプリケーション環境での NTLM

次の図は、Remote Authentication Module が、UNIX 環境で実行されている NTLM と Shared Services 間の通信を使用可能にする方法を示しています。



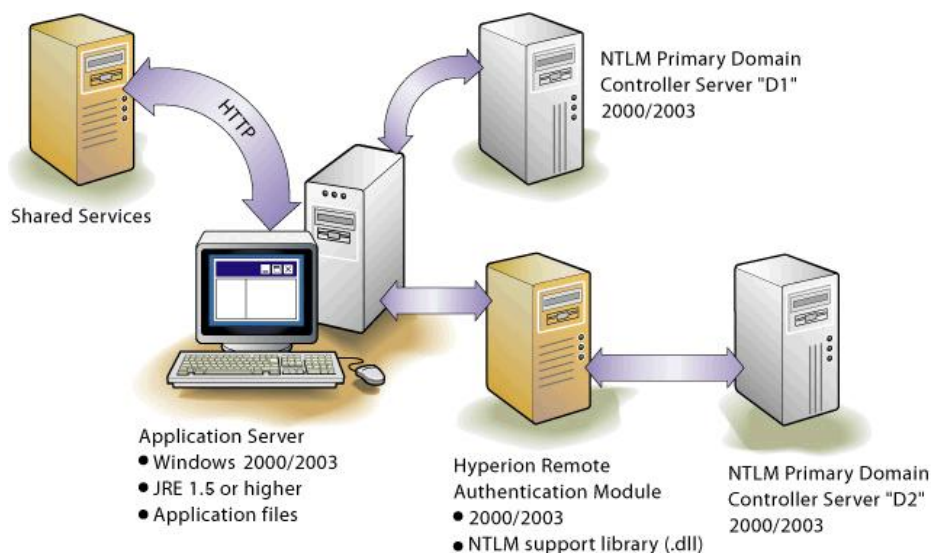
Shared Services 構成情報は Shared Services レジストリに保管され、アプリケーション・バイナリがアプリケーション・サーバー上に常駐します。NTLM 接続の場合、NTLM ドメイン内で Remote Authentication Module をホストするマシン上に NTLM サポート・ライブラリ・ファイル(css-9\_5\_0.dll)も必要です。

NTLM プライマリ・ドメイン・コントローラおよび Remote Authentication Module は、Windows 2000 または Windows 2003 サーバー上に指定できます。ただし、EPM System では Remote Authentication Module を同じサーバー上の NTLM プライマリ・ドメイン・コントローラと結合しないでください。Remote Authentication Module ホスト・マシンは、NTLM プライマリ・ドメイン・コントローラと同じドメインに存在する必要があります。

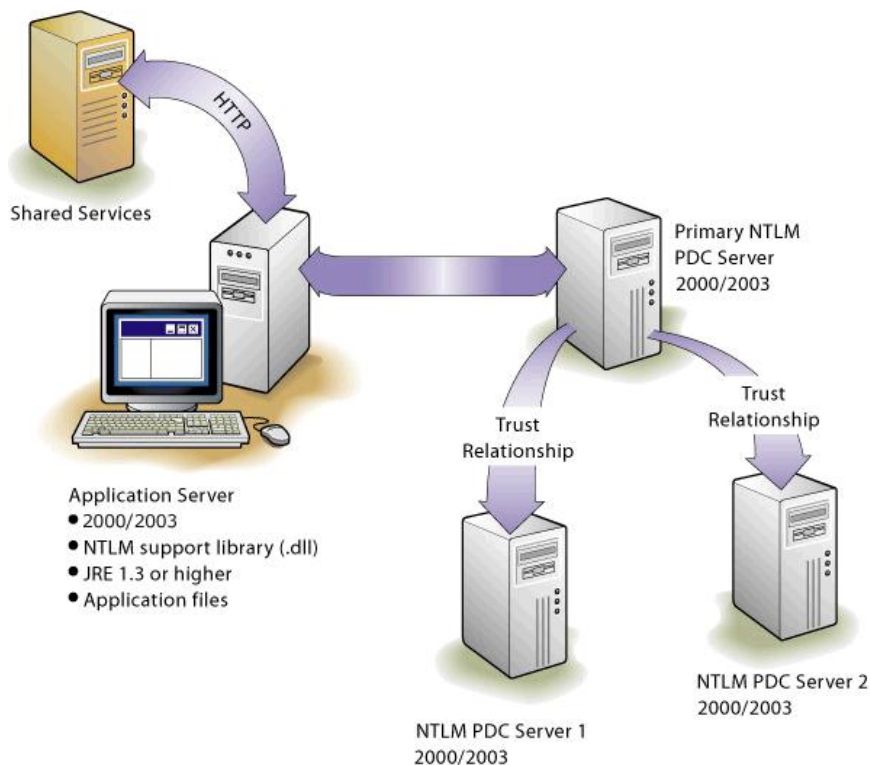
## 複数の NTLM ドメインのサポート

Remote Authentication Module により、EPM System 製品が Shared Services がインストールされているドメインによって信頼されていないその他の NTLM ドメインに属するユーザーを認証できます。

次の図は、複数の NTLM ドメインにまたがるユーザーが、Windows 環境に配置された EPM System 製品にアクセスする方法を示しています。



Remote Authentication Module がない場合、EPM System 製品が複数の NTLM ドメインを使用する唯一の方法は、Shared Services ホスト・マシンのドメインとユーザー・アカウントが使用可能な NTLM ドメイン間の信頼関係を確立することです。



各 NTLM ドメインは、外部ユーザー・ディレクトリとして Shared Services に別々に構成されます。

## NTLM 外部ユーザー・ディレクトリの構成の変更

Shared Services をアップグレードする前に存在していた NTLM 構成は、「定義済ユーザー・ディレクトリ」画面に一覧表示されます。

▶ NTLM 構成のプロパティを変更するには、次の手順に従います:

- 1 Shared Services Console を起動します。47 ページの「Shared Services Console の起動」を参照してください。
- 2 管理、ユーザー・ディレクトリの構成の順に選択します。  
「定義済ユーザー・ディレクトリ」画面が表示されます。
- 3 プロバイダ構成から、変更する NTLM 構成を選択します。
- 4 編集をクリックします。  
「NTLM 接続情報」画面が開きます。

- 5 NTLM 接続情報で、構成パラメータを変更します。表 13 を参照してください。構成名を除き、この画面のすべての情報を編集できます。

表 13 「NTLM 接続情報」画面

ラベル	説明
ドメイン	<p>NTLM ドメイン名。ドメインのフェッチボタンを使用して、ドメイン名を取得できます。</p> <p>ドメインが指定されない場合、Shared Services は実行時にすべての表示可能なドメインを検出して使用し、これによりパフォーマンスに影響を及ぼす場合があります。検索順は、ローカル・コンピュータ、ローカル・コンピュータのドメイン、ローカル・コンピュータに表示可能な信頼できるドメインの順です。</p> <p><b>注：</b> Shared Services は NTLM が Remote Authentication Module とともに使用される場合はドメインを検出しないため、Remote Authentication Module が使用される場合はドメインを指定する必要があります。</p> <p><b>例:</b> MY_DOMAIN</p>
信頼済	<p>このプロバイダが信頼できる SSO ソースであることを示すチェック・ボックス。信頼できるソースからの SSO トークンには、ユーザーのパスワードは含まれません。</p>
最大サイズ	<p>NTLM へのクエリーが戻せる最大エントリ数。委任された管理モードで Shared Services を構成する場合、この値を 0 に設定します。</p> <p><b>例:</b> 100</p>
ホスト名	<p>UNIX 環境で起動している EPM System 製品の SSO をサポートするように Remote Authentication Module がインストールされている Windows サーバー名。</p> <p><b>例:</b> MyHRAMServer</p>

ラベル	説明
ポート	Oracle Hyperion(R) Remote Authentication Module が起動しているポート番号。 例: 3891

- 6 終了をクリックします。  
Shared Services は構成を保存し、構成した NTLM プロバイダを一覧表示する「定義済ユーザー・ディレクトリ」画面に戻ります。
- 7 構成をテストします。79 ページの「ユーザー・ディレクトリの接続のテスト」を参照してください。
- 8 必要に応じて、検索順の割当てを変更します。詳細は、85 ページの「ユーザー・ディレクトリの検索順の管理」を参照してください。
- 9 必要に応じて、NTLM ユーザー・ディレクトリの追加のパラメータを指定します。詳細は、87 ページの「セキュリティ・オプションの設定」を参照してください。

## ユーザー・ディレクトリ構成の削除

ユーザー・ディレクトリ構成はいつでも削除できます。ディレクトリ構成を削除すると、ユーザー・ディレクトリから取得されたユーザーおよびグループのプロビジョニング情報がすべて使用不可になり、検索順からディレクトリが除去されます。

**ヒント:** プロビジョニング用に使用された構成済のユーザー・ディレクトリを使用しない場合、ユーザーおよびグループに検索されないように検索順から除去します。このアクションにより、プロビジョニング情報の整合性を維持し、必要に応じて後でユーザー・ディレクトリを使用できます。

- ▶ ユーザー・ディレクトリ構成を削除するには、次の手順に従います:
  - 1 Shared Services Console を起動します。47 ページの「Shared Services Console の起動」を参照してください。
  - 2 管理、ユーザー・ディレクトリの構成の順に選択します。
  - 3 定義済ユーザー・ディレクトリ画面から、ディレクトリを選択します。
  - 4 削除をクリックします。

## ユーザー・ディレクトリの検索順の管理

構成済のユーザー・ディレクトリに関連付けられている検索順は、Shared Services がユーザーおよびグループ情報の取得に使用する検索順でディレクトリの位置を決定します。Shared Services は、検索順に構成済のユーザー・ディレクトリを自動的に追加し、次に使用可能な検索シーケンスを割り当てます。Shared Services が既存のディレクトリの検索順を自動的に再割り当てする場合には、検索順から構成済のユーザー・ディレクトリを除去できます。検索順に含まれていないユーザー・ディレクトリは認証とプロビジョニングのサポートに使用されません。

**注：** Shared Services は、指定されたアカウントを検出するとユーザーまたはグループの検索を停止します。EPM System ユーザーの大部分が存在する企業ディレクトリを検索順の一番上に配置することをお勧めします。ユーザーのアカウントがユーザー・ディレクトリ内に複数ある場合、Shared Services は検索で最初に検出されたアカウントを取得します。

デフォルトでは、ネイティブ・ディレクトリは検索順の最初のディレクトリとして設定されます。追加のユーザー・ディレクトリは検索順の次に使用可能なシーケンス番号を指定されます。検索順を管理するために、次のタスクを実行できます。

- [86 ページの「ユーザー・ディレクトリの検索順への追加」](#)
- [86 ページの「検索順の変更」](#)
- [87 ページの「検索順の割当ての除去」](#)

## ユーザー・ディレクトリの検索順への追加

新規に構成されたユーザー・ディレクトリは、検索順に自動的に追加されます。検索順からディレクトリを除去した場合、検索順の最後にそれを追加できます。

▶ 検索順にユーザー・ディレクトリを追加するには、次の手順に従います：

- 1 Shared Services Console を起動します。47 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
- 2 管理、ユーザー・ディレクトリの構成の順に選択します。
- 3 定義済ユーザー・ディレクトリ画面から、検索順に追加するディレクトリを選択します。
- 4 追加をクリックします。

このボタンは、検索順にないユーザー・ディレクトリを選択している場合のみ使用可能です。

Shared Services に、検索順が更新されたことを示すメッセージが表示されます。

- 5 「定義済ユーザー・ディレクトリ」画面に戻るには、OK をクリックします。

## 検索順の変更

ネイティブ・ディレクトリを含む、各ユーザー・ディレクトリに割り当てられているデフォルトの検索順は、ディレクトリが構成されたシーケンスに基づきます。

▶ 検索順を変更するには、次の手順に従います：

- 1 Shared Services Console を起動します。47 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
- 2 管理、ユーザー・ディレクトリの構成の順に選択します。
- 3 定義済ユーザー・ディレクトリ画面から、検索順を変更するディレクトリを選択します。

- 4 必要に応じて、上へ移動または下へ移動をクリックします。
- 5 新規検索順を有効にするには Shared Services を再起動します。
- 6 Shared Services セキュリティ API を使用するその他の EPM System 製品とカスタム・アプリケーションを再起動します。

## 検索順の割当ての除去

検索順からユーザー・ディレクトリを削除してもディレクトリ構成が無効になりません。ユーザー認証のために検索されるディレクトリのリストからユーザー・ディレクトリが除去されるのみです。検索順に含まれないディレクトリは、未使用のステータスに設定されます。検索順からユーザー・ディレクトリを除去すると、他のユーザー・ディレクトリに割り当てられている検索順は自動的に更新されます。

**注：** 検索順からネイティブ・ディレクトリを除去できません。

- ▶ 検索順からユーザー・ディレクトリを除去するには、次の手順に従います:
  - 1 Shared Services Console を起動します。47 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
  - 2 管理、ユーザー・ディレクトリの構成の順に選択します。
  - 3 定義済ユーザー・ディレクトリから、ディレクトリを選択して検索順から除去します。
  - 4 削除をクリックします。  
Shared Services では、確認のダイアログ・ボックスが表示されます。
  - 5 OK をクリックします。  
Shared Services に、検索順が更新されたことを示すメッセージが表示されます。
  - 6 OK をクリックして、「定義済ユーザー・ディレクトリ」画面に戻ります。ここでは「未使用」としてユーザー・ディレクトリ・ステータスがリストされています。

## セキュリティ・オプションの設定

セキュリティ・オプションは、検索順に含まれるすべてのユーザー・ディレクトリに適用可能なグローバル・パラメータから構成されています。

- ▶ セキュリティ・オプションを設定するには、次の手順に従います:
  - 1 Shared Services Console を起動します。47 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
  - 2 管理、ユーザー・ディレクトリの構成の順に選択します。
  - 3 セキュリティ・オプションを選択します。
  - 4 セキュリティ・オプションでは、グローバル・パラメータを設定します。

The screenshot shows the 'Defined User Directories' configuration window with the 'Security Options' tab selected. The 'Basic Configuration' section includes:
 

- Token Timeout: 480 mins
- Logging Level: WARN
- Enable HTTP Access to Security Configuration: checked
- SAP Keystore Timeout: 10 secs

 Below this, 'Show Advanced Options' is checked. The 'Delegated User Management' section has 'Enable Delegated User Management Mode' unchecked. The 'Single Sign-On Configuration' section has 'Enable SSO' unchecked, 'SSO Provider or Agent' set to 'Oracle Single Sign-On (OSSO)', and 'SSO Mechanism' set to 'Get Remote User from HTTP Request'. The 'Custom Module' section has 'Authentication Module' set to 'com.myCompany.custom.myCustom'. At the bottom, there are 'Help', 'OK', and 'Cancel' buttons.

表 14 ユーザー・ディレクトリ用のセキュリティ・オプション

パラメータ	説明
トークンのタイムアウト	<p>EPM System 製品または Web ID 管理ソリューションが発行元となる SSO トークンの期限が切れるまでの時間(分)。ユーザーは、この期間が過ぎてからログインする必要があります。トークンのタイムアウトは、サーバーのシステム・クロックに基づいて設定されます。</p> <p><b>注:</b> トークンのタイムアウトは、セッションのタイムアウトとは異なります。</p> <p><b>例:</b> 480</p>
ログイン・レベル	<p>ユーザー・ディレクトリ関連の問題が Shared Services セキュリティ・ログ・ファイルに記録されるレベル(ERROR、WARN、INFO、DEBUG および TRACE)。管理者は、オンザフライで Shared Services ログ・レベルを変更し、関連する情報を把握して、Shared Services の問題をデバッグできます。ログ・レベルの変更をアクティブにするために、Shared Services アプリケーション・サーバーを再起動する必要はありません。</p> <p>EPM System 製品に属するログ・ファイルは、HYPERION_HOME/logs に保管され、管理者は簡単にログ・ファイルを検索し、アプリケーションおよびトラブルシューティングの問題を監視できます。製品ログ・ファイルは、製品固有のフォルダで作成されます。たとえば、Shared Services ログは、HYPERION_HOME/logs/SharedServices9 にあります。既存のログ・ファイルは新しい場所に移動されることはありません。</p> <p><b>例:</b> WARN</p>
セキュリティ構成への HTTP アクセスを使用可能にする	<p>EPM System 11.1.1.3 および Hyperion System 9 製品で構成される混在環境で、このオプションを選択し、Hyperion System 9 製品で HTTP URL を使用して、Shared Services レジストリに保管されている構成情報にアクセスできます。</p> <p>環境に EPM System 11.1.1.3 製品のみがある場合、このオプションを選択しないでください。</p>



パラメータ	説明
SAP キーストアのタイムアウト	SAP キーストア・ファイルを解決するための制限時間(秒単位)。デフォルトは 10 です。 <b>例:</b> 20
詳細オプションの表示	委任された管理および SSO 構成に関連するオプションを表示できるオプション。
委任されたユーザー管理モードを使用可能にする	EPM System 製品の委任されたユーザー管理を使用可能にし、配布されたプロビジョニング・アクティビティの管理をサポートするオプション。 <a href="#">第 7 章「委任されたユーザー管理」</a> を参照してください。
SSO の使用可能	Oracle Access Manager などのセキュリティ・エージェントからの SSO のサポートを使用可能にするオプション。
SSO プロバイダ/エージェント	EPM System 製品が SSO を受け入れる必要のある Web ID 管理ソリューションを選択します。Kerberos などの Web ID 管理ソリューションがリストされていない場合、その他を選択します。 SSO プロバイダを選択すると、希望する SSO メソッドが自動的に選択されます。必要に応じて、HTTP ヘッダーの名前、またはカスタム・ログイン・クラスの名前を変更できます。
SSO メカニズム	ユーザーのログイン名を EPM System 製品に提供するために Web ID 管理ソリューションで使用されるメソッド。受入れ可能な SSO メソッドの説明は、 <a href="#">24 ページの「サポートされている SSO メソッド」</a> を参照してください。
認証モジュール	カスタム認証のクラス名またはパッケージ名を使用している場合、カスタム認証モジュールが選択されたすべてのユーザー・ディレクトリで、カスタム認証モジュールの完全修飾 Java クラス名を使用してユーザーを認証する必要があります。 認証モジュールは、ディレクトリ構成で使用可能(デフォルト)である場合にのみ、ユーザー・ディレクトリに使用されます。 <b>注:</b> デフォルトのクラス名(CustomAuthenticationImpl)とパッケージ名(com.hyperion.css.custom)を使用している場合、Shared Services はカスタム認証クラスを自動的に取得するため、Shared Services 構成を更新してカスタム認証クラスを指定する必要はありません。 <b>注意</b> Essbase のカスタム認証を使用可能にする場合、デフォルトのクラス名とパッケージ名を使用している場合でも、カスタム・クラスの完全修飾クラス名を指定する必要があります。 <a href="#">55 ページの「カスタム認証モジュールの使用方法」</a> を参照してください。

5 OK をクリックします。

## 特殊文字の使用方法

MSAD およびその他の LDAP ベースのユーザー・ディレクトリでは、DN、ユーザー名、役割およびグループ名などのエンティティで特殊文字が使用可能です。このような文字を理解させるには、Shared Services に対して特別な処理が必要になる場合があります。

一般に、たとえばユーザー URL とグループ URL、およびベース DN など、MSAD を含む LDAP ベースのユーザー・ディレクトリに対してユーザー・ディレクトリ の設定で使用される任意の特殊文字を指定するのに、エスケープ・キャラクタを 使用する必要があります。ネイティブ・ディレクトリおよび NTLM では特別な文 字の処理は必要ありません。

表 15 には、ユーザー名、グループ名、ユーザー URL、グループ URL、およびユー ザー DN の OU の値で使用可能な特殊文字がリストされます。ネイティブ・ディ レクトリおよび NTLM では特別な文字の処理は必要ありません。

表 15 サポートされる特殊文字

文字*	名前または意味	文字	名前または意味
(	左カッコ	\$	ドル
)	右カッコ	+	プラス
"	二重引用符	&	アンパサンド
'	一重引用符	¥	円記号
,	カンマ	^	脱字記号
=	次と等しい	;	セミコロン
<	次より小さい	#	ポンド
>	次より大きい	@	アット記号

\* / (スラッシュ) は、外部のユーザー・ディレクトリに指定される DN 内にある組織単位名に使用できます。

- 特殊文字はログイン・ユーザー属性の値には使用できません。
- アスタリスク(\*) は、ユーザー名、グループ名、ユーザー URL、グループ URL、 およびユーザー DN の OU 名には使用できません。
- 特殊文字の組合せを含んだ属性値は使用できません。
- アンパサンド(&) は、エスケープ・キャラクタなしで使用できます。MSAD の 設定では、"&" は &amp; のように指定する必要があります。
- ユーザー名とグループ名には円記号(¥) とスラッシュ(/) の両方を使用できませ ん。たとえば、test/¥user や new¥test/user のような名前は使用できませ ん。

表 16 エスケープする必要がない文字

文字	名前または意味	文字	名前または意味
(	左カッコ	'	一重引用符
)	右カッコ	^	脱字記号
\$	ドル	@	アット記号
&*	アンパサンド		

\* &amp; のように記述されている必要があります。

これらの文字は、ユーザー・ディレクトリの設定(ユーザー名、グループ名、ユーザー URL、グループ URL およびユーザー DN)で使用する場合にエスケープされる必要があります。

表 17 ユーザー・ディレクトリ構成設定における特殊文字のエスケープ

特殊文字	エスケープ	サンプル設定	エスケープの例
カンマ(,)	円記号(¥)	ou=test,ou	ou=test¥,ou
プラス符号(+)	円記号(¥)	ou=test+ou	ou=test¥+ou
次と等しい(=)	円記号(¥)	ou=test=ou	ou=test¥=ou
ポンド(#)	円記号(¥)	ou=test#ou	ou=test¥#ou
セミコロン(;)	円記号(¥)	ou=test;ou	ou=test¥;ou
次より小さい(<)	¥&lt;	ou=test<ou	ou=test¥&lt;ou
次より大きい(>)	¥&gt;	ou=test>ou	ou=test¥&gt;ou
"(二重引用符)*	¥¥(二重円記号)	ou=test"ou	ou=test¥¥"ou
¥(円記号)†	¥¥¥(三重円記号)	ou=test¥ou	ou=test¥¥¥¥ou

\*ユーザー DN では、二重引用符(")は、単一の円記号でエスケープされる必要があります。たとえば ou=test"ou は、ユーザー DN では ou=test¥"ou と指定する必要があります。

†ユーザー DN では、円記号(¥)は、単一の円記号でエスケープされる必要があります。たとえば ou=test¥ou は、ユーザー DN では ou=test¥¥ou と指定する必要があります。

**注意** ユーザー URL が指定されていない場合、RDN ルート内で作成されるユーザーに/(スラッシュ)または¥(円記号)が含まれてはいけません。同様に、グループ URL が指定されない場合、これらの文字は RDN ルート内に作成されたグループ名で使用してはいけません。たとえば、OU=child ¥ou, OU=parent/ou または OU=child/ou, OU=parent¥ou などのグループ名は、使用できません。この問題は、ユーザー・ディレクトリ構成で ID属性として一意の属性を使用している場合には適用されません。



# 6

## アプリケーション・グループ およびアプリケーションでの 作業

### この章の内容

概要 .....	93
アプリケーション・グループの使用 .....	93
アプリケーションの管理 .....	95
アプリケーションの参照 .....	98

### 概要

アプリケーション・グループおよびアプリケーションは、2つの重要な Shared Services の概念です。アプリケーションは、Shared Services に登録されている EPM System 製品を参照します。登録プロセスにより、Shared Services が EPM System アプリケーションの存在を認識します。すべてのプロビジョニング・アクティビティは、アプリケーション・グループに属するアプリケーションに対して実行されます。

この章には、アプリケーション・グループとアプリケーションの作成と管理に関する情報が記載されています。

### アプリケーション・グループの使用

アプリケーション・グループは EPM System アプリケーションのコンテナです。たとえば、アプリケーション・グループには、Planning アプリケーションと1つ以上の Reporting and Analysis アプリケーションが含まれるとします。アプリケーションが属することのできるアプリケーション・グループの数は1つですが、アプリケーション・グループには複数のアプリケーションを含められます。

Shared Services に登録されているが、アプリケーション・グループに属していないアプリケーションは、ビュー・ペインの「デフォルト・アプリケーション・グループ」ノードの下に一覧表示されます。「デフォルト・アプリケーション・グループ」ノードに一覧表示されているアプリケーションの役割にユーザーをプロビジョニングし、プロビジョニング情報を失うことなくアプリケーションをアプリケーション・グループに移動できます。

アプリケーション・グループの管理タスクを詳しく解説するトピック:

- 94 ページの「アプリケーション・グループの作成」
- 94 ページの「アプリケーション・グループ・プロパティの変更」
- 95 ページの「アプリケーション・グループの削除」

**注：** アプリケーション・グループを作成および管理するには、Shared Services 管理者またはプロジェクト・マネージャである必要があります。Shared Services 管理者は、すべての登録されているアプリケーションを使用できますが、プロジェクト・マネージャは自分がプロジェクト・マネージャであるアプリケーションのみ使用できます。

## アプリケーション・グループの作成

アプリケーション・グループの作成中、新規アプリケーション・グループにアプリケーションを割り当てることもできます。

- ▶ アプリケーション・グループを作成するには、次の手順に従います：
  - 1 Shared Services Console を起動します。47 ページの「Shared Services Console の起動」を参照してください。
  - 2 ビュー・ペインでアプリケーション・グループを右クリックし、新規を選択します。新規アプリケーション・グループ画面が表示されます。
  - 3 名前テキスト・ボックスでアプリケーション・グループ名を入力し、説明テキスト・ボックスにはオプションの説明を入力します。
  - 4 このアプリケーション・グループにアプリケーションを割り当てるには、次の手順に従います：
    - 1 アプリケーション・グループのアプリケーションのリストから、割り当てるアプリケーションを含むアプリケーション・グループを選択します。
    - 2 リストの更新をクリックします。使用可能なアプリケーションのリストに、アプリケーション・グループに割当て可能なアプリケーションが表示されます。
    - 3 使用可能なアプリケーションでアプリケーション・グループに割り当てるアプリケーションを選択し、追加をクリックします。  
選択したアプリケーションが「割り当てられたアプリケーション」リストに表示されます。
    - 4 割り当てられたアプリケーションを除去するには、割り当てられたアプリケーションから除去するアプリケーションを選択し削除をクリックします。現在のセッションで割り当てたアプリケーションをすべて除去するには、リセットをクリックします。
  - 5 終了をクリックします。
  - 6 追加作成をクリックし、別のアプリケーション・グループを作成するか、OK をクリックしてステータス画面を閉じます。

## アプリケーション・グループ・プロパティの変更

プロパティおよびアプリケーションの割当てなどアプリケーション・グループの設定はすべて変更できます。

**注：** 別のアプリケーション・グループから移動して、アプリケーションをアプリケーション・グループに追加することもできます。97 ページの「[アプリケーションの移動](#)」を参照してください。

- ▶ アプリケーション・グループを変更するには、次の手順に従います：
- 1 **Shared Services Console** を起動します。47 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
  - 2 ビュー・ペインから、アプリケーション・グループを選択します。
  - 3 参照タブでアプリケーション・グループを右クリックし、開くを選択します。
  - 4 必要に応じてアプリケーション・グループ・プロパティを変更します。アプリケーションの割当てと除去の詳細は、94 ページの[手順 4](#) を参照してください。
  - 5 保存をクリックします。

## アプリケーション・グループの削除

アプリケーション・グループを除去すると、アプリケーションとアプリケーション・グループとの関連付けが除去され、アプリケーションからプロビジョニング割当てが削除されて、アプリケーション・グループも削除されます。次のアプリケーション・グループは削除できません。

- デフォルト・アプリケーション・グループ
- Foundation
- File System

- ▶ アプリケーション・グループを削除するには、次の手順に従います：
- 1 **Shared Services Console** を起動します。47 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
  - 2 ビュー・ペインでアプリケーション・グループを右クリックし、削除を選択します。
  - 3 **OK** をクリックします。

## アプリケーションの管理

Shared Services では、登録されている EPM System アプリケーションを追跡します。登録は Shared Services からではなく、個々の EPM System から完了します。

一部のアプリケーションの登録では、アプリケーション・グループが作成され、そのアプリケーション・グループにアプリケーションを割り当てます。登録でアプリケーション・グループが作成されない場合は、登録されたアプリケーションが Shared Services Console のビュー・ペインの「デフォルト・アプリケーション・グループ」ノードの下に一覧表示されます。これらのアプリケーションはプロビジョニングできます。「デフォルト・アプリケーション・グループ」からアプリケーション・グループにアプリケーションを移動する場合、Shared Services はプロビジョニング情報を保持します。

アプリケーション管理タスクについてのトピック

- 96 ページの「アプリケーションへのアクセス権の割当て」
- 97 ページの「アプリケーションの移動」
- 97 ページの「アプリケーション間のプロビジョニング情報のコピー」
- 98 ページの「アプリケーションの削除」

## アプリケーションへのアクセス権の割当て

アプリケーション管理者は Shared Services Console を使用して、レポートや計算スクリプトなど、アプリケーション固有のオブジェクトにアクセス権を割り当てるなどのプロビジョニング・タスクを実行できます。たとえば、Essbase アプリケーションの場合、適切な Administration Services 権限を持つユーザーは、選択したユーザーおよびグループに対してフィルタおよび計算スクリプトへのアクセスを割り当てられます。

製品のなかには、特定のセキュリティ・タスクを Shared Services Console からではなく、製品インタフェースで実行する必要があるものもあります。たとえば、フィルタおよび計算スクリプトは、Administration Services インタフェースを使用して作成する必要があります。次にこれらのオブジェクトは、Shared Services Console から特定のユーザーまたはグループを割り当てることによってプロビジョニングできます。同様に、製品内から Reporting and Analysis のリポジトリ・コンテンツにアクセス権を割り当てる必要があります。

Shared Services Console からアクセス権を割り当てるには、Shared Services 管理者であるか、または該当する製品の役割(たとえば、Planning マネージャなど)にプロビジョニングされる必要があります。特定の製品に対するアクセス権の割当てについては、このマニュアルの最後にある該当する製品の付録を参照してください。

この手順を開始する前に、必要なサーバーとアプリケーションが実行されていることを確認してください。

➤ アプリケーション固有のアクセス権を割り当てるには、次の手順に従います:

- 1 Shared Services Console を起動します。47 ページの「Shared Services Console の起動」を参照してください。
- 2 ビュー・ペインで、アクセス権を割り当てるアプリケーションを含むアプリケーション・グループを展開します。
- 3 アプリケーションを右クリックして、権限の割当てを選択します。このオプションは、アクセス権を設定可能なアプリケーションにのみ使用可能です。

選択したアプリケーションの「プリファレンスの割当て」タブが表示されます。

**注：** アプリケーションが実行されていない場合は、アプリケーションを選択するとエラー・メッセージが表示されます。アプリケーションにアクセスするには、製品のサーバーを再起動し、ビュー、リフレッシュの順にクリックして、ビュー・ペインをリフレッシュします。

- 4 必要に応じてアクセス権を割り当てます。詳細は、このマニュアルの最後にある製品の付録を参照してください。



## アプリケーションの移動

プロビジョニング・データを失うことなく、1つのアプリケーション・グループから別のアプリケーション・グループにアプリケーションを移動できます。アプリケーション・グループからアプリケーションを移動すると、アプリケーションとアプリケーション・グループ間の関連付けが除去されます。

**注：** Foundation アプリケーション・グループのアプリケーションは移動できません。

▶ アプリケーションを移動するには、次の手順に従います：

- 1 **Shared Services Console** を起動します。47 ページの「**Shared Services Console の起動**」を参照してください。
- 2 アプリケーション・グループでアプリケーションを右クリックし、移動先を選択します。
- 3 移動先タブでアプリケーションの宛先アプリケーション・グループを選択します。
- 4 保存をクリックします。

## アプリケーション間のプロビジョニング情報のコピー

複数アプリケーション(たとえば、EPM System バージョン 11.1.1.3 からの複数の Planning アプリケーション)の場合、1つのアプリケーションから別のアプリケーションにプロビジョニング情報をコピーできます。プロビジョニング情報をコピーすると、すべてのユーザー、グループおよび役割情報がターゲット・アプリケーションにコピーされます。製品固有のアクセス制御設定はコピーされません。

▶ アプリケーション間でプロビジョニング情報をコピーするには、次の手順に従います：

- 1 **Shared Services Console** を起動します。47 ページの「**Shared Services Console の起動**」を参照してください。
- 2 ビュー・ペインで、プロビジョニング情報をコピーするアプリケーションを右クリックして、プロビジョニングのコピーを選択します。

同じタイプの別のアプリケーションが **Shared Services** に登録されている場合は、「プロビジョニングのコピー」タブが表示されます。このタブには、プロビジョニング情報をコピーできるターゲット・アプリケーションが一覧表示されます。

- 3 目的のアプリケーションを選択します。
- 4 保存をクリックします。

## 複数のアプリケーションの削除

**Shared Services** の管理者がアプリケーションを削除すると、プロビジョニング情報も削除されます。

- ▶ アプリケーションを削除するには、次の手順に従います:
- 1 Shared Services Console を起動します。47 ページの「Shared Services Console の起動」を参照してください。
  - 2 ビュー・ペインで、アプリケーション・グループを右クリックし、削除を選択します。  
「アプリケーションの削除」画面が開き、削除可能なアプリケーションが一覧表示されます。
  - 3 削除するアプリケーションを選択します。アプリケーション・グループ内のすべてのアプリケーションを削除するには、そのアプリケーション・グループを選択します。
- 注： この画面でアプリケーション・グループを削除できません。95 ページの「アプリケーション・グループの削除」を参照してください。
- 4 削除をクリックします。
  - 5 確認のダイアログ・ボックスで OK をクリックします。

## アプリケーションの削除

Shared Services の管理者はアプリケーション・グループからアプリケーションを削除できます。アプリケーション・グループからアプリケーションを削除する場合、そのアプリケーションのプロビジョニング情報はすべて除去されます。

- ▶ アプリケーションを削除するには、次の手順に従います:
- 1 Shared Services Console を起動します。47 ページの「Shared Services Console の起動」を参照してください。
  - 2 ビュー・ペインでアプリケーションを右クリックし、削除を選択します。
  - 3 OK をクリックします。

## アプリケーションの参照

アプリケーションに属するアーチファクトを表示、検索、ロード、エクスポート、およびインポートできます。アプリケーションおよびリポジトリのアーチファクトは、編成された方法で表示できるようにカテゴリにソートされます。これは、ライフサイクル管理ユーティリティ機能です。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ライフサイクル管理ガイド』を参照してください。

# 7

## 委任されたユーザー管理

### この章の内容

委任されたユーザー管理について .....	99
管理者の階層 .....	99
委任されたユーザー管理モードを使用可能にする .....	100
委任された管理者の作成 .....	101

## 委任されたユーザー管理について

委任されたユーザー管理では、EPM System 製品向けの管理者の階層を作成できます。この機能では、Shared Services 管理者は、責任のあるユーザーとグループを管理するための制限されたアクセスを許可される他の管理者に、ユーザーとグループを管理する責任を委任できます。

管理者の Shared Services の役割を持つユーザーのみが EPM System 製品のすべてのユーザーとグループを表示できます。委任された管理者は、責任のあるユーザーとグループのみを表示および管理できます。また、委任された管理者は、割り当てられた役割によって許可された管理タスクのみを実行できます。

## 管理者の階層

デフォルトの Shared Services 管理者アカウント(admin)は、EPM System 製品で最も強力なアカウントです。初めて Shared Services にアクセスした後は、このアカウントのパスワードを変更することをお勧めします。

2つの管理者層の、Shared Services 管理者、および委任された管理者は、委任された管理モードの状態です。

## Shared Services 管理者

デフォルトの admin アカウントに類似した Shared Services 管理者アカウントを作成し、Shared Services およびその他の EPM System アプリケーションを管理することをお勧めします。

すべての Shared Services 機能にアクセスを提供する、Shared Services 管理者の役割をユーザーとグループにプロビジョニングすることで、Shared Services 管理者アカウントを作成できます。

## 委任された管理者

Shared Services 管理者とは対照的に、委任された管理者は、Shared Services および EPM System 製品への管理者レベルのアクセスは制限されています。委任された管理者は、管理者アクセスを許可されているユーザーとグループにのみアクセスできます。これで、複数の管理者全体でユーザーとグループ管理のタスクを分割できます。

EPM System 製品の委任された管理者の権限は、Shared Services 管理者がプロビジョニングによって許可したアクセス権によってコントロールされます。たとえば、委任された管理者が Shared Services でディレクトリ・マネージャのグローバルの役割を許可され、ユーザーがネイティブ・ディレクトリでユーザーとグループを作成できると仮定してください。役割を追加しない場合、この委任された管理者は、他の管理者が作成したユーザーとグループのリストを表示できません。

委任された管理者がユーザーにプロビジョニングする権限がある(プロビジョニング・マネージャの役割によって許可された)場合、委任された管理者は、さらに管理タスクを委任するために、その他の委任された管理者を作成し、この管理者にプロビジョニングできます。

## 委任されたユーザー管理モードを使用可能にする

委任された管理者を作成する前に、Shared Services に対して、委任されたユーザー管理モードを使用可能にする必要があります。デフォルトの Shared Services の配置では、委任された管理はサポートされていません。

追加の画面およびメニュー・オプションは、委任されたユーザー管理モードに切り替えた後に使用可能になります。

委任された管理モードでは、委任された管理者に割り当てられた役割の範囲は、委任されたリストのユーザーとグループに制限されています。デフォルト・モードに戻すと、その制限が解除され、その役割のオリジナルの範囲が回復します。たとえば、Essbase プロビジョニング・マネージャの役割を割り当てられているユーザー `del_admin1` は、`Esb_group1` および `Esb_group2` の委任された管理者であると仮定してください。デフォルト・モードに戻すと、`del_admin1` がすべてのユーザーとグループに対して Essbase プロビジョニング・マネージャになります。

- ▶ 委任されたユーザー管理モードを使用可能にするには、次の手順に従います:
  - 1 Shared Services Console を起動します。47 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
  - 2 管理から、ユーザー・ディレクトリの構成を選択します。
  - 3 セキュリティ・オプション、詳細オプションの表示の順に選択します。
  - 4 委任されたユーザー管理モードを使用可能にするを選択します。
  - 5 OK をクリックします。
  - 6 Shared Services を再起動します。
  - 7 Shared Services セキュリティ API を使用するその他の EPM System 製品とカスタム・アプリケーションを再起動します。

## 委任された管理者の作成

- [101 ページの「プランニング・ステップ」](#)
- [101 ページの「委任された管理者のプロビジョニング」](#)
- [102 ページの「委任リストの作成」](#)
- [106 ページの「委任されたレポートの表示」](#)

### プランニング・ステップ

- [101 ページの「委任された管理者のユーザー・アカウント」](#)
- [101 ページの「委任プランの作成」](#)

### 委任された管理者のユーザー・アカウント

Shared Services 管理者は、Shared Services で構成されたユーザー・ディレクトリの既存のユーザー・アカウントから委任された管理者を作成します。プロビジョニングとは異なり、委任された管理者の機能はグループには割り当てることができません。Shared Services 管理の委任プロセスを開始する前に、委任された管理者が、構成されたユーザー・ディレクトリでユーザーとして作成されることを確認します。

### 委任プランの作成

委任プランでは、EPM System 製品を効果的に管理するために必要な委任された管理者のレベルが識別される必要があります。プランでは次のことが識別される必要があります。

- 各委任された管理者が管理する必要のあるユーザーとグループ。このリストは、委任リストを作成中に使用できます。[102 ページの「委任リストの作成」](#)を参照してください。
- 各委任管理者が許可される必要のある Shared Services および EPM System 製品の役割。

### 委任された管理者のプロビジョニング

Shared Services 管理者は、委任された管理者をプロビジョニングして、委任プランに基づき、委任された管理者に役割を許可します。

委任された管理者は、実施する必要のあるアクティビティに応じて、Shared Services の役割が許可される必要があります。[163 ページの「Shared Services 役割」](#)を参照してください。

委任された管理者は、EPM System 製品から、たとえば Planning からのプロビジョニング・マネージャから役割を許可され、委任された管理者が EPM System 製品の管理タスクを実行できます。

## 委任リストの作成

委任リストでは、委任された管理者が管理できるユーザーとグループが識別されます。各リストは、1つ以上の委任された管理者に割り当てられます。委任された管理者は、次のことを行うことができます。

- 委任リストを通して、管理者に割り当てられたユーザーとグループのみを表示します。その他のユーザーとグループはすべて、リストから非表示になったままです。
- 管理する他のユーザーの委任リストを作成します。
- 委任リストに含まれるユーザーとグループのみを検索して取得します。

**注：** Shared Services では、現在のユーザーが委任リストを管理するために割り当てられている場合のみ、「委任リスト」のノードが表示されます。

委任された管理者が作成するユーザーとグループは、これらを作成した管理者に自動的に割り当てられません。Shared Services の管理者は、委任された管理者がこれらのユーザーとグループにアクセスする前に、これらのユーザーとグループを委任リストに追加する必要があります。ただし、委任された管理者は、作成する委任リストにこれらのユーザーとグループを割り当てることができます。

▶ 委任リストを作成するには、次の手順に従います：

- 1 **Shared Services Console** を起動します。47 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
- 2 ビュー・ペインのネイティブ・ディレクトリで、委任リストを右クリックし、新規を選択します。  
委任リストの作成画面が開きます。
- 3 名前に委任リストの一意の名前を入力します。
- 4 **オプション:** 説明に、リストの説明を入力します。
- 5 **オプション:** リストにグループを追加するには、次へをクリックします。これらは、このリストに割り当てられている委任された管理者が管理可能なグループです。

1. グループ検索で、リストに割り当てるグループの名前を入力します。すべてのグループを取得するには、このフィールドを空のままにします。パターン検索にはワイルドカードとして\*を使用します。委任された管理者である場合は、自分に割り当てられているグループのみ表示されます。
2. ディレクトリで、グループを表示するユーザー・ディレクトリを選択します。
3. 検索をクリックします。
4. 使用可能なグループから、グループを選択します。
5. 追加をクリックします。

選択したグループが「**割り当てられたグループ**」に一覧表示されます。

**注：** Shared Services は、Oracle および SQL Server データベースの役割をユーザー・ディレクトリのグループと同等のものと見なします。Oracle デー

データベースの役割は、階層にすることができます。SQL Server データベースの役割はネストできません。DB2 では役割がサポートされないため、Shared Servicesでは、DB2 データベース・プロバイダを選択する場合、グループが表示されません。

6. **オプション:** 「割り当てられたグループ」からグループを選択し、「削除」をクリックしてグループを割当て解除します。リセットをクリックして、現在のセッションに割り当てたすべてのグループを割当て解除します。

**6 オプション:** 次へをクリックして、ユーザーをリストに追加します。これらは、このリストに割り当てられた委任された管理者が管理できるユーザーです。

1. ユーザー検索で、リストに割り当てるユーザーの名前を入力します。すべてのユーザーを取得するには、このフィールドを空白のままにします。パターン検索には、ワイルドカードとして\*を使用します。委任された管理者である場合は、自分に割り当てられているユーザーのみ表示されます。
2. ディレクトリで、ユーザーを表示するユーザー・ディレクトリを選択します。
3. 検索をクリックします。
4. 使用可能なユーザーから、ユーザーを選択します。
5. 追加をクリックします。

選択したユーザーが「割り当てられたユーザー」に一覧表示されます。

6. **オプション:** 「割り当てられたユーザー」からユーザーを選択し、「削除」をクリックしてユーザーを割当て解除します。「リセット」をクリックして、現在のセッションに割り当てたすべてのユーザーを割当て解除します。

**注:** リストの委任された管理者が、ユーザーとして自動的に追加されます。

**7 オプション:** 次へをクリックして、このリスト用の委任された管理者を割り当てます。管理者 タブが開きます。

1. ユーザー検索で、ユーザーを入力して、リストの委任された管理者として割り当てます。このフィールドを空白のままにし、すべてのユーザーを取得します。パターン検索用にワイルドカードとして\*を使用します。委任された管理者の場合は、割り当てられたユーザーのみが表示されます。
2. ディレクトリで、ユーザーを表示するユーザー・ディレクトリを選択します。
3. 検索をクリックします。
4. 使用可能なユーザーから、ユーザーを選択します。
5. 追加をクリックします。

選択したユーザーが「割り当てられたユーザー」に一覧表示されます。

6. **オプション:** 「割り当てられたユーザー」リストから、ユーザーを選択し、「削除」をクリックしてユーザーを割当て解除します。「リセット」をクリックして、現在のセッションに割り当てたすべてのユーザーを割当て解除します。

**注：** リストを作成するユーザーが、リストの委任された管理者として自動的に追加されます。

8 終了をクリックします。

## 委任リストの変更

委任された管理者は、自分に割り当てられているリストのみ変更できます。Shared Services 管理者役割を持つユーザーは、すべての委任リストを変更できます。

▶ 委任リストを変更するには、次の手順に従います:

1 **Shared Services Console** を起動します。47 ページの「**Shared Services Console の起動**」を参照してください。

2 ビュー・ペインのネイティブ・ディレクトリノードから委任リストを選択します。

3 変更する委任リストを検索します。49 ページの「**ユーザー、グループ、役割および委任リストの検索**」を参照してください。

検索条件に一致する委任リストが「参照」タブに一覧表示されます。

4 委任リストを右クリックして、プロパティを選択します。

「委任リストのプロパティ」画面が表示されます。

5 **オプション:** 全般で、リスト名と説明を変更します。

6 **オプション:** グループを追加するには、「グループ・メンバーをクリックします。

1. グループ検索で、リストに割り当てるグループの名前を入力します。すべてのグループを取得するには、このフィールドを空のままにします。パターン検索にはワイルドカードとして\*を使用します。委任された管理者である場合は、自分に割り当てられているグループのみ表示されます。

2. ディレクトリで、グループを表示するユーザー・ディレクトリを選択します。

3. 検索をクリックします。

4. 使用可能なグループから、1つ以上のグループを選択します。

5. 追加をクリックします。

選択したグループが「割り当てられたグループ」に一覧表示されます。

6. **オプション:** グループの割当てを解除するには、「割り当てられたグループ」からグループを選択して「削除」をクリックします。現在のセッションに割り当てられているすべてのグループの割当てを解除するには「リセット」をクリックします。

7 **オプション:** リストにユーザーを追加するには、ユーザー・メンバーをクリックします。

1. ユーザー検索で、リストに割り当てるユーザーの名前を入力します。すべてのユーザーを取得するには、このフィールドを空白のままにします。パターン検索には、ワイルドカードとして\*を使用します。委任された管理者である場合は、自分に割り当てられているユーザーのみ表示されます。



2. ディレクトリで、ユーザーを表示するユーザー・ディレクトリを選択します。
3. 検索をクリックします。
4. 使用可能なユーザーから、ユーザーを選択します。
5. 追加をクリックします。  
選択したユーザーが「割り当てられたユーザー」に一覧表示されます。
6. **オプション:**ユーザーの割当てを解除するには、「割り当てられたユーザー」からユーザーを選択して「削除」をクリックします。現在のセッションに割り当てられているすべてのユーザーの割当てを解除するには「リセット」をクリックします。

**注:** リストの委任された管理者が、ユーザーとして自動的に追加されます。

#### 8 オプション: 委任された管理者の割当てを変更するには、管理者をクリックします。

管理者ページが表示されます。

1. ユーザー検索で、リストの委任された管理者として割り当てるユーザーの名前を入力します。すべてのユーザーを取得するには、このフィールドを空白のままにします。パターン検索にはワイルドカードとして\*を使用します。委任された管理者である場合は、自分に割り当てられているユーザーが表示されます。
2. ディレクトリで、ユーザーを表示するユーザー・ディレクトリを選択します。
3. 検索をクリックします。
4. 使用可能なユーザーから、ユーザーを選択します。
5. 追加をクリックします。  
選択したユーザーが「割り当てられたユーザー」に一覧表示されます。
6. **オプション:**ユーザーの割当てを解除するには、「割り当てられたユーザー」からユーザーを選択して「削除」をクリックします。現在のセッションに割り当てられているすべてのユーザーの割当てを解除するには「リセット」をクリックします。

**注:** リストを作成するユーザーが、リストの委任された管理者として自動的に追加されます。

#### 9 保存をクリックします。

## 委任リストの削除

▶ 委任リストを削除するには、次の手順に従います:

- 1 **Shared Services Console** を起動します。47 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
- 2 ビュー・ペインのネイティブ・ディレクトリノードから委任リストを選択します。

- 3 変更する委任リストを検索します。49 ページの「ユーザー、グループ、役割および委任リストの検索」を参照してください。  
検索条件に一致する委任リストが「参照」タブに一覧表示されます。
- 4 委任リストを右クリックして、削除を選択します。
- 5 OK をクリックします。

## 委任されたレポートの表示

委任されたレポートには、選択された委任リストに割り当てられたユーザーとグループ、およびリストが割り当てられた委任された管理者に関する情報が含まれます。

Shared Services 管理者は、委任リストのすべてで委任されたレポートを生成および表示できます。委任された管理者は、作成した委任リスト、および管理者に割り当てられた委任リスト上のレポートを生成できます。

- ▶ 委任されたレポートを表示するには、次の手順に従います:
- 1 Shared Services Console を起動します。47 ページの「Shared Services Console の起動」を参照してください。
  - 2 ビュー・ペインのネイティブ・ディレクトリで、委任リストを右クリックし、委任されたレポートの表示を選択します。  
委任されたレポートの表示画面が開きます。
  - 3 委任リスト名で、レポートが生成されるリスト名を入力します。パターン検索用にワイルドカードとして\*を使用します。
  - 4 管理者で、指定リストの割当てがレポートされる委任された管理者のユーザー ID を入力します。パターン検索用にワイルドカードとして\*を使用します。
  - 5 レポート作成をクリックします。
  - 6 取消しをクリックしてレポートを閉じるか、または印刷プレビューをクリックしてレポートをプレビューします。  
レポートをプレビューする場合、次の手順に従います:
    1. 印刷をクリックしてレポートを印刷します。
    2. 閉じるをクリックして「レポートの表示」ウィンドウを閉じます。

# 8

## ネイティブ・ディレクトリの管理

### この章の内容

ネイティブ・ディレクトリ情報 .....	107
ネイティブ・ディレクトリのデフォルトのユーザーおよびグループ.....	108
OID のネイティブ・ディレクトリとしての使用方法 .....	108
OpenLDAP のネイティブ・ディレクトリとしての使用方法 .....	110
ネイティブ・ディレクトリ・ユーザーの管理 .....	111
ネイティブ・ディレクトリ・グループの管理 .....	115
役割の管理.....	120
OpenLDAP root ユーザー・パスワードの変更 .....	123
OpenLDAP データベースのバックアップ .....	124
ネイティブ・ディレクトリ・データの回復 .....	124
OpenLDAP データの回復 .....	125
ネイティブ・ディレクトリの移行.....	126

## ネイティブ・ディレクトリ情報

Shared Services は、ネイティブ・ディレクトリを使用してユーザー・プロビジョニング・データを保管し、リレーショナル・データベースを使用して製品登録データを保管します。

EPM System 製品に最初にログオンすると、製品は、ユーザー・プロビジョニング情報についてネイティブ・ディレクトリに直接クエリーします。EPM System 製品は、ネイティブ・ディレクトリが実行している場合にのみ正常に機能します。

Shared Services Console は、構成されたユーザー・ディレクトリ(ネイティブ・ディレクトリを含む)ごとにユーザーおよびグループのリストを表示します。これらのリストは、アプリケーション役割に対してユーザーおよびグループをプロビジョニングするために使用されます。

Shared Services Console は、ネイティブ・ディレクトリ(Shared Services とともにインストールされたデフォルトのユーザー・ディレクトリ)のための中心的な管理場所です。他のユーザー・ディレクトリは、独自の管理画面で管理されます。

OID または OpenLDAP をネイティブ・ディレクトリとして使用できます。次を参照してください。

- 108 ページの「OID のネイティブ・ディレクトリとしての使用方法」
- 110 ページの「OpenLDAP のネイティブ・ディレクトリとしての使用方法」

**注：** 高可用性とフェイルオーバーを備えた OpenLDAP の設定については、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System 高可用性ガイド』を参照してください。

## ネイティブ・ディレクトリのデフォルトのユーザーおよびグループ

ネイティブ・ディレクトリにはデフォルトで1つのユーザー・アカウント(admin、デフォルトのパスワードは password)が含まれています。このアカウントを使用して、ネイティブ・ディレクトリと Shared Services のすべての管理タスクを実行できます。

Shared Services のすべてのユーザー(ネイティブ・ディレクトリまたは外部ユーザー・ディレクトリで定義されたかどうかに関係なく)、WORLD グループ(ネイティブ・ディレクトリの唯一のデフォルト・グループ)に属しています。WORLD は論理グループです。Shared Services のすべてのユーザーは、このグループに割り当てられたすべての役割を継承します。ユーザーは、ユーザーに直接割り当てられたすべての権限およびユーザーのグループ(WORLD グループを含む)に割り当てられたすべての権限を合せて取得します。

Shared Services が委任モードで配置されている場合、WORLD グループには、グループおよびユーザーが含まれます。ユーザーの委任リストに WORLD グループが含まれている場合、ユーザーは、検索操作時にすべてのユーザーおよびグループを取得できます。

## OID のネイティブ・ディレクトリとしての使用方法

デフォルトで、OpenLDAP はネイティブ・ディレクトリとしてインストールされます。OID をネイティブ・ディレクトリとして使用するには、既存の OID を Shared Services から構成する必要があります。51 ページの「[ネイティブ・ディレクトリとしての Oracle Internet Directory の設定](#)」を参照してください。

ネイティブ・ディレクトリは、独自の領域を使用して、ユーザー、グループおよび役割を作成および管理します。企業の OID の通常の運用には影響しません。Shared Services Console は、css 領域に含まれる情報のみを管理します。

## ネイティブ・ディレクトリの管理

Shared Services Console が提供する管理機能を使用して、ネイティブ・ディレクトリを管理します。

関連トピック:

- [111 ページの「ネイティブ・ディレクトリ・ユーザーの管理」](#)
- [115 ページの「ネイティブ・ディレクトリ・グループの管理」](#)
- [120 ページの「役割の管理」](#)
- [123 ページの「OpenLDAP root ユーザー・パスワードの変更」](#)

OID をネイティブ・ディレクトリとして使用している場合は、常に Shared Services Console を使用して、css 領域の管理を行うことをお勧めします。

## OID の管理

OID ベース DN の一部であるため、次の管理操作は、OID が提供する機能を使用して実行されます。次のタスクの実行については、Oracle Internet Directory のドキュメントを参照してください。

- ネイティブ・ディレクトリ(OID)の開始および停止
- クラスタリングおよびフェイルオーバー
- ネイティブ・ディレクトリ・データのバックアップ(Shared Services の配布で提供されたバックアップ・スクリプトは OpenLDAP のバックアップのみに使用できます)
- データのバックアップからの復元

## パスワード・ポリシーの設定

パスワード・ポリシーは、パスワードの構文とパスワードの使用方法を決定します。たとえば、パスワード・ポリシーは、パスワードの変更までの期間、パスワードの最少文字数および特殊文字の使用を決定します。

OID をネイティブ・ディレクトリとして使用している場合は、OID のパスワード・ポリシー管理機能を使用して、ネイティブ・ディレクトリ・ユーザーのパスワード・ポリシーを確立できます。

**注：** OpenLDAP を使用している場合は、ネイティブ・ディレクトリ・ユーザーにパスワード・ポリシーの設定または強制を行うことはできません。管理者およびディレクトリ・マネージャのみがネイティブ・ディレクトリのユーザー・パスワードを変更できます。

OID を使用して次のポリシー属性を設定できます。

- orclpwdIPLockoutDuration: ある IP アドレスからの無効なログイン試行回数 がしきい値に達した場合にアカウントをロックする期間(秒単位)。
- orclpwdIPMaxFailure: OID がユーザー・アカウントをロックするまでの無効なログイン試行回数。
- pwdFailureCountInterval: 認証に失敗して、パスワード・エラーがエラー・カウンタから削除されるまでの間隔(秒単位)。
- pwdExpireWarning: パスワードの期限切れの警告がユーザーに表示される期間(秒単位)。
- pwdCheckSyntax: パスワードの構文チェックを使用可能にするかどうかを示すオプション。

ポリシー属性のリストとポリシー属性の使用方法については、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

## ネイティブ・ディレクトリのユーザー・パスワードの変更

OID をネイティブ・ディレクトリとして使用している場合、Shared Services は、OID のパスワード・ポリシーを強制します(109 ページの「パスワード・ポリシーの設定」を参照)。Shared Services は、EPM System 製品ユーザーにメッセージを表示し、これらのポリシーに従ってパスワードを変更するように要求します。

ネイティブ・ディレクトリのアカウントは、他の企業アプリケーションのサポートに使用されるユーザー・アカウントとは分離されているため、パスワードの変更は、EPM System 製品にのみ影響します。

**注：** ネイティブ・ディレクトリのパスワードは、ネイティブ・ディレクトリのユーザー・アカウントを変更して、いつでも変更できます。113 ページの「ユーザー・アカウントの変更」を参照してください。

▶ ネイティブ・ディレクトリのパスワードを変更するには、次の手順に従います：

- 1 現在のパスワードに、パスワードを入力します。
- 2 新パスワードとパスワードの確認に、新パスワードを入力します。

**注：** 新パスワードは、OID のパスワード・ポリシーに従う必要があります。

- 3 OK をクリックします。

## OpenLDAP のネイティブ・ディレクトリとしての使用方法

- 110 ページの「インストール先」
- 111 ページの「OpenLDAP の標準モードでの開始」
- 111 ページの「OpenLDAP のデバッグ・モードでの開始」
- 111 ページの「OpenLDAP の停止」

### インストール先

デフォルトで OpenLDAP は `HYPERION_HOME/products/Foundation/SharedServices/openLDAP` にインストールされます。

例:

```
C:\¥Hyperion¥products¥Foundation¥SharedServices¥openLDAP (Windows)
```

OpenLDAP のインストール先は、このマニュアルでは、`OPENLDAP_HOME` を指します。

ネイティブ・ディレクトリ・データは、`OPENLDAP_HOME/var/openldap-data` に保管され、ユーティリティは、`OPENLDAP_HOME/bdb/bin` に保管されます。

デフォルトで OpenLDAP は、ポート 28029 に配置されます。

## OpenLDAP の開始

OpenLDAP はデフォルトでサービスまたはプロセスとしてインストールされます。

### OpenLDAP の標準モードでの開始

Windows の場合、OpenLDAP を開始するには、サービス・ウィンドウから OpenLDAP サービスを開始するか、OPENLDAP\_HOME/startService.bat を実行します。

UNIX システムの場合、OpenLDAP プロセスを開始するには、OPENLDAP\_HOME/startOpenLDAP スクリプトを実行します。

### OpenLDAP のデバッグ・モードでの開始

▶ OpenLDAP をデバッグ・モードで開始するには、次の手順に従います:

- 1 コマンド・プロンプトのウィンドウを使用して、OPENLDAP\_HOME に移動します。
- 2 次のコマンドを実行します。

```
slapd -d 1
```

### OpenLDAP の停止

Windows の場合、OpenLDAP を停止するには、サービス・ウィンドウから OpenLDAP サービスを停止するか、OPENLDAP\_HOME/stopService.bat を実行します。

UNIX システムの場合、OpenLDAP プロセスを停止するには、OPENLDAP\_HOME/stopOpenLDAP スクリプトを実行します。

## ネイティブ・ディレクトリ・ユーザーの管理

Shared Services 管理者またはディレクトリ・マネージャは、次のタスクを実行して、ネイティブ・ディレクトリのユーザー・アカウントを管理できます。

- [112 ページの「ユーザーの作成」](#)
- [113 ページの「ユーザー・アカウントの変更」](#)
- [114 ページの「ユーザー・アカウントの非アクティブ化」](#)
- [115 ページの「ユーザー・アカウントの削除」](#)
- [130 ページの「ユーザーとグループのプロビジョニング」](#)
- [131 ページの「ユーザーとグループのプロビジョニング解除」](#)
- [134 ページの「プロビジョニング・レポートの生成」](#)

OID をネイティブ・ディレクトリとして使用している場合は、常に Shared Services Console を使用して、css 領域の管理を行うことをお勧めします。

**注：** 外部ユーザー・ディレクトリのユーザーは、Shared Services Console から管理できません。

## ユーザーの作成

- ▶ ユーザーを作成するには、次の手順に従います：
- 1 Shared Services Console を起動します。47 ページの「Shared Services Console の起動」を参照してください。
  - 2 ビュー・ペインのネイティブ・ディレクトリノードで、ユーザーを右クリックし、新規を選択します。
  - 3 ユーザーの作成画面に、必要な情報を入力します。

表 18 「ユーザーの作成」画面

ラベル	説明
ユーザー名	組織の名前付けルールに従う一意のユーザー識別子(例: jyoung などの名の先頭文字とそれに続く姓)  ユーザー名には、任意の数値または文字の組合せを含むことができます。  同じユーザー名(スペースの数のみが異なる名前など)を作成できません。たとえば、ユーザー名 user 1 (user と 1 の間にスペースが 1 つある)と user 1 (user と 1 の間にスペースが 2 つある)は作成できません。
名	ユーザーの名(オプション)
姓	ユーザーの姓(オプション)
説明	ユーザーの説明(オプション)
電子メール・アドレス	ユーザーの電子メール・アドレス(オプション)
パスワード	パスワードは大文字と小文字を区別し、文字の任意の組合せを含むことができます。
パスワードの確認	パスワードを再入力します。

- 4 **オプション:** 1 つ以上のグループにユーザーを追加するには、次へをクリックします。
  - 1 グループ・メンバーシップページのグループ検索に、ユーザーに割り当てるグループの名前を入力します。使用可能なすべてのグループを表示するには、「\*」と入力します。
  - 2 検索をクリックします。
  - 3 使用可能なグループから、1 つ以上のグループを選択します。



4. 追加をクリックします。  
選択したグループは、「割り当てられたグループ」リストに表示されます。
5. **オプション:** 「割り当てられたグループ」からグループを選択し、「削除」をクリックすると、グループへの割り当てが解除されます。「リセット」をクリックすると、割り当てられたグループに行ったすべての変更が元に戻されます。
- 5 終了をクリックします。
- 6 追加作成をクリックして別のユーザーを作成するか、「OK」をクリックしてユーザーの作成画面を閉じます。

## ユーザー・アカウントの変更

デフォルトの admin アカウントの場合、電子メール・アドレス、パスワードおよびグループ・メンバーシップのみを変更できます。他のすべてのユーザー・アカウントの場合、すべてのプロパティを変更できます。

▶ ユーザー・アカウントを変更するには、次の手順に従います:

- 1 **Shared Services Console** を起動します。47 ページの「**Shared Services Console の起動**」を参照してください。
- 2 ビュー・ペインのネイティブ・ディレクトリノードで、ユーザーを選択します。
- 3 ユーザー・アカウントを検索します。49 ページの「**ユーザー、グループ、役割および委任リストの検索**」を参照してください。

検索条件を満たすユーザーのリストが「参照」タブに表示されます。

- 4 変更するユーザー・アカウントを右クリックし、プロパティを選択します。  
「ユーザー・プロパティ」画面が開きます。

**注:** Shared Services が委任された管理モードで配置されている場合、「ユーザー・プロパティ」画面には、「委任リスト」タブが表示されます。

- 5 全般タブで、1 つ以上のユーザー・プロパティを変更します。  
変更できるプロパティの説明については、表 18 を参照してください。
- 6 **オプション:** ネイティブ・ディレクトリ・グループとのユーザーの関連を変更します。
  1. メンバーをクリックします。  
メンバータブが開きます。
  2. 「グループ名」または「説明」を選択します。
  3. 使用可能なグループの検索ボックスに、このユーザーに割り当てるグループの名前または説明を入力し(使用可能なすべてのグループを表示するには「\*」と入力します)、実行をクリックします。
  4. 使用可能なグループから、ユーザーに割り当てる 1 つ以上のグループを選択し、追加をクリックします。

選択したグループは、「割り当てられたグループ」リストに表示されます。

割り当てられたグループから、除去するグループを選択し、削除をクリックすると、割り当てられたグループが除去されます。

- 7 **オプション:** 委任リストをクリックすると、ユーザーの委任リストの割当てが表示されます。
- 8 保存をクリックします。

## ユーザー・アカウントの非アクティブ化

EPM System のアプリケーションに対するアクセス権が禁止されているユーザー・アカウントを非アクティブにします。アカウントの非アクティブ化は、通常、ネイティブ・ディレクトリ管理者が将来アカウントを再アクティブ化する可能性がある場合に一時的に行われます。

- 非アクティブ・ユーザー・アカウントは、EPM System のアプリケーション (Shared Services Console を含む) のログオンには使用できません。
- 非アクティブ・アカウントのグループ関連は維持され、ネイティブ・ディレクトリ管理者に見える状態で残ります。
- 非アクティブ・アカウントの役割関連は維持されます。
- 非アクティブ・ユーザー・アカウントは、アクセスが使用不可のアイテムの製品固有のアクセス制御画面には表示されません。
- 非アクティブ・ユーザー・アカウントは、ネイティブ・ディレクトリから削除されません。

**注:** admin アカウントは非アクティブにはできません。

- ▶ ユーザー・アカウントを非アクティブにするには、次の手順に従います:
- 1 Shared Services Console を起動します。47 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
  - 2 非アクティブにするネイティブ・ディレクトリユーザーを検索します。49 ページの「[ユーザー、グループ、役割および委任リストの検索](#)」を参照してください。
  - 3 ユーザー・アカウントを右クリックし、非アクティブにするを選択します。

## 非アクティブ・ユーザー・アカウントのアクティブ化

非アクティブ・ユーザー・アカウントをアクティブにすると、アカウントが非アクティブ化されるまでに存在したすべての関連が元に戻ります。非アクティブ・ユーザー・アカウントがメンバーであったグループが削除された場合、削除されたグループから与えられた役割は元に戻りません。

- ▶ 非アクティブなユーザー・アカウントをアクティブにするには、次の手順に従います:
- 1 Shared Services Console を起動します。47 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。

- 2 アクティブにするネイティブ・ディレクトリユーザーを検索します。49 ページの「ユーザー、グループ、役割および委任リストの検索」を参照してください。
- 3 ユーザー・アカウントを右クリックし、アクティブにするを選択します。

## ユーザー・アカウントの削除

ユーザー・アカウントを除去すると、ネイティブ・ディレクトリ・グループとのユーザーの関連、ユーザーの役割の割当ておよびユーザー・アカウントがネイティブ・ディレクトリから削除されます。

**注：** admin アカウントは削除できません。

- ▶ ユーザー・アカウントを削除するには、次の手順に従います：
- 1 Shared Services Console を起動します。47 ページの「Shared Services Console の起動」を参照してください。
  - 2 削除するネイティブ・ディレクトリユーザーを検索します。49 ページの「ユーザー、グループ、役割および委任リストの検索」を参照してください。
  - 3 ユーザー・アカウントを右クリックし、削除を選択します。

## ネイティブ・ディレクトリ・グループの管理

ネイティブ・ディレクトリ・ユーザーは、共通の特性に基づいてグループ化できます。たとえば、ユーザーを機能に基づいてスタッフ、マネージャ、販売などのグループに分類したり、場所に基づいて Sales\_West や Managers\_HQ などのグループに分類できます。ユーザーは 1 つ以上のグループに属することができます。

ネイティブ・ディレクトリ・グループは、Shared Services で構成されたユーザー・ディレクトリの他のグループおよびユーザーを含むことができます。

ユーザーのグループ所属は、認証プロセスでは重要な考慮事項です。通常、個々のユーザー・アカウントではなくグループがプロビジョニング・プロセスの円滑化に使用されます。

Shared Services 管理者またはディレクトリ・マネージャが実行するタスクは次のとおりです。

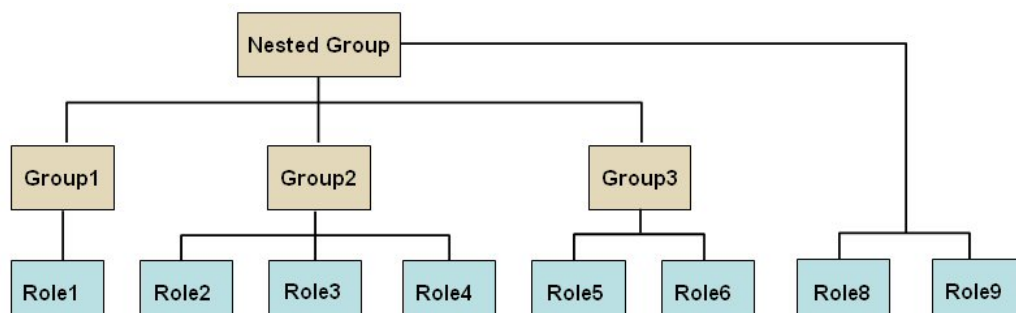
- 116 ページの「グループの作成」
- 118 ページの「グループの変更」
- 120 ページの「グループの削除」
- 130 ページの「ユーザーとグループのプロビジョニング」
- 131 ページの「ユーザーとグループのプロビジョニング解除」
- 134 ページの「プロビジョニング・レポートの生成」

OID をネイティブ・ディレクトリとして使用している場合は、常に Shared Services Console を使用して、css 領域の管理を行うことをお勧めします。

**注：** 外部ユーザー・ディレクトリのグループは、Shared Services Console から管理できません。

## ネストされたグループ

プロビジョニングを促進するために外部ディレクトリからネストされたグループを使用できます。ネストされたグループのメンバーはネストされたグループに割り当てられている役割を継承します。この概念を図で示すと、次のようになります。



各コンポーネント・グループ(Group2 など)は、ネストされたグループに直接割り当てられている役割のほか、ネストされたグループに割り当てられているすべての役割(図では Role8 と Role9)を継承します。たとえば、図の Group1 の役割割り当てでは、Role1、Role8、および Role9 です。ネストされたグループはコンポーネント・グループに割り当てられたグループを継承しません。

**注：** パフォーマンスに影響を及ぼすため、ネストされたネイティブ・ディレクトリ・グループの使用はお勧めしません。

## グループの作成

ネイティブ・ディレクトリ・グループは、Shared Services で構成されたユーザー・ディレクトリ(ネイティブ・ディレクトリを含む)のユーザーおよびグループを含むことができます。他のグループを含むグループは、ネストしたグループと呼ばれます。ネストしたネイティブ・ディレクトリ・グループの使用はお勧めしません。116 ページの「[ネストされたグループ](#)」を参照してください。

外部ユーザー・ディレクトリのグループをネイティブ・ディレクトリ・グループに追加すると、Shared Services は、データベース内に参照を作成して関係を確立します。

- ▶ ネイティブ・ディレクトリ・グループを作成するには、次の手順に従います:
  - 1 Shared Services Console を起動します。47 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
  - 2 ビュー・ペインでグループを右クリックし、新規を選択します。  
「グループの作成」画面が開きます。
  - 3 名前に、一意のグループ名を入力します。  
グループ名では大文字と小文字は区別されません。

**4 オプション: グループの説明を入力します。**

**5 次のいずれかのアクションを行います:**

- 「終了」をクリックすると、グループまたはユーザーを追加せずにグループが作成され、[手順 10](#)に進みます。
- 「次へ」をクリックすると、ネストされたグループが作成されるか、グループにユーザーが割り当てられます。

「グループ・メンバー」タブが表示されます。

**6 ネストされたグループを作成します。この手順をスキップするには、次へをクリックします。**

1. ディレクトリで、ネストしたグループの追加元のユーザー・ディレクトリを選択します。すべてを選択すると、すべての構成済ディレクトリでグループが検索されます。
2. グループ名を選択すると、グループ名に基づいて検索されます。説明を選択すると、グループの説明に基づいて検索されます。
3. グループを取得するための条件を入力します。\*(アスタリスク)をワイルドカードとして使用すると、使用可能なすべてのグループが取得されます。

4. 検索をクリックします。

検索条件に一致するグループが、使用可能なグループに表示されます。

5. 使用可能なグループから、新しいグループ内にネストするグループを選択します。
6. 追加をクリックします。

選択したグループは、割り当てられたグループリストに表示されます。

7. **オプション:** 手順 a から f を繰り返して、他のユーザー・ディレクトリのグループを取得して割り当てます。

Shared Services を使用して、割り当てられたグループを検索すると、除去するグループを識別できます。割り当てられたグループリストの上にあるフィールドを使用して、割り当てられたグループ・リスト内を検索する検索条件を定義します。割り当てられたグループ・リスト内の検索の手順については、手順 a から d を参照してください。

「割り当てられたグループ」から、除去するグループを選択し、「削除」をクリックすると、割り当てられたグループが除去されます。「リセット」をクリックすると、現在のセッションで割り当てられたすべてのグループが除去されます。

**7 終了をクリックすると、ユーザーを追加せずにグループが作成されます。次へをクリックすると、ユーザーがグループに追加されます。**

「ユーザー・メンバー」タブが表示されます。

**8 ユーザーをグループに割り当てるには、次の手順に従います:**

1. ディレクトリで、ユーザーの取得元のユーザー・ディレクトリを選択します。すべての構成済ユーザー・ディレクトリでグループを検索するには、すべてを選択します。
2. 検索するユーザー・プロパティ(名前、名、姓または説明)を選択します。

3. 検索条件を入力します。\* (アスタリスク)をワイルドカードとして使用すると、すべてのユーザーが取得されます。
4. 検索をクリックします。  
検索条件に一致するユーザー・アカウントが「使用可能ユーザー」に表示されます。
5. 使用可能なユーザーから、グループに追加するユーザーを選択します。
6. 追加をクリックします。  
選択したユーザー・アカウントが「割り当てられたユーザー」に表示されます。
7. **オプション:**手順 a から f を繰り返して、他のユーザー・ディレクトリのユーザーを取得して割り当てます。

Shared Services を使用して、割り当てられたユーザーを検索すると、除去するユーザーを識別できます。割り当てられたユーザーリストの上にあるフィールドを使用して、割り当てられたユーザー・リスト内を検索する検索条件を定義します。割り当てられたユーザー・リスト内の検索の手順については、手順 a から d を参照してください。

「割り当てられたユーザー」から、除去するユーザーを選択し、「削除」をクリックすると、割り当てられたユーザーが除去されます。「リセット」をクリックすると、現在のセッションで割り当てられたすべてのユーザーが除去されます。

- 9 終了をクリックします。
- 10 確認画面から、追加作成(別のグループを作成する場合)を選択するか、OK(「参照」タブに戻る場合)を選択します。

## グループの変更

WORLD (ネイティブ・ディレクトリ内のすべてのユーザーおよびグループのコンテンツ)以外のすべてのネイティブ・ディレクトリ・グループのプロパティを変更できます。ネストされたグループからサブグループ除去すると、サブグループの役割継承が更新されます。同様に、グループからユーザーを除去すると、ユーザーの役割継承が更新されます。

**注:** WORLD グループの設定は変更できません。

- ▶ グループを変更するには、次の手順に従います:
  - 1 Shared Services Console を起動します。47 ページの「Shared Services Console の起動」を参照してください。
  - 2 グループを検索します。49 ページの「ユーザー、グループ、役割および委任リストの検索」を参照してください。  
検索条件を満たすグループのリストが「参照」タブに表示されます。
  - 3 グループを右クリックして、プロパティを選択します。  
グループ・プロパティ画面が表示されます。

**注：** Shared Services が委任された管理モードで配置されている場合、グループ・プロパティ画面には、「委任リスト」タブが表示されます。

- 4 全般タブで名前と説明を編集して、グループの全般的なプロパティを変更します。
- 5 グループ・メンバータブを開き、グループを変更する1つまたは両方のアクションを実行します。

1. グループにグループを追加するには、次の手順に従います:

- ディレクトリで、ネストしたグループの追加元のユーザー・ディレクトリを選択します。すべてを選択すると、すべての構成済ディレクトリでグループが検索されます。
- グループ名を選択すると、グループ名に基づいて検索されます。説明を選択すると、グループの説明に基づいて検索されます。
- グループを取得するための条件を入力します。\*(アスタリスク)をワイルドカードとして使用すると、使用可能なすべてのグループが取得されます。
- 検索をクリックします。
- 使用可能なグループから1つ以上のグループを選択し、追加をクリックします。

選択したグループが割り当てられたグループに表示されます。割り当てられたグループからグループを選択し、削除をクリックすると、選択したグループが除去されます。

- **オプション:** この手順を繰り返して、他のユーザー・ディレクトリのグループを取得して割り当てます。

2. 割り当てられたグループを除去するには、次の手順に従います:

- 割り当てられたグループから、除去するグループを選択します。

Shared Services を使用して、割り当てられたグループを検索すると、除去するグループを識別できます。割り当てられたグループリストの上にあるフィールドを使用して、割り当てられたグループ・リスト内を検索する検索条件を定義します。

- 削除をクリックします。

除去されたグループが、使用可能なグループリストに表示されます。

- **オプション:** リセットをクリックすると、割り当てられたグループに行われた変更が元に戻されます。

- 6 ユーザー・メンバータブを選択し、ユーザーの割当てを変更する1つまたは両方のアクションを実行します。

1. グループにユーザーを追加するには、次の手順に従います:

- ディレクトリで、ユーザーの追加元のユーザー・ディレクトリを選択します。すべてを選択すると、すべての構成済ディレクトリでユーザーが検索されます。
- 検索するユーザー・プロパティ(名前、名、姓または説明)を選択します。
- ユーザーを取得するための条件を入力します。\*(アスタリスク)をワイルドカードとして使用すると、使用可能なすべてのユーザーが取得されます。

- 検索をクリックします。
  - 使用可能なユーザーから、グループに割り当てる 1 つ以上のユーザーを選択します、
  - 追加をクリックします。  
選択したグループは、割り当てられたユーザーリストに表示されます。
  - **オプション:** この手順を繰り返して、他のユーザー・ディレクトリのユーザーを取得して割り当てます。
2. ユーザーをグループから除去するには、次の手順に従います:
- 割り当てられたユーザーから、除去するユーザーを選択します。  
Shared Services を使用して、割り当てられたユーザーを検索すると、除去するユーザーを識別できます。割り当てられたユーザーリストの上にあるフィールドを使用して、検索条件を定義します。
  - 削除をクリックします。
  - **オプション:** リセットをクリックすると、割り当てられたユーザーに行われた変更が元に戻されます。
- 7 「委任リスト」タブ(委任された管理モードで Shared Services が配置されている場合にのみ有効です)を開くと、グループに割り当てられた、委任された管理者が表示されます。
- 8 保存をクリックします。

## グループの削除

グループを削除すると、グループに関連付けられたユーザーおよび役割が除去され、ネイティブ・ディレクトリからグループの情報が除去されます。ただし、削除されたグループに割り当てられたユーザーまたはサブグループは削除されません。

- ▶ グループを削除するには、次の手順に従います:
- 1 Shared Services Console を起動します。47 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
  - 2 ビュー・ペインから、グループを選択します。
  - 3 削除するグループを検索します。49 ページの「[ユーザー、グループ、役割および委任リストの検索](#)」を参照してください。  
検索条件を満たすグループが「参照」タブに表示されます。
  - 4 グループを右クリックし、削除を選択します。

## 役割の管理

役割は、ユーザーが特定のアプリケーションで実行できる操作を定義します。



アプリケーション役割は、EPM System の登録されたすべてのアプリケーションから表示できますが、Shared Services Console から更新または削除できません。Shared Services の管理者が実行するタスクは次のとおりです。

- [121 ページの「集約役割の作成」](#)
- [122 ページの「集約役割の変更」](#)
- [123 ページの「集約役割の削除」](#)
- [134 ページの「プロビジョニング・レポートの生成」](#)

**注：** 新しく作成されたユーザーおよびグループを LDAP ベースのユーザー・ディレクトリ (MSAD を含む) からプロビジョニングできます。ただし、新しいユーザーおよびグループにプロビジョニングされた役割をユーザーが使用できるのは、Shared Services がキャッシュをリフレッシュした後のみです。キャッシュのデフォルトのリフレッシュ間隔は 60 分です。この値は、css Cache Refresh Interval の値を更新することで変更できます。[65 ページの「OID、MSAD およびその他の LDAP ベースのユーザー・ディレクトリの構成」](#) を参照してください。

## 集約役割の作成

管理とプロビジョニングを円滑にするために、Shared Services の管理者は、製品固有の複数の役割をカスタムな 1 つの Shared Services 役割に関連付ける集約役割を作成できます。Shared Services のプロビジョニング・マネージャ役割を持つユーザーは、プロビジョニング・マネージャを担当する製品の集約役割を作成できます。Shared Services の管理者は、EPM System のすべての製品の集約役割を作成できます。

集約役割については、[19 ページの「集約役割」](#) を参照してください。

**注：** 役割を作成できるのは、少なくとも 1 つの EPM System アプリケーションを Shared Services に登録した後のみです。

▶ 集約役割を作成するには、次の手順に従います：

- 1 Shared Services Console を起動します。[47 ページの「Shared Services Console の起動」](#) を参照してください。
- 2 ビュー・ペインから、役割を右クリックし、新規を選択します。  
「役割の作成」画面が表示されます。
- 3 名前に、役割名を入力します。特殊文字を含む役割名はサポートされていません。役割名は、¥ (バックスラッシュ) で開始または終了できません。詳細は、[89 ページの「特殊文字の使用法」](#) を参照してください。
- 4 **オプション:** 説明に、役割の説明を入力します。
- 5 製品名から、役割を作成する製品を選択します。

このリストは、Shared Services に登録された EPM System のすべてのアプリケーションを含みます。

- 6 次へをクリックします。
- 7 役割メンバータブで、追加する役割を見つけます。
  - 「検索」をクリックして、選択したアプリケーションからすべての役割を取得します。
  - 「役割の検索」に役割名を入力し、「検索」をクリックすると、役割が検索されます。パターン検索では、アスタリスク(\*)をワイルドカードとして使用します。
- 8 使用可能な役割から、割り当てるアプリケーション役割を選択します。
- 9 追加をクリックします。

選択した役割は、割り当てられた役割リストに表示されます。

割り当てられた役割から役割を選択し、削除をクリックすると、選択された役割が除去されます。リセットをクリックすると、このタブで行ったすべてのアクションが元に戻されます。
- 10 終了をクリックします。

## 集約役割の変更

集約役割のみを変更できます。デフォルト・アプリケーション固有の役割は、Shared Services から変更できません。製品名以外のすべての役割プロパティを変更できます。

- ▶ 集約役割を変更するには、次の手順に従います:
- 1 Shared Services Console を起動します。47 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
  - 2 ビュー・ペインで、役割を選択します。
  - 3 集約役割を取得します。49 ページの「[ユーザー、グループ、役割および委任リストの検索](#)」を参照してください。
  - 4 役割を右クリックして、プロパティを選択します。

「役割プロパティ」画面が表示されます。
  - 5 全般タブで名前と説明を編集して、役割の全般的なプロパティを変更します。
  - 6 役割メンバーの割当てを変更する場合は、役割メンバータブを開き、次の1つまたは2つのアクションを実行します。
    1. 役割メンバーを追加するには、次の手順に従います:
      - 追加する役割を取得します。
        - 検索をクリックして、すべての役割を取得します。
        - 役割の検索に役割名を入力し、検索をクリックすると、特定の役割が取得されます。パターン検索では、アスタリスク(\*)をワイルドカードとして使用します。
      - 使用可能な役割から、1つ以上の役割を選択します。
      - 追加をクリックします。選択した役割が割り当てられた役割に表示されます。

割り当てられた役割から、1つ以上の役割を選択し、削除をクリックすると、選択された役割が除去されます。リセットをクリックすると、このタブで行ったアクションが元に戻されます。

2. 役割の割当てを除去するには、次の手順に従います:
  - 割り当てられた役割から、除去する1つ以上の役割を選択します。
  - 削除をクリックします。

7 保存をクリックします。

## 集約役割の削除

Shared Services から作成される集約役割を削除できます。アプリケーション固有の役割は削除できません。

▶ 集約役割を削除するには、次の手順に従います:

- 1 Shared Services Console を起動します。47 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
- 2 ビュー・ペインで、役割を選択します。
- 3 集約役割を取得します。  
49 ページの「[ユーザー、グループ、役割および委任リストの検索](#)」を参照してください。  
検索条件を満たす役割のリストが「参照」タブに表示されます。
- 4 役割を右クリックし、削除を選択します。
- 5 OK をクリックします。

## OpenLDAP root ユーザー・パスワードの変更

Shared Services 管理者は、OpenLDAP を完全に制御できる OpenLDAP root ユーザー・アカウントのパスワードを変更できます。デフォルトの root パスワードは、ファイルにハード・コードされ、ユーザーには見えません。OpenLDAP は、このパスワードを変更するためのインタフェースを提供しません。セキュリティを強化するために、Shared Services は、root パスワードを変更するための画面を提供します。更新されたパスワードは、OpenLDAP および Shared Services の再起動後に有効になります。

**注：** Shared Services 管理者役割がプロビジョニングされたユーザーのみが root パスワードを変更できます。

- ▶ OpenLDAP root パスワードを更新するには、次の手順に従います:
- 1 Shared Services Console を起動します。47 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
  - 2 管理から、ネイティブ・ディレクトリのパスワードの変更を選択します。

- 3 現在のパスワードに、root アカウントのパスワードを入力します。デフォルト・パスワードがまだ一度も変更されていない場合、このフィールドは自動的に設定されます。
- 4 新パスワードおよび新パスワードの確認に、root アカウントの新パスワードを入力します。
- 5 終了をクリックします。
- 6 OpenLDAP を再起動します。
- 7 Shared Services を再起動します。
- 8 Shared Services セキュリティ API を使用するその他の EPM System 製品とカスタム・アプリケーションを再起動します。

## OpenLDAP データベースのバックアップ

メディアの障害、ユーザー・エラーまたは不測の事態によるプロビジョニング・データの損失から回復するために、OpenLDAP データベースを定期的にバックアップする必要があります。このデータベースを定期的にバックアップすることをお勧めします。

OpenLDAP データベースのバックアップについては、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System バックアップおよびリカバリ・ガイド』を参照してください。

## ネイティブ・ディレクトリ・データの回復

Shared Services のデータベースは、製品登録に関連する情報を保管し、ネイティブ・ディレクトリのデータベースは、すべての製品のプロビジョニング・データを保管します。これらのデータベースは協調して動作し、EPM System 製品をサポートします。

これらのデータベース間にデータの不一致があると、正常な動作に影響します。不一致は、データベースの更新やアップグレードを手動で行った場合に起こります。プロビジョニング中に Shared Services が登録されたアプリケーションを表示しない場合は、ネイティブ・ディレクトリ・データを回復する必要があります。回復プロセスは、Shared Services のデータベースをマスター・データベースとして使用し、データの不一致を解決します。回復プロセスは次の操作を実行します。

- 失われた登録済アプリケーションをネイティブ・ディレクトリで作成します。
- データが Shared Services のデータベースに存在しない、陳腐化したアプリケーション・エントリをネイティブ・ディレクトリから除去します。

---

**注意** ネイティブ・ディレクトリを回復する前に、ネイティブ・ディレクトリ・データのバックアップ・コピーを作成します。

---

操作に関連するメッセージ(エラーと情報)は、`SharedServices_syncOpenLDAP.log` ファイルに記録されます。第 11 章「EPM System の保護のガイドライン」を参照してください。

- ▶ ネイティブ・ディレクトリのデータベースと Shared Services のリポジトリを同期化するには、次の手順に従います:
  - 1 **Shared Services Console** を起動します。47 ページの「**Shared Services Console の起動**」を参照してください。
  - 2 管理を選択し、ネイティブ・ディレクトリの回復を選択します。  
「ネイティブ・ディレクトリの回復」画面が開きます。
  - 3 回復の開始をクリックします。  
回復プロセスのステータスが表示されます。
  - 4 **オプション:** リフレッシュをクリックすると、ステータスが更新されます。
  - 5 **オプション:** ログの表示をクリックすると、実行された操作の詳細を記述したログ・ファイルが表示されます。

## OpenLDAP データの回復

SSO とプロビジョニングを使用可能にするには、OpenLDAP を実行している必要があります。ネイティブ・ディレクトリのエラーが原因で OpenLDAP が失敗した場合は、EPM System 製品(Shared Services を含む)にユーザーがアクセスする前に、プロビジョニング・データを回復する必要があります。

- ▶ OpenLDAP が失敗した後にプロビジョニング・データを回復するには、次の手順に従います:
  - 1 OpenLDAP が実行していないことを確認します。
  - 2 コマンド・プロンプトまたはコンソールを開きます。
  - 3 `OPENLDAP_HOME/bdb/bin` に移動します。例: `HYPERION_HOME/products/Foundation/SharedServices/openLDAP/bdb/bin`。
  - 4 **オプション:** UNIX システムを使用する場合は、`LIBPATH (AIX)`、`SHLIB_PATH (HP-UX)`または `LD_LIBRARY_PATH (その他すべての UNIX システム)`を OpenLDAP ライブラリのパスで更新します。

**注:** たとえば、UNIX システムでの OpenLDAP の管理に使用される `db_recover` および `db_archive` などの `bdb` スクリプトを実行する前に、環境変数を設定する必要があります。

サンプルの `LD_LIBRARY_PATH` 設定:

```
LD_LIBRARY_PATH=Hyperion_Home/products/Foundation/openLDAP/usr/local/  
lib:Hyperion_Home/products/Foundation/openLDAP/usr/local/bdb/  
lib:Hyperion_Home/products/Foundation/openLDAP/usr/local/ssl/
```

```
lib:Hyperion_Home/products/Foundation/openLDAP/usr/local/lib/sparcv9
export LD_LIBRARY_PATH
```

- 5 次のコマンドを使用して、db\_recover ユーティリティまたはスクリプトを実行します:

```
db_recover -h Path_OpenLDAP_data_file
```

例:db\_recover -h ../../var/openldap-data。openldap-data は OpenLDAP データ・ファイルの名前を示します。

- 6 ユーティリティを監視して、正常に実行していることを確認します。
- 7 OpenLDAP サービスまたはプロセスを再起動します。
- 8 アプリケーション・サーバーで、Shared Services を再起動します。
- 9 Shared Services セキュリティ API を使用するその他の EPM System 製品とカスタム・アプリケーションを再起動します。

## ネイティブ・ディレクトリの移行

ネイティブ・ディレクトリのデータベースは、セキュリティ関連データを保管します。ネイティブ・ディレクトリ・データの移行は、Shared Services の移行の一部として行う必要があります。移行は、アプリケーション・インスタンスを別の稼働環境(例: 開発からテスト環境またはテストから本稼働環境)にコピーするプロセスです。

情報ソース:

- ライフサイクル管理ユーティリティを使用したネイティブ・ディレクトリの移行については、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ライフサイクル管理ガイド』を参照してください。
- インポート/エクスポート・ユーティリティを使用したネイティブ・ディレクトリ・データの移行手順については、『Import/Export Utility ユーザー・ガイド』を参照してください。このガイドは、HYPERION\_HOME/common/utilities/CSSImportExportUtility/cssimportexport.zip から入手できます。

## この章の内容

プロビジョニングについて.....	127
ユーザーとグループのプロビジョニング.....	130
ユーザーとグループのプロビジョニング解除.....	131
監査セキュリティ・アクティビティおよび LCM アーチファクト.....	131
監査データの削除.....	132
アプリケーションおよびアプリケーション・グループレベルの監査オブジェクトの選択 .....	133
レポートの生成.....	133
ネイティブ・ディレクトリ・データのインポートとエクスポート.....	137

## プロビジョニングについて

組織にはそれぞれ一意のプロビジョニングの要件があります。この項では、ユーザーとグループに Shared Services の役割をプロビジョニングする一般的なフローについて説明します。

ユーザーとグループへの Shared Services の役割のプロビジョニングは、アプリケーションを管理して、プロビジョニングできる管理レベルのユーザーを作成するために主に設計されています。自身が所属する EPM System 製品ユーザーとグループには、Shared Services の役割がプロビジョニングする必要はありません。アクセスする必要がある EPM System 製品からのみの役割が必要となります。

## プロビジョニング・プロセスの開始する前に

プロビジョニング・プロセスを開始する前に、次のアクティビティを完了しておくようにします。

- EPM System 製品をプロビジョニングする方法をプランします。次の内容を実行する必要があります。
  - 使用可能な役割を理解します。EPM System 製品の役割のリストは、[163 ページの「Shared Services 役割」](#)を参照してください。
  - 使用可能なアーチファクトレベルのアクセス権を理解します。Shared Services とは異なり、大半の EPM System 製品は、製品アーチファクトへのアクセスを制限するために、アクセス制御リスト(ACL)を使用したアーチファクトレベルのアクセス権を順守させます。たとえばアカウントは、アクセス権を設定できる Planning アーチファクトです。アクセス制御を設定できる

製品アーチファクトに関する情報は、製品の管理者ガイドを参照してください。

- EPM System ユーザーとグループ用のアカウントを含む外部のユーザー・ディレクトリを構成します。第5章「ユーザー・ディレクトリの構成」を参照してください。
- プロビジョニングに対してユーザーとグループを識別します。これらのユーザーとグループは、ネイティブ・ディレクトリまたは外部のユーザー・ディレクトリに属することができます。
- プロビジョニング・モードの、集中(デフォルト)、または委任された管理モードのいずれかを決定します。委任された管理者に割り当てられている役割の範囲は、これらの管理者に割り当てられた委任リストに制限されます。たとえば、ユーザー Admin1 が DelegatedList1 用の Essbase プロビジョニング・マネージャの役割を割り当てられた場合、Admin1 は DelegatedList1 からのユーザーのみをプロビジョニングできます。第7章「委任されたユーザー管理」を参照してください。

## プロビジョニング・ステップの概要

Shared Services のプロビジョニング・アクティビティは、Shared Services 管理者またはプロビジョニング・マネージャが実行する必要があります。組込みの admin アカウントはプロビジョニング・プロセスの開始の際に使用可能です。

ユーザーとグループのプロビジョニングは、組織専用調整されたプロビジョニング・プランに従う必要があります。一般に、Shared Services 管理者およびアプリケーション固有のプロビジョニング・マネージャを作成して、EPM System 製品ユーザーとグループをプロビジョニングします。組織の必要に応じて、たとえば、LCM 管理者のようなその他のパワー・ユーザーを、Shared Services の役割を割り当てることにより作成することもできます。使用可能な役割およびそのアクセス権の詳細は、163 ページの「Shared Services 役割」を参照してください。

EPM System 製品では、管理者とエンドユーザーの2つの異なるタイプのユーザーを持つことができます。一般に、管理者は、ユーザー・ディレクトリの管理、アプリケーションの作成、ユーザーとグループのプロビジョニング、およびアプリケーションおよびアーチファクトの移行など、管理的なアクションを実行することで EPM System 製品をサポートします。エンドユーザーは、アプリケーションの機能を利用して、たとえば、Planning アプリケーションを使用してプランを作成します。

一般に、管理ユーザーは EPM System 製品の機能を実行できません。たとえば、機能の役割の割当てがない場合、Planning プロビジョニング・マネージャは、Planning を使用してプランを作成または管理できません。

## 管理ユーザーのプロビジョニング

管理ユーザーとグループのプロビジョニングは、必要な EPM System 製品管理の役割を割り当てるのに、Shared Services Console を使用する必要があります。たとえば、Planning プロビジョニング・マネージャの役割により、受信者は、ユーザーとグループに Planning の役割をプロビジョニングできます。その他の EPM System



製品には類似した管理の役割があります。Shared Services からの管理の役割の割当ては、Shared Services 管理者が実行する必要があります。

役割を組み合わせ、追加のアクセス権をユーザーまたはグループに割り当てたり、EPM System 製品全体で管理アクセスを提供したりできます。プロビジョニング・マネージャとディレクトリ・マネージャの役割を組み合わせることはお薦めしません。

## EPM System ユーザーのプロビジョニング

Shared Services Console は、Shared Services の管理インタフェースです。Shared Services で構成されたユーザー・ディレクトリで定義されたすべてのユーザーは、Shared Services Console にログインできます。エンドユーザーは、Shared Services の役割のプロビジョニングは必要ありません。

ユーザーに製品の役割をプロビジョニングして、その他の EPM System 製品にアクセスできるようにする必要があります。Shared Services 管理者およびプロビジョニング・マネージャは、次のステップを実行してユーザーとグループにプロビジョニングします。

1. Shared Services Console から、EPM System 製品へのアクセスを必要とするユーザー(またはユーザーが所属するグループ)を識別して選択します。49 ページの「ユーザー、グループ、役割および委任リストの検索」を参照してください。
2. EPM System 製品へのユーザーのアクセスを許可する製品の役割を割り当てます。たとえば、サーバー・アクセスは、すべての Essbase ユーザーに割り当てられる必要があります。130 ページの「ユーザーとグループのプロビジョニング」を参照してください。

EPM System 製品の役割は、付録 A「製品の役割」で説明されています。

3. EPM System 製品に属するアプリケーション・インスタンスの機能へのアクセスを許可する、アプリケーション固有の役割を割り当てます。たとえば、Essbase アプリケーション Esb\_App1 では、Esb\_App1 の計算スクリプトを操作する必要があるユーザーに割り当てられる計算の役割が提供されます。

これらの役割は、アプリケーションを基準に割り当てられます。たとえば、Essbase アプリケーション Esb\_App1 からの役割では、ユーザーは Esb\_App1 の機能にのみアクセスできます。

4. 製品管理画面を使用して、EPM System アプリケーションによって管理されるアーチファクトへのアクセスを割り当てます。これらのステップを使用して、Shared Services Console から製品管理画面を起動できます。

1. Shared Services Console ビュー・ペインで、プロビジョニングするアプリケーションを右クリックします。
2. アクセス権の割当てを選択します。Shared Services Console の一部ではない、製品管理画面が開きます。
3. 必要に応じてユーザーにプロビジョニングします。画面で使用可能なオンライン・ヘルプの指示を参照してください。

アーチファクトレベルのアクセス制御では、管理者は、アプリケーション・オブジェクトへのアクセスを調整できます。これらのアクセス権は、設計で

は、アプリケーションの役割より粒度が細かくなっています。これらの特権を使用して、役割を使用して許可されたアクセス権を制限できます。

アーチファクトレベルのアクセス制御は、EPM System 製品の管理ガイドで説明されています。

## ユーザーとグループのプロビジョニング

プロビジョニングは、EPM System アプリケーションから、構成済ユーザー・ディレクトリで使用可能なユーザーとグループに役割を許可するプロセスです。プロビジョニングは、1つ以上の EPM System アプリケーションの役割をユーザーまたはグループに割り当てる、プロビジョニング・マネージャまたは Shared Services 管理者によって、ユーザーまたはグループ・レベルで管理されます。17 ページの「[プロビジョニング\(役割ベースの認証\)](#)」を参照してください。

**注：** プロビジョニング・マネージャは、自身のプロビジョニング・データを変更できません。

**ヒント：** 管理を促進するには、ユーザーではなくグループをプロビジョニングして、集約された役割を使用することをお勧めします。

▶ ユーザーまたはグループをプロビジョニングするには、次の手順に従います：

1 **Shared Services Console** を起動します。47 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。

2 プロビジョニングするユーザーまたはグループを見つけます。

49 ページの「[ユーザー、グループ、役割および委任リストの検索](#)」を参照してください。

**注：** グループ・ベースのプロビジョニングは、Financial Management のタスクフローではサポートされていません。

3 ユーザーまたはグループを右クリックし、**プロビジョニング**を選択します。

「プロビジョニング」タブが表示されます。

4 **オプション:** ビューを選択します。

役割は、階層(ツリー)またはリストに表示できます。階層をドリルダウンし、使用可能な役割を表示する必要があります。リスト・ビューでは、使用可能な役割が表示されますが、階層は表示されません。

5 役割を1つ以上選択し、**追加**をクリックします。

選択された役割が、選択された役割に表示されます。

6 **保存**をクリックします。

プロビジョニング・プロセスが正常に終了したことを示すダイアログ・ボックスが開きます。

7 **OK** をクリックします。

## ユーザーとグループのプロビジョニング解除

プロビジョニング解除により、アプリケーションからユーザーまたはグループが割り当てられているすべての役割が解除されます。Shared Services 管理者は、1つ以上のアプリケーションから役割をプロビジョニング解除できます。アプリケーションのプロビジョニング・マネージャにより、アプリケーションから役割をプロビジョニング解除できます。たとえば、グループ Sales\_West は、Planning および Financial Management から役割をプロビジョニングされると仮定します。このグループが Planning プロビジョニング・マネージャによりプロビジョニング解除される場合、Planning からの役割のみが解除されます。

- ▶ ユーザーまたはグループをプロビジョニング解除するには、次の手順に従います:
  - 1 Shared Services Console を起動します。47 ページの「Shared Services Console の起動」を参照してください。
  - 2 プロビジョニング解除するユーザーまたはグループを見つけます。  
49 ページの「ユーザー、グループ、役割および委任リストの検索」を参照してください。
  - 3 ユーザーまたはグループを右クリックし、プロビジョニング解除を選択します。  
「プロビジョニング解除」タブが表示されます。
  - 4 アプリケーションを選択するか、またはすべて確認を選択してすべてのアプリケーションを選択します。
  - 5 OK をクリックします。
  - 6 確認のダイアログ・ボックスで、OK をクリックします。
  - 7 「プロビジョニング解除の要約」画面で、OK をクリックします。

## 監査セキュリティ・アクティビティおよび LCM アーチファクト

Shared Services を使用すると、プロビジョニングおよびライフサイクル管理アクティビティの監査では、セキュリティ・オブジェクト、およびライフサイクル管理ユーティリティを使用してエクスポートまたはインポートされるアーチファクトへの変更を追跡できます。

監査は、グローバル、アプリケーション・グループおよびアプリケーションの3つのレベルで構成できます。

グローバル・レベルでは、Shared Services で処理されるセキュリティおよびアーチファクトを監査できます。アプリケーション・グループレベルおよびアプリケーションレベルの監査では、アプリケーション・グループに関連するセキュリティ・アクティビティ、または Shared Services を介して実行されるアプリケーションの監査が可能です。Shared Services 外で実行されるアプリケーション・グループおよびアプリケーション・セキュリティのアクティビティ、たとえば Essbase における計算スクリプトの割当てなどは監査できません。

デフォルトでは、監査は使用不可になっています。Shared Services 管理者、ディレクター・マネージャ、および LCM マネージャに対して監査レポートを表示し、発生した変更の追跡を許可する場合は、監査を使用可能にする必要があります。135 ページの「監査レポートの生成」を参照してください。

Shared Services 管理者のみが、監査を使用可能であるか、またはグローバル・レベルで監査されるオブジェクトおよびアーチファクトのリストを変更できます。

- 132 ページの「監査データの削除」
- 133 ページの「アプリケーションおよびアプリケーション・グループレベルの監査オブジェクトの選択」

▶ 監査構成を変更するには、次の手順に従います:

- 1 Shared Services 管理者のログイン情報を使用して、Shared Services Console にログインします。47 ページの「Shared Services Console の起動」を参照してください。
- 2 管理、監査の構成の順に選択します。
- 3 「監査構成」画面では:
  1. 監査の使用可能を選択して監査をアクティブにします。このオプションが選択されていない場合、Shared Services はどのレベルでも監査をサポートしません。デフォルトでは監査は使用不可になっています。
  2. グローバル設定の上書き許可を選択し、アプリケーション・グループおよびアプリケーションレベルの監査を使用不可にします。このオプションが選択されている場合、アプリケーション・グループおよびアプリケーション・レベルのタスクの選択は破棄され、グローバル選択が使用されます。
  3. オプション: システムから古い監査データを除去するには、次より古いファイルを削除:で、監査データを保持する日数を設定し、削除をクリックします。
  4. タスクの選択から、監査データが保持されるタスクを選択します。タスクは、Shared Services で登録されるアプリケーションに基づいて分類されます。
  5. OK をクリックします。

## 監査データの削除

Shared Services では、Shared Services データベースから監査データは自動的に除去されません。大量のデータを保持していると、監査レポート生成時のパフォーマンスが低下する場合があります。

---

**注意** Shared Services 管理者は、会社の監査データ保持規定に基づいてデータを削除する必要があります。データを削除する前に、Shared Services データベースをバックアップするようにしてください。

---

▶ 監査データを削除するには、次の手順に従います:

- 1 Shared Services 管理者ログイン情報を使用して、Shared Services Console にログインします。47 ページの「Shared Services Console の起動」を参照してください。

- 2 管理、監査の構成の順に選択します。  
「監査構成」画面を開きます。
- 3 次より古いファイルを削除:では、監査データを保持する日数を設定します。
- 4 削除をクリックします。
- 5 OK をクリックします。

## アプリケーションおよびアプリケーション・グループレベルの監査オブジェクトの選択

Shared Services 管理者のみが、アプリケーションおよびアプリケーション・グループレベルで監査用のオブジェクトを選択できます。

▶ 監査用のオブジェクトを選択するには、次の手順に従います:

- 1 Shared Services 管理者のログイン情報を使用して、Shared Services Console にログインします。47 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
  - 2 ビュー・ペインで、次のうち1つを右クリックし、監査の構成を選択します。
    - アプリケーション・グループ内のすべてのアプリケーションに対する監査を使用可能にするアプリケーション・グループ
    - アプリケーションに対する監査を使用可能にするアプリケーション
- 注:** 監査の構成オプションは、グローバル設定の上書きを許可が「監査構成」画面で選択されている場合、アプリケーション・グループおよびアプリケーション・レベルで使用可能ではありません。131 ページの「[監査セキュリティ・アクティビティおよび LCM アーチファクト](#)」を参照してください。
- 3 タスクの選択から、監査データが保持されるタスクを選択します。タスクは、Shared Services で登録されるアプリケーションに基づいて分類されます。
  - 4 OK をクリックします。

## レポートの生成

Shared Services では、プロビジョニング・レポート、監査レポートおよび移行ステータス・レポートの3つのタイプのレポートが生成できます。次の項を参照してください。

- 134 ページの「[プロビジョニング・レポートの生成](#)」
- 135 ページの「[監査レポートの生成](#)」
- 136 ページの「[移行ステータス・レポートの生成](#)」

## プロビジョニング・レポートの生成

Shared Services 管理者およびプロビジョニング・マネージャは、Shared Services Console のレポート機能を使用して、ユーザーおよび役割のプロビジョニング・データをレビューできます。プロビジョニング・レポートには、選択したアプリケーションからの役割に割り当てられたユーザーの情報、および1つ以上のユーザーに割り当てられている選択したアプリケーションからの役割の情報を含むことができます。またレポートには、プロビジョニングされた役割をユーザーに許可する責任のあったオリジナルのグループまたは役割で始まる、継承の順序を示す継承情報も含まれます。

プロビジョニング・レポートでは、管理者が、EPM System アプリケーション全体でユーザーに許可されたアクセス権および権限をレビューできます。このレポートは、コンプライアンス・レポートへのユーザーのアクセスを追跡するのに役に立ちます。

ネイティブ・ディレクトリの WORLD グループがプロビジョニングされている場合、WORLD グループから継承される役割は、このレポートがユーザーまたはグループのために生成されている場合のみプロビジョニング・レポートに含まれません。

▶ プロビジョニング・レポートを生成するには、次の手順に従います:

- 1 Shared Services Console のビュー・ペインから、ユーザーまたは役割を選択します。49 ページの「ユーザー、グループ、役割および委任リストの検索」を参照してください。
- 2 管理、プロビジョニング・レポートの表示の順に選択します。
- 3 レポート生成パラメータを入力します。

表 19 レポートの表示画面

ラベル	説明
すべて検索	レポートが生成されるオブジェクト・タイプ(ユーザー、グループまたは役割)を選択します。
ユーザーまたは役割	このラベルはすべて検索で選択される内容に応じて変わります。
フィルタ条件	レポート・データをグループ化するために使用する基準。
有効な役割の表示	「はい」を選択すると、すべての有効な役割(継承済および直接割り当てられた)に関してレポートします。継承済役割(直接割り当てられた役割とは対照的)は、ユーザーまたはグループが属するグループに割り当てられます。いいえを選択すると、直接割り当てられた役割に関してのみレポートします。
グループ	レポートのデータをグループ化する方法を選択します。使用可能なグループ化の基準はすべて検索の選択内容によって異なります。

ラベル	説明
アプリケーション	<p>プロビジョニング・データのレポート元のアプリケーションを選択するか、またはすべてを選択してすべてのアプリケーションに関してレポートします。</p> <p><b>注：</b> アプリケーション・グループに属するアプリケーションに関してのみレポートできます。</p>

- 4 レポート作成をクリックします。  
レポートは、「プロビジョニング・レポート」タブに表示されます。
- 5 **オプション:** レポートを印刷するには、次の手順に従います:
  1. 印刷プレビューをクリックします。  
レポートは、「レポートの表示」ウィンドウで表示されます。
  2. 印刷をクリックします。
  3. プリンタを選択して、印刷をクリックします。
  4. 閉じるをクリックします。
- 6 **オプション:** CSVにエクスポートをクリックして、レポートをカンマ区切りの値(CSV)ファイルにエクスポートします。
- 7 OKをクリックします。

## 監査レポートの生成

セキュリティ・レポート、アーチファクト・レポート、および構成レポートの3つの監査レポートを生成できます。セキュリティ・レポートには、監査を構成するセキュリティ・タスクに関する監査情報が表示されます。アーチファクト・レポートには、ライフサイクル管理ユーティリティを使用してインポートまたはエクスポートされたアーチファクトの情報が表示されます。

Shared Services 管理者、ディレクトリ・マネージャおよび LCM マネージャでは、監査レポートを生成および表示し、長期間に発生したセキュリティ・データへの変更を追跡できます。

**注：** 監査は、監査レポートを生成する前に構成される必要があります。131 ページの「[監査セキュリティ・アクティビティおよび LCM アーチファクト](#)」を参照してください。

- ▶ 監査レポートを生成するには、次の手順に従います:
- 1 管理、監査レポートの順に選択します。
  - 2 次のいずれかのオプションを選択します。
    - セキュリティ・レポート。セキュリティ監査レポートを生成します。
    - アーチファクト・レポート。ライフサイクル管理ユーティリティを使用して移行されたアーチファクトに関するレポートを生成します。
    - 構成レポート。実行された構成タスクに関するセキュリティ監査レポートを生成します。

**注：** これらのレポートは自動的に生成され、過去 30 日間のすべてのユーザーのデータを表示します。

**3 レポートを再生成するには、レポート・パラメータを選択します：**

1. 実行者で、レポートが生成されるユーザーを選択します。
2. 実行対象期間で、レポートを生成する期間を選択します。その期間は、日数、または日付範囲として設定できます。
3. **オプション:** 詳細ビューを選択して、変更された属性、および新規の属性値に基づいてレポート・データをグループ化します。
4. **オプション:** ページあたりでは、レポート・ページで表示するデータの行数を選択します。
5. レポートの表示をクリックします。

**4 レポート・データを含む CSV ファイルを作成するには、エクスポートをクリックします。**

1. CSV として保存を選択します。
2. OK をクリックします。
3. 開くをクリックしてファイルを開くか、または保存をクリックしてファイル・システムにファイルを保存します。デフォルトの名前は、セキュリティ・レポート・ファイルは `auditsecurityreport.csv`、アーチファクト・レポートは `AuditArtifactReport.csv`、および構成レポートは `AuditConfigReport.csv` になっています。

**5 閉じるをクリックします。**

## 移行ステータス・レポートの生成

移行ステータス・レポートには、ライフサイクル管理ユーティリティを使用して実行されたアーチファクトの移行に関する情報が含まれています。このレポートには、移行を実行したユーザー、使用したパッケージ・ファイル、移行を実行した時間、および移行したアーチファクトの数などの情報が示されます。

▶ 移行ステータス・レポートを生成するには、次の手順に従います：

**1 管理、移行ステータス・レポートの順に選択します。**

このレポートは、自動的に生成され、過去 30 日間に実行された移行をすべて表示します。

**2 レポートを再生成するには、レポート・パラメータを選択します：**

1. 実行された期間で、レポートを生成する期間を選択します。その期間は、日数、または日付範囲として設定できます。
2. ステータスでは、生成されるレポートに基づいて移行ステータスを選択します。すべての移行でレポートを生成する場合、ステータスは指定しないでください。
  - アクティブを選択し、アクティブな移行についてのみレポートします。
  - 成功を選択し、成功した移行についてのみレポートします。



3. **オプション:** ページあたりでは、レポート・ページで表示するデータの行数を選択します。
- 3 リフレッシュをクリックします。
- 4 **オプション:** 縮小/展開をクリックして、レポート・パラメータを非表示または表示します。

## ネイティブ・ディレクトリ・データのインポートとエクスポート

ライフサイクル管理ユーティリティを使用して、次のタスクを実行します。

- 環境全体でのプロビジョニング・データの移動
- ユーザーとグループのバルク・プロビジョニング
- ネイティブ・ディレクトリのユーザーとグループの管理

『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ライフサイクル管理ガイド』を参照してください。

**注:** バージョン 9.x からバージョン 11.1.1.3 にアップグレードして、プロビジョニング・データが破損した場合、インポート/エクスポート・ユーティリティを使用して、既存のエクスポート・ファイルからネイティブ・ディレクトリ・データをインポートします。HYPERION\_HOME/common/utilities/CSSImportExportUtility/cssimportexport.zip 内にあるインポート/エクスポート・ユーティリティ・ドキュメント(impexp.pdf)を参照してください。



# 10

## ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティの使用方法

### この章の内容

ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティについて .....	139
ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティのインストール.....	144
ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティの実行 .....	145
個々の製品の更新 .....	147

## ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティについて

ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティは、次のシナリオで使用されません。

- 139 ページの「ネイティブ・ディレクトリの古いデータの消去」
- 140 ページの「一意の ID 属性を使用するための Shared Services のアップグレード」
- 142 ページの「ユーザー・ディレクトリ全体のユーザーとグループの移行」

### ネイティブ・ディレクトリの古いデータの消去

Shared Services の外部ユーザー・ディレクトリ構成では、ユーザーとグループの場所を反映した ID 属性(たとえば、DN)を使用できます。このような場合、組織単位間でユーザーとグループを移動すると、EPM System のセキュリティではこうした変更点に対応して同期されるわけではないため、ネイティブ・ディレクトリ内のデータが陳腐化することがあります。

MSAD を含む LDAP ベースのユーザー・ディレクトリで次のアクションを実行する場合、このユーザー・ディレクトリでネイティブ・ディレクトリが維持しているリンクが壊れると、ネイティブ・ディレクトリのデータが古くなり、EPM System アプリケーションへのアクセスが失われる原因となります。

- 組織ユニット間でのユーザーとグループの移動
- 複数のユーザーまたはグループの同じ共通名(CN)への割当て
- プロビジョニングされたユーザーまたはグループの CN の変更

ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティを実行してネイティブ・ディレクトリのデータと構成済の LDAP ベースのユーザー・ディレクトリのデータとの

同期を取ります。このユーティリティを実行すると、陳腐化したプロビジョニング・データを使用できるようになります。

- ▶ ネイティブ・ディレクトリから古いデータを消去するには、次の手順に従います:
  - 1 ネイティブ・ディレクトリと Shared Services リポジトリのバックアップを作成します。[124 ページの「OpenLDAP データベースのバックアップ」](#)を参照してください。
  - 2 ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティをインストールします。[144 ページの「ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティのインストール」](#)を参照してください。
  - 3 ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティを実行して、ネイティブ・ディレクトリとユーザー・ディレクトリ間でユーザーとグループの同期を取ります。[145 ページの「ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティの実行」](#)を参照してください。ユーティリティが実行するアクションの詳細は、[144 ページの「実行される操作」](#)を参照してください。

## 一意の ID 属性を使用するための Shared Services のアップグレード

Shared Services の外部ユーザー・ディレクトリ構成では、構成済ユーザー・ディレクトリのユーザーとグループを見つけるために、ID 属性を使用します。Shared Services のアップグレード中、ユーザーとグループの場所を反映しない一意の ID 属性(推奨)を使用するか、場所を反映する ID(たとえば、DN)を使用するかを選択できます。

ユーザーとグループが組織ユニット間で移動されるか、プロビジョニングされたユーザーとグループの CN が変更された場合、ネイティブ・ディレクトリに古いデータが作成されることになるため、一意の ID 属性を使用することをお勧めします。

一意の ID 属性への移行は、EPM System 製品すべての影響するため、アプリケーションのダウンタイムが最小限になるよう移行プランを立てます。

### 重要な考慮事項

- OID や MSAD など、LDAP ベースのユーザー・ディレクトリの場合、一意の ID 属性のみ設定できます。
- 移行が機能するには、Shared Services で構成されているすべての類似したユーザー・ディレクトリを新しい一意の ID 属性に移行する必要があります。Shared Services で MSAD ユーザーとグループを新しい属性に移行するには、事前にすべての MSAD ユーザー・ディレクトリ構成を新しい一意の ID 属性に更新する必要があります。同様に、MSAD 以外の LDAP ベースのユーザー・ディレクトリ(SunONE、IBM Directory Server、Novell eDirectory およびカスタムのユーザー・ディレクトリ)の構成を新しい ID 属性に更新してからでないと、Shared Services ではこのようなユーザー・ディレクトリからユーザーとグループを新しい属性に移行できません。

たとえば、Shared Services に 3 種類の MSAD ユーザー・ディレクトリが構成されているとします。そのうち 2 つは一意の ID 属性 ObjectGUID を使用するよう構成され、3 つ目は属性として DN を使用するよう構成されています。このシナリオでは、3 つ目の構成でも DN 以外の一意の属性を使用するまで、ユーザーおよびグループを移行できません。

- リバース移行はサポートされていません。新しい一意の属性に移行した後、以前の ID 属性(DN)に戻すことはできません。

新しい一意の ID 属性に移行する前に、ネイティブ・ディレクトリ・データベースをバックアップすることをお勧めします。ID 属性を DN に戻す場合は、バックアップからデータを復元できます。

---

**注意** 「ユーザー構成」画面の「ログイン」フィールドを使用して、loginAttribute として識別されている属性を変更した場合、ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティを使用して一意の ID 属性を変更しないでください。ユーティリティを実行すると、loginAttribute が変更されているユーザー・ディレクトリで定義されたアカウントを持つユーザーのプロビジョニング・データはネイティブ・ディレクトリから削除されます。削除されたデータは元に戻せません。ただし、最新のバックアップからの復元は可能です。

---

---

**注意** Shared Services のユーザーとグループを一意の ID 属性に移行した後、EPM System 製品では製品固有のリポジトリに含まれたユーザーとグループの情報が更新され、一意の ID 属性に反映されるまで、動作しなくなります。

---

Shared Services と EPM System 製品の一意の ID 属性への移行には、処理の対象となるユーザーとグループの数に応じて、相当な時間がかかる可能性があります。EPM System 製品はこの間使用できなくなるため、ダウンタイムを最小限に留めるようスケジュールすることをお勧めします。

## アップグレードの手順

- ▶ 一意の ID 属性を使用するよう Shared Services をアップグレードするには、次の手順に従います:
  - 1 ネイティブ・ディレクトリに古いデータが存在する場合はそれらを除去します。139 ページの「ネイティブ・ディレクトリの古いデータの消去」を参照してください。
  - 2 ネイティブ・ディレクトリと Shared Services リポジトリをバックアップします。124 ページの「OpenLDAP データベースのバックアップ」を参照してください。
  - 3 ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティをインストールします。144 ページの「ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティのインストール」を参照してください。
  - 4 一意の ID 属性を使用するようにユーザー・ディレクトリの構成を更新します。65 ページの「OID、MSAD およびその他の LDAP ベースのユーザー・ディレクトリの構成」を参照してください。

- 5 Shared Services を再起動するか、ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティを実行します。145 ページの「ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティの実行」を参照してください。ユーティリティが実行するアクションのリストは、144 ページの「実行される操作」を参照してください。
- 6 製品固有の移行の手順を実行します。次のトピックを参照してください。
  - 147 ページの「Essbase」
  - 148 ページの「Planning」
  - 149 ページの「Financial Management」
  - 149 ページの「Reporting and Analysis」
  - 150 ページの「Strategic Finance」

## ユーザー・ディレクトリ全体のユーザーとグループの移行

組織ではコーポレート・ユーザー・ディレクトリを廃止して、別のユーザー・ディレクトリに切り替える場合があります。これが原因で EPM System 製品で維持されるプロビジョニングされたユーザーのユーザーおよびグループ ID が不正確になることがあります。たとえば、組織で NTLM ユーザー・ディレクトリを OID や MSAD に切り替えたとします。EPM System 製品によって保管されたプロビジョニング情報が新しいコーポレート・ユーザー・ディレクトリのユーザーとグループの ID を反映するように更新されていない場合、EPM System 製品はアクセス不可になります。

この説明の中で、ユーザーとグループの移行元のユーザー・ディレクトリは、ソース・ユーザー・ディレクトリとして、ユーザーとグループの移行先のユーザー・ディレクトリは、ターゲット・ユーザー・ディレクトリとして参照されています。

### 前提条件

- ユーザーまたはグループが、ソース・ユーザー・ディレクトリの組織単位間を移動する場合や、プロビジョニングされたユーザーまたはグループの共通名が変更される場合は、ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティを実行して、ネイティブ・ディレクトリのプロビジョニング・データをソース・ユーザー・ディレクトリのユーザーおよびグループと同期します。139 ページの「ネイティブ・ディレクトリの古いデータの消去」を参照してください。
- ターゲット・ユーザー・ディレクトリには、ソース・ディレクトリで維持されるものと同じユーザーおよびグループ・アカウントが含まれます。ソースとターゲットのユーザーおよびグループ ID は一致している必要があります。
- ソースおよびターゲットのユーザー・ディレクトリは Shared Service で構成されます。
- **オプション:**一意の identityAttribute を使用しない場合、ターゲット・ユーザー・ディレクトリにソース・ユーザー・ディレクトリから移行されたものと同じユーザーおよびグループのアカウントが含まれる場合は、ターゲット・ユーザー・ディレクトリが検索順の一番上になるように、Shared Services のユーザー

ザー・ディレクトリ検索順が変更されます。85 ページの「ユーザー・ディレクトリの検索順の管理」を参照してください。

## 移行中に行われる処理

移行プロセスが開始されたら、Shared Services は次の操作を実行します。

- ネイティブ・ディレクトリから loginAttribute の値を使用して、構成済ユーザー・ディレクトリのユーザーおよびグループを参照します。ソース・ユーザー・ディレクトリで見つかった一致は無視されます。
- 構成済ユーザー・ディレクトリのいずれかに一致が見つかり、Shared Services は、検索を停止し、ネイティブ・ディレクトリのプロビジョニング情報が一致するユーザーまたはグループに割り当てられるように、ネイティブ・ディレクトリを更新します。
- 一致するエンティティがソース・ユーザー・ディレクトリで見つかった場合、プロセスはネイティブ・ディレクトリのプロビジョニング情報を変更しません。
- 一致するレコードがソース・ユーザー・ディレクトリで見つからなかった場合、プロセスはネイティブ・ディレクトリからプロビジョニング情報を除去します。

## ユーザー・ディレクトリ間でユーザーおよびグループの移動を処理するためにネイティブ・ディレクトリを更新する

移行プロセスを開始する前に、ソースおよびターゲットのユーザー・ディレクトリおよびネイティブ・ディレクトリのバックアップを作成します。EPM System 製品リポジトリをバックアップする必要もあります。

ユーザー・ディレクトリ間でユーザーを移行する前に、次の操作を実行してください。ユーザー・ディレクトリ間でユーザーおよびグループを移行する場合はこれらの操作を実行しないでください。

- ユーザーおよびグループ CN に移動または変更する組織間の単位を処理するには、ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティを実行します。139 ページの「ネイティブ・ディレクトリの古いデータの消去」を参照してください。
- ▶ ユーザー・ディレクトリ間のユーザーおよびグループの移動を処理するためにネイティブ・ディレクトリを更新するには、次の手順に従います：
- 1 ネイティブ・ディレクトリと Shared Services リポジトリをバックアップします。124 ページの「OpenLDAP データベースのバックアップ」を参照してください。
  - 2 ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティをインストールします。144 ページの「ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティのインストール」を参照してください。
  - 3 ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティを実行します。145 ページの「ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティの実行」を参照してください。ユーティリティが実行するアクションについては、144 ページの「実行される操作」を参照してください。

## 移行後の手順

ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティが正常に実行されたら、次のいずれかの操作を実行します。

- 検索順からソース・ユーザー・ディレクトリを除去します。87 ページの「[検索順の割当ての除去](#)」を参照してください。
- Shared Services からソース・ユーザー・ディレクトリ構成を削除します。85 ページの「[ユーザー・ディレクトリ構成の削除](#)」を参照してください。

## 実行される操作

ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティは次のアクションを実行します。

- ユーザー・アカウントが外部のユーザー・ディレクトリで使用可能でない場合は、ネイティブ・ディレクトリからユーザーを削除します。
- ユーザー・ディレクトリが Shared Services の検索順から除去された場合は、外部ユーザー・ディレクトリ由来のユーザー・アカウントを削除します。
- 外部ユーザー・ディレクトリのユーザーまたはグループの CN が変更された場合、ネイティブ・ディレクトリを更新します。
- 外部ユーザー・ディレクトリのユーザーまたはグループが 1 つの組織ユニットから他の組織ユニット(ここで、ユーザーまたはグループの移動先となる組織ユニットは、Shared Services で構成されている必要があります)に移動される場合は、ネイティブ・ディレクトリを更新します。
- プロビジョニングされているユーザーとグループが 1 つのユーザー・ディレクトリから別のユーザー・ディレクトリに移行された場合は、ネイティブ・ディレクトリを更新します。

**注：** ネイティブ・ディレクトリでユーザーとグループの情報を移行した後、EPM System のユーザーとグループの情報を移行する必要があります。詳細は、147 ページの「[個々の製品の更新](#)」を参照してください。

# ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティのインストール

ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティを含む UpdateNativeDir.zip アーカイブは、HYPERION\_HOME/common/utilities/SyncOpenLdapUtility にインストールされます。

- ▶ ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティをインストールするには、次の手順に従います:
  - 1 UpdateNativeDir.zip を便利な場所、できれば HYPERION\_HOME に抽出します。これで updateNativedir フォルダが作成されます。
  - 2 テキスト・エディタを使用して、updateNativedir バッチ・ファイルまたはスクリプトを開きます。



1. JAVA\_HOME が Sun Java バージョン 1.5 以降(たとえば、HYPERION\_HOME/common/JRE/Sun/1.5.0/bin)をポイントしていることを確認します。
2. updateNativedir を保存して閉じます。

## ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティの実行

ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティは、Shared Services の検索順に含まれているすべての外部ユーザー・ディレクトリに関連付けられているデータを同期します。

ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティを実行する前に、次のデータベースをバックアップしてください。

- ネイティブ・ディレクトリ・リポジトリ
- Shared Services リポジトリ
- Essbase(セキュリティ・ファイル)
- Planning リポジトリ
- Financial Management リポジトリ
- Reporting and Analysis リポジトリ

▶ ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティを実行するには、次の手順に従います:

- 1 コマンド・プロンプトまたはコンソール・ウィンドウを使用して、ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティがインストールされているディレクトリに移動します。
- 2 次のコマンドを実行します。

```
updateNativedir -cssLocation config HTTP URI [-options]
```

config HTTP URI が Shared Services 構成情報が使用可能な場所を識別します。たとえば、http://MyServer:port/framework/getCSSConfigFile の MyServer は、アプリケーション・サーバーの名前を示します。Shared Services が SSL を使用するように配置される場合、セキュアな HTTP URI であることを確認してください。

ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティ・オプションについては、[146 ページ](#)の「ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティのオプション」で説明します。

このユーティリティは、検索順で指定されたユーザー・ディレクトリをリストし、操作を続行するかどうかを尋ねます。

- 3
- 4 ユーティリティの実行を続行するには 1 を入力し、操作を取り消すには 0 を入力します。
- 5 進行状況を確認するには、ログ・ファイルをモニターします。

- 6 このユーティリティによって行われた更新が Shared Services に表示できるように、Shared Services を再起動して、キャッシュをリフレッシュします。

## ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティのオプション

表 20 ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティのオプション

オプション	説明
- nodelete	<p><b>オプション:</b> このオプションを使用して CSSMigration-Deleted_time_stamp.log ファイルを生成します。このファイルは削除の対象となるネイティブ・ディレクトリのユーザーとグループをリストします。ユーザーとグループはネイティブ・ディレクトリから削除されません。</p> <p>このオプションが設定されていない場合、ユーティリティは CSSMigration-Deleted_time_stamp.log を生成し、外部ユーザー・ディレクトリで使用できない ID を持つネイティブ・ディレクトリのユーザーとグループを自動的に削除します。</p>
- noprompt	<p><b>オプション:</b> サイレント・モードで操作を実行するためにこのオプションを使用します。ユーザーとの対話が不要なことから、スケジュールされたジョブに使用されます。</p> <p><b>例:</b> updateNativeDir -cssLocation config HTTP URI -noprompt はネイティブ・ディレクトリをサイレント・モードで更新します。</p>
- nouupdate	<p><b>オプション:</b> ネイティブ・ディレクトリで更新する必要があるユーザーとグループをリストする CSSMigration-Update_time_stamp.log を生成するには、このオプションを使用してください。このオプションを使用すると、ネイティブ・ディレクトリのユーザーおよびグループ情報は更新されません。</p> <p><b>例:</b> updateNativeDir -cssLocation config HTTP URI -nouupdate</p> <p>このオプションが設定されていない場合、ユーティリティは CSSMigration-Update_time_stamp.log を生成し、ネイティブ・ディレクトリのユーザーおよびグループ情報を自動的に更新します。</p>

## ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティのログ・ファイル

デフォルトで、ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティのログ・ファイルは、updateNativedir/logs に作成されます。ユーティリティが updateNativedir/logs を作成できない場合、ログ・ファイルは \$TMP%¥Hyperion-logs または %TEMP%¥Hyperion-logs に作成されます。

- CSSMigration-Ambiguous\_time\_stamp.log には、ユーティリティで複数の類似 ID が検出されたために更新されなかった ID がリストされます。このファイルにリストされた ID は手動で更新する必要があります。
- CSSMigration-Deleted\_time\_stamp.log は、ネイティブ・ディレクトリから削除する必要がある、削除された外部ユーザー・ディレクトリ・エントリをリストします。これらのエントリは、ユーティリティの実行時に nodelete オ

プッシュが設定されない場合、ネイティブ・ディレクトリから自動的に除去されます。

- CSSMigration-Updated\_time\_stamp.log は、更新が必要なネイティブ・ディレクトリ ID をリストします。ユーティリティの実行時に-noupdate オプションが設定されない場合、ユーティリティはネイティブ・ディレクトリの中でこれらのエントリを更新します。
- CSSMigration-ignored\_time\_stamp.log は、更新の必要がないため、アクションが実行されなかったエントリをリストします。

## 個々の製品の更新

EPM System 製品は、次のシナリオで、内部のリポジトリを更新するステップを実行する必要があります。

- ネイティブ・ディレクトリの古いデータは、ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティを使用して消去されます。[139 ページの「ネイティブ・ディレクトリの古いデータの消去」](#)を参照してください。
- Shared Services は、一意の ID 属性を使用するために再構成されます。[140 ページの「一意の ID 属性を使用するための Shared Services のアップグレード」](#)を参照してください。
- ネイティブ・ディレクトリは、ユーザー・ディレクトリ全体でユーザーとグループの移動を処理するために更新されます。[142 ページの「ユーザー・ディレクトリ全体のユーザーとグループの移行」](#)を参照してください。

次の EPM System 製品では、内部のリポジトリを更新する必要があります。

- [147 ページの「Essbase」](#)
- [148 ページの「Planning」](#)
- [149 ページの「Financial Management」](#)
- [149 ページの「Reporting and Analysis」](#)
- [150 ページの「Strategic Finance」](#)

次の EPM System 製品では、移行手順を実行する必要はありません。

- Performance Scorecard
- Oracle Essbase 統合サービス
- Provider Services

## Essbase

**注意** 移行プロセスの前に、ネイティブ・ディレクトリの Essbase セキュリティ・ファイルおよびデータをバックアップすることをお勧めします。新規の ID 属性を使用するためにユーザーとグループを移行した後は、以前使用していた ID の属性に戻せません。元に戻すには、バックアップから、ネイティ

ブ・ディレクトリおよび Essbase のユーザーとグループのデータを復元します。

アップグレード後に Essbase を開始する前に、HYPERION\_HOME¥AnalyticServices¥bin¥essbase.cfg で IDMIGRATION の設定を編集して、Shared Services で使用される新規の ID 属性に移行するかどうかを示します。

起動時に、Essbase では essbase.cfg がチェックされ、IDMIGRATION の設定によって示されるアクションが実行されます。

表 21 IDMIGRATION 構文

構文	説明
CHECKANDMIGRATE	デフォルトのオプション。Shared Services で変更した ID 属性がないかチェックし、Essbase セキュリティで属性を更新します。
NOMIGRATION	Essbase セキュリティでは変更は行いません。
FORCEDMIGRATION	ID 属性が変更したかどうかをチェックしないで Essbase ユーザーとグループを更新します。

## Planning

**注意** 移行する前に、ネイティブ・ディレクトリおよび Planning リポジトリのユーザーとグループのデータをバックアップすることをお勧めします。新規の ID 属性を使用するためにユーザーとグループを移行した後は、以前使用していた ID の属性に戻せません。元に戻すには、バックアップから、ネイティブ・ディレクトリおよび Planning リポジトリのユーザーとグループのデータを復元します。

**注：** システムをアップグレードした後は、セキュリティのロード、または既存のセキュリティの設定の変更など、別の操作を実行する前に、新規の ID の属性にユーザーとグループを移行します。このような変更は、移行中に失われている場合があります。

Planning は、Planning リポジトリでプロビジョニングされたユーザーとグループに関する情報を保管します。Shared Services が新規 ID の属性を使用するためにアップグレードされた場合、「ユーザー/グループの移行」をクリックして、Planning リポジトリの情報と、構成済のユーザー・ディレクトリの情報を同期化する必要があります。このボタンは、データ・フォーム、メンバーまたはタスク・リストへのアクセスを割り当てる場合に、Planning で使用可能です。

**注：** HspUserUpdateユーティリティは、ユーザーの更新には今後使用されません。

## Financial Management

---

**注意** 移行する前に、ネイティブ・ディレクトリおよび Financial Management のユーザーとグループのデータをバックアップすることをお勧めします。新規の ID 属性を使用するためにユーザーとグループを移行した後は、以前使用していた ID の属性に戻せません。元に戻すには、バックアップから、ネイティブ・ディレクトリおよび Financial Management リポジトリのユーザーとグループのデータを復元します。

---

Financial Management では、Financial Management リポジトリでプロビジョニングされたユーザーとグループに関する情報が記録されます。Shared Services が新規の ID 属性を使用するためにアップグレードされた場合、Financial Management リポジトリの情報と、構成済ユーザー・ディレクトリの情報を同期化する必要があります。

**注：** Financial Management をアップグレードした後は、セキュリティのロード、または既存のセキュリティの設定の変更など、別の操作を実行する前に、新規の ID の属性にユーザーとグループを移行します。このような変更は、移行中に失われている場合があります。

Financial Management 構成ユーティリティの「セキュリティ」タブ上にある「**ユーザーの移行**」ボタンをクリックし、Financial Management リポジトリの情報と、構成済ユーザー・ディレクトリの情報を同期化します。

Financial Management のユーザーの移行は、リリース 11.1.1.3 にアップグレードした後、Financial Management を開始する前に完了しておく必要のある、1 度かぎりの操作です。

## Reporting and Analysis

---

**注意** 移行プロセスの前に、ネイティブ・ディレクトリおよび Reporting and Analysis のユーザーとグループのデータをバックアップすることをお勧めします。新規の ID 属性を使用するためにユーザーとグループを移行した後は、以前使用していた ID の属性に戻せません。元に戻すには、バックアップから、ネイティブ・ディレクトリおよび Reporting and Analysis リポジトリのユーザーとグループのデータを復元します。

---

Reporting and Analysis では、SyncCSSIdentity\_BI ユーティリティを使用して、リレーショナル・データベースに保管されているユーザーとグループ ID を同期化して、Shared Services に設定されている ID 属性を反映します。140 ページの「一意の ID 属性を使用するための Shared Services のアップグレード」および 145 ページの「ネイティブ・ディレクトリの更新ユーティリティの実行」を参照してください。

**注：** Reporting and Analysis をアップグレードした後は、セキュリティのロード、または既存のセキュリティの設定の変更など、別の操作を実行する前に、新規の ID の属性にユーザーとグループを移行します。このような変更は、移行中に失われている場合があります。

Shared Services が新規の ID 属性を使用するためにアップグレードされた場合のみ、SyncCSSIdentity\_BI ユーティリティを実行します。Shared Services で新規の ID 属性を使用しない場合、またはユーザー・ディレクトリでの組織間の単位移動により陳腐化したデータがない場合は、このユーティリティを実行しないでください。このユーティリティは、Shared Services および Reporting and Analysis をアップグレードした後、1 度のみ実行される必要があります。

SyncCSSIdentity\_BI ユーティリティは、BIPLUS\_HOME/syncCSSId にインストールされます。Reporting and Analysis をアップグレードした後で、Reporting and Analysis サービスを開始する前に、このユーティリティを実行します。

SyncCSSIdentity\_BI ユーティリティを実行するための情報は、BIPLUS\_HOME/syncCSSId/ReadmeSyncCSSId\_BI.txt を参照してください。ユーティリティからの実行時間情報は、BIPLUS\_HOME/syncCSSId/BI\_Sync.log に書き込まれます。

ユーティリティの正常な実行では、Reporting and Analysis データベースの V8\_PROP\_VALUE テーブルにおける ConfigurationManager.CSSIdSyncState の値は、0 (NO\_SYNC について) に設定されます。このプロパティのその他の使用できる値は、1 (CHECK\_AND\_SYNC、デフォルト値) および 2 (FORCE\_SYNC) です。

データベースの同期の状態が 0 (NO\_SYNC) でなく、システムで ID の同期化が必要であると判別された場合、認証サービスでは警告メッセージが HYPERION\_HOME/logs/BIPlus/CSSSynchronizer.log に書き込まれます。ただし、Reporting and Analysis サービスは通常どおり実行されます。

## Strategic Finance

Oracle Hyperion Strategic Finance Fusion Edition では、Shared Services により使用される一意の ID 属性にユーザーを自動的に移行して、ドメイン名や組織単位の変更によりプロビジョニングおよびオブジェクトのアクセス情報が失われる問題を解決します。

## この章の内容

SSLの実装	151
デフォルトの管理パスワードの変更	151
ネイティブ・ディレクトリ・パスワードの変更	152
アプリケーション・サーバー管理者パスワードの変更	152
SSO 暗号化キーの再生成	154
セキュリティ構成への HTTP アクセスの使用不可	155
データベース・パスワードの変更	155
Cookie の保護	156
OID のネイティブ・ディレクトリとしての使用	157
SSO トークンのタイムアウトの低減	157
セキュリティ・レポートの確認	157
認証システムの強力な認証としてのカスタマイズ	158
UDL ファイルの暗号化(Financial Management)	158
デバッグ・ユーティリティを使用不可にする	158
デフォルトの Apache 情報の非表示	160
デフォルトの Web サーバー・エラー・ページの変更	161
サードパーティ製ソフトウェアのサポート	161

## SSL の実装

SSL では、データを暗号化する暗号システムを使用します。SSL は、データを安全に送信できるクライアントとサーバー間の安全な接続を作成します。

EPM System 環境を保護するには、ユーザー・ディレクトリの通信のために、Web アプリケーションおよび LDAPS に対して SSL を構成します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System SSL 構成ガイド』を参照してください。

## デフォルトの管理パスワードの変更

デフォルトのネイティブ・ディレクトリ管理ユーザー・アカウントでは、すべての Shared Services 機能へのアクセスが提供されます。Shared Services を構成後すぐに、およびその後定期的にこのアカウントのパスワードを変更する必要があります。

admin ユーザー・アカウントを編集して、パスワードを変更します。113 ページの「ユーザー・アカウントの変更」を参照してください。

## ネイティブ・ディレクトリ・パスワードの変更

ネイティブ・ディレクトリ管理者のパスワードは、Shared Services の構成後すぐに、およびその後定期的に変更する必要があります。

### OpenLDAP

OpenLDAP の root パスワードを変更します。123 ページの「OpenLDAP root ユーザー・パスワードの変更」を参照してください。

### OID

- ▶ OID パスワードを変更するには、次の手順に従います:
  - 1 ユーザーのパスワードを変更します。対象ユーザーは、OID との接続をネイティブ・ディレクトリとして確立するために使用されたアカウントのユーザーです。『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。
  - 2 新パスワードを使用して、ネイティブ・ディレクトリの構成を更新します。53 ページの「ネイティブ・ディレクトリ構成の変更」を参照してください。
  - 3 EPM System のすべての製品を再起動します。

## アプリケーション・サーバー管理者パスワードの変更

EPM System 製品の配置プロセスは、デフォルトの hyperion アカウント(パスワードは hyperion)を使用して、Web アプリケーションを WebLogic Server および Oracle Application Server アプリケーション・サーバーに配置します。WebSphere 配置プロセスは、パスワードを使用しません。Web アプリケーションを Embedded Java コンテナ(Tomcat)に配置する場合は、デフォルトのアカウントは使用しません。WebLogic Server ドメインと EPM System 製品が配置された OC4J コンテナを管理する場合は、デフォルトのアカウントを使用します。

デフォルトのアカウントのパスワードは配置を完了した直後に変更する必要があります。また、パスワードは以後定期的に変更してください。

---

**注意** WebSphere で hyperion ユーザーのパスワードを設定すると、EPM System コンフィグレータを使用して、WebSphere インストールでのアクション(配置、配置解除または再配置)を実行できません。EPM System コンフィグレータでこれらのアクションを実行するには、パスワードを除去する必要があります。パスワードを除去しない場合は、これらのアクションを手動で実行できます。

---



▶ パスワードを変更するには、次の手順に従います:

#### 1 アプリケーション・サーバーを開始します。

- **WebLogic:** `startWebLogic.cmd` (Windows の場合)または `startWebLogic.sh` (UNIX の場合)を実行します。通常、このファイルは `HYPERION_HOME/deployments/WebLogic9/bin` にあります。
- **WebSphere:** `startServer.bat` (Windows の場合)または `startServer.sh` (UNIX の場合)を実行します。通常、このファイルは `HYPERION_HOME/deployments/WebSphere6/bin` にあります。

#### 2 アプリケーション・サーバーの管理コンソールを開きます。管理コンソールを開始する URL は次のとおりです:

- **WebLogic:** `http://SERVER_NAME:7001/console` (`http://myServer:7001/console` など)
- **WebSphere:** `http://SERVER_NAME:19060/ibm/console` (`http://myServer:19060/ibm/console` など)

#### 3 アプリケーション・サーバーのコンソールを使用して、アプリケーション・サーバーに対する `hyperion` ユーザーのパスワードを変更します。EPM System 製品のドメイン (WebLogic Server)および OC4J インスタンス(Oracle Application Server)のそれぞれでパスワードを変更する必要があります。詳細は、アプリケーション・サーバーのドキュメントを参照してください。

**注:** **WebLogic のみ::** `hyperion` ユーザーのパスワードを変更後、WebLogic 管理コンソールを再起動できない場合は、`HYPERION_HOMEdeployments/Weblogic9/boot.properties` を削除し、**ユーザー名とパスワードのプロンプトが表示されないようにする手順**を実行します。この手順を完了後、WebLogic 管理サーバーから `boot.properties` を `HYPERION_HOMEdeployments/Weblogic9/servers/SERVER_NAME/security/boot.properties` のすべての管理対象サーバーにコピーします。

#### 4 WebLogic Server および Oracle Application Server のみ: アプリケーション・サーバーのパスワードを暗号化します。

1. コマンド・プロンプトを開いて、`HYPERION_HOME/common/config/9.5.0.0` ディレクトリに移動します。
2. アプリケーション・サーバーに対する `hyperion` ユーザーの新パスワードのみをパラメータに使用して、`encryptString.bat` を実行します。

たとえば、`myPasswor12` が新パスワードの場合、コマンド `encryptString.bat myPasswor12` を使用して、パスワードを暗号化します。暗号化されたパスワードは、コマンド・プロンプトのウィンドウに表示されます。

---

**注意** パスワードは、アプリケーション・サーバーに指定したとおりに正確に入力します。そうでない場合は、パスワードの不一致が発生します。

---

3. 暗号化されたパスワードをコマンド・プロンプトのウィンドウからコピーします。

4. テキスト・エディタを使用して、プロパティ・ファイル(.properties または oracle.properties)を開きます。このファイルは、HYPERION\_HOME/common/config/9.5.0.0/resources/APP\_SERVER/resources フォルダから使用可能です。APP\_SERVER は、アプリケーション・サーバー名または oracle を表します。
5. 既存のパスワードを、手順 c でコピーした暗号化されたパスワードに置き換えます。
  - **Oracle Application Server:** oc4j.admin.password プロパティの値を置き換えます。
  - **WebLogic Server:** domain.default.user.password の値を置き換えます。
6. ファイルを保存して閉じます。

## SSO 暗号化キーの再生成

SharedServicesHandler ユーティリティを使用して、SSO 暗号化キーを EPM System 製品向けに再生成します。SharedServicesHandler ユーティリティは、EPM System の SSO トークンの暗号化と復号化に使用できる新しいキーストア・ファイルを生成します。

---

**注意** 11.1.1 製品と 9.x 製品で構成される混在環境では、SharedServicesHandler ユーティリティを使用しないでください。EPM System バージョン 11.1.1 製品を使用する場合にのみ SharedServicesHandler ユーティリティの実行を行ってください。

---

---

**注意** Financial Management、Performance Management Architect、および Profitability and Cost Management で使用されるタスクフローは、新しいキーストアの生成時には無効です。キーストアを再生成した後に、タスクフローを開いて保存すると、タスクフローは有効になります。

---

▶ SharedServicesHandler ユーティリティを実行するには、次の手順に従います:

- 1 HYPERION\_HOME/common/utilities/SharedServicesHandler/SharedServicesHandler.zip (Windows の場合)または HYPERION\_HOME/common/utilities/SharedServicesHandler/SharedServicesHandler.tar (UNIX の場合)のコンテンツを Shared Services ホスト・マシンのディレクトリ(HYPERION\_HOME/common/utilities/SharedServicesHandler など)に抽出します。
- 2 コマンド・プロンプト・ウィンドウを開き、SharedServicesHandler ユーティリティを抽出したディレクトリ内の bin ディレクトリ(HYPERION\_HOME/common/utilities/SharedServicesHandler/bin など)に移動します。
- 3 SharedServicesHandler.bat (Windows の場合)または SharedServicesHandler.sh (UNIX の場合)を実行します。

SharedServicesHandler ユーティリティは、キーストア・ファイル ssHandlerTK を HYPERION\_HOME/common/css に作成します。

- 4 HYPERION\_HOME/common/css/ssHandlerTK を、EPM System 製品と Shared Services のセキュリティを使用するユーティリティをホストするサーバー上の HYPERION\_HOME/common/CSS ディレクトリにコピーします。
- 5 EPM System の製品と Shared Services のセキュリティの API を使用するカスタム・アプリケーションのすべてを再起動します。

## セキュリティ構成への HTTP アクセスの使用不可

環境で EPM System のバージョン 11.1.1.3 製品のみを使用している場合は、セキュリティ構成への HTTP アクセスを使用不可にします。87 ページの「[セキュリティ・オプションの設定](#)」を参照してください。

## データベース・パスワードの変更

EPM System 製品のすべてのデータベースのパスワードを定期的に変更します。Oracle Hyperion Shared Services レジストリでデータベースのパスワードを変更する手順の詳細は、この項で説明します。

EPM System 製品のデータベースのパスワードを変更する手順の詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照してください。

- ▶ EPM System 製品のデータベースのパスワードを Shared Services レジストリで変更するには、次の手順に従います:
  - 1 データベース管理コンソールを使用して、EPM System 製品のデータベースの構成に使用したアカウントを持つユーザーのパスワードを変更します。
  - 2 EPM System 製品(Web アプリケーション、サービスおよびプロセス)を停止します。
  - 3 EPM System コンフィグレータを使用して、次の手順のいずれかを実行してデータベースを再構成します。

Shared Services のみ:

**注:** EPM System 製品が Shared Services と異なるマシンに存在する分散環境では、すべてのサーバーでこの手順を実行する必要があります。

1. EPM System コンフィグレータの Foundation タスクからデータベースの構成を選択します。
2. 「Shared Services およびレジストリ・データベース構成」ページで、前に構成された Shared Services データベースに接続を選択します。
3. Shared Services データベースを構成するのに使用したアカウントを持つユーザーの新パスワードを指定します。他の設定は変更しないでください。
4. 構成を続行し、完了したら終了をクリックします。

Shared Services 以外の EPM System 製品:

**注：** 現在のサーバーのみに配置されている EPM System 製品に対し、次の手順を行います。

1. EPM System コンフィグレータの製品の構成タスク・リストから、データベースの構成を選択します。
2. 「データベースの構成」 ページで、データベースの初回構成を実行を選択します。
3. EPM System 製品のデータベースを構成するのに使用したアカウントを持つユーザーの新パスワードを指定します。他の設定は変更しないでください。
4. 次へをクリックします。  
次のいずれかのオプションを選択するように要求するプロンプトがダイアログ・ボックスに表示されます。
  - テーブルを削除して再作成します
  - 既存のデータベースを再使用します
5. 既存のデータベースを再使用しますを選択します。
6. 構成を続行し、完了したら終了をクリックします。

詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照してください。

#### 4 EPM System 製品およびサービスを開始します。

## Cookie の保護

EPM System の Web アプリケーションは、cookie を設定してセッションを追跡します。特にセッションの cookie を設定しているとき、サーバーは保護フラグを設定できます。これにより、ブラウザは保護チャネルを介して cookie を送信できません。こうすることで、セッションが乗っ取られる危険性が低くなります。

**注：** EPM System 製品が SSL 使用可能の環境に配置される場合のみ cookie を保護する必要があります。

## WebLogic Server

WebLogic Server セッションの記述子を変更して、Oracle WebLogic Server の cookie を保護します。session-param 要素内の cookieSecure 属性の値を TRUE に設定します。詳細は、[http://e-docs.bea.com/wls/docs92/webapp/weblogic\\_xml.html](http://e-docs.bea.com/wls/docs92/webapp/weblogic_xml.html) を参照してください。

## Oracle Application Server

set-secure 値を TRUE に設定して、Oracle Application Server の cookie を保護します。詳細は、[http://download.oracle.com/docs/cd/B25221\\_04/web.1013/b14426/xmlfiles.htm#sthref596](http://download.oracle.com/docs/cd/B25221_04/web.1013/b14426/xmlfiles.htm#sthref596) を参照してください。

## Embedded Java コンテナ

▶ Embedded Java コンテナ(Tomcat)の cookie を保護するには、次の手順に従います:

1 テキスト・エディタを使用して、`server.xml` を開きます。EPM System にバンドルされた Embedded Java コンテナを使用している場合、`server.xml` の場所は、`HYPERION_HOME/common/appServers/Tomcat/5.5.17/conf/` です。

2 HTTP コネクタ定義で、保護属性の値を `TRUE` に設定します。たとえば、次のようにします。

```
secure="true"
```

3 `server.xml` を保存して閉じます。

4 Embedded Java コンテナを再起動します。

## WebSphere

セッション・マネージャのプロパティの `Secure` フィールドを使用可能にして、セッションの cookie を保護します。[WebSphere のドキュメント](#)を参照してください。

## OID のネイティブ・ディレクトリとしての使用

OpenLDAP のかわりに OID をネイティブ・ディレクトリとして使用すると、パスワードのポリシーを強制できます。[51 ページの「ネイティブ・ディレクトリとしての Oracle Internet Directory の設定」](#) および [109 ページの「パスワード・ポリシーの設定」](#) を参照してください。

## SSO トークンのタイムアウトの低減

SSO トークンのタイムアウトは、デフォルトで 480 分に設定されています。SSO トークンのタイムアウトを、たとえば 60 分に縮小すると、表示されている場合はトークンの再利用を最小限にできます。[87 ページの「セキュリティ・オプションの設定」](#) を参照してください。

## セキュリティ・レポートの確認

セキュリティ・レポートには、監査を構成しているセキュリティ・タスクに関する監査情報が含まれています。特に EPM System 製品で失敗したログイン試行とプロビジョニングの変更を識別するために、このレポートを `Shared Services Console` で定期的に生成し確認します。レポート生成オプションとして詳細ビューを選択し、変更された属性と新しい属性値に基づいてレポート・データをグループ化します。[135 ページの「監査レポートの生成」](#) を参照してください。

## 認証システムの強力な認証としてのカスタマイズ

カスタム認証モジュールを使用して、EPM System に強力な認証を追加できます。たとえば、RSA SecurID two-factor 認証を non-challenge 応答モードで使用できます。カスタム認証モジュールは、シン・クライアントおよびシック・クライアントに対して透過的であり、クライアント側の配置変更は必要ありません。55 ページの「カスタム認証モジュールの使用方法」を参照してください。

## UDL ファイルの暗号化(Financial Management)

Financial Management の構成中に、EPM System コンフィグレータはデフォルトで暗号化されていない UDL ファイルを作成します。このファイルは、EPM System コンフィグレータの「詳細データベース・オプション」ページのオプションを選択するか、構成プロセスの完了後に EncryptHFUMUDL ユーティリティを実行することによって、暗号化できます。

詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』の「UDL ファイルの暗号化」を参照してください。

## デバッグ・ユーティリティを使用不可にする

### EPM Workspace

管理者はセキュリティの目的で、主にテストおよびデバッグ目的で使用される次の EPM Workspace 機能を使用不可にできます:

- 構成情報の URL - 次の URL は、グローバル・サービス・マネージャや Shared Services などの EPM Workspace のインストールに関する構成情報を示します。
  - `http://hostname:19000/workspace/browse/configInfo` (非 SSL)
  - `https://hostname:19002/workspace/browse/configInfo` (SSL)「構成情報」ページを使用不可にするには、`HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER/Workspace/webapps/workspace/jsp/shared/configInfo.jsp` を除去するか名前を変更します。
- EPM Workspace テスト・モジュール - `cds.test` には、EPM Workspace をデバッグ・モードで実行中にアクセスできるテスト・ケースおよびデバッグ・ユーティリティが含まれています。このモジュールを使用不可にするには、`HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER/Workspace/webapps/workspace/modules/com/hyperion/tools/cds/repository/bpm/test` の名前を変更するか削除します。
- コードのトラブルシューティング - トラブルシューティングの目的で、EPM Workspace は未処理の JavaScript ファイルとともに出荷されます。本番環境から未処理の JavaScript ファイルを除去するには、次の手順に従います:

- HYPERION\_HOME/deployments/APP\_SERVER/Workspace/webapps/workspace/js/com/hyperion ディレクトリのバックアップ用コピーを作成します。
- ファイル DIRECTORY\_NAME.js を除き、HYPERION\_HOME/deployments/APP\_SERVER/Workspace/webapps/workspace/js/com/hyperion の各サブディレクトリから .js ファイルを削除します。

各サブディレクトリには、ディレクトリの名前を持つ .js ファイルが含まれています。たとえば、HYPERION\_HOME/deployments/APP\_SERVER/Workspace/webapps/workspace/js/com/hyperion/bpm/web/common には Common.js が含まれています。ディレクトリの名前を持つファイル(この場合は Common.js)以外のすべての .js ファイルを除去します。

- クライアント側のデバッグ・モード - EPM Workspace がデバッグ・モードでないことを確認します。EPM Workspace がデバッグ・モードの場合、CMC を使用してデバッグをオフにします。

デバッグ・モードをオフにするには、次の手順に従います:

1. CMC を開始します。CMC を開始するには、startUI.bat (Windows の場合) または startUI.sh (UNIX の場合) を実行します。通常、このファイルは HYPERION\_HOME/common/workspacert/5.5.0.0/bin にあります。
2. EPM Workspace に管理者としてログインします。
3. ナビゲート、管理、構成コンソールの順に選択し、CMC を開きます。
4. 現在のビューで、「Webアプリケーション構成」を選択します。
5. Web アプリケーションのリストで Workspace Web アプリケーションを右クリックし、プロパティを選択します。
6. 全般タブで ClientDebugEnabled の値を No に変更します。
7. OK をクリックします。

## Performance Scorecard

Performance Scorecard は、ドキュメントに記載されていない多数のデバッグ・ページとともにインストールされます。Performance Scorecard は、これらのデバッグ・ページを使用不可にしてそれらへのアクセスを制限します。ただし、高いレベルのセキュリティを確保するには、デバッグ・ページの除去を検討してください。

- ▶ Performance Scorecard デバッグ・ページを除去するには、次の手順に従います:

- 1 **Performance Scorecard サーバー・ホストで** HYPERION\_HOME/deployments/APP\_SERVER/HPSWebReports/webapps/HPSWebReports/jsp/debug **に移動します。** APP\_SERVER は、アプリケーション・サーバーの名前です(例: Tomcat5)。

たとえば、Tomcat アプリケーション・サーバー上に配置された Performance Scorecard インスタンスの場合は、HYPERION\_HOME/deployments/Tomcat5/HPSWebReports/webapps/HPSWebReports/jsp/debug に移動します。

## 2 ディレクトリのコンテンツを削除します。

# デフォルトの Apache 情報の非表示

httpd.conf (通常、HYPERION\_HOME/common/httpServers/Apache/2.0.59/conf/httpd.conf にある)を更新して、Apache Web サーバーのセキュリティの基本的な強化を行えます。

- Apache のバナーおよびバージョン情報を表示しないようにするには、次の手順に従います:
  - ServerTokens を Prod に設定します(ServerTokens Prod など)。デフォルト値は Full です。
  - ServerSignature を Off に設定します(ServerSignature Off など)。デフォルト値は On です。
- Apache ドキュメントの次のディレクティブをコメント化して、Apache ドキュメントへのアクセス権を除去します:

```
AliasMatch ^/manual(?:/(?:de|en|es|fr|ja|ko|ru))?(/*.*)?$ "C:/Hyperion/common/httpServers/Apache/2.0.59/manual$1"
<Directory "C:/Hyperion/common/httpServers/Apache/2.0.59/manual">
    Options Indexes
    AllowOverride None
    Order allow,deny
    Allow from all
    <Files *.html>
        SetHandler type-map
    </Files>
    SetEnvIf Request_URI ^/manual/(de|en|es|fr|ja|ko|ru)/ prefer-language=$1
    RedirectMatch 301 ^/manual(?:/(de|en|es|fr|ja|ko|ru)){2,}(/.*)?$ /manual/$1$2
</Directory>
```

- 次のディレクティブをコメント化して、インデックス・モジュールを使用不可にします:
  - LoadModule autoindex\_module modules/mod\_autoindex.so
  - IndexOptions FancyIndexing VersionSort
  - ReadmeName README.html
  - HeaderName HEADER.html
  - DefaultIcon /icons/unknown.gif
  - IndexIgnore .??\* ~\*# HEADER\* README\* RCS CVS \*,v \*,t
- AddIcon\*ディレクティブをすべてコメント化します。これらのディレクティブはすでにコメント化されている IndexOptions FancyIndexing VersionSort によって使用されます。AddIcon\*ディレクティブの例には、AddIconByType (TXT,/icons/text.gif) text/\*と AddIcon /icons/tar.gif .tar があります。



## デフォルトの Web サーバー・エラー・ページの変更

アプリケーション・サーバーが要求を受け入れられないとき、バックエンド・アプリケーション・サーバーの Web サーバー・プラグイン(WebLogic の apache プラグインなど)はプラグインの構築情報が表示されたデフォルトのエラー・ページを戻します。これ以外にも、Web サーバーによってデフォルトのエラー・ページが表示される場合があります。攻撃者は、この情報から公共の Web サイトの既知の脆弱性を知ることができます。

Web アプリケーション・サーバー・プラグインおよび Web サーバーのエラー・ページをカスタマイズして、サーバーのバージョン、サーバー・タイプ、プラグインの作成日、プラグイン・タイプなどの本番環境用システム・コンポーネントに関する情報が含まれないようにできます。詳細は、ご使用のアプリケーション・サーバーおよび Web サーバーのベンダーのドキュメントを参照してください。

## サードパーティ製ソフトウェアのサポート

サードパーティのベンダーが行う下位互換性のアサーションを承認してサポートします。したがって、ベンダーが下位互換性をアサートする場合は、後に続くメンテナンスのリリースやサービス・パックを使用できます。非互換性が識別されると、Oracle では、製品が配置されるリリースにパッチを指定し、サポートされるマトリックスから非互換性バージョンを除去します。あるいは、その Oracle 製品にメンテナンス・リリースかサービス・フィックスを提供します。

**サーバー側の更新:** サードパーティ製サーバー側コンポーネントのアップグレードに関するサポートは将来のメンテナンス・リリースに関する方針に従います。通常、Oracle では、サードパーティ製サーバー側コンポーネントについて、現在サポートしているリリースのサービス・パックの次回メンテナンス・リリースへのアップグレードをサポートします。次回の主要リリースへのアップグレードはサポートされません。たとえば、Apache サーバーはバージョン 2.0.61 からバージョン 2.0.63 にアップグレードできますが、バージョン 2.0.61 からバージョン 2.2 へのアップグレードはサポートされません。

**クライアント側の更新:** Oracle ではクライアント・コンポーネントの自動更新をサポートしています。これには、サードパーティ製クライアント・コンポーネントの次回主要リリースへの更新が含まれます。たとえば、ブラウザの JRE バージョンを 1.5 から 1.6 に更新できます。





# 製品の役割

## この付録の内容

Shared Services 役割.....	163
Essbase の役割.....	165
Essbase Studio 役割.....	166
Reporting and Analysis 役割.....	167
Performance Management Architect 役割.....	169
Financial Management の役割.....	169
Planning 役割.....	171
Business Rules 役割.....	172
Business Modeling 役割.....	173
Profitability and Cost Management 役割.....	173
トランザクション・マネージャ役割.....	174
Performance Scorecard 役割.....	174
Essbase Provider Services 役割.....	175
Data Integration Management 役割.....	175
FDM の役割.....	175
ERP Integrator.....	176

## Shared Services 役割

Shared Services 役割はすべてパワー役割です。通常、これらの役割は、Shared Services および他の EPM System 製品の管理を行うパワー・ユーザーに付与されます。

役割名	説明
管理者	<p>Shared Services と統合される製品全体へのコントロールを行います。他の EPM システム製品の役割よりも、セキュリティ面でのコントロールが強化されるため、慎重に割り当てる必要があります。管理者は、Shared Services Console ですべての管理タスクを実行でき、自分自身をプロビジョニングすることも可能です。</p> <p>この役割は、Shared Services に登録されたすべてのアプリケーションへの幅広いアクセス権を付与します。管理者役割はデフォルトで、admin ネイティブ・ディレクトリ・ユーザーに割り当てられます。このユーザーは Shared Services の配置後に唯一使用可能であるユーザーです。</p>
ディレクトリ・マネージャ	ネイティブ・ディレクトリのユーザーとグループを作成および管理します。

役割名	説明
	<p>ディレクトリ・マネージャに対しては、プロビジョニング・マネージャ役割を割り当てないでください。これらの役割を組み合わせると、ディレクトリ・マネージャが自分自身をプロビジョニングできるようになります。</p> <p>それを避けるために、1人のユーザーにディレクトリ・マネージャ役割を付与し、別のユーザーにプロビジョニング・マネージャ役割を付与することをお勧めします。</p>
LCM 管理者	<p>ライフサイクル管理ユーティリティを実行し、製品環境とオペレーティング・システム全体でアーチファクトまたはデータのレベルを上げます。</p> <p>プロビジョニング・マネージャ役割に加えて、LCM 管理者役割は Shared Services のディレクトリ・マネージャとプロジェクト・マネージャの役割にも相当します。</p>
プロジェクト・マネージャ	Shared Services でプロジェクトを作成および管理します。
統合の作成	ウィザードを使用して Shared Services データ統合(アプリケーション間でデータを移動するプロセス)を作成します。
統合の実行	<p>Shared Services データ統合を表示および実行します。</p> <p>Performance Management Architect の場合は、データ同期を実行します。</p>
次元編集者	<p>次元作成用のインポート・プロファイルを作成および管理します。また、Performance Management Architect のユーザー・インタフェース内またはクラシック・アプリケーション管理オプションで次元を手動で作成および管理します。</p> <p>Web ナビゲーションを使用して Financial Management および Planning のクラシック・アプリケーション管理にアクセスする際に必要です。</p>
<p>アプリケーション作成者</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Analytic Services アプリケーション作成者</li> <li>● Financial Management アプリケーション作成者</li> <li>● Planning アプリケーション作成者</li> <li>● Profitability アプリケーション作成者</li> </ul>	<p>Performance Management Architect のアプリケーションを作成および配置します。この役割のユーザーはアプリケーションを作成できますが、次元を変更できるのは、ユーザーがアクセス権を持つ場合のみにかぎられます。</p> <p>次元エディタ役割に加えて、Financial Management および Planning ユーザーが製品のクラシック・アプリケーション管理オプションをナビゲートできるようにするために必要です。</p> <p>アプリケーション作成者役割を持つユーザーが Performance Management Architect からアプリケーションを配置するとき、そのユーザーは自動的に、アプリケーションのアプリケーション管理者とプロビジョニング・マネージャになります。</p> <p>アプリケーション作成者はすべてのアプリケーションを作成できます。</p> <p>Analytic Services のアプリケーション作成者は汎用アプリケーションを作成できます。</p> <p>Financial Management アプリケーション作成者は連結アプリケーションおよび Performance Management Architect の汎用アプリケーションを作成できます。アプリケーションを作成するには、そのユーザーは Financial Management 構成ユーティリティで指定されたアプリケーション作成者グループのメンバーである必要があります。</p> <p>Planning アプリケーション作成者は Planning のアプリケーションと Performance Management Architect の汎用アプリケーションを作成できます。</p> <p>Profitability アプリケーション作成者は Profitability and Cost Management アプリケーションと Performance Management Architect の汎用アプリケーションを作成できます。</p>
<p>Calculation Manager 管理者</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Financial Management Calculation Manager 管理者</li> </ul>	<p>Calculation Manager 機能を管理します。</p> <p>Financial Management Calculation Manager 管理者は Financial Management での Calculation Manager 機能を管理します。</p> <p>Planning Calculation Manager 管理者は Planning での Calculation Manager 機能を管理します。</p>

役割名	説明
● Planning Calculation Manager 管理者	

## Essbase の役割

次の表では、Essbase に固有な役割について説明します。固有の Essbase アプリケーションまたはデータベースに対するユーザーとグループへのアクセス権の付与の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

**注：** Essbase アプリケーションを作成するには、Essbase 管理者役割に加え、Shared Services のプロジェクト・マネージャ役割が必要です。

役割	説明
<b>サーバー役割</b>	
管理者	サーバー、アプリケーション、およびデータベースへの完全な管理アクセス権を持ちます。 <b>注：</b> プロビジョニング・マネージャ役割は、Essbase の管理者を移行するときに自動的に割り当てられます。ただし、Essbase 管理者を Shared Services Console で作成するときは、プロビジョニング・マネージャ役割を手動で割り当てる必要があります。
アプリケーションの作成/削除	アプリケーション内でアプリケーションとデータベースを作成および削除します。このユーザーが作成したアプリケーションとデータベースに対するアプリケーション・マネージャとデータベース・マネージャの権限も含まれます。
サーバー・アクセス	なしを除く、デフォルトの最低限のアクセス権を持つアプリケーションまたはデータベースにアクセスします。 <b>注：</b> Essbase アプリケーション・レベルでセキュリティを割り当てるとき、アプリケーションが含まれる(ユーザーに Essbase Server レベルの役割、たとえば、アプリケーションの作成/削除がないかぎり)Essbase Server のサーバー・アクセス役割をユーザーに割り当てる必要があります。
<b>アプリケーション役割</b>	
アプリケーション・マネージャ	割り当てられたアプリケーション内でデータベースとアプリケーションの設定を作成、削除および変更します。アプリケーション内のデータベースのデータベース・マネージャの権限も含まれます。 <b>注：</b> プロビジョニング・マネージャ役割は、Essbase アプリケーション・マネージャを移行する際に自動的に割り当てられます。ただし、Essbase アプリケーション・マネージャを Shared Services Console で作成する場合は、プロビジョニング・マネージャ役割を手動で割り当てる必要があります。
データベース・マネージャ	割り当てられたアプリケーション内のデータベース、データベース・アーチファクト、ロック、セッションを管理します。
アプリケーションの開始/停止	アプリケーションまたはデータベースを開始および停止します。
計算	割り当てられた計算およびフィルタを使用して割り当てられたスコープを基に、データ値の計算、更新および読取りを行います。

役割	説明
書込み	割り当てられたフィルタを使用して、割り当てられたスコープを基に、データ値の更新と読取りを行います。
フィルタ	フィルタの制限に応じて特定のデータとメタデータにアクセスします。
読取り	データ値を読み取ります。

## Essbase Studio 役割

役割	説明
cpAdmin	管理者* <ul style="list-style-type: none"> <li>● Oracle Essbase Studio データ・ソース接続を作成、更新、および削除します。</li> <li>● Essbase Studio のメタデータ要素を作成、更新、および削除します。</li> <li>● Essbase Studio のサンプルの表示操作を実行します。</li> <li>● Essbase Studio からキューブを配置します。</li> <li>● ドリルスルー・レポートを実行します。</li> </ul>
cpDM	データ・モデラー* <ul style="list-style-type: none"> <li>● Essbase Studio のメタデータ要素を作成、更新、および削除します。</li> <li>● Essbase Studio からキューブを配置します。</li> <li>● Essbase Studio のサンプルの表示操作を実行します。</li> <li>● ドリルスルー・レポートを実行します。</li> <li>● データ・ソース接続を作成できません。</li> </ul>
cpDSAdmin	データ・ソース管理者 <ul style="list-style-type: none"> <li>● Essbase Studio データ・ソース接続を作成、更新、および削除します。</li> <li>● Essbase Studio のサンプルの表示操作を実行します。</li> <li>● ドリルスルー・レポートを実行します。</li> <li>● メタデータ要素を作成できません。</li> </ul>
cpViewer	ビューア <ul style="list-style-type: none"> <li>● 階層や次元要素などのアーチファクトを表示するために、Essbase Studio に接続します。</li> <li>● ドリルスルー・レポートを実行します。</li> <li>● Essbase Studio のアーチファクトを削除または変更できません。</li> </ul>

\*さらに、Essbase Studio でキューブを配置するには、cpAdmin および cpDM ユーザーが、少なくとも Shared Services プロジェクト・マネージャ役割にプロビジョニングされている必要があります。

# Reporting and Analysis 役割

役割	説明
<b>パワー役割</b>	
Reporting and Analysis 管理者	(ファイルが"アクセス権なし"でロックされていないかぎり)すべてのリソースへの条件付きのアクセス権を持つが、すべての機能にアクセスできるわけではありません。管理者とインパクト・マネージャのモジュールにアクセスします。  Financial Reporting、Oracle Hyperion(R) Interactive Reporting、Oracle Hyperion(R) SQR(R) Production Reporting、および Web Analysis に適用されます
Reporting and Analysis グローバル管理者	すべてのリソースと機能に対して、全体的かつ暗黙的なアクセス権を持ちます。管理者とインパクト・マネージャのモジュールにアクセスします。 <b>注：</b> Reporting and Analysis グローバル管理者がアクセスを拒否されることはありません。  Financial Reporting、Interactive Reporting、Production Reporting および Web Analysis に適用されます
コンテンツ・マネージャ	すべてのリソースへの暗黙的なアクセス権とともに(ファイルが"アクセス権なし"でロックされていないかぎり)、インポートされたリポジトリ・コンテンツの管理とタスクの実行を行います。データ・ソース・パブリッシャ役割を含みます。  Financial Reporting、Interactive Reporting、Production Reporting および Web Analysis に適用されます
データ・ソース・パブリッシャ	データ・ソース接続ファイルをインポートします  Interactive Reporting および Web Analysis に適用されます
お気に入りディストリビュータ	お気に入りマネージャを使用して、ユーザーのお気に入りフォルダにコンテンツをプッシュします  Financial Reporting、Interactive Reporting、Production Reporting および Web Analysis に適用されます
ジョブ・マネージャ*	パブリック・ジョブ・パラメータ、出力ディレクトリ、出力プリンタの場所を作成および管理します  Interactive Reporting および Production Reporting に適用されます
スケジュール・マネージャ	イベント、カレンダー、タイム・イベント、パブリック・パラメータ、物理リソースを作成および管理します。バッチを作成します。またスケジュールとジョブ・マネージャ役割を含みます。  Financial Reporting、Interactive Reporting、および Production Reporting に適用されます
<b>対話型役割</b>	
Analyst	完全な分析およびレポート機能を使用して、対話型コンテンツにアクセスします  Financial Reporting、Interactive Reporting、および Web Analysis に適用されます
コンテンツ・パブリッシャ	バッチ、ブック、レポートおよびドキュメントをインポート、保存および変更します。ショートカットとフォルダを作成および変更します。EPM Workspace を介して、Financial Reporting でデータソースとデータベース接続を削除します。  Financial Reporting、Interactive Reporting、Production Reporting および Web Analysis に適用されます。
データ・エディタ	Web Analysis データを Essbase にプッシュします
ジョブ・パブリッシャ*	ドキュメント、ジョブ、ジョブの出力をインポートおよび変更します。ジョブを実行します。Smart Form パブリッシャ役割が含まれます。

役割	説明
	Interactive Reporting および Production Reporting に適用されます
個人用ページの パブリッシャ*	個人用ページをリポジトリにパブリッシュします。ここでは他のリポジトリ・ユーザーが個人用ページを表示できます。個人用ページのエディタ役割が含まれます。  Interactive Reporting および Production Reporting に適用されます
レポート・デザ イナ	ドキュメントを作成および配布するためオーサリング Studio にアクセスします  Financial Reporting および Web Analysis に適用されます
スケジューラ	スケジュール・モジュールを使用してジョブとバッチをスケジュールします。リポジトリに移動し、アクセス制御を割り当てます。エクスプローラとジョブの実行者の役割が含まれます。  Financial Reporting、Interactive Reporting、および Production Reporting に適用されます
Smart Form パブ リッシャ*	プログラムのカスタム・フォームをロードします(フォームはジョブの実行者にジョブの定義に使用される情報の入力を求めます)  Production Reporting に適用されます  <b>注：</b> Smart Form パブリッシャの機能を利用するには、ジョブ・パブリッシャ役割を持っている必要があります。
<b>ビュー役割</b>	
ダイナミック・ ビューア*	Interactive Reporting ドキュメントを表示、再プロセス、および印刷します。
エクスプローラ	エクスプローラ・モジュールと「開く」ダイアログ・ボックスを使用するコンテキストのリポジトリ・コンテンツをリストします。検索、表示、コンテンツへの登録など  <b>注：</b> リポジトリへのアクセス権は、プロパティと権限によって保護された個別のファイルとフォルダへのアクセスを付与しません。  Financial Reporting、Interactive Reporting、Production Reporting および Web Analysis に適用されます
Interactive Reporting ビュー ア*	静的な Interactive Reporting ドキュメントを確認および印刷します。
ジョブの実行者*	ジョブを実行し、パブリック・ジョブ・パラメータと物理リソースを表示します  Interactive Reporting および Production Reporting に適用されます
個人用ページの エディタ*	個人用ページの作成、変更、カスタマイズを行います。他のユーザーがパブリッシュした個人用ページからコンテンツをコピーします  Interactive Reporting および Production Reporting に適用されます
個人パラメータ のエディタ	クエリーの結果設定をカスタマイズするために、データベース接続で視点と個人用パラメータを定義します  Interactive Reporting、Production Reporting および Web Analysis に適用されます
ビューア	EPM Workspace コンテンツを確認します。コンテンツは静的で、お気に入りフォルダのみからアクセスできます  <b>注：</b> この役割は最低限のエンド・ユーザー機能を提供します。他の役割を割り当てられない場合にのみ使用してください  Financial Reporting、Interactive Reporting、Production Reporting および Web Analysis に適用されます
<b>システム役割</b>	



役割	説明
信頼されたアプリケーション	Interactive Reporting データベース接続ファイル(.oce 拡張子)で、ログイン情報が必要となるクライアント・サーバー間通信を使用可能にします。この通信では、接続、データベース・タイプ、ネットワーク・アドレスおよびデータベースのユーザー名情報がカプセル化されます。

\*この Reporting and Analysis 役割は、EPM Workspace から Financial Reporting または Web Analysis にアクセスする Financial Management ユーザーと Planning ユーザーには適用されず、割り当てることができません。

## Performance Management Architect 役割

役割	説明
次元編集者*	<ul style="list-style-type: none"> <li>共有ライブラリに含まれる共有次元の次元所有者</li> <li>共有ライブラリの任意のローカル次元へのアクセス権を次元所有者、次元ライターまたは次元リーダーに明示的に割当て可能</li> </ul>
アプリケーション作成者†	<ul style="list-style-type: none"> <li>未配置のアプリケーションのすべての次元の次元所有者</li> <li>共有ライブラリの任意の次元へのアクセス権を次元所有者、次元ライターまたは次元リーダーに明示的に割当て可能</li> </ul>
アプリケーション管理者‡	<ul style="list-style-type: none"> <li>配置済アプリケーションのすべての次元の次元所有者</li> <li>共有ライブラリの任意の次元へのアクセス権を次元所有者、次元ライターまたは次元リーダーに明示的に割当て可能</li> </ul>
Calculation Manager 管理者 <sup>d</sup>	適切なアプリケーション・タイプのすべての次元の次元リーダー

\*次元編集者のみが共有ライブラリで次元を作成できます。

†アプリケーション作成者またはアプリケーション管理者のみが、アプリケーションに次元を作成または追加できます。

‡アプリケーション作成者またはアプリケーション管理者のみが、アプリケーションに次元を作成または追加できます。

<sup>d</sup>Calculation Manager のグローバル役割については、表 22 の「Calculation Manager 管理者」を参照してください。

## Financial Management の役割

Performance Management Architect および Calculation Manager では、その他の Shared Services 役割が必要です。163 ページの「Shared Services 役割」を参照してください。

役割	説明
<b>パワー役割</b>	
アプリケーション管理者	すべての Financial Management タスクを実行します。この役割のアクセス権はユーザーが持つ他のアクセス設定を上書きします。
システムのロード	メタデータ(ルール、メンバー・リストなど)をロードします。
内部取引の管理	期間の開始と終了、エンティティのロックと解除、理由コードの管理などを行います。この役割のユーザーはすべての内部タスクも実行します。

役割	説明
<b>対話型役割</b>	
仕訳の承認	仕訳の承認または拒否します
仕訳の作成	仕訳の作成、変更、削除、送信、未送信などを行います
貸借不一致の仕訳の作成	貸借不一致の仕訳を作成します
デフォルト	アプリケーションの開始と終了、ドキュメントとお気に入りの管理、Smart View の管理、実行中のタスクおよびデータ・タスクへのアクセス、タスクのロードと抽出を実行します。メタデータまたはルールの抽出はできません。
仕訳マネージャ	仕訳に関連したすべてのタスクを実行します
仕訳の転記	仕訳の転記と転記の戻しを実行します
テンプレートの管理	仕訳の設定モジュールで仕訳テンプレート・タスクへのアクセスを付与します
繰返しの生成	仕訳の設定モジュールで繰返しの生成タスクへのアクセスを付与します
スーパーバイザの確認	プロセス管理ユニットの開始とプロセス管理データの承認およびパブリッシュを行います。プロセス・レベルに応じてプロセス・ユニットのレベルを上げたり、または拒否したりできます。
レビュー担当者 1 から 10	データがユーザーの指定プロセス・レベルにあるとき、データのブロックを表示および編集します
送信者	最終的な承認のためにデータのブロックを送信します
データのロック	データ・エクスプローラでデータをロックします
データのロック解除	データ・エクスプローラでデータのロックを解除します
すべて集計	すべて集計を実行します
集計	集計を実行します
データを含むすべてを集計	すべてのデータで集計を実行します
配賦の実行	配賦を実行します
データ入力フォームの管理	Web でデータ入力フォームを管理します
サーバーでのシステム・レポートの保存	サーバーでシステム・レポートを保存します
Excel データのロード	Smart View からデータをロードします
内部取引ユーザー	トランザクションの作成、編集、削除、ロード、抽出を実行します。勘定科目または ID 別に照合レポートを実行したり、トランザクション・レポートの実行や複数モジュールでドリルします
内部取引照合テンプレート	内部取引の照合テンプレートを管理します
勘定科目による内部取引の自動照合	勘定科目ごとに内部取引を自動照合します

役割	説明
ID による内部取引の自動照合	ID ごとに内部取引を自動照合します
許容差による内部取引の手動照合	許容差の確認をしながら、内部取引を手動で照合します
内部取引の手動照合	内部取引を手動で照合します
内部取引の照合解除	内部取引の照合を解除します
内部取引の転記/転記の戻し	内部取引の転記および転記の戻しを実行します
Web グリッドでの書戻しの使用可能	Web グリッドに直接データを入力し、保存します
データベース管理	データをコピーおよび消去して、無効なレコードを削除します
所有権の管理	所有者情報を入力および編集します
タスクの自動化	自動化タスクを設定します
カスタム・ドキュメントの管理	サーバーとの間でカスタム・ドキュメントをロードおよび抽出します
拡張分析	拡張分析クエリーを作成および実行します
Excel から書き戻すデータ・フォーム	Web データ入力フォームを使用して Smart View からデータを送信します
<b>ビュー役割</b>	
上級ユーザー	ブラウザ・ビューを使用して実行中のタスクにアクセスできます
仕訳の読取り	仕訳を読み取ります
プロセス・コントロールの電子メール・アラートを受信	電子メールを受信します
内部取引の電子メール・アラートを受信	電子メールを受信します
予約済	現在は使用されていません

## Planning 役割

Performance Management Architect および Calculation Manager では、その他の Shared Services 役割が必要です。163 ページの「[Shared Services 役割](#)」を参照してください。

役割	説明
<b>パワー役割</b>	
管理者	アプリケーション所有者、一括割当ての役割に予約されているタスクを除き、すべてのアプリケーション・タスクを実行します。アプリケーションの作成および管理、アクセス権の管理、

役割	説明
	予算プロセスの開始、通知用電子メール・サーバーの指定を実行します。データのコピー機能を使用できます。
アプリケーションの所有者	アプリケーションの所有権を割り当てます。
一括割当て	データを階層形式で多次元に分散する一括割当て機能にアクセスします。この機能ではデータ・フォームでは表示されないセルやユーザーがアクセス権を持たないセルへの分散も可能です。任意のユーザー・タイプにこの役割を割り当てることが可能ですが、割当ては慎重に行ってください。
オフライン・ユーザー	データ・フォームに対して「オフラインの使用可能」プロパティが設定されている場合、Planning データ・フォームをオフラインにできます。
Essbase 書込みアクセス権	プランナおよび対話型ユーザーの場合: ユーザーが持つ Planning のアクセス権と同等のユーザー・アクセス権を、Essbase の Planning データに付与します。ユーザーは Financial Reporting やサードパーティ製のツールなど別製品を使用して、Planning のデータを Essbase で直接変更できる書込みアクセス権が使用可能になります。詳細は、Essbase におけるデータへの書込みアクセス権を参照してください。
<b>対話型役割</b>	
対話型ユーザー	データ・フォーム、Smart View ワークシート、ビジネス・ルール、タスク・リスト、Financial Reporting レポート、およびアダプタ・プロセスの作成と維持を行います。Smart View でのスマート・スライスの作成、セル詳細の消去機能の使用、すべてのプランナ・タスクの実行が可能です。対話型ユーザーは通常、部署の責任者や事業単位のマネージャに割り当てます。
<b>プランナ役割</b>	
プランナ	承認用プランを入力および送信し、ビジネス・ルールとアダプタ・プロセスを実行します。他のユーザーが作成したレポートの使用、タスク・リストの表示と使用、自分自身への電子メール通知の使用可能化、Smart View を使用したデータの作成が可能です。
<b>ビュー役割</b>	
表示ユーザー	Planning データ・フォームとライセンスを所有するデータ・アクセス・ツール(たとえば、Financial Reporting、Web Analysis および Smart View)を使用して、データを表示および分析します。典型的な表示ユーザーは予算プロセスの期間中および最後にビジネス・プランを参照する必要がある経営者です。

Planning ユーザーで、Financial Reporting または Web Analysis にアクセスするユーザーに適用されない、または割り当てべきでない役割の詳細は、[167 ページの「Reporting and Analysis 役割」](#)を参照してください。

## Business Rules 役割

役割	説明
<b>パワー役割</b>	
管理者	ビジネス・ルール、シーケンス、マクロ、変数、プロジェクトの作成、起動、編集、検証および管理を行います。ビジネス・ルール、シーケンス、マクロ、変数およびプロジェクトに対してアクセス権を割り当てます。

役割	説明
<b>対話型役割</b>	
対話型ユーザー	ビジネス・ルール、シーケンス、マクロ、変数およびプロジェクトを作成します。ビジネス・ルール、シーケンス、マクロ、変数およびプロジェクトに対してアクセス権を割り当てます。
基本ユーザー	ユーザーがアクセス権を持っているビジネス・ルールおよびシーケンスを起動します。ユーザーがアクセス権を持っている変数、マクロ、ビジネス・ルールおよびシーケンスを表示します。ユーザーが編集権限を持っているビジネス・ルール、シーケンス、マクロ、変数およびプロジェクトを編集します。

## Business Modeling 役割

役割	説明
<b>パワー役割</b>	
管理者	デスクトップおよび Web の両方でアプリケーションのユーザー、セキュリティ、データベースを管理します。データベースとコンテナを設定および維持し、アプリケーション(認証、ユーザーおよびグループ、プロビジョニング)をインストールおよび構成します。Web ホーム・ページでグローバル・ツールを設定します。
<b>対話型役割</b>	
ビルダー	ボックス、リンク、変数、財務値、および添付の財務データなどモデルのすべての要素を定義することで、オリジナル・モデルとエンタープライズ・モデルを作成します
<b>ビュー役割</b>	
エンド・ユーザー	モデルの期間を更新します。ビジネスと運用の知識を使用して、オリジナル・モデルのパラメータを調整し、Web 上でシナリオを実演して、プロセスの改善、時間と経費の節約、または予期しないボトルネックへの対応や利益の追求を行えます。

## Profitability and Cost Management 役割

役割	説明
<b>パワー役割</b>	
管理者 (admin)	<p>管理者役割は次のタスクを実行するために、Profitability and Cost Management での管理機能を提供します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● ユーザー・アカウントとセキュリティ役割の作成および維持のほか、Shared Services を使用したユーザーのプロビジョニング</li> <li>● Essbase データベースの生成</li> <li>● アプリケーション・プリファレンスの設定と維持</li> <li>● 共通次元とメンバーの選択を目的とした、Performance Management Architect を使用したモデル・データベースの構築</li> <li>● ステージ、ドライバ、POV、ドライバの関連付け、割当て、アプリケーション・プリファレンスなどのモデルにおける要素の作成および維持</li> </ul>

役割	説明
	<ul style="list-style-type: none"> <li>● モデル・データとメタデータのリレーショナル・データベースから Profitability and Cost Management へのインポートを目的とした、ソース・データベースでのステージング・テーブルの作成</li> <li>● POV コピー、計算、検証、データ入力および割当てのトレースの実行</li> <li>● Essbase への配置と計算スクリプトの生成</li> <li>● データのインポートおよびエクスポート</li> <li>● ライフサイクル管理ユーティリティを使用した、開発またはテスト環境から本番環境などの別の環境へのデータのレベル上げ</li> <li>● Profitability and Cost Management のモデル・コンポーネントのバックアップおよび復元</li> <li>● ビジネス・オブジェクトに加えられた変更の監視</li> </ul>
パワー・ユーザー	<p>パワー・ユーザー役割は主なモデル関数を管理し、次のタスクを実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● ステージ、ドライバ、POV、ドライバの関連付け、割当て、アプリケーション・プリファレンスなどのモデルにおける要素の作成と維持</li> <li>● POV コピー、計算、検証、データ入力、トレース割当ての実行</li> <li>● Essbase への配置と計算スクリプトの生成</li> <li>● データのインポートおよびエクスポート</li> </ul>

### 対話型役割

対話型ユーザー	<p>次のタスクを実行できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● すべてのモデリング画面の表示</li> <li>● データ入力画面でのデータの表示および変更</li> </ul>
表示ユーザー	<p>次の関数に対して表示のみのアクセス権を持ちます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● データ入力</li> <li>● トレース割当て</li> <li>● アプリケーション・プリファレンス</li> <li>● モデル・ステージ、ドライバ、および POV</li> </ul>

## トランザクション・マネージャ役割

役割	説明
<b>パワー役割</b>	
管理者	すべてのシステム・リソースを管理します
<b>対話型役割</b>	
基本ユーザー	システム・リソースを表示します

## Performance Scorecard 役割

役割	説明
<b>パワー役割</b>	

役割	説明
上級マネージャ	上級マネージャ役割は、Performance Scorecard 環境での管理機能を提供します
<b>対話型役割</b>	
基本ユーザー	実績収集管理のその他の役割で、レポート、スコアカード、メジャーおよびイニシアチブへのアクセスを付与します
対話型ユーザー	主に設計者の役割で、対話型ユーザーはすべてのビジネス・オブジェクトに対し作成と変更のアクセス権を持ちます。この中にはマップ(責任、戦略、因果関係)のほか、スコアカード、イニシアチブ、メジャーなどが含まれます。

## Essbase Provider Services 役割

Analytic Provider Services は管理者パワー役割を提供します。これにより、ユーザーは Essbase サーバー・クラスタを作成、変更および削除できるようになります。

## Data Integration Management 役割

Oracle Hyperion(R) Data Integration Management では、Shared Services によって確立されるセキュリティ環境を使用しません。

Data Integration Management の現在のバージョンにアップグレードしようとしていて、Shared Services の認証プラグインを使用した場合、Shared Services の認証プラグインを登録解除したあとで、Informatica PowerCenter リポジトリ・マネージャを使用して、ユーザーを再作成する必要があります。このバージョンの Data Integration Management はネイティブの Informatica 認証にのみ対応しています。

Oracle Hyperion(R) Data Integration Management の保護の詳細は、Data Integration Management のドキュメントを参照してください。

## FDM の役割

FDM の役割	役割のタスク
管理者	アプリケーションを管理して、アクションを実行します。すべての場所へのアクセス権と、すべてのフォームおよびコントロールに対する権利を持ちます。
基本レビュー担当者	財務管理問題をレビューします。
基本レビュー担当者 と送信者	レビュー後に認証または評価を送信します。

FDM の 役割	役割のタスク
中間 2-9	<p>データをターゲット・システムにロードします。中間レベルの役割は、FDM 管理者によって定義されます。ユーザーにユーザー・レベルが割り当てられると、そのユーザーは、そのレベル以上を割り当てられたすべてのオブジェクトへのアクセス権を持ちます。</p> <p>たとえば、中間 7 の役割を割り当てられたユーザーは、中間 7 から中間 9 および「すべて」の役割を使用してアクセスできる各オブジェクトへのアクセス権を持ちます。パワー・レベルおよび中間 2 から中間 6 がアクセスできるオブジェクトには、中間 7 ユーザーはアクセスできません。</p>

## ERP Integrator

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management ERP Integration Adapter for Oracle Applications の 役割	役割のタスク
管理者	アプリケーションを管理し、アクションを実行します。
ドリルスルー	<p>ERP Integrator と FDM に適用されます。ソース・システムにドリルスルーできるかどうかを制御します。</p> <p>FDM では、この役割は許容されるタスクとして中間の役割に適用され、ソース・システムへのドリルバックを制御します。</p> <p>ERP Integrator では、この役割はユーザーが ERP Integrator のランディング・ページにドリルできるかどうかを制御し、ソース・システムへのドリルを制御します。</p>
統合の作成	ERP Integrator のメタデータとデータ・ルールを作成します。
統合の実行	<p>既存の ERP Integrator のメタデータとデータ・ルールを実行して、実行時パラメータを入力します。また、トランザクション・ログを表示できます。</p> <p>FDM Oracle Hyperion Financial Data Quality Management ERP Integration Adapter for Oracle Applications ユーザーは、Oracle General Ledger からデータを抽出する必要がある場合、データ・ルールを実行するには、この役割を付与される必要があります。</p>



# B

## Shared Servicesの役割と許可されたタスク

表 22 Shared Services のユーザー役割とタスクのマトリックス

タスク	管理者	ディレク トリ・マ ネージャ	プロジェ クト・マ ネージャ	プロビ ジョニン グ・マ ネージャ	統合の作 成	統合の実行
ユーザーの 作成	X	X				
ユーザー詳 細の変更	X	X				
ユーザーの 削除	X	X				
ユーザー・ アカウント の非アク ティブ化お よびアク ティブ化	X	X				
グループの 作成	X	X				
グループ詳 細の変更	X	X				
グループの 削除	X	X				
プロジェク トの作成	X		X			
プロジェク ト詳細の変 更	X		X			
プロジェク トの削除	X		X			
ユーザーの プロビジョ ニング	X			X		
ユーザーの プロビジョ ニング解除	X			X		

タスク	管理者	ディレク トリ・マ ネージャ	プロジェ クト・マ ネージャ	プロビ ジョニン グ・マ ネージャ	統合の作 成	統合の実行
グループの プロビジョ ニング				X		
グループの プロビジョ ニング解除	X			X		
プロビジョ ニング・レ ポートの生 成	X			X		
データ統合 へのアクセ ス権の割当 て	X				X	
データ統合 の作成	X				X	
データ統合 の編集					X	
データ統合 のコピー	X				X	
データ統合 の削除	X				X	
データ統合 グループの 作成	X				X	
データ統合 の表示	X				X	X
データ統合 の実行また は実行スケ ジュールの 設定	X					X
データ統合 グループの 実行または 実行スケ ジュールの 設定	X					X



# Essbaseのユーザー・プロビジョニング

## この付録の内容

Shared Services Console の Essbase からの起動.....	179
Essbase の役割.....	180
Essbase の役割階層 .....	180

## Shared Services Console の Essbase からの起動

**注：** Shared Services を使用して、Essbase のアプリケーション、データベースおよびアーチファクトにセキュリティを提供します。Shared Services のセキュリティを使用するには、Essbase Server と Essbase の既存のすべてのユーザーおよびグループを Shared Services に移行する必要があります。Essbase セキュリティの詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』と『Oracle Essbase Administration Services オンライン・ヘルプ』を参照してください。

Essbase ユーザーを Shared Services Console で管理するには、Shared Services Console に、次の Shared Services 役割がプロビジョニングされるユーザーとしてログインする必要があります。

- 適切な Essbase Server またはアプリケーションのプロビジョニング・マネージャの役割
- 適切な認証ディレクトリのディレクトリ・マネージャの役割

Shared Services Console を管理サービスから起動すると、アクセスしている Essbase Server との接続を確立した Essbase ユーザーとして Shared Services Console に自動的にログインします。

**注：** Shared Services のセキュリティ・モードでは、Essbase Server への接続に使用したのと同じユーザーを使用して Administration Services Console にログインする必要があります。

ブラウザから Shared Services Console を起動する場合は、適切なユーザーとしてログインします。たとえば、Essbase 管理者がユーザーを管理できるディレクトリ・マネージャ役割を持つ Essbase 管理者をプロビジョニングするには、Shared Services 管理者としてログインする必要があります。

- ▶ Shared Services Console を管理サービスから起動するには、次の手順に従います:
  - 1 エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューから、Essbase Server を選択します。
  - 2 サーバー・ノードの下で、セキュリティノードを選択します。
  - 3 右クリックして、ユーザー管理を選択します。

Shared Services Console の起動ページは、別のブラウザ・ウィンドウで開きます。

**注：** ブラウザのポップアップ・ブロックは、Shared Services Console の起動を防止します。

- 4 起動をクリックします。

Shared Services Console の MaxL からの起動については、『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』を参照してください。

**注：** Essbase を Shared Services のセキュリティと同期化するには、セキュリティ情報をリフレッシュします。セキュリティ情報のリフレッシュについては、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

## Essbase の役割

Essbase の役割については、165 ページの「Essbase の役割」を参照してください。

## Essbase の役割階層

Select Roles:	
	Analytic Servers:JWARD1:1
	Analytic Servers:JWARD1:1
<input type="checkbox"/>	Provisioning Manager
<input type="checkbox"/>	Administrator
<input type="checkbox"/>	Create/Delete Application
<input type="checkbox"/>	Server Access
	Demo
	Sample
<input type="checkbox"/>	Provisioning Manager
<input type="checkbox"/>	Application Manager
<input type="checkbox"/>	Database Manager
<input type="checkbox"/>	Calc
<input type="checkbox"/>	Write
<input type="checkbox"/>	Read
<input type="checkbox"/>	Filter
<input type="checkbox"/>	Start/Stop Application



# Essbase Studioのプロビジョニング

## この付録の内容

前提条件.....	181
Essbase Studio からの Shared Services Console の起動.....	181
Essbase Studio 役割.....	182
Essbase Studio 役割履歴.....	182
役割別 Essbase Studio アーチファクト権限.....	182

## 前提条件

キューブ・スキーマや次元要素など、Essbase Studio アーチファクトにセキュリティを提供するには、Shared Services を使用します。Essbase Studio ユーザーに割り当てる役割により、これらのアーチファクトへのアクセスが決定されます。Essbase Studio セキュリティの詳細は、『Oracle Essbase Studio ユーザー・ガイド』を参照してください。

Shared Services Console の Essbase Studio ユーザーを管理するには、次の Shared Services 役割にプロビジョニングされている Shared Services Console ユーザーとしてログインする必要があります:

- 該当する Essbase Studio インスタンスのプロビジョニング・マネージャ役割
- 該当する認証ディレクトリのディレクトリ・マネージャ役割

プロビジョニング・ユーザーのその他の前提条件:

- Shared Services が構成および実行されている必要があります。
- Essbase Studio のユーザーおよびグループ情報を保管する外部ユーザー・ディレクトリが Shared Services で構成されています。
- Essbase Studio インスタンスが EPM System コンフィグレータを使用して作成および登録されています。(注意: Essbase Studio が実行されている必要はありません。)

## Essbase Studio からの Shared Services Console の起動

Essbase Studio から Shared Services Console を直接起動する方法はありません。Shared Services Console を起動するには、次のいずれかの方法を使用します:

- スタートメニューから、Oracle EPM System、Foundation Services、Shared Services Console の順に選択します。

- ブラウザで、Shared Services Console の URL を入力します。デフォルトは、次のとおりです:

`http://server:port/interop/index.jsp`

## Essbase Studio 役割

166 ページの「Essbase Studio 役割」を参照してください。

## Essbase Studio 役割履歴

役割は、cpAdmin がほとんどの権限を持っており、各役割に付与されている権限数によって、降順に一覧表示されます。

- cpAdmin - 管理者
- cpDM - データ・モデラー
- cpDSAdmin - データ・ソース管理者
- cpViewer - ビューア

**注：** さらに、Essbase Studio でキューブを配置するには、cpAdmin および cpDM ユーザーが、少なくとも Shared Services プロジェクト・マネージャ役割にプロビジョニングされている必要があります。

## 役割別 Essbase Studio アーチファクト権限

Essbase Studio アーチファクト	cpAdmin	cpDM	cpDSAdmin	cpViewer
フォルダ	作成 読取り 更新 破棄	作成 読取り 更新 破棄	読取り	読取り
データ・ソース接続	作成 読取り 更新 破棄	読取り	作成 読取り 更新 破棄	読取り
ミニスキーマ	作成 読取り 更新 破棄	読取り	作成 読取り 更新 破棄	読取り
次元要素	作成 読取り	作成 読取り	読取り	読取り

Essbase Studio アーチファクト	cpAdmin	cpDM	cpDSAdmin	cpViewer
	更新 破棄	更新 破棄		
階層	作成 読取り 更新 破棄	作成 読取り 更新 破棄	読取り	読取り
別名セット	作成 読取り 更新 破棄	作成 読取り 更新 破棄	読取り	読取り
キューブ・ス キーマ	作成 読取り 更新 破棄	作成 読取り 更新 破棄	読取り	読取り
Essbase モデル	作成 読取り 更新 破棄	作成 読取り 更新 破棄	読取り	読取り
ドリルスルー・ レポート	作成 読取り 更新 破棄 実行	作成 読取り 更新 破棄 実行	読取り 実行	読取り 実行

**注：** また、Oracle Essbase Studio にキューブを配置するには、cpAdmin および cpDM ユーザーが、少なくとも Shared Services プロジェクト・マネージャ役割にプロビジョニングされている必要があります。







# Reporting and Analysisのユーザー・プロビジョニング

## この付録の内容

Shared Services Console の EPM Workspace からの起動.....	185
Reporting and Analysis のプロビジョニング.....	185
Reporting and Analysis 役割.....	187
Reporting and Analysis 役割階層.....	187
役割の組合せの例.....	189

## Shared Services Console の EPM Workspace からの起動

Shared Services Console を使用して Reporting and Analysis のユーザー、グループ、役割などを管理します。ユーザーまたはグループをプロビジョニングするには、Shared Services の管理者またはプロビジョニング・マネージャである必要があります。第9章「プロビジョニングの管理」を参照してください。

- ▶ EPM Workspace から Shared Services Console を起動するには、ナビゲート、管理、ユーザー管理の順に選択します。

Shared Services Console が別のウィンドウで開きます。

## Reporting and Analysis のプロビジョニング

ここでは、Reporting and Analysis のユーザーとグループのプロビジョニングを実行するために必要な手順について概説します。

- 185 ページの「前提条件」
- 186 ページの「プロビジョニング・プロセス」
- 187 ページの「Reporting and Analysis オブジェクトのアクセス制御の設定」

### 前提条件

- 186 ページの「Shared Services」
- 186 ページの「Essbase」
- 186 ページの「Reporting and Analysis」

## Shared Services

- Shared Services が実行されていること。Shared Services の前提条件は、185 ページの「前提条件」を参照してください。
- Reporting and Analysis アプリケーションのユーザーおよびグループ情報を保管する外部ユーザー・ディレクトリが Shared Services で構成されていること。
- Shared Services 管理者により次のパワー・ユーザーが作成されていること。
  - 管理者。Reporting and Analysis の管理者役割を割り当てます。
  - プロビジョニング・マネージャ。プロビジョニング・マネージャ役割を割り当てます。
  - 管理者。Planning の管理者役割を割り当てます。

## Essbase

Essbase Server がインストールおよび構成されていること。次のタスクを実行しておく必要があります。

- 有効な製品配置 ID を使用した Essbase Server のアクティブ化
- Shared Services での Essbase の登録
- Essbase Server の開始

## Reporting and Analysis

- Reporting and Analysis 製品がインストールおよび構成されていること。
  - Reporting and Analysis 製品のアクティブ化が完了していること
  - Reporting and Analysis 製品が Shared Services で構成されていること
  - Reporting and Analysis 製品サーバーが実行されていること
- EPM Workspace Web アプリケーションと Web サーバーが実行されていること。

## プロビジョニング・プロセス

プロビジョニング・マネージャ役割は Shared Services 管理者に自動的に割り当てられます。配置プロセスではデフォルト Reporting and Analysis ユーザーが作成されません。

**注：** Reporting and Analysis ではプロビジョニング情報のローカル・コピーが保持されません。Shared Services で管理される情報が使用されます。

▶ Reporting and Analysis ユーザーとグループをプロビジョニングするには、次の手順に従います:

- 1 Reporting and Analysis のプロビジョニング・マネージャ役割を持つユーザーとして EPM Workspace にログインします。

- 2 「ナビゲート」で、管理、ユーザー管理の順に選択します。Shared Services Console が開きます。
- 3 Reporting and Analysis 役割を使用してユーザーとグループをプロビジョニングします。

## Reporting and Analysis オブジェクトのアクセス制御の設定

Reporting and Analysis のオブジェクトにはフォルダとドキュメントが含まれます。

- ▶ アクセス制御を設定するには、次の手順に従います:
- 1 Reporting and Analysis のプロビジョニング・マネージャとエクスプローラの役割を持つユーザーで EPM Workspace にログインします。
  - 2 「ナビゲート」で、管理、ユーザー管理の順に選択します。
  - 3 プロジェクトまたはアプリケーション・グループの下で、System 9 BI+を展開し、BI+アプリケーションを選択します。

## Reporting and Analysis 役割

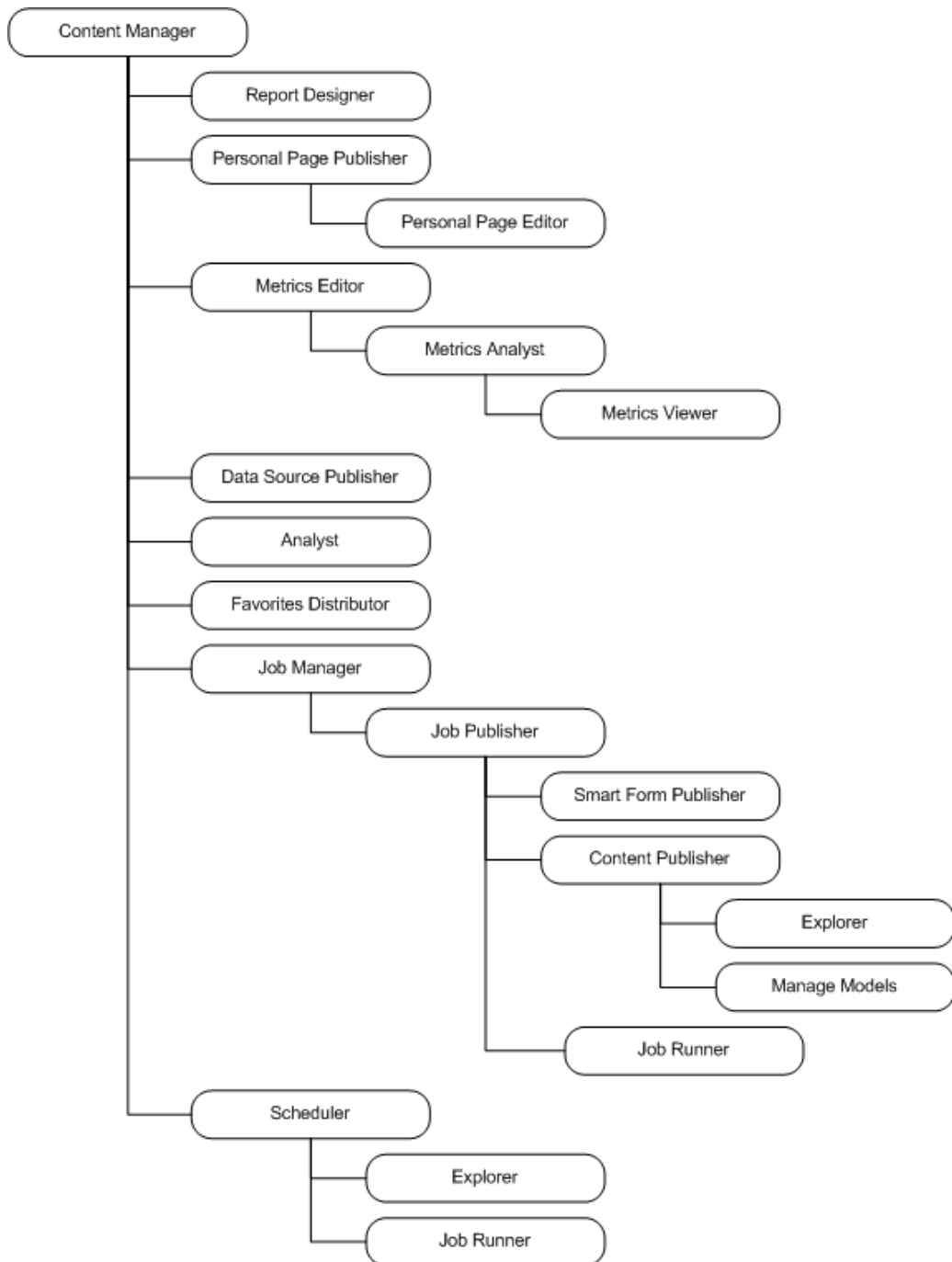
事前定義された役割(付録 A 「製品の役割」を参照)の組合せを割り当てることで、ユーザーとグループをプロビジョニングし、特定の製品にアクセスしたり、機能を使用したりできるようにします。

## Reporting and Analysis 役割階層

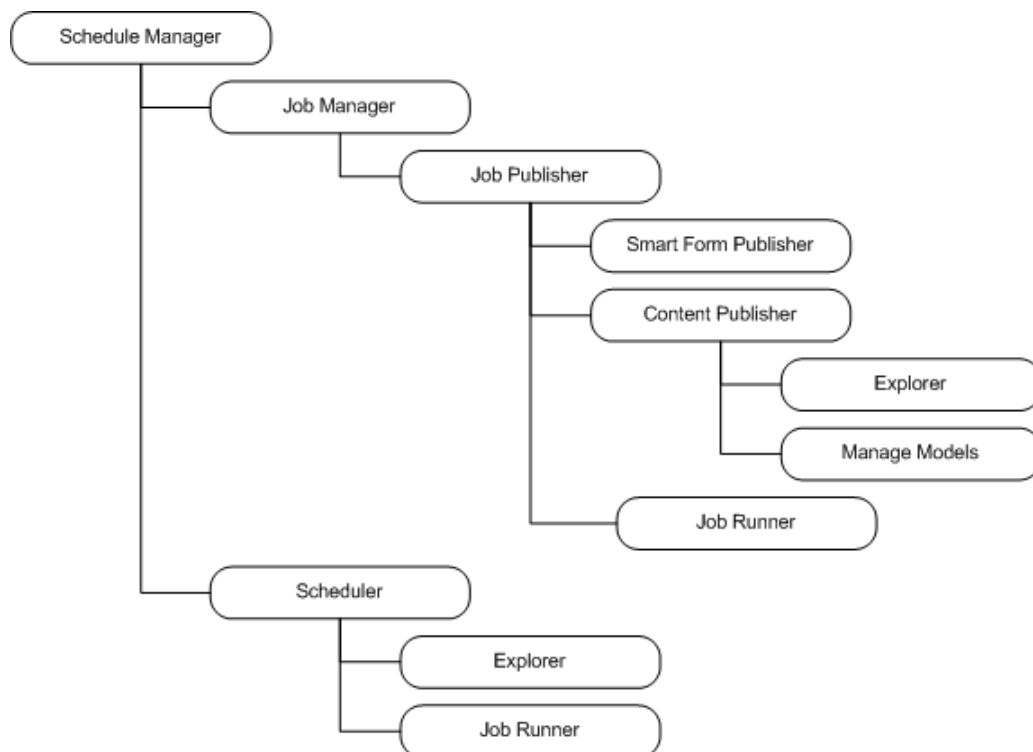
役割は、他の役割を階層形式で整理します。Reporting and Analysis 役割は次の分岐に集約されます。

- [188 ページの「コンテンツ・マネージャの分岐」](#)
- [188 ページの「スケジュール・マネージャの分岐」](#)

## コンテンツ・マネージャの分岐



## スケジュール・マネージャの分岐



## 役割の組合せの例

この表では役割の組合せを割り当てることで可能になるアクセス権と機能の例を示します。

組み合わせた役割	タスク	アクセス権
エクスプローラ+お気に入りのディストリビュータ+個人用ページのエディタ+個人パラメータのエディタ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● EPM Workspace での Web Analysis と Financial Reporting の対話型コンテンツの確認</li> <li>● リポジトリ・コンテンツの一覧化とリポジトリ・コンテンツへの登録</li> <li>● Oracle Hyperion(R) Web Analysis Studio におけるアクセス可能な対話型コンテンツの確認</li> <li>● 個人用ページへのアクセス</li> <li>● お気に入りマネージャへのアクセス</li> <li>● クエリー結果の設定をカスタマイズするために、Web Analysis の視点、個人用変数、個人用パラメータを定義</li> </ul>	コンテンツを変更せず、または変更点をリポジトリに保存せずに対話型コンテンツを共有
エクスプローラ+アナリスト+コンテンツ・パブリッシャ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● EPM Workspace での Web Analysis、Financial Reporting、および</li> </ul>	クエリーの編集、再クエリーおよびリポジトリへの変更点の保存

組み合せた役割	タスク	アクセス権
	<p>Interactive Reporting の対話型コンテンツの確認</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● リポジトリ・コンテンツの一覧化とリポジトリ・コンテンツへの登録</li> <li>● Web Analysis Studio におけるアクセス可能な対話型コンテンツの確認</li> <li>● クエリーの編集、再クエリー、およびデータの整列</li> <li>● Financial Reporting のバッチおよびブックの作成</li> <li>● インポート、変更、および「名前を付けて保存」ダイアログ・ボックスへのアクセス</li> </ul>	<p>行うために、ドキュメント・タイプを対話型で使用</p>
<p>個人用ページのパブリッシャ+データ・ソース・パブリッシャ+アナリスト+レポート・デザイナー+ジョブ・マネージャ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● Web Analysis、Financial Reporting、Oracle Hyperion(R) Interactive Reporting の新規対話型コンテンツの作成および配布</li> <li>● Oracle Hyperion(R) Web Analysis Studio のドキュメント設計インタフェースにおける Oracle Hyperion(R) Web Analysis のカスタム・ドキュメントの作成および配布</li> <li>● Oracle Hyperion Financial Reporting Studio, Fusion Edition へのアクセス</li> <li>● 個人用ページへのアクセスとリポジトリ・ユーザーへのコンテンツの配布</li> <li>● リポジトリ・ユーザーへのデータ・ソース接続ファイルの配布</li> <li>● リポジトリ・ユーザーへのバッチ、ブック、レポート、およびドキュメントの配布</li> <li>● Production Reporting ファイルおよび Oracle Hyperion(R) SQR(R) Production Reporting 出力のインポートと変更</li> <li>● ジョブの作成、保存、および実行</li> <li>● 出力ディレクトリの作成および管理</li> </ul>	<p>リソースへの管理者アクセスを除く、主なコンテンツ作成機能へのアクセス権</p>
<p>コンテンツ・マネージャ+スケジュール・マネージャ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● リポジトリで発行されたすべてのコンテンツ管理およびすべてのコンテンツ作成機能</li> <li>● イベント、カレンダー、タイム・イベント、パブリック・パラメータ、および物理リソースの作成と管理</li> </ul>	<p>リソースへの管理者アクセスを除く、すべてのコンテンツ作成およびスケジューリング機能へのアクセス権</p>

組み合わせた役割	タスク	アクセス権
Reporting and Analysis 管理者+データ・エディタ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● すべてのリソースへの条件付きアクセス</li> <li>● 管理モジュールへのアクセス</li> <li>● インパクト・マネージャ・モジュールへのアクセス</li> <li>● Essbase への編集の書戻し</li> </ul>	リソースへの条件付きアクセスでの、主な機能とモジュールへのアクセス権







# Performance Management Architectのユーザー・プロビジョニング

## この付録の内容

Performance Management Architect 役割 .....	193
Performance Management Architect アクセス・レベル .....	193

## Performance Management Architect 役割

事前定義した役割を割り当てて、ユーザーとグループをプロビジョニングします (付録 A 「製品の役割」を参照してください)。

## Performance Management Architect アクセス・レベル

次のテーブルでは、Performance Management Architect で実行される共通のタスク、および必要なアクセス・レベルを説明します。次の点を考慮してください。

- アプリケーション内のローカル次元、または共有ライブラリ内の共有次元用の構造のみを編集できます。
- 役割でコピーのターゲットの次元も作成できる場合のみ、次元をコピーできます。
- 少なくともソース次元へのリーダー・アクセス、およびターゲット次元へのライター・アクセスがある場合のみ、次元を同期化できます。
- アプリケーション作成者またはアプリケーション管理者の役割がある場合のみ、アプリケーションに次元を追加できます。

アクセス・レベル	次元レベルのタスク
次元所有者	<ul style="list-style-type: none"><li>● 次元構造またはプロパティの編集</li><li>● 次元のコピー</li><li>● 次元間における次元の同期化</li><li>● 次元のアプリケーションへの追加</li><li>● 次元の除去</li><li>● 次元の削除</li></ul>
次元ライター	<ul style="list-style-type: none"><li>● 次元構造またはプロパティの編集</li><li>● 次元のコピー</li><li>● 次元間の同期化</li><li>● 次元のアプリケーションへの追加</li></ul>

アクセス・レベル	次元レベルのタスク
次元リーダー	<ul style="list-style-type: none"><li>● 次元のコピー</li><li>● 次元からの同期化</li><li>● 次元のアプリケーションへの追加</li></ul>



# Profitability and Cost Managementのユーザー・プロビジョニング

## この付録の内容

前提条件 .....	195
Profitability and Cost Management からの Shared Services Console の起動 .....	196
Profitability and Cost Management 役割 .....	197

## 前提条件

ユーザーをプロビジョニングする前に、次の製品が構成および実行されていることを確認してください。

- 195 ページの「EPM Workspace」
- 195 ページの「Shared Services」
- 195 ページの「Essbase」
- 196 ページの「Profitability and Cost Management」

### EPM Workspace

- EPM Workspace と Web サーバーが実行されていること。
- 少なくとも 1 つの Profitability and Cost Management アプリケーションが作成されていること。

### Shared Services

- Shared Services が構成および実行されていること。
- Profitability and Cost Management のユーザー情報を保管する外部ユーザー・ディレクトリが Shared Services で構成済であること。
- Shared Services 管理者が次のユーザー役割を作成済であること。
  - Profitability and Cost Management の管理者役割
  - Profitability and Cost Management のプロビジョニング・マネージャ役割

### Essbase

Essbase サーバーが実行されている必要があります。

## Profitability and Cost Management

- 『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』で記述されているように、Profitability and Cost Management がインストールおよび構成されていること。これには、次のタスクが含まれます。
  - 製品のアクティブ化
  - Shared Services の登録
  - データベースの構成
  - アプリケーション・サーバーの配置
  - Profitability and Cost Management のインスタンス登録
  - データ・ソースの構成
  - Profitability and Cost Management サーバーの実行
- Profitability and Cost Management サーバーが実行されていること。
- Profitability and Cost Management のアプリケーション作成者、次元編集者、統合の作成、統合の実行などの Shared Services 役割を割り当てることで、1人以上のユーザーが Profitability and Cost Management のアプリケーション作成者としてプロビジョニングされていること。130 ページの「ユーザーとグループのプロビジョニング」を参照してください。
- 少なくとも1つの Profitability and Cost Management アプリケーションが作成および配置されていること。
- Profitability and Cost Management のアプリケーションが Shared Services のプロジェクトに割り当てられていること。
- アプリケーションにプロビジョニング・マネージャ役割を割り当てることで、各 Profitability and Cost Management アプリケーションのプロビジョニング・マネージャが作成されていること。130 ページの「ユーザーとグループのプロビジョニング」を参照してください。

## Profitability and Cost Management からの Shared Services Console の起動

▶ Shared Services Console を起動するには、次の手順に従います:

- 1 Shared Services サーバーが実行されていることを確認してください。
- 2 EPM Workspace に管理者(admin)としてログインします。
- 3 ナビゲート、管理、ユーザー管理の順に選択します。

Shared Services Console が表示されます。

- 4 ユーザーとグループを作成およびプロビジョニングします。130 ページの「ユーザーとグループのプロビジョニング」を参照してください。

## Profitability and Cost Management 役割

Profitability and Cost Management では、各ユーザー ID はセキュリティの役割に割り当てられています。

- 管理者(admin は Shared Services へのログオン時のデフォルトのセキュリティの役割)
- パワー・ユーザー
- 対話型ユーザー
- 表示ユーザー

割り当てられたセキュリティの役割は、ユーザーが使用可能なアクセス・レベルと権限を決定します。あるアクセス・レベルがユーザーのグループに割り当てられている場合、同様のセキュリティ・アクセス権がグループのすべてのメンバーに付与されます。

特定ユーザーに必要なアクセス権によっては、割り当てられたセキュリティのレベル設定を変更して、アクセス権の範囲を変更できます。

デフォルトで割り当てられた Oracle Hyperion Profitability and Cost Management、Fusion Edition のセキュリティの役割のリストと、関連付けられたアクセスの説明は、173 ページの「[Profitability and Cost Management 役割](#)」を参照してください。





# Financial Managementのユーザー・プロビジョニング

## この付録の内容

Shared Services Console の EPM Workspace からの起動.....	200
Financial Management の役割.....	200
ユーザーおよびグループの Financial Management アプリケーションへの割当て .....	201
Financial Management アプリケーションのセキュリティ・クラスの設定.....	201
セキュリティ・クラスへのアクセス権の割当て.....	202
Financial Management アプリケーションのセキュリティ・レポートの実行.....	204
Financial Management ユーザーの Shared Services セキュリティへの移行.....	204

Financial Management は Shared Services のプロビジョニングで強制されるアプリケーション・セキュリティと、ドキュメントなどのメタデータおよびデータのクラス・アクセス・セキュリティをサポートしています。この付録では Financial Management のユーザーおよびグループのプロビジョニングについての情報を解説します。

**注：** アプリケーションにセキュリティ・ファイルをロードすることもできます。  
『Oracle Hyperion Financial Management 管理者ガイド』を参照してください。

ユーザーのプロビジョニングの前提条件:

- Shared Services および Financial Management が構成され、実行されている必要があります。
- Shared Services 管理者によって次のユーザーが作成済:
  - プロビジョニング・マネージャ。ユーザーをプロビジョニングするには、プロビジョニング・マネージャ役割が自動的に割り当てられる Shared Services 管理者を使用できるほか、別のユーザーに役割を割り当てることもできます。
  - アプリケーション作成者。Financial Management のアプリケーション作成者役割を割り当てます。
  - 管理者。Financial Management 管理者役割を割り当てます。
- Financial Management ユーザーおよびグループ情報の外部ユーザー・ディレクトリが、Shared Services で構成されている必要があります。
- Financial Management アプリケーションを Shared Services に登録しておく必要があります。

- ▶ Financial Management ユーザーおよびグループをプロビジョニングするには、次の手順に従います:
  - 1 Financial Management のプロビジョニング・マネージャ役割を持つユーザーとして、Shared Services にログインします。
  - 2 ネイティブ・ディレクトリまたは構成されたユーザー・ディレクトリの1つから、Financial Management の役割でプロビジョニングするユーザーまたはグループを選択します。
  - 3 Financial Management 役割でユーザーおよびグループをプロビジョニングします。付録 A「製品の役割」を参照してください。
  - 4 アプリケーション・グループを選択します。
  - 5 ユーザーおよびグループをプロビジョニングする Financial Management アプリケーションを選択します。

**注：** ライフサイクル管理を構成していない場合、アプリケーションに接続できないというエラー・メッセージが表示されます。ライフサイクル管理を構成するには『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照してください。

- 6 メタデータおよびセキュリティ役割へのアクセスを割り当てて、ユーザーをプロビジョニングします。

## Shared Services Console の EPM Workspace からの起動

Shared Services Console を使用して、Financial Management のユーザー、グループおよび役割を管理します。ユーザーまたはグループをプロビジョニングするには、Shared Services 管理者またはプロビジョニング・マネージャである必要があります。

- ▶ EPM Workspace から Shared Services Console を起動するには、ナビゲート、管理、ユーザー管理の順に選択します。

Shared Services Console が別のウィンドウで開きます。

## Financial Management の役割

ユーザーおよびグループをプロビジョニングするには、定義済役割の組合せ(付録 A「製品の役割」を参照)を割り当てて、特定の製品のアクセスと機能を実現します。

Oracle Hyperion Financial Management, Fusion Edition のプロビジョニング・マネージャの役割が、Shared Services 管理者に自動的に割り当てられます。この管理者またはその役割がプロビジョニングされる別のユーザーを使用して、ユーザーおよびグループをプロビジョニングできます。



# ユーザーおよびグループの Financial Management アプリケーションへの割当て

- ▶ ユーザーおよびグループをアプリケーションに割り当てるには、次の手順に従います:
  - 1 Shared Services Console から、アプリケーション・グループを展開し、アプリケーション名を右クリックして、アクセス権の割当てを選択し、ユーザーとグループの選択を選択します。
  - 2 次のいずれかのオプションを選択します。
    - すべて表示: プロビジョニングされるすべてのユーザーを表示します
    - ユーザーまたはグループ、および検索条件に検索条件を入力し、検索をクリックします。
  - 3 使用可能なユーザーとグループからアプリケーションに割り当てるユーザーおよびグループを選択し、役割を選択し、矢印キーを使用してそれらを「選択したユーザー」列に移動します。
  - 4 次へをクリックします。

## Financial Management アプリケーションのセキュリティ・クラスの設定

プロビジョニング・マネージャの役割に割り当てられたユーザーのみがアプリケーションのセキュリティ・クラスを定義できます。

ユーザーやグループがアプリケーション要素(アカウントやエンティティなど)にアクセスできるかどうかは、ユーザーやグループが属しているセキュリティ・クラスやアプリケーション要素に関連付けられているセキュリティ・クラスによって異なります。

## セキュリティ・クラスの作成

**注:** クラシック・アプリケーション管理を使用している場合はこの手順を使用します。Performance Management Architect を使用している場合は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect, Fusion Edition 管理者ガイド』を参照してください。

- ▶ セキュリティ・クラスを作成するには、次の手順に従います:
  - 1 Shared Services Console から、アプリケーション・グループを展開し、アプリケーション名を右クリックして、アクセス権の割当てを選択し、クラスの選択を選択します。
  - 2 クラス名に、セキュリティ・クラスの名前を入力します。

**注:** 名前は 80 文字までです。

- 3 追加をクリックします。

## セキュリティ・クラスの削除

クラシック・アプリケーション管理を使用している場合はこの手順を使用します。Performance Management Architect を使用している場合は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect, Fusion Edition 管理者ガイド』を参照してください。

---

**注意** セキュリティ・クラスをアプリケーションから削除するには、その前に割り当てられたアプリケーション要素への関連付けを解除する必要があります。

---

エンティティ、アカウント、シナリオ、レポート、データ・フォームおよびジャーナルをセキュリティ・クラスから分離するには、メタデータ・ファイルを変更します。『Oracle Hyperion Financial Management, Fusion Edition 管理者ガイド』を参照してください。Performance Management Architect を使用している場合は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect, Fusion Edition 管理者ガイド』を参照してください。

- ▶ セキュリティ・クラスを削除するには、次の手順に従います:
  - 1 Shared Services Console から、アプリケーション・グループを展開し、アプリケーション名を右クリックして、アクセス権の割当てを選択し、クラスの選択を選択します。
  - 2 使用可能クラスから、削除するセキュリティ・クラスを選択し、削除をクリックします。
  - 3 削除を確認するには、はいをクリックします。

## セキュリティ・クラスの選択

- ▶ アプリケーションのセキュリティ・クラスを選択するには、次の手順に従います:
  - 1 Shared Services Console から、アプリケーション・グループを展開し、アプリケーション名を右クリックして、アクセス権の割当てを選択し、クラスの選択を選択します。
  - 2 使用可能クラスから、アプリケーションに割り当てるセキュリティ・クラスを選択し、矢印キーを使用してそれらを「選択したクラス」列に移動します。
  - 3 次へをクリックします。

## セキュリティ・クラスへのアクセス権の割当て

ユーザーとグループおよびセキュリティ・クラスを定義したら、アプリケーションのそれぞれのセキュリティ・クラスに各ユーザーとグループが持つアクセス・レベルを指定し、電子メール・アラートを設定できます。

**注：** あるアプリケーションのアプリケーション管理者の役割に割り当てられたユーザーは、そのアプリケーションのすべての情報に対するアクセス権があります。

**表 23 ユーザー・アクセス・テーブル**

アクセス・レベル	ユーザーとグループ・タスク
なし	セキュリティ・クラスに割り当てられた要素へのアクセス権がありません。
メタデータ	リスト中の指定したメンバーを表示できますが、メンバーのデータについては表示も変更もできません。
読取り	セキュリティ・クラスに割り当てられた要素のデータを表示できますが、レベルを上げたり下げたりすることはできません。
レベルを上げる	セキュリティ・クラスに割り当てられた要素のデータを表示でき、レベルを上げたり下げたりできます。
すべて	セキュリティ・クラスに割り当てられた要素のデータを変更でき、レベルを上げたり下げたりできます。

ピボット・テーブル機能を使用して、アクセス権を割り当てるために2つのビュー間を切り替えることができます。たとえば、行にユーザーとグループを持ち、列にセキュリティ・クラスを持つ場合、「ピボット・テーブル」をクリックすると、ユーザーおよびグループは列に、セキュリティ・クラスは行に存在するようになります。

- ▶ セキュリティ・クラスへのアクセス権を割り当てるには、次の手順に従います：
  - 1 **Shared Services Console** から、アプリケーション・グループを展開し、アプリケーション名を右クリックして、アクセス権の割当てを選択し、アクセスの割当てを選択します。
  - 2 アクセス権を割り当てるセルを選択します。

**ヒント：** 複数のセルを選択するには、[Shift]および[Ctrl]キーを使用します。列または行を選択するには、列または行のヘッダーをクリックします。

- 3 アクセス権から、割り当てるアクセス・レベルを選択します。
- 4 設定をクリックして、選択したセルにレベルを適用します。
- 5 **オプション:** 電子メール・アラートを追加するには、テーブル内のセルを選択し、アラートの追加をクリックします。

**注意** アラート・プロセスは、外部認証ファイルに保管された電子メール・アドレスを使用します。電子メール・アラートを設定するには、『Oracle Hyperion Financial Management, Fusion Edition 管理者ガイド』を参照してください。

**注：** 電子メール・アラートを除去するには、セルを選択して「アラートの削除」をクリックします。

- 6 保存をクリックします。
- 7 次へをクリックします。

## Financial Management アプリケーションのセキュリティ・レポートの実行

アプリケーションのセキュリティを設定中に選択した情報について、セキュリティ・レポートを実行できます。ユーザー別のクラス、ユーザー別の役割、ユーザー別のクラスおよび役割、グループ別のユーザーに対してレポートを実行できます。レポートはオンラインで表示できるほか、CSV ファイルにエクスポートできます。

**注：** HFM-Format、PDF、RTF、HTML、XLS などでもレポートをフォーマットし、印刷できます。『Hyperion Financial Management ユーザー・ガイド』を参照してください。

- ▶ セキュリティ・レポートを作成するには、次の手順に従います:
  - 1 **Shared Services Console** でアプリケーション・グループを展開し、アプリケーション名を右クリックして、アクセス権の割当て、セキュリティ・レポートの順に選択します。
  - 2 次のレポート・オプションを選択します。
    - 権限
      - ユーザー別のクラス
      - ユーザー別の役割
    - グループ別のユーザー
  - 3 次のいずれかのオプションを選択します。
    - レポートの起動は新しいウィンドウでレポートを開きます。
    - ファイルへのエクスポートは CSV ファイルとしてファイルを保存します。

## Financial Management ユーザーの Shared Services セキュリティへの移行

ユーザーを Shared Services セキュリティに移行する方法は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照してください。



# Planningのユーザー・プロビジョニング

## この付録の内容

手順の概要.....	205
EPM Workspace からの Shared Services Console の起動.....	208
Planning でのユーザーとグループのリフレッシュ.....	208
Planning 役割 .....	209
接続タイプと Planning について .....	210

## 手順の概要

この項では Planning のユーザーとグループをプロビジョニングするために実行する必要がある手順について概説します。詳細な手順は、このガイドの他の項と、『Hyperion Planning - System 9 管理ガイド』を参照してください。

- 205 ページの「前提条件」
- 207 ページの「プロビジョニング・プロセス」

## 前提条件

- 205 ページの「Shared Services」
- 206 ページの「Essbase」
- 206 ページの「Reporting and Analysis」
- 206 ページの「EPM Workspace」
- 206 ページの「Planning」

## Shared Services

- Shared Services が実行されていること。
- Essbase および Planning のユーザーおよびグループ情報を保管する外部のユーザー・ディレクトリは Shared Services で構成します。
- Shared Services 管理者により次のパワー・ユーザーが作成されていること。
  - Reporting and Analysis 管理者。Reporting and Analysis の管理者役割を割り当てます。これはにより、EPM Workspace へのアクセス権が付与されます。

- Planning プロビジョニング・マネージャ。Planning のプロビジョニング・マネージャと Shared Services のディレクトリ・マネージャ役割を割り当てます。
- 管理者。Planning の管理者役割を割り当てます。
- Planning インスタンスが作成され、EPM System コンフィグレータを使用して登録されていること

## Essbase

Essbase サーバーが実行されている必要があります。

## Reporting and Analysis

- Reporting and Analysis の製品がインストールおよび構成済であること。Reporting and Analysis 共通サービス、EPM Workspace、EPM Workspace Web サーバーが実行されていること。
- Planning と Performance Management Architect が Reporting and Analysis Web サーバーの構成で使用可能になっており、EPM Workspace からアクセス可能であること。
- 次元サーバーが実行されていること。

## EPM Workspace

- Oracle Enterprise Performance Management Workspace, Fusion Edition は、Planning を集中管理する場所であり、Web サーバーが実行されていること。
- 少なくとも 1 つの Planning アプリケーションが作成されていること。Oracle Hyperion Reporting and Analysis 管理者は Planning アプリケーションを Performance Management Architect から作成します。

## Planning

- Planning がインストールおよび構成済であること。
- Planning サーバーが実行されていること。
- このガイドに記述されているように、Planning アプリケーション作成者、次元編集者、統合の作成、統合の実行などの Shared Services 役割を割り当てることで、1 人以上のユーザーが Planning のアプリケーション作成者としてプロビジョニングされていること。
- Performance Management Architect がインストールおよび構成され、実行されていること。
- Performance Management Architect を使用することで、Planning アプリケーションが作成および配置されます。『Enterprise Performance Management Architect 管理者ガイド』を参照してください。

Planning アプリケーション作成者、次元編集者、統合の作成、統合の実行などの Shared Services 役割を持つユーザーのみが、Planning アプリケーションを作成および配置できます。

- Planning アプリケーションは、Shared Services のプロジェクトに割り当てられます。
- このガイドの記述にあるように、アプリケーションのプロビジョニング・マネージャ役割を割り当てることで、Planning アプリケーションのプロビジョニング・マネージャが作成されていること。

## プロビジョニング・プロセス

Planning にアクセスするために、ユーザーおよびグループには Planning アプリケーション役割が必要です。役割でユーザーおよびグループをプロビジョニングした後は、次元メンバー、データ・フォーム、フォルダ、タスク・リストへのアクセス権、および Calculation Manager のビジネス・ルールの起動権限(Planning または Shared Services Console から)を割り当てます。Planning のアプリケーション要素にアクセス権を割り当てるには、Oracle Hyperion Planning, Fusion Edition の管理者オンライン・ヘルプを参照してください。

Planning のプロビジョニング・マネージャ役割は、自動的に Shared Services 管理者に割り当てられます。

- ▶ Planning のユーザーとグループを Shared Services Console からプロビジョニングするには、次の手順に従います:
  - 1 Planning の管理者またはプロビジョニング・マネージャ役割を持つユーザーとして Shared Services Console にログインします。
  - 2 ネイティブ・ディレクトリまたは構成済のユーザー・ディレクトリから、Planning 役割でプロビジョニングするユーザーまたはグループを選択します。
  - 3 管理、プロビジョニングの順に選択します。
  - 4 Planning アプリケーションが登録されているプロジェクトを展開します。
  - 5 プリケーションを展開して、使用可能な役割を表示します。
  - 6 役割を選択し、右矢印を使用して選択された役割ペインに役割を移動します。
  - 7 保存をクリックします。

**注：** 208 ページの「[Planning でのユーザーとグループのリフレッシュ](#)」の記述にあるように、Planning は Shared Services と同期されます。同期後、Essbase に存在しない Planning ユーザーは、自動的に作成されます。ユーザーが Essbase に存在する場合は、アプリケーションの割当てが、Planning に対するアクセス権を反映するよう更新されます。

# EPM Workspace からの Shared Services Console の起動

- ▶ Shared Services Console を EPM Workspace から起動するには、ナビゲート、管理、ユーザー管理の順に選択します。

Shared Services Console が別のウィンドウで開きます。

## Planning でのユーザーとグループのリフレッシュ

Planning および Oracle Hyperion(R) Business Rules では、次の場合にユーザー、グループ、役割の最新リストを Shared Services Console から取得します。

- アプリケーションが選択されたセキュリティ・フィルタでリフレッシュされる。
- ProvisionUsers ユーティリティが実行されている。(『Oracle Hyperion Planning 管理者ガイド』を参照してください)。
- アプリケーションにログインしているユーザーがいる。(Planning は Shared Services Console でユーザーを同期します)。
- アクセス権が Planning で割り当てられている。

## ユーザーとグループ ID の移行

ユーザーまたはグループの ID、あるいはユーザー・ディレクトリ階層での位置を変更する場合、Planning でこの情報を更新(または移行)する必要があります。

- ▶ 変更されたユーザーおよびグループ ID を Shared Services Console から Planning に移行するには、次の手順に従います:

### 1 次のいずれかのアクションを行います:

- 管理、移行データ・フォームの管理の順に選択し、データ・フォーム・フォルダまたはデータ・フォームを選択します。
- 管理、次元の順に選択し、次元のメンバーを選択します。
- 管理、タスク・リストの管理の順に選択し、タスク・リストを選択します。
- 管理、ビジネス・ルール・セキュリティの順に選択し、ビジネス・ルール・フォルダまたはビジネス・ルールを選択します。

### 2 アクセス権の割当てをクリックします。

### 3 移行 ID をクリックします。

**注:** また、UpdateUsers ユーティリティ(Oracle Hyperion Planning, Fusion Edition の管理者オンライン・ヘルプで説明)を使用して ID を移行することもできます。



## Planning 役割

ソフトウェアとユーザーに適したライセンスに従って、Planning ではこのガイドで記述されている役割をサポートしています。

### Essbase におけるデータへの書込みアクセス権

Essbase ではすべての管理者が Planning データへの書込みアクセス権を持っています。デフォルトでは、Planning が Essbase の中でプランナや対話型ユーザーに対して生成するセキュリティ・フィルタは読取り専用です。ただし、プランナや対話型ユーザーに対し、Essbase の書込みアクセス役割を割り当てることで、これらのユーザーが Essbase のデータに対し、Planning と同じアクセス権を持つようにすることができます。Financial Reporting、Essbase Excel アドイン、またはサード・パーティなどの別製品を使用することで、これらのユーザーが Planning のデータを (ユーザーが Planning で書込みアクセス権を持つため)Essbase で直接変更できるようになります。

**注：** セキュリティ・フィルタは表示ユーザーに対して、常に読取り専用です。

### Planning と Business Rules 間の役割

ユーザーがクラシック Planning アプリケーションからビジネス・ルールを起動するには、Business Rules 管理者は Business Rules で作成されたビジネス・ルールへのアクセス権を付与する必要があります。Oracle Hyperion EPM Architect, Fusion Edition Planning アプリケーションの場合、Planning 管理者は Planning からの起動アクセス権を割り当てられます。

表 24 Planning と Business Rules の役割

Planning 役割	Business Rules 役割	実行されるタスク
管理者	管理者	<ul style="list-style-type: none"><li>● ビジネス・ルールの設計</li><li>● Planning アプリケーション用のビジネス・ルールの起動</li></ul>
対話型ユーザー	対話型ユーザー	<ul style="list-style-type: none"><li>● ビジネス・ルールの設計</li><li>● 管理者により起動権限を割り当てられているルールの起動</li></ul>
プランナ	基本ユーザー	管理者により起動権限を割り当てられているビジネス・ルールの起動
表示ユーザー	なし	なし

Planning ユーザーが Planning アプリケーション間で異なる役割を持っている場合、Business Rules ではユーザーの持つ最も高い役割が使用されます。たとえば、ユーザーが 1 つのアプリケーションでは管理者で、別のアプリケーションではプランナである場合、このユーザーは Business Rules では管理者となります。

注： Hyperion Calculation Manager 役割の詳細は、付録 A を参照してください。

## Planning および Essbase 間のアクセス権

Essbase データベースでセキュリティ・フィルタが更新された後、Planning ユーザーの Essbase でのアクセス権は、接続を確立するユーザー・タイプに依存します。

表 25 Planning および Essbase 間のアクセス権

接続ユーザー・タイプ	表示ユーザー	プランナ	対話型ユーザー	管理者
名前付きユーザー	フィルタ・アクセス	計算	計算	データベース設計者*

\*アプリケーション・マネージャでの影響なし。

## 接続タイプと Planning について

Planning は適切なユーザー・タイプを使用して、Essbase データベースとの接続を確立します。

表 26 接続タイプと Planning

Planning アプリケーションへログオンするために使用されるプログラム	Essbase の接続
Planning と Oracle Hyperion Smart View for Office, Fusion Edition クライアントから Oracle Hyperion Planning, Fusion Edition プロバイダまで	スーパーバイザ・ユーザー接続のプール
Oracle Hyperion Financial Reporting, Fusion Edition、Business Rules、およびサードパーティ製ツール	名前付きユーザー



# Business Rulesのユーザー・プロビジョニング

## この付録の内容

プロビジョニングの概要.....	211
Shared Services Console の起動 .....	212
Business Rules のユーザー役割.....	212
Business Rules ・ユーザーの Shared Services ・セキュリティへの移行.....	212

この付録では Business Rules ユーザーおよびグループのプロビジョニングについての情報を解説します。

## プロビジョニングの概要

Business Rules のユーザーをプロビジョニングするプロセスの概要を説明します。

1. 管理者は、Administration Services のユーザーの外部化ユーティリティを使用して、ネイティブな Administration Services と Business Rules のユーザーを Shared Services に移行します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照してください。
2. 管理者は、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System コンフィグレータを使用して、Shared Services を配置します。Shared Services が配置されると、ネイティブ・ディレクトリが構成されます。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照してください。
3. 管理者は、Business Rules のユーザーおよびグループ情報を保管する外部ユーザー・ディレクトリを構成します。第 5 章「ユーザー・ディレクトリの構成」を参照してください。
4. 管理者は、Administration Services(Business Rules がそのコンポーネント)を Shared Services に登録します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照してください。
5. Shared Services は、製品登録情報をデータベースに保管します。
6. 管理者は、ネイティブ・ディレクトリと外部ユーザー・ディレクトリで定義されたユーザーおよびグループに Business Rules 役割を割り当てます。第 9 章「プロビジョニングの管理」を参照してください。

Shared Services は、プロビジョニング情報をネイティブ・ディレクトリに保管します。

7. ユーザーは Administration Services にログオンし、アプリケーションは外部ユーザー・ディレクトリに対してユーザーを認証します。

## Shared Services Console の起動

Shared Services Console は、集中管理されたユーザー・インタフェースを提供します。ここでは、EPM System 製品のユーザー・プロビジョニング・タスクを実行できます。Shared Services Console の起動手順については、[47 ページの「Shared Services Console の起動」](#)を参照してください。

## Business Rules のユーザー役割

ソフトウェアおよびユーザーの適用可能なライセンスに従って、Business Rules は、ユーザーおよびグループに割当て可能な定義済の 3 つの役割(管理者、対話型ユーザーおよび基本ユーザー)をサポートします。これらの役割は、Business Rules のリポジトリ・オブジェクトにユーザーおよびグループが実行できるタスクを決定します。Business Rules の役割については、[172 ページの「Business Rules 役割」](#)を参照してください。ユーザーおよびグループへの役割の割当てについては、[130 ページの「ユーザーとグループのプロビジョニング」](#)を参照してください。

Shared Services でユーザーおよびグループに役割を割り当てたら、そのユーザーおよびグループに、Business Rules のリポジトリ・オブジェクトへのアクセス権を割り当てます。たとえば、Business Rules のアプリケーション・グループ内のすべてのビジネス・ルールを編集するためのアクセス権をユーザーに割り当てる場合があります。『Hyperion Business Rules Administrator's Guide』または『Oracle Essbase Administration Services オンライン・ヘルプ』を参照してください。

## Business Rules ・ ユーザーの Shared Services ・ セキュリティへの移行

Business Rules をアップグレードしている場合は、Administration Services でユーザーの外部化ユーティリティを実行して、ネイティブな Administration Services と Oracle Hyperion(R) Business Rules のユーザーを Shared Services に移行する必要があります。詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照してください。

# K

## Performance Scorecardのプロ ビジョニング

### この付録の内容

概要 .....	213
要件 .....	213
セキュリティの割当て .....	214

## 概要

次のアイテムを使用して、Performance Scorecard のユーザーおよびグループをプロビジョニングできます:

- このマニュアルで説明されている Shared Services によって提供されるセキュリティの役割。
- スコアカード、メジャー、イニシアチブ、および Web ページへのアクセスを特定する Performance Scorecard で作成するセキュリティの役割。216 ページの「カスタム・セキュリティの役割」を参照してください。
- 組織で地理的または機能的に固有の領域を示すために Performance Scorecard で作成するカスタム・ドメイン。これにより、ユーザーがアクセス可能なデータが特定されます。216 ページの「ドメイン」を参照してください。

また、Shared Services の設定と以前の使用に基づいて次のタスクを実行できます:

- Performance Scorecard でプロビジョニングされる役割に対して、Shared Services の Performance Scorecard 役割にプロビジョニングされるユーザーとグループ間のバルク同期を実行する。
- Performance Scorecard で作成した新規従業員を収容するために Shared Services で作成する必要があるアカウントを識別する。

『Oracle Hyperion Performance Scorecard 管理者ガイド』の第 2 章を参照してください。

## 要件

Performance Scorecard ユーザーおよびグループのアカウントをプロビジョニングするには、アカウントに次の役割があることを確認してください:

- プロビジョニング・マネージャ
- BI+管理¥グローバル管理
- HPS パワー・マネージャ

- 管理者

## セキュリティの割当て

▶ Performance Scorecard アカウントをプロビジョニングするには、次の手順に従います:

- 1 「管理」、「ユーザー管理」の順に選択して、Shared Services Console を起動します。
- 2 アカウントが必要なアクセス権を提供していることを確認します。213 ページの「要件」を参照してください。
- 3 Shared Services Console で、このマニュアルの説明に従ってアカウントを作成しプロビジョニングします。
- 4 左側にある「アプリケーション・グループ」エクスプローラを選択します。
- 5 「スコアカード」を選択し、「Performance Scorecard」を右クリックして、ショートカット・メニューから「セキュリティの割当て」を選択します。  
「ユーザーまたはグループの選択」ページが表示されます。

- 6 アカウントを選択して「次へ」をクリックします。

「プロパティの管理」ページが表示されます。Performance Scorecard で作成したドメインまたはセキュリティの役割が使用できます。ドメインはグループ・アカウントには使用できません。

- 7 Performance Scorecard の従業員をアカウントに関連付けるには、次のタスクを実行します:

1. 「選択」をクリックします。
2. 「選択」に「従業員」ボックスが表示されます。「検索」をクリックしてすべての従業員を表示します。
3. 従業員を選択して、「適用」をクリックします。

189 ページの「役割の組合せの例」を参照してください。

- 8 「プライマリ・ドメイン」から、アカウントを関連付ける組織内で、固有の地理的または機能的な領域を示すドメインを選択します。これにより、ドメイン内のすべてのデータへのユーザーのアクセスが許可されます。

216 ページの「ドメイン」を参照してください。

- 9 「セキュリティの役割」で、ユーザーがアクセス可能なデータおよび実行可能なタスクを特定する提供されるセキュリティの役割またはカスタム・セキュリティの役割を選択します。

215 ページの「提供されるセキュリティの役割」を参照してください。

メジャー、スコアカード、イニシアチブ、および Web ページ権限を特定する独自の Performance Scorecard セキュリティの役割を作成する方法については、『Oracle Hyperion Performance Scorecard 管理者ガイド』の第 2 章を参照してください。

- 10 「終了」をクリックします。

## 提供されるセキュリティの役割

次のテーブルでは、アカウントに割り当てる役割に従って、ユーザーが実行可能なテーブルやタスクを特定します。

表 27 提供されるセキュリティの役割

セキュリティの役割	権限の説明
ユーザー	<p>ユーザーが次のタスクを実行できるようにします。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● マップを表示してマップ要素にドリル・ダウンする。</li> <li>● アクセス可能なオブジェクトに関するデータにアクセスしてノートを使用する。</li> <li>● すべてのレポートにアクセスし、権限があればレポートにデータを入力する。</li> <li>● アラートの作成と登録</li> <li>● 注釈の編集と削除</li> </ul> <p>注： これにより、ユーザーが一定の基準を満たさない場合は、メジャーおよびスコアカードへのアクセスが制限されます。オブジェクトとの関連付けに関係なく、すべてのビジネス・オブジェクトにアクセスする必要のある従業員には、この役割を適用しないでください。</p>
デザイナー	<p>ユーザーが次のタスクを実行できるようにします。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 前述のようなすべてのアプリケーション・オブジェクトを作成する。ただし、ドメイン内にこれらのオブジェクトを配置するための追加の権限が必要。</li> <li>● マップを表示してマップ要素にドリル・ダウンする。</li> <li>● すべてのレポートを使用し、権限があればメジャーの結果やターゲット値などのデータを入力する。</li> <li>● アラートの作成と登録</li> </ul>
汎用ドメイン・デザイナー	<p>ユーザーがデザイナーの(対話型の)役割によって付与されている手順を実行できるだけでなく、メジャーやマップなどのオブジェクトをドメインと関連付けて、ドメイン固有のアプリケーションを構築できるようにします。</p>
管理者	<p>ユーザーが次のタスクを実行できるようにします。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● メジャーやスコアカードなどの Performance Scorecard データへの条件付きアクセスを提供するカスタム・セキュリティの役割を作成する。</li> <li>● ドメインの作成、変更、または削除</li> <li>● Shared Services とセキュリティを同期する。</li> <li>● ビジネス・オブジェクトに行われた変更を追跡する。</li> <li>● アプリケーション・データのスター・スキーマおよび多次元の Essbase データベースを生成する。</li> <li>● アプリケーション・データを別の環境に移行する。</li> <li>● Alerter を構成し、ユーザーがアラート通知を送受信できるようにする。</li> <li>● ユーザー・アクティビティをモニターする。</li> </ul>

## カスタム・セキュリティの役割

Performance Scorecard でセキュリティの役割を作成すると、ユーザーがアクセス可能な Performance Scorecard データを特定できます。これにより、ユーザーがアクセスし、特定のページやレポートを制限できるメジャー、スコアカード、およびイニシアチブを指定できます。条件付きデータにアクセスするには、ユーザーが特定の基準を満たす場合にのみメジャー、スコアカード、およびイニシアチブへのアクセスを提供する権限を特定できます。たとえば、スコアカードにユーザーが所有するメジャーが含まれていない場合は、スコアカードへのアクセスを制限できます。

作成するセキュリティの役割は、プロビジョニングで使用するために Shared Services で自動的に使用可能になります。セキュリティ役割の作成方法については、『Oracle Hyperion Performance Scorecard 管理者ガイド』の第2章を参照してください。

## ドメイン

ユーザーに関連付ける組織内で、地理的または機能的に固有の領域を示すためにドメインを作成します。アプリケーション・デザイナーはマップ、メジャー、スコアカードなどのオブジェクトをドメインと関連付けられるため、ドメインをアカウントへ割り当てることによって、ユーザーがアクセス可能なデータを特定し、データのパーティショニングが可能になります。Performance Scorecard で作成するドメインは、アカウント・プロビジョニング用に Shared Services で自動的に使用でき、アカウントとドメインを関連付けられます。

ドメインを作成する方法については、『Oracle Hyperion Performance Scorecard 管理者ガイド』の第2章を参照してください。

## 従業員

従業員とは、メジャー結果の入力や戦略要素の使用など、ユーザーに関連付けられたオブジェクトに関わるタスクの実行を担当する任意の Performance Scorecard ユーザーを示します。従業員をユーザー・アカウントに割り当てることで、そのユーザーは従業員が使用するオブジェクトにアクセスできるようになるほか、従業員に対してアクセスが認証されているデータにもアクセスできるようになります。

Oracle Hyperion Performance Scorecard, Fusion Edition 従業員用に Shared Services でプロビジョニングする必要のあるアカウントを特定するには、『Oracle Hyperion Performance Scorecard 管理者ガイド』の第2章の記述にあるように、「ユーザー・アカウントを従業員と同期」コマンドを実行します。設計者のセキュリティ役割を持っている場合は、従業員を作成して空のアカウントに割り当てることもできます。





# Provider Servicesのユーザー・プロビジョニング

## この付録の内容

Shared Services における管理者役割のプロビジョニング .....	217
Analytic Provider Services Users ユーザーの Shared Services への移行 .....	218

## Shared Services における管理者役割のプロビジョニング

Shared Services を使用して、Provider Services にセキュリティを提供します。これは、管理サービスによって管理されます。Shared Services のセキュリティを使用するには、Provider Services を Shared Services に登録する必要があります。

Shared Services モードでは、Provider Services に割り当てる必要がある唯一の役割は、Analytic Server クラスタを作成、変更および削除する管理者役割です。管理者のみが、Provider Services に Oracle Essbase クラスタを作成できます。他の役割は割り当てられません。管理者以外のユーザーはクラスタに接続できるのみです。

▶ 管理者の役割をプロビジョニングするには、次の手順に従います:

- 1 Shared Services の Shared Services Console ([http://sharedservices\\_server:28080/interop/index.jsp](http://sharedservices_server:28080/interop/index.jsp))にログインします。

例: <http://myServer:28080/interop/index.jsp>。

- 2 ログオンに、管理者ユーザー名(デフォルトは admin)とパスワード(デフォルトは password)を入力します。


- 3 ログオンをクリックします。

- 4 ナビゲーション画面で、プロジェクトと APS 11.1.0 Servers を展開します。

Provider Services が表示されます。

- 5 プロビジョニングするユーザーを作成するには、次の手順に従います:

1. ナビゲーション・ペインで、「ユーザー・ディレクトリ」とディレクトリ(「ネイティブ・ディレクトリ」など)を1つ展開します。
2. 「ユーザー」を選択して、右クリックし、「新規」を選択します。
3. 情報を入力して、新規ユーザーを作成します。
4. 次へをクリックして、1つ以上の既存のグループにユーザーを追加するか、終了をクリックします。

5. OK をクリックしてユーザーを追加するか、追加作成をクリックしてユーザーの追加を続行します。
- 6 プロビジョニングする既存のユーザーを選択するには、次の手順に従います:
  1. ナビゲーション・ペインで、「ユーザー・ディレクトリ」とディレクトリ（「ネイティブ・ディレクトリ」など）を1つ展開します。
  2. Users を選択して右クリックし、すべて表示を選択します。
- 7 特定のユーザーを検索するには、ユーザーボックスにユーザー ID を入力し、検索をクリックします。
- 8 リストからユーザー ID を選択し、プロビジョニングを選択します。
- 9 ユーザーまたはグループのプロビジョニングで、APS 11.1.0 Servers を展開し、Provider Services の名前を展開します。
- 10 管理者を選択し、 を選択して役割を選択します。
- 11 保存をクリックします。

ユーザーは、Provider Services 管理者としてプロビジョニングされます。管理者ユーザー名とパスワードを使用して、Oracle Essbase Administration Services Console にログインし、Analytic Server クラスタの作成と管理を行います。
- 12 プロビジョニングの要約で、プロビジョニング情報を確認し、OK をクリックします。

## Analytic Provider Services Users ユーザーの Shared Services への移行

Oracle Hyperion Provider Services には他のユーザーがないため、Shared Services への移行は必要ありません。



# FDM

## この付録の内容

前提条件.....	219
FDM の役割.....	219
FDM ユーザーのプロビジョニング.....	219
FDM ユーザーの Shared Services セキュリティへの移行.....	220

## 前提条件

- Shared Services と FDM が実行されていること。
- Shared Services 管理者により次のタイプのユーザーが作成されていること：
  - FDM ユーザーをプロビジョニングできるプロビジョニング・マネージャ。デフォルトの Shared Services admin ユーザーを使用して FDM ユーザーをプロビジョニングすることもできます。
  - FDM 管理者。FDM 管理者役割を割り当てます。
- FDM のユーザーとグループ用の外部ユーザー・ディレクトリは、Shared Services で構成されます。
- FDM アプリケーションは、Shared Services で構成されます。

## FDM の役割

サポートされている役割のリストは、[175 ページの「FDM の役割」](#)を参照してください。

## FDM ユーザーのプロビジョニング

[第9章「プロビジョニングの管理」](#)のプロビジョニング・プロセスについては、[プロビジョニングの管理](#)を参照してください。

**注：** この手順では、プロビジョニングするユーザーとグループが Shared Services で構成されたユーザー・ディレクトリに存在することを前提とします。

FDM ユーザーをプロビジョニングするには、Shared Services と FDM Web クライアントでプロビジョニング・タスクを実行する必要があります。

▶ ユーザーをプロビジョニングするには、次の手順に従います:

**1 FDM ユーザーを Shared Services でプロビジョニングします。**

1. Oracle Hyperion(R) Shared Services Console を起動します。47 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
2. プロビジョニングするユーザーを見つけます。  
49 ページの「[ユーザー、グループ、役割および委任リストの検索](#)」を参照してください。
3. ユーザーを右クリックして、プロビジョニングを選択します。  
「プロビジョニング」タブが表示されます。
4. 各 FDM アプリケーションからユーザーに割り当てるアプリケーション役割を選択して、追加をクリックします。

**注:** 1 人のユーザーに割り当てる FDM アプリケーション役割は 1 つのみです。1 人のユーザーに FDM の場所ごとに別の役割を割り当てることができます。FDM アプリケーション役割を変更して、特定のオブジェクトへのアクセス権を追加または除去できます。詳細は、FDM の管理ガイドを参照してください。

選択した役割が、選択された役割に表示されます。

5. 保存をクリックします。  
プロビジョニング・プロセスが正常に終了したことを示すダイアログ・ボックスが開きます。
  6. OK をクリックします。
- 2 FDM Web クライアントにアクセスします。**
- 3 管理、ユーザーのメンテナンスの順に選択します。**  
「ユーザーのメンテナンス」画面が開きます。
- 4 ユーザー名から手順 1 でプロビジョニングしたユーザーを選択します。**
- 5 OK をクリックします。**  
「新規ユーザー」画面が開きます。
- 6 場所で、新規ユーザーにデフォルトの場所(または「すべての場所」)を割り当てます。**
- 7 グリッドの更新をクリックします。**

## FDM ユーザーの Shared Services セキュリティへの移行

Shared Services 管理者は、FDM ユーザー移行ユーティリティを使用して、既存の Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Fusion Edition ユーザーを Oracle Hyperion(R) Shared Services セキュリティに移行します。

▶ 既存ユーザーを移行してプロビジョニングするには、次の手順に従います:

1 スタート、プログラム、Oracle EPM System、Financial Data Quality Management、ワークベンチ、ユーザー移行の順に選択して、ユーザー移行ユーティリティを起動します。

2

3

4

5

6



---

# 用語集

---

！感嘆符(!)(bang character(!))を参照してください。

**#MISSING** 欠落データ(#MISSING)(missing data(#MISSING))を参照してください。

**2 パス(two-pass)** 他のメンバーの計算済の値に依存するメンバーを再計算するために使用される、Essbaseのプロパティです。2パスのメンバーは、2番目のパスの間にアウトラインから計算されます。

**Calculation Manager Planning, Financial Management** および Essbase のユーザーがグラフィカルな環境でビジネス・ルールを設計、検証および管理するために使用する計算モジュールです。

**CDF** カスタム定義関数(CDF)(custom-defined function (CDF))を参照してください。

**CDM** カスタム定義マクロ(CDM)(custom-defined macro (CDM))を参照してください。

**Cookie** Web サイトによってコンピュータ上に配置されたデータのセグメントです。

**essbase.cfg** Essbase のオプションの構成ファイルです。管理者は、このファイルを編集して Essbase サーバー機能をカスタマイズできます。一部の構成は、Essbase クライアントで使用することにより、Essbase サーバーの設定を上書きできます。

**EssCell** 特定の Essbase データベース・メンバーの交差を示す値を取得するために、Essbase スプレッドシート・アドインのセルに入力する関数です。

**ESSCMD** Essbase の操作を対話的に実行したり、バッチ・スクリプト・ファイルから実行したりするための、コマンドライン・インタフェースです。

**ESSLANG** テキスト文字を解釈するために使用されるエンコード方式を定義する Essbase 環境変数です。**エンコード方式(encoding)**も参照してください。

**ESSMSH** MaxL シェル(MaxL Shell)を参照してください。

**Extensible Markup Language(XML)** データに属性を割り当てるタグのセットで構成される言語です。スキーマに基づいて、複数のアプリケーションの間で解釈可能です。

**Extract-Transform-Load(ETL)** データを抽出してアプリケーションに移行するための、データ・ソース固有のプログラムです。

**GUI** グラフィカル・ユーザー・インタフェースです。

**ID(identity)** 外部認証におけるユーザーまたはグループの一意の ID です。

**Install\_Home** EPM System 製品がインストールされるディレクトリを示す変数です。同じコンピュータに複数のアプリケーションがインストールされている場合は、EPM System 製品の1つのインスタンスを指します。

**Interactive Reporting 接続ファイル(.oce)(Interactive Reporting connection file(.oce))** データベース API(ODBC、SQL\*Net、など)、データベース・ソフトウェア、データベース・サーバーのネットワーク・アドレス、データベース・ユーザー名などのデータベース接続情報を含むファイルです。管理者は、Interactive Reporting 接続ファイル(.oce)を作成して発行します。

**Java データベース接続(JDBC)(Java Database Connectivity (JDBC))** Java クライアントとリレーショナル・データベースにより使用されるクライアントとサーバー間の通信プロトコルです。JDBC インタフェースにより、SQL データベースのアクセスのための呼出しレベル API が提供されます。

**JSP** Java Server Page です。

**KeyContacts ガジェット(KeyContacts gadget)** Smart Space ユーザーのグループを含み、Smart Space Collaborator へのアクセスを提供します。たとえば、マーケティング・チームおよび開発チーム向けに個別の KeyContacts ガジェットを使用できます。

**LRO リンク・レポート・オブジェクト(LRO)(linked reporting object (LRO))**を参照してください。

**MaxL** Essbase で使用される多次元データベース向けアクセス言語です。データ定義の言語(MaxL DDL)とデータ操作の言語(MaxL DML)から構成されます。[MaxL DDL](#)、[MaxL DML](#)、および [MaxL シェル\(MaxL Shell\)](#)も参照してください。

**MaxL DDL** Essbase で、バッチまたは対話的なシステム管理のタスクに使用されるデータ定義の言語です。

**MaxL DML** Essbase で、データのクエリーと抽出に使用されるデータ操作の言語です。

**MaxL DML の計算済メンバー(calculated member in MaxL DML)**  
分析を目的として設計されたメンバーです。MaxL DML クエリーのオプションの WITH セクションで定義されます。

**MaxL DML の計算済メンバー(calculated member in MaxL DML)**  
分析を目的として設計されたメンバーです。MaxL DML クエリーのオプションの WITH セクションで定義されます。

**MaxL Perl モジュール(MaxL Perl Module)** Essbase MaxL DDL の一部である Perl モジュール(essbase.pm)です。このモジュールを Perl パッケージに追加すると、Perl プログラムから Essbase データベースにアクセスできます。

**MaxL シェル(MaxL Shell)** MaxL ステートメントを Essbase サーバーに渡すためのインタフェースです。MaxL シェルの実行可能ファイル(UNIX は essmsh、Windows は essmsh.exe)は、Essbase の bin ディレクトリに格納されています。

**MaxL スクリプト・エディタ(MaxL Script Editor)** 管理サービス・コンソールのスクリプト開発環境です。MaxL スクリプトで Essbase を管理するとき、テキスト・エディタと MaxL シェルの代替として MaxL スクリプト・エディタを使用できます。

**MDX(多次元式)(MDX (multidimensional expression))** リレーショナル・データベースで SQL を使用する際に、OLAP 準拠のデータベース向けに OLE DB に命令する言語です。「OLAPQuery」セクションのアウトライナを構築するとき、Interactive Reporting クライアントは要求を MDX の命令に変換します。ユーザーがクエリーを処理するとき、MDX がデータベース・サーバーに送信され、サーバーはクエリーの結果となるレコードを戻します。[SQL スプレッドシート\(SQL spreadsheet\)](#)も参照してください。

**MIME タイプ(MIME Type)** 多目的インターネットメール拡張仕様(Multipurpose Internet Mail Extension)です。アイテムのデータ・フォーマットを示す属性により、システムはオブジェクトを開くアプリケーションを判断します。ファイルの MIME タイプはファイル拡張子または HTTP ヘッダーにより判別されず。プラグインはブラウザに対して、サポートされる MIME タイプ、および各 MIME タイプに対応するファイル拡張子を通知します。

**NULL 値(null value)** データのない値です。NULL 値はゼロに等しくありません。

**ODBC** Open Database Connectivity の略です。データベース管理システム(database management system (DBMS))の情報処理方法に関係なく、あらゆるアプリケーションにより使用されるデータベース・アクセスのメソッドです。

**「OK」ステータス(OK status)** 集計ステータスの 1 つです。エンティティが集計済であり、組織階層の下にあるデータが変更されていないことを示します。

**OLAP メタデータ・カタログ(OLAP Metadata Catalog)** 統合サービスで、リレーショナル・データ・ソースから取り出されるデータの特性、ソース、場所およびタイプを記述したメタデータが含まれているリレーショナル・データベースです。

**OLAP モデル(OLAP model)** 統合サービスで、リレーショナル・データベースのテーブルおよび列から作成される論理モデル(スター・スキーマ)です。OLAP モデルは多次元データベースの構造を生成するために使用されます。

**Open Database Connectivity (ODBC)** 標準のアプリケーション・プログラミング・インタフェース(API)です。これにより、アプリケーションから複数のサードパーティ・データベースにアクセスできます。



**PL 勘定(P&L)(P&L accounts (P&L))** 損益勘定です。通常、会社の損益計算書を構成する費用勘定と収益勘定の集合を指します。

**POV(視点)(POV (point of view))** 行、列、またはページ軸に割り当てられていないメンバーを選択することにより、データ・フォーカスを設定する機能です。たとえば、FDM での POV の選択項目には、場所、期間、カテゴリ、およびターゲット・カテゴリが含まれる可能性があります。また、Smart View で POV をフィルタとして使用すると、Currency 次元を POV に割り当て、Euro メンバーを選択できます。データ・フォームで POV を選択すると、ユーロ建でデータが表示されます。

**Production Reporting** [SQR Production Reporting](#) を参照してください。

**PVA 期別価額メソッド(PVA)(periodic value method (PVA))**を参照してください。

**root メンバー(root member)** 次元分岐における最上位のメンバーです。

**RSC サービス(RSC services)** リモート・サービス・コンフィグレータで構成されるサービスです。リポジトリ・サービス、サービス・ブローカ、名前サービス、イベント・サービス、およびジョブ・サービスを含みます。

**Shared Services レジストリ(Shared Services Registry)** Shared Services データベースの一部です。Shared Services レジストリでは、インストールされたほとんどの EPM System 製品の情報(インストール・ディレクトリ、データベース設定、配置設定、コンピュータ名、ポート、サーバー、URL、依存サービス・データなど)を保管および再利用します。

**Smart Space Collaborator** ユーザーまたはシステムがメッセージを送信したり、Reporting and Analysis リポジトリのコンテンツを共有したりするためのサービスです。メッセージには、インスタント・メッセージのスタイル、ディスカッション、ミーティング、トースト・メッセージなどの様々な形態を使用できます。

**Smart Space クライアント・ソフトウェア(Smart Space client software)** クライアントのコンピュータ上で実行し、ガジェット、即時コラボレーション、および Reporting and Analysis リポジトリへのアクセスを提供します。Smart Space のワークフレームとガジェットから構成されます。

**SmartBook ガジェット(SmartBook gadget)** Reporting and Analysis リポジトリまたは URL からのドキュメントを含みます。SmartBook が開くとすべてのドキュメントがロードされるので、あらゆるコンテンツへのアクセスを即座に実行できます。

**SPF ファイル(SPF files)** SQR Production Reporting サーバーで作成される、プリンタに依存しないファイルです。フォント、間隔、ヘッダー、フッターなど、フォーマットされた実際のレポート出力を表します。

**SQL スプレッドシート(SQL spreadsheet)** SQL クエリーの結果セットを表示するデータ・オブジェクトです。

**SQR Production Reporting** データ・アクセス、データ操作、および SQR Production Reporting ドキュメント作成のための専用プログラミング言語です。

**Structured Query Language(SQL)** リレーショナル・データベースに対する指示を処理するために使用される言語です。

**TCP/IP Transmission Control Protocol/Internet Protocol(TCP/IP)**を参照してください。

**Transmission Control Protocol/Internet Protocol(TCP/IP)** 異なるオペレーティング・システムおよび内部アーキテクチャを持つコンピュータをリンクする標準的な通信プロトコルのセットです。TCP/IP を使用すると、LAN および WAN に接続する多様なコンピュータとの間でのファイルの交換、メールの送信、およびデータの保管が可能です。

**Unicode モードのアプリケーション(Unicode-mode application)** 文字テキストが UTF-8 でエンコードされている Essbase アプリケーションです。様々な言語に設定されているコンピュータを使用するユーザーが、アプリケーション・データを共有できます。

**Uniform Resource Locator(URL)** インターネットまたはイントラネット上のリソースのアドレスです。

**Web サーバー(Web server)** イントラネットまたはインターネットの Web ページや Web アプリケーションをホストするソフトウェアやハードウェアです。

**WITH セクション(WITH section)** MaxL DML で、オプションで使用できるクエリーのセクションです。メンバーのセットを定義する再利用可能な論理を作成するために使用されます。WITH セクションでセット(カスタムのメンバー)を一度定義すると、クエリー中に複数回参照できます。

**Workspace ページ(Workspace Page)** 複数のソース(ドキュメント、URL、その他のコンテンツ・タイプ)からのコンテンツを使用して作成されるページです。Oracle およびその他のソースからのコンテンツを集約するために使用可能です。

**ws.conf** Windows プラットフォーム用の構成ファイルです。

**wsconf\_platform** UNIX プラットフォーム用の構成ファイルです。

**XML Extensible Markup Language(XML)**を参照してください。

**XOLAP** アウトラインのメタデータのみを保管し、クエリー時にリレーショナル・データベースからすべてデータを取得する、Essbase の多次元データベースです。XOLAP は、集約ストレージ・データベースおよび重複メンバー名を含むアプリケーションをサポートします。

**Y 軸スケール(Y axis scale)** 「調査」セクションに表示される、チャートの Y 軸上の値の範囲です。たとえば、各チャートについて一意の Y 軸スケールを使用したり、すべての詳細チャートに同一の Y 軸スケールを使用したり、または列内のすべてのチャートに同一の Y 軸スケールを使用することが可能です。多くの場合、共通の Y 軸スケールを使用すると、一目でチャートを比較できるようになります。

**Zero Administration** サーバー上のプラグインの最新バージョン番号を識別するソフトウェア・ツールです。

**アウトライン(outline)** 多次元データベースのデータベース構造です。すべての次元、メンバー、タグ、タイプ、集計、および算術的關係を含みます。データは、アウトラインに定義された構造に応じてデータベースに保管されます。

**アウトライン同期(outline synchronization)** パーティション・データベースで、データベースのアウトラインの変更を他のデータベースに伝播するプロセスです。

**アクセサ(accessor)** データ・マイニング・アルゴリズムに関する入出力データ仕様です。

**アクセス権(access permissions)** リソースに対してユーザーが実行できる一連の操作です。

**アクティビティ・レベルの承認(activity-level authorization)** 操作対象のデータに依存せず、アプリケーションへのユーザー・アクセス、およびアプリケーションで実行できるアクティビティのタイプを定義します。

**アクティブ・サービス(active service)** 実行タイプが保留ではなく開始に設定されているサービスです。

**アセンブリ(assemblies)** EPM System 製品またはコンポーネントのインストール・ファイルです。

**値次元(value dimension)** 入力値、換算値、および集計の詳細を定義するために使用されます。

**アダプタ(adapter)** ターゲットおよびソース・システムのデータやメタデータにプログラムを統合するためのソフトウェアです。

**アップグレード(upgrade)** 以前のソフトウェア・リリースを現在のリリースに置換するプロセス、またはある製品を別の製品に置換するプロセスです。

**宛先(destination)** (1) Business Rules と Calculation Manager の場合、割り当てられた値が保管されるデータベース内の交差です。(2) Profitability and Cost Management 割当てでは、割り当てられる値を受け取るポイントです。

**アドホック・レポート(ad hoc report)** エンド・ユーザーがその場で作成するオンライン分析クエリーです。

**アプリケーション(application)** (1)特定のタスクまたはタスクのグループを実行するために設計されたソフトウェア・プログラムです(スプレッドシート・プログラム、データベース管理システムなど)。(2)必要とされる特定の分析およびレポートに対応するために使用される、次元および次元メンバーの関連するセットです。

**アプリケーションの通貨(application currency)** アプリケーションのデフォルトのレポート用通貨です。

**アペンダ(appender)** 宛先を意味する Log4j の用語です。

**安全率(Risk Free Rate)** より安全な投資から期待される利回りです(米国の長期国債など)。

**暗黙の共有(implied share)** メンバーが1つ以上の子を持ち、集計されている子は1つのみである場合、親と子が値を共有します。

**アーチファクト(artifact)** 個別のアプリケーションまたはリポジトリ・アイテムです(スクリプト、フォーム、ルール・ファイル、Interactive Reporting ドキュメント、財務レポートなど)。オブジェクトとも呼ばれます。

**移行(migration)** アプリケーション、アーチファクト、またはユーザーを、別の環境またはコンピュータにコピーするプロセスです。たとえば、テスト環境から実稼働環境にコピーします。

**移行監査レポート(migration audit report)** 移行ログから生成されるレポートです。アプリケーションの移行に関する追跡情報を提供します。

**移行スナップショット(migration snapshot)** アプリケーションの移行のスナップショットです。移行ログに取込まれます。

**移行定義ファイル(.mdf)(migration definition file(.mdf))** アプリケーションの移行に使用される移行パラメータを含むファイルです。これによりバッチ・スクリプトを処理できます。

**移行ログ(migration log)** アプリケーションの移行のすべてのアクションとメッセージを取込むログ・ファイルです。

**依存エンティティ(dependent entity)** 組織内の他のエンティティに属するエンティティです。

**一意でないメンバー名(non-unique member name)** [重複メンバー名\(duplicate member name\)](#)を参照してください。

**一意のメンバー名(unique member name)** データベース・アウトライン内に一度のみ存在する、共有されないメンバーの名前です。

**一意メンバーのアウトライン(unique member outline)** 重複メンバー名を使用できないデータベース・アウトラインです。

**イメージ・ブックマーク(image bookmarks)** Web ページやリポジトリ・アイテムへのグラフィック・リンクです。

**因果関係マップ(cause and effect map)** 企業戦略を形成する要素の関連、およびこれらの要素が組織の戦略目標を達成するためにどのように連動するかを示します。因果関係マップのタブは、各戦略マップについて自動的に作成されます。

**インデックス(index)** (1)疎データの組合せによりブロック・ストレージ・データベースでデータを取得するメソッドです。(2)インデックス・ファイルを指します。

**インデックス・キャッシュ(index cache)** インデックス・ページを含むバッファです。

**インデックス項目(index entry)** 疎次元の交差へのポインタです。インデックス項目はディスク上のデータ・ブロックをポイントし、オフセットを使用してセルを検索します。

**インデックス・ファイル(index file)** ブロック・ストレージのデータ取得情報を保管する Essbase ファイルです。ディスクに常駐し、インデックス・ページを含みます。

**インデックス・ページ(index page)** インデックス・ファイルの下位区分です。データ・ブロックを指すポインタを含みます。

**イントロスペクション(introspection)** データベース固有の関係に基づいて階層を判断するために、データ・ソースを詳細に検査することを指します。[スクレーピング\(scraping\)](#)と対比してください。

**インポート・フォーマット(import format)** FDM で、ソース・ファイルの構造を定義します。これにより、ソース・データ・ファイルを FDM データのロード位置にロードできます。

**「影響」ステータス(IMPACTED status)** 親エンティティに集計する子エンティティの変更を示します。

**円グラフ(pie chart)** 1つのデータ・セットを扇形に分割された円形で示すグラフです。

**エンコード方式(encoding)** テキストの作成、保管、表示のためにビット組合せを文字にマッピングするメソッドの1つです。各エンコード方式には UTF-8 などの名前が付けられています。各エンコード方式では、それぞれの値は特定のビット組合せにマッピングされています。たとえば、UTF-8 では大文字の A は HEX41 にマッピングされています。[コード・ページ\(code page\)](#)および[ロケール\(locale\)](#)も参照してください。

**エンタープライズ・ビュー(Enterprise View)**

Administration Services の機能の1つです。グラフィカルなツリー・ビューを使用して Essbase 環境を管理できます。エンタープライズ・ビューを使用すると、Essbase アーチファクトを直接操作できます。

**エンティティ(entity)** 部門、子会社、工場、地域、製品など、組織での財務報告単位となる組織単位を示す次元です。

**エージェント(agent)** アプリケーションやデータベースの開始と停止、ユーザー接続の管理、ユーザー・アクセスのセキュリティ対策を行う Essbase サーバー・プロセスです。このエージェントは、ESSBASE.EXE と呼ばれます。

**お気に入りガジェット(Favorites gadget)** Reporting and Analysis ドキュメントへのリンクと URL を含みません。

**親(parents)** 直接レポートする依存エンティティを1つ以上含むエンティティです。親はエンティティであると同時に少なくとも1つのノードに関連しているため、エンティティ、ノード、および親の情報が関連付けられています。

**親の調整(parent adjustments)** 親に関連して子に転記される仕訳エントリです。

**折れ線グラフ(line chart)** データ・セットを最大 50 個表示できるグラフです。各データ・セットは線で示されます。折れ線グラフで絶対値やパーセントを表す際に、前の線の上に次の線を重ねていく形で表示することも可能です。

**オンライン分析プロセス(OLAP)(online analytical processing (OLAP))** 複数ユーザーによりクライアントとサーバー間の計算を行うことができる多次元の環境です。集計された企業データをリアル・タイムで分析するユーザーが使用します。OLAP システムの機能には、ドリルダウン、データのピボット、複素数計算、トレンド分析、およびモデリングが含まれます。

**会社間消去(intercompany elimination)** **消去(elimination)** を参照してください。

**会社間照合(intercompany matching)** アプリケーション内の会社間勘定科目の対の残高を比較するプロセスです。会社間の受取勘定科目は、対応する会社間の支払い勘定科目と比較されます。一致する勘定科目は、組織の集計合計から会社間のトランザクションを消去するために使用されます。

**会社間照合レポート(intercompany matching report)** 会社間勘定科目の残高を比較して、勘定の収支が合っているかどうかを示すレポートです。

**拡張リレーショナル・アクセス(Advanced Relational Access)** リレーショナル・データベースと Essbase 多次元データベースの統合を指します。これにより、すべてのデータがリレーショナル・データベースに保持され、Essbase データベースに存在する要約レベルのデータにマッピングされます。

**確認レベル(review level)** プロセス管理の確認ステータス・インディケータの1つです。「開始していません」、「第1パス」、「送信済」、「承認済」、「発行済」など、プロセス単位のレベルを示します。

**加重(weight)** スコアカードのアイテムに割り当てられた値です。スコアボード全体のスコアの計算において、そのアイテムの相対的な重要性を示します。スコアカードのすべてのアイテムの加重を総計すると 100%になります。たとえば、ある製品について新機能を開発する重要性を認めるため、開発者のスコアカード上の New Features Coded のメジャーに Number of Minor Defect Fixes のメジャーよりも大きな加重が割り当てられる可能性があります。

**カスケード(cascade)** メンバー値のサブセットに対して複数のレポートを作成するプロセスです。

**カスタム・カレンダー(custom calendar)** システム管理者が作成したカレンダーです。

**カスタム次元(custom dimension)** ユーザーが作成および定義する次元です。チャンネル、製品、部署、プロジェクト、または地域がカスタム次元になることがあります。

**カスタム定義関数(CDF)(custom-defined function (CDF))** Java で開発され、MaxL により Essbase の標準計算スクリプト言語に追加された、Essbase 計算関数です。**カスタム定義マクロ(CDM)(custom-defined macro (CDM))** も参照してください。

**カスタム定義マクロ(CDM)(custom-defined macro (CDM))** Essbase のマクロです。Essbase 計算機の関数および専用マクロ関数を使用して記述されます。カスタム定義マクロが使用する Essbase の内部マクロ言語により、計算関数を組み合わせることが可能となり、複数の入力パラメータが処理されます。**カスタム定義関数(CDF)(custom-defined function (CDF))** も参照してください。

**カスタム・プロパティ(custom property)** ユーザーが作成した次元または次元メンバーのプロパティです。

**カスタム・レポート(custom report)** 設計レポート・モジュールで作成する複雑なレポートです。コンポーネントの様々な組合せによって構成されます。

**型付きメジャー(typed measure)** Essbase で、メジャーが示されている次元で Text または Date というタグが付けられたメンバーです。セルの値は事前定義されたテキストまたは日付として表示されます。

**カタログ・ペイン(Catalog pane)** アクティブ・セクションで使用可能な要素のリストを表示します。クエリーがアクティブ・セクションの場合はデータベース・テーブルのリストが表示されます。ピボットがアクティブ・セクションの場合は結果列のリストが表示されます。ダッシュボードがアクティブ・セクションの場合は埋込み可能セクションのリスト、グラフィック・ツール、およびコントロール・ツールが表示されます。

**カテゴリ(categories)** データ編成に使用するグループです(月など)。

**株式ベータ(Equity Beta)** 株のリスクを指します。その株の収益と市場利益率の差異により測定され、ベータと呼ばれるインデックスで示されます。たとえば、市場利益率が1%変動するのに伴って株の収益が通常1.2%変動するのであれば、その株のベータ値は1.2です。

**可変属性(varying attribute)** 1つ以上の次元で変化する属性の関連付けです。これらの次元との関連で値を追跡するために使用できます。たとえば、Product次元に関連付けられているSales Representativeという可変属性を使用すると、複数の販売員によるCustomer Salesの値を時間次元との関連で追跡できます。また、5月に特定の販売員が担当した製品を検索するといった場合にも、可変属性をメンバー選択で使用できます。

**カレンダー(calendar)** ユーザー定義の期間、およびその関係です。暦年または会計年度は、Q1、Q2、Q3、およびQ4から構成されます。

**為替レート(exchange rate)** ある通貨から別の通貨に変換する際に使用する数値です。たとえば、1米ドルをユーロに変換する場合、為替レートの0.8936に米ドルを乗じます。これにより、1米ドルに相当するユーロは0.8936と算出されます。

**為替レート・タイプ(exchange rate type)** 為替レートの識別子です。異なるレートのタイプが使用されるのは、一定期間および年間について複数のレートが存在することがあるためです。従来より、期末時点でのレートを当期の平均レートおよび期末レートとして定義します。その他、ヒストリカル・レート、予算レート、予測レートなどのレート・タイプがあります。レート・タイプは特定の時点に適用されません。

**換算(translation)** **通貨換算(currency conversion)**を参照してください。

**換算レート(conversion rate)** **為替レート(exchange rate)**を参照してください。

**勘定科目次元(accounts dimension)** 高機能の会計を可能にする次元タイプです。勘定科目として定義可能な次元は1つのみです。

**勘定科目の種別(account type)** 時間の経過に伴う勘定科目の値のフロー、およびその符号の振る舞いを示します。勘定科目の種別のオプションには、支出、収益、資産、負債、および資本が含まれます。

**勘定科目の消去(account eliminations)** 集計時に集計ファイル内で値がゼロに設定された勘定科目です。

**勘定科目のブロック(account blocking)** 集計ファイルで勘定科目が入力データを受け入れるプロセスです。ブロックされた勘定科目は加算集計プロセスで値を受け取りません。

**関数(function)** 値またはデータベース・メンバーを戻すルーチンです。

**感嘆符(!)(bang character(!))** 一連のレポート・コマンドを終了して、データベースからの情報を要求する文字です。レポート・スクリプトは感嘆符を使用して終了する必要があります。レポート・スクリプト内では複数の感嘆符を使用できます。

**管理対象サーバー(managed server)** 内蔵されたJava仮想マシン(Java Virtual Machine (JVM))で実行されるアプリケーション・サーバー・プロセスです。

**関連勘定科目(Related Accounts)** 勘定科目の構造体では、すべてのメイン勘定科目および関連勘定科目は同一のメイン勘定科目番号にグループ化されます。メイン勘定科目と関連勘定科目は、勘定科目番号の最初の接尾辞により区別されます。

**外部でトリガーされるイベント(externally triggered events)** ジョブの実行をスケジュールするための、時間ベースでないイベントです。

**外部認証(external authentication)** OracleのHyperionアプリケーションの外部に保管されたユーザー情報を使用して、アプリケーションにログオンすることを指します。ユーザー情報の保管場所は、通常はMSADやNTLMなどの企業ディレクトリとなります。

**ガジェット(gadget)** EPMのコンテンツを容易に表示し、Reporting and Analysisのコア機能にアクセスできる、軽量で単純な専用アプリケーションです。

**期別価額メソッド(PVA)(periodic value method (PVA))** 通貨換算方法の1つです。一定期間における期別の為替レート値を適用して通貨を算出します。

**基本エンティティ(base entity)** 組織の構造の一番下に位置し、他のエンティティを持たないエンティティです。

**基本次元(base dimension)** 1つ以上の属性次元に関連付けられている標準次元です。たとえば、製品に香りがあるとすると、Product 次元が Flavors 属性次元の基本次元となります。

**基本通貨(base currency)** 日常の業務トランザクションが行われる通貨です。

**期末(ending period)** チャートの日付範囲を調整できる期間です。たとえば、月の期末の場合、当月末までの情報がチャートに表示されます。

**キャッシュ(cache)** データを一時的に保持する、メモリー内のバッファです。

**キューブ(cube)** 3つ以上の次元を含むデータのブロックです。Essbase データベースはキューブです。

**キューブ・スキーマ(cube schema)** Essbase Studio におけるメジャーおよび階層などのメタデータ要素です。キューブの論理モデルを指します。

**キューブ配置(cube deployment)** Essbase Studio で、アウトラインを構築してデータを Essbase アプリケーションおよびデータベースにロードするために、モデルのロード・オプションを設定するプロセスです。

**兄弟(sibling)** 他の子メンバーと同じ世代で、すぐ上に同じ親を持つ子メンバーです。たとえば、メンバー Florida とメンバー New York はメンバー East の子であり、互いの兄弟です。

**共有 Workspace ページ(Shared Workspace Page)** 専用のシステム・フォルダに保管され、組織全体で共有する Workspace ページです。権限を持つユーザーは、共有 Workspace ページの「ナビゲート」メニューからアクセスできます。

**共有メンバー(shared member)** ストレージ・スペースを別の同名メンバーとの間で共有するメンバーです。Essbase アウトラインに複数回現れるメンバーが重複して計算されることを防ぎます。

**行の抑制(suppress rows)** 欠落値を含む行を除外し、スプレッドシート・レポートからの文字にアンダースコアを付けます。

**クエリー(query)** データ・プロバイダからの情報の要求です。リレーショナル・データ・ソースにアクセスする場合などに使用されます。

**クエリー・ガバナー(query governor)** Essbase Integration Server のパラメータ、または Essbase サーバーの構成設定です。データ・ソースに対して実行されるクエリーの時間とサイズをコントロールします。

**クラスタ(cluster)** 単一リソースとして動作して、タスクの負荷を共有し、フェイルオーバーのサポートを提供する一連のサーバーまたはデータベースです。システムにおける単一障害点となるサーバーやデータベースを排除します。

**クラスタ棒グラフ(clustered bar charts)** カテゴリを横に並べたグラフです。並列カテゴリの分析に便利です。垂直棒グラフでのみ使用されます。

**繰返し(iteration)** 同じバージョンのデータを修正して移行する予算またはプランニング・サイクルのパスです。

**クリーン・ブロック(clean block)** 計算スクリプトによってすべての次元が一度に計算された場合、または計算スクリプトで SET CLEARUPDATESTATUS コマンドが使用された場合の、データベース全体の計算が完了しているデータ・ブロックを指します。

**クロス集計レポート(crosstab reporting)** テーブル・フォーマットでデータの分類および集計を行うことです。テーブルのセルには、交差する分類に合致するデータの集計結果が保管されています。たとえば、製品販売情報のクロス集計レポートに、列見出しとして Small や Large などのサイズ属性、行見出しとして Blue や Yellow などの色属性を表示できます。テーブルの中で Large と Blue が交差するセルには、サイズが Large のすべての Blue 製品の総売上げが表示されます。

**グリッドの POV(grid POV)** 行、列、またはページの交差に次元を配置せずに、グリッド上で次元メンバーを指定する手段です。レポート・デザインはグリッド・レベルで POV の値を設定し、ユーザーの POV がグリッドに影響を与えないように防ぐことができます。次元に含まれるグリッドの値が1つのとき、その次元は行、列、またはページではなくグリッドの POV に配置します。

**グループ(group)** 複数のユーザーに同様のアクセス権を割り当てるためのコンテナです。

**グローバル・レポート・コマンド(global report command)** 別のグローバル・コマンドに置き換えられるか、またはファイルが終了するまで実行し続けるレポート・スクリプトのコマンドです。

**計算(calculation)** データを集約したり、データベースで計算スクリプトを実行したりするプロセスです。

**計算結果アイテム(computed item)** データベースやキューブに物理的に保管される列に対して、仮想の列を指します。クエリー実行時にデータベースにより、または Interactive Reporting Studio の「結果」セクションで計算されます。計算結果アイテムは、関数、データ・アイテム、およびダイアログ・ボックスで提供される演算子に基づくデータ計算であり、レポートに含まれたり他のデータの計算に再利用されることがあります。

**計算スクリプト(calc script)** データベースの集計方法や集約方法を定義する一連のコマンドです。集計プロセスとは別に、割当てや他の計算ルールを指定するコマンドが計算スクリプトに含まれることもあります。

**系統データ(genealogy data)** 割当ての計算後にオプションで生成される追加データです。このデータにより、すべての割当てでステップにわたるコストまたは収益のフローについてレポートを作成できます。

**系列(lineage)** 異なるメタデータ要素間の関係です。1 つメタデータ要素が他の 1 つ以上のメタデータ要素からどのように導き出されるかを示し、メタデータ要素を物理ソースまでトレースします。Essbase Studio では、この関係を系列ビューでグラフィカルに表示できます。 [トレーサビリティ\(traceability\)](#) も参照してください。

**結合(join)** 特定の列または行の共通のコンテンツに基づく 2 つのリレーショナル・データベース・テーブルまたはトピックの間のリンクです。通常、異なるテーブルまたはトピック内の同一または類似するアイテムの間で結合が起きます。たとえば、Customer テーブルと Orders テーブルで Customer ID の値が同一である場合、Customer テーブル内のレコードが Orders 内のレコードに結合します。

**欠落データ(#MISSING)(missing data(#MISSING))** ラベル付けされた場所のデータが存在しないか、値が含まれていないか、データが入力されていないかまたはロードされていないことを示すマーカーです。たとえば、勘定科目に当期ではなく過去または将来の期間のデータが含まれている場合は、欠落データが存在します。

**権限(permission)** データまたは他のユーザーとグループを管理するために、ユーザーおよびグループに付与されるアクセス・レベルです。

**検索ガジェット(Search gadget)** Reporting and Analysis のリポジトリを検索します。検索ガジェットは、ドキュメントをインポートしたときに設定されたドキュメントのキーワードや説明で一致を探します。

**検証(validation)** アウトラインに対してビジネス・ルール、レポート・スクリプト、またはパーティション定義をチェックして、チェック対象のオブジェクトが有効であることを確認するプロセスです。たとえば、FDM の検証ルールにより、FDM からターゲット・アプリケーションにデータがロードされた後で特定の条件が満たされているかどうかを確認されます。

**限界税率(Marginal Tax Rate)** 税引き後の負債コストを計算するために使用されます。最近計上された所得に適用される税率(所得額に適用される最高の税率区分の税率)を示し、連邦税、州税、および地方税を含みます。課税対象所得と税率区分の現在のレベルに基づいて、限界税率を予測できます。

**現地通貨(local currency)** 入力通貨タイプです。入力通貨タイプが指定されていない場合は、現地通貨がエンティティの基本通貨に一致します。

**原点(origin)** 2 つの軸の交差です。

**子(child)** データベース・アウトライン内で親を持つメンバーです。

**高機能計算(intelligent calculation)** 最後に実行された計算以降に更新されたデータ・ブロックを追跡する計算メソッドです。

**交差(intersection)** 多次元データベース内の次元の交差を表すデータの単位です。ワークシートのセルです。

**構成ファイル(configuration file)** セキュリティ・プラットフォームでは、XML ドキュメントの構成を製品の管理者やインストール・プログラムに依存しています。XML ドキュメントは有意義なプロパティの値を示し、企業の認証シナリオに関連する場所と属性を指定するように変更する必要があります。

**構造ビュー(structure view)** トピックをコンポーネントのデータ・アイテムの単純なリストとして表示します。

**構築メソッド(build method)** データベース・アウトラインを変更するために使用するメソッドの一種です。データ・ソース・ファイルのデータ・フォーマットに基づいて構築メソッドを選択します。

**個人の反復タイム・イベント(personal recurring time events)** 再利用可能なタイム・イベントです。作成したユーザーのみがアクセスできます。

**個人用変数(personal variable)** 複雑なメンバー選択の特定の選択ステートメントです。

**個人用ページ(personal pages)** リポジトリ情報を参照するための個人用ウィンドウです。表示する情報、およびレイアウトと色を選択します。

**コミット・アクセス(committed access)** Essbase のトランザクションの処理方法に影響する Essbase カーネルの分離レベルです。コミット・アクセスでは、同時トランザクションは書き込みロックを長期間保持し、予測可能な結果を生成します。

**コンテキスト変数(context variable)** タスクフロー・インスタンスのコンテキストを特定するために、特定のタスクフローに定義される変数です。

**コンテンツ(content)** リポジトリに保管されたあらゆるタイプのファイルの情報です。

**コンテンツ・ブラウザ(content browser)** コンテンツを参照して選択し、Workspace ページに配置するために使用できるコンポーネントです。

**コントリビューション(contribution)** 子エンティティから親に追加される値です。それぞれの子は親に対するコントリビューションを持ちます。

**コントロール・グループ(controls group)** 証明書および評価の情報を維持および整理するために FDM で使用されます。サーベンス・オクスリ(Sarbanes-Oxley)法の規定に準拠する上で特に役立ちます。

**コード・ページ(code page)** 一連のテキスト文字へのビット組合せのマッピングです。コード・ページは、それぞれ異なる文字セットをサポートします。各コンピュータには、ユーザーが必要とする言語の文字セットについてのコード・ページ設定が含まれます。このドキュメントでは、コード・ページは非 Unicode のエンコードのビット組合せに文字をマッピングします。[エンコード方式\(encoding\)](#)も参照してください。

**差異(variance)** プラン値と実績値などの 2 つの値の差です。

**サイクル・スルー(cycle through)** データベース内で複数パスを実行し、同時に計算することを指します。

**再構成 URL(reconfigure URL)** ユーザーが Workspace にログオンしているときに、サーブレット構成設定を動的に再ロードするための URL です。

**再構築(restructure)** データベース・インデックス、また場合によってはデータ・ファイルの再生成もしくは再構築を行う操作です。

**最新(latest)** 最新の期間として定義されたメンバーからデータ値を取得するために使用される、スプレッドシートのキー・ワードです。

**最上位メンバー(top-level member)** 次元のアウトラインで、階層ツリーの一番上に位置する次元メンバーです。次元メンバー間に階層の関係がない場合は、ソート順で最初のメンバーを指します。階層の関係がある場合、最上位メンバーの名前が次元名と同一となるのが一般的です。

**サブ勘定科目のナンバリング(Subaccount Numbering)** 不連続の整数を使用してサブ勘定科目のナンバリングを行うためのシステムです。

**サブスクライブ(subscribe)** アイテムまたはフォルダが更新されるときに自動的に通知を受け取るように、アイテムまたはフォルダにフラグを付けることを指します。

**サポート詳細(supporting detail)** セルの値を算出した計算および仮定です。

**三角換算法(triangulation)** 第 3 の共通通貨を介して、ある通貨から別の通貨に残高を変換する手段です。欧州の場合はユーロが共通通貨として使用されます。たとえば、フランス・フランからイタリア・リラに変換する場合、ユーロが共通通貨として定義されます。したがって、フランの残高をリラに変換するには、フランからユーロに変換してから、ユーロからリラに変換します。

**算出ステータス(calculation status)** 一部の値または式の計算が変更されたことを示す集計ステータスです。影響を受けるエンティティについて正しい値を取得するには、再集計する必要があります。

**算術演算子(mathematical operator)** 式およびアウトラインでのデータの計算方法を定義する記号です。標準的な算術演算子またはブール演算子が使用されます(+、-、\*、/、%など)。



**算術データ・ロード(arithmetic data load)** データベース内の値に対して演算(たとえば各値に 10 を加算するなど)を実行するデータ・ロードです。

**サンプリング(sampling)** エンティティの特性を判別するためにエンティティの代表的な部分を選択するプロセスです。[メタデータのサンプリング\(metadata sampling\)](#)も参照してください。

**サービス(services)** ビジネス・アイテムを取得、変更、追加、および削除するためのリソースです(権限付与、認可など)。

**サーブレット(servlet)** Web サーバーが実行可能なコンパイルされたコードです。

**残高勘定科目(balance account)** 特定の時点の符号なしの値を保管する勘定科目の種別です。

**式(formula)** データベース・メンバーを計算する演算子、関数、次元およびメンバー名、および定数の組合せです。

**式の保存(preserve formulas)** データ取得中にワークシート内に保持される、ユーザーが作成した式です。

**資産勘定科目(asset account)** 勘定科目の種別の 1 つです。会社の資産の値を保管します。

**支出勘定科目(expense account)** 期別の値と年次累計値を保管する勘定科目です。値が正の場合は、純利益が減ります。

**市場リスク割増額(Market Risk Premium)** 国債よりもリスクの高い投資を投資家に呼びかけるための、安全率に追加して支払われる利回りです。予測される市場利回りから安全率を差し引いて計算されます。この数字が示すモデルは将来の市況に近いものとなる必要があります。

**システム抽出(system extract)** データをアプリケーションのメタデータから ASCII ファイルに転送します。

**子孫(descendant)** データベース・アウトラインで親の下に位置するメンバーです。たとえば、年、四半期および月を含む次元では、メンバー Qtr2 およびメンバー April がメンバー Year の子孫となります。

**シナリオ(scenario)** データを分類するための次元です(Actuals、Budget、Forecast1、Forecast2 など)。

**支配比率(percent control)** 所属するグループ内でエンティティが受ける支配の程度です。

**収益勘定科目(income account)** 期別の値と年次累計値を保管する勘定科目です。値が正の場合は純利益が増えます。

**集計(consolidation)** 従属するエンティティからのデータを親エンティティに集約するプロセスです。たとえば、次元 Year に Qtr1、Qtr2、Qtr3、および Qtr4 というメンバーが含まれている場合、この集計は Year になります。

**集計比率(percent consolidation)** 親に集計された子の値の割合です。

**集計ファイル(\*.cns)(consolidation file(\*.cns))** 集計ファイルは、集計のプロセスでチャートまたはツリー・ビューを使用して Strategic Finance ファイルを追加、削除、移動するためのグラフィカル・インタフェースです。集計ファイルを使用して、集計を定義したり変更したりすることも可能です。

**集計ファイル(親)(consolidated file(Parent))** 事業部門のすべてのファイルが集計されたファイルです。集計の定義を含みます。

**集計ルール(consolidation rule)** 階層のノードを集計する際に実行されるルールを特定します。親の残高が正しく集計されるように、顧客固有の適切な式を含めることができます。消去プロセスは、集計ルール内でコントロールできます。

**修飾名(qualified name)** 定まったフォーマットのメンバー名です。重複メンバーのアウトラインにおいて、重複メンバー名を区別します([Market].[East].[State].[New York]、[Market].[East].[City].[New York] など)。

**集約(aggregation)** 集約ストレージ・データベースの値をロール・アップおよび保管するプロセスです。または集約プロセスによって保管された結果を指します。

**集約関数(aggregate function)** 関数の一種です。合計、平均の計算など、データの要約や分析を実行します。

**集約スクリプト(aggregation script)** 集約を構築するための集約ビューの選択を定義するファイルです。集約ストレージ・データベースのみで使用されます。

**集約ストレージ・データベース(aggregate storage database)**

潜在的に大きな多数の次元に分類される疎に分散した大規模なデータをサポートするように設計されたデータベースのストレージ・モデルです。上位のメンバーと式は動的に計算され、選択されたデータ値は集約、保管されます。通常、集約の合計所要時間が改善されます。

**集約制約(aggregate limit)** 集約要求ライン・アイテムや集約メタトピック・アイテムに設定する制約です。

**集約セル(aggregate cell)** 複数のセルから構成されるセルです。たとえば、Children(Year)を使用するデータ・セルは、Quarter 1、Quarter 2、Quarter 3、および Quarter 4 のデータを含む 4 つのセルに展開されます。

**集約ビュー(aggregate view)** 各次元内のメンバーのレベルに基づく集約セルの集合です。計算時間を短縮するため、値は事前に集約されて集約ビューとして保管されています。取得は集約ビューの合計から開始され、合計に追加されます。

**出資比率(percent ownership)** エンティティが親によって所有される程度です。

**手動ステージ(manual stage)** 完了するためにユーザーが操作する必要があるステージです。

**消去(elimination)** 組織内のエンティティ間でのトランザクションをゼロに設定(消去)するプロセスです。

**消去済勘定科目(Eliminated Account)** 集計ファイルに表示されない勘定科目です。

**詳細チャート(detail chart)** 要約チャートで、詳細な情報を提供するチャートです。詳細チャートは要約チャートの下にある「調査」セクションに列で表示されます。要約チャートに円グラフが表示される場合、その下の詳細チャートには円の各区分が示されます。

**使用済ブロック(dirty block)** 最後に計算された後に変更されたセルを含むデータ・ブロックです。子ブロックが使用済である(つまり更新されている)場合、上位のブロックにも使用済のマークが付けられます。

**シリアル計算(serial calculation)** デフォルト計算設定です。1 つの計算を複数のタスクに分割して、一度に 1 つのタスクを計算します。

**仕訳(JE)(journal entry(JE))** シナリオと期間の残高勘定科目の借方または貸方に計上する調整の集合です。

**シングル・サインオン(single sign-on)** 外部のログイン情報を使用するシングル・ログインにより、複数の EPM System 製品にアクセスできる機能です。

**信頼できるパスワード(trusted password)** ある製品について認証されたユーザーが、パスワードを再入力せずに他の製品にもアクセスできるようにするパスワードです。

**信頼できるユーザー(trusted user)** 認証されたユーザーです。

**時間次元(time dimension)** データが示す期間を定義します(会計期間、暦時間など)。

**軸(axis)** (1)測定と分類に使用されるグラフィックを貫通する直線です。(2)多次元のデータを整理および関連付けるために使用されるレポートのアスペクトです(フィルタ、ページ、行、列など)。たとえば、Simple Basic でデータ・クエリーを実行する場合、軸では Qtr1、Qtr2、Qtr3、および Qtr4 の値の列を定義できます。Market と Product の階層による合計が行データとして取得されます。

**時系列レポート作成(time series reporting)** カレンダーの日付(年、四半期、月、週など)に基づくデータのレポート作成プロセスです。

**次元(dimension)** ビジネス・データを整理して値の抽出や保持のために使用されるデータ・カテゴリです。通常、次元には関連するメンバーをグループ化した階層が含まれます。たとえば、Year 次元は多くの場合四半期、月などの期間の各単位ごとのメンバーが含まれます。

**次元間の無関係性(interdimensional irrelevance)** 次元が他の次元と交差しない状況を指します。次元に含まれるデータは、交差しない次元はアクセスできないため、交差しない次元は無関係となります。

**次元構築(dimension build)** Essbase アウトラインに次元およびメンバーを追加するプロセスです。

**次元構築のルール(dimension build rules)** データ・ロードのルールに似た仕様です。Essbase でアウトラインを変更するために使用されます。変更は外部データ・ソース・ファイルのデータに基づきます。

**次元性(dimensionality)** MaxL DML において、セットで示された次元およびその順序です。たとえば、{(West, Feb), (East, Mar)} というセットの場合は、含まれている 2 つのタプルはいずれも次元(Region, Year)を反映しているため、同一の次元性であることとなります。

**次元タイプ(dimension type)** 定義済の機能を使用可能にする次元のプロパティです。時間のタグが付けられた次元は、定義済のカレンダー機能を持ちます。

**次元タブ(dimension tab)** 「ピボット」セクションで、行と列の間でデータのピボットを実行するためのタブです。

**次元テーブル(dimension table)** (1)特定のビジネス・プロセスに関する多数の属性を含むテーブルです。(2)Essbase 統合サービスでは、Essbase の潜在的な次元を定義する 1 つ以上のリレーショナル・テーブルのための、OLAP モデルのコンテナを指します。

**事前計算(precaculation)** ユーザーが取得する前にデータベースで計算を実行することです。

**持続性(persistence)** Essbase の操作や設定に対する継続的または長期的な影響です。たとえば、ユーザー名やパスワードの有効性について、Essbase 管理者がその持続性を制限することがあります。

**実行時プロンプト(runtime prompt)** ビジネス・ルールが実行される前にユーザーが入力または選択する変数です。

**実績の頻度(result frequency)** 日付のセットを作成して結果を収集および表示するために使用されるアルゴリズムです。

**自動逆仕訳(auto-reversing journal)** 次期に逆仕訳する調整を入力するための仕訳です。

**自動ステージ(automated stage)** ユーザーの操作を必要としないステージです(データ・ロードなど)。

**従業員(employee)** 特定のビジネス・オブジェクトに対して責任を負う(または関与する)ユーザーです。従業員は組織に勤めている必要はありません(コンサルタントなど)。従業員は、認可のためにユーザー・アカウントに関連付けられている必要があります。

**重要事業領域(CBA)(critical business area(CBA))** 部門、地域、工場、コスト・センター、プロフィット・センター、プロジェクト・チーム、またはプロセスに編成された個人またはグループです。責任チームまたはビジネス領域とも呼ばれます。

**重要成功要因(CSF)(critical success factor (CSF))** 戦略目標を達成するために確立および維持する必要のある能力です。戦略目標または重要プロセスにより所有され、1 つ以上のアクションに対する親となります。

**上位レベル・ブロック(upper-level block)** 少なくとも 1 つの疎メンバーが親レベルのメンバーになっているデータ・ブロックです。

**冗長データ(redundant data)** 重複データ・ブロックです。Essbase で更新されたブロックがコミットされるまで、トランザクションの間保持されます。

**ジョブ(jobs)** 出力生成のために起動できる特殊なプロパティを持つドキュメントです。ジョブには Interactive Reporting、SQR Production Reporting、または汎用ドキュメントを含めることができます。

**ジョブの出力(job output)** ジョブの実行によって生成されたファイルやレポートです。

**数値属性範囲(numeric attribute range)** 基本次元メンバーを関連付けるために使用される機能です。メンバーは個別の数値を含み、値の範囲を示す属性を持ちます。たとえば、顧客を年齢別に分類する場合、Age Group 属性次元に 0-20、21-40、41-60、および 61-80 という年齢範囲に該当するメンバーを含めることができます。各 Customer 次元メンバーは Age Group 範囲に関連付けられます。データを取得する際は、個別の年齢の値ではなく年齢範囲に基づいて処理されます。

**スクレーピング(scraping)** データ・ソースを検査して、最も基本的なメタデータ要素を得ることを指します。[イントロスペクション\(introspection\)](#) と対比してください。

**スケーリング(scaling)** スケーリングによって値の表示方法を判別します(整数、十単位、百単位、千単位、百万単位など)。

**スコア(score)** ターゲットを達成するレベルです。通常はターゲットのパーセンテージとして表されます。

**スコアカード(scorecard)** 目標を達成する上での、従業員、戦略要素、または責任要素の進行状況を示すビジネス・オブジェクトです。スコアカードに追加された各メジャーおよび子スコアカードについて収集されるデータに基づいて、進行状況が確認されます。

**スコープ(scope)** Essbase の操作または設定により包含されるデータ領域です(セキュリティ設定により影響を受けるデータ領域など)。通常、スコープには粒度が 3 レベルあり、上位レベルが下位レベルを包含します。これらのレベルは上位から下位の順で、システム全体(Essbase サーバー)、Essbase サーバー上のアプリケーション、Essbase サーバー・アプリケーション内のデータベースとなります。**持続性(persistence)**も参照してください。

**ステージ(stage)** 通常は個別のユーザーにより実行される、タスクフロー内の 1 つの論理ステップを形成するタスクの説明です。ステージには手動と自動の 2 つのタイプがあります。

**ステージ・アクション(stage action)** 自動ステージで、ステージを実行するために呼び出されたアクションです。

**ステージ後割当て(post stage assignment)** 割当てモデルにおける割当てです。後に続くモデル・ステージの場所に割り当てられます。

**ステージ内割当て(intrastage assignment)** 財務フローの割当てです。同じステージ内のオブジェクトに対して割り当てられます。

**ステージング領域(staging area)** 特定のアプリケーションの必要性に対応するために作成するデータベースです。ステージング領域は、1 つ以上の RDBMS のスナップショット(再構築されたバージョン)です。

**ステータス・バー(Status bar)** 画面下部のステータス・バーには、コマンド、勘定科目、およびデータ・ファイルの現在のステータスに関する有用な情報が表示されます。

**スナップショット(snapshot)** 特定の時点の読取り専用データです。

**スポットライタ(Spotlighter)** 選択された条件に基づくカラー・コーディングを使用可能にするツールです。

**スマート・カット(SmartCut)** URL フォームのリポジット・アイテムへのリンクです。

**スマート・スライス(smart slice)** Smart View で、データ・ソースの再利用可能なパースペクティブです。次元または次元メンバーの限定的なセットを含みません。

**スマート・タグ(smart tags)** Microsoft Office アプリケーションでのキーワードです。スマート・タグのメニューから使用可能な定義済アクションに関連付けられています。EPM System 製品でも、スマート・タグを使用して Reporting and Analysis のコンテンツのインポートや Financial Management および Essbase の機能へのアクセスが可能です。

**スーパー・サービス(super service)** RSC サービスを開始するために startCommonServices スクリプトによって使用される専用のサービスです。

**スーパーバイザ(supervisor)** サーバーのすべてのアプリケーション、データベース、関連ファイル、セキュリティ機構にフル・アクセスできるユーザーです。

**ズーム(zoom)** レポートの倍率を設定します。たとえば、ページ全体またはページ幅に合わせて倍率を変更したり、100%を基準としてパーセントで倍率を指定したりできます。

**ズームチャート(ZoomChart)** チャートを拡大することにより詳細情報を表示するために使用されます。チャートに表示されるメトリックについて数値情報を詳細に表示できます。

**精度(precision)** 数値に表示される小数点以下の桁数です。

**製品(product)** Shared Services における、Planning や Performance Scorecard などのアプリケーション・タイプです。

**セカンダリ・メジャー(secondary measure)** プライマリ・メジャーよりも優先度の低いメジャーです。セカンダリ・メジャーにはパフォーマンス・レポートがありませんが、スコアカードで使用したり、次元メジャーのテンプレートを作成するために使用できます。

**責任マップ(accountability map)** 組織内の責任チーム(重要事業領域とも呼ばれます)の責任、報告、および依存関係の構造を視覚的、階層的に示します。

**セキュリティ・エージェント(security agent)** Web アクセス管理プロバイダ(Netegrity SiteMinder など)です。企業の Web リソースを保護します。

**セキュリティ・プラットフォーム(security platform)** EPM System 製品で外部認証とシングル・サインオン機能を使用するためのフレームワークです。

**世代(generation)** データベースでのメンバー関係を定義する階層ツリー内のレイヤーです。世代は、次元の最上位のメンバー(世代 1)から子メンバーへと 1 世代ずつ下に配置されていきます。一意の世代名を使用すると、階層ツリー内のレイヤーを特定できます。

**設計レポート(Design Report)** コンポーネント・ライブラリを使ってカスタム・レポートを作成するための Web Analysis Studio のインタフェースです。

**接続ファイル(connection file)** [Interactive Reporting 接続ファイル\(.oce\)](#)([Interactive Reporting connection file\(.oce\)](#))を参照してください。

**セル(cell)** (1)多次元データベースの次元の交差を表すデータ値です。ワークシート上の行および列の交差を指します。(2)管理ドメインに属するノードの論理グループです。

**セル・ノート(cell note)** Essbase データベースでセルに付けられるテキスト注釈です。セル・ノートは LRO の一種です。

**選択リスト(choice list)** レポート・デザイナーがレポートの視点(POV)を定義する際に各次元に指定するメンバーのリストです。定義されたメンバー・リストに指定されたメンバーを選択するか、または動的リストの関数に定義された条件に一致するメンバーを選択するのみで、選択リストを使用して次元の POV を変更できます。

**戦略マップ(Strategy map)** 上位レベルのミッションおよびビジョンのステートメントを、組織が、構成要素である下位レベルの戦略的達成目標に組入れる方法を示します。

**戦略目標(SO)(strategic objective (SO))** 測定可能な結果によって定義された長期目標です。各戦略目標は、アプリケーション内の 1 つのパーспекティブに関連付けられ、1 つの親(エンティティ)を持ち、重要成功要因または他の戦略目標の親になります。

**税金の初期残高(Taxes - Initial Balances)** Strategic Finance では、損失の初期残高、収益の初期残高、および納税の初期残高のエントリは、Strategic Finance の最初の期間に先立つ期間に発生していることを前提とします。

**相関サブクエリー(correlated subqueries)** 親クエリーの各行で一度評価されるサブクエリーです。サブクエリーのトピック・アイテムを親クエリーのトピックに結合することにより作成されます。

**相互割当て(reciprocal assignment)** 財務フローの割当ての一種です。宛先の 1 つとしてソースが含まれます。

**組織(organization)** 各エンティティ、およびその関係を定義するエンティティの階層です。

**疎次元(sparse dimension)** ブロック・ストレージ・データベースで、他の次元と比較した際に、すべてのメンバーの組合せについてのデータを含んでいる可能性が低い次元です。たとえば、すべての製品についてのデータがすべての顧客に含まれているわけではありません。**密次元(dense dimension)** と対比してください。

**祖先(ancestor)** その下にメンバーを含む分岐メンバーです。たとえば、メンバー Qtr2 とメンバー 2006 はメンバー April の祖先です。

**属性(attribute)** 次元メンバーの特性です。たとえば、Employee 次元のメンバーは名前、年齢、住所といった属性を持ち、Product 次元のメンバーはサイズ、味などの複数の属性を持つ可能性があります。

**属性計算次元(Attribute Calculations dimension)** メンバーのグループに対して、合計、カウント、平均、最小、および最大を計算するシステム定義の次元です。この次元は動的に計算され、データベース・アウトラインでは表示されません。たとえば、メンバー Avg を使用すると、製品 Red についてニューヨークでの 1 月の平均売上値を計算できます。

**属性次元(attribute dimension)** 次元の一種です。次元のメンバーの属性や特質に基づいて分析できます。

**属性タイプ(attribute type)** 様々な関数(データのグループ化、選択、または計算)を使用可能にするためのテキスト、数値、ブール値、日付、またはリンク属性タイプです。たとえば、Ounces 属性次元は数値タイプを持つので、各製品の属性として指定されるオンス数を使用して当該製品のオンス当たりの収益を計算できます。

**属性の関連付け(attribute association)** データベース・アウトラインでの関係です。これにより、属性次元のメンバーが基本次元のメンバーの特性を表します。たとえば、製品 100-10 がグレープ味である場合、製品 100-10 は Flavor 属性の関連付けがグレープになります。したがって、Product 次元のメンバー 100-10 は Flavor 属性次元のメンバー Grape に関連付けられることになります。

**属性レポート(attribute reporting)** 基本次元メンバーの属性に基づくレポート作成プロセスです。**基本次元(base dimension)**も参照してください。

**貸借一致の仕訳(balanced journal)** 借方の合計と貸方の合計が等しい仕訳です。

**対称型マルチプロセッシング(SMP)(symmetric multiprocessing (SMP))** マルチプロセッシングとマルチスレッディングを使用可能にするサーバーのアーキテクチャです。多数のユーザーが単一のインスタンスに同時に接続した場合でも、パフォーマンスが大きく低下することはありません。

**タイトル・バー(Title bar)** Strategic Finance 名、ファイル名、およびシナリオ名のバージョン・ボックスを表示します。

**タイム・イベント(time events)** ジョブを実行するトリガーです。

**タイム・スケール(time scale)** 指定された期間別(毎月、四半期ごとなど)にメトリックを表示します。

**タイム・ライン・ビューア(time line viewer)** 特定の場所について、完了したプロセス・フロー・ステップの日時を表示するための FDM の機能です。

**多次元データベース(multidimensional database)** 3つ以上の次元でデータを整理、保管、および参照するメソッドです。次元のセットが交差するポイントが個別の値となります。**リレーショナル・データベース(relational database)**と対比してください。

**タスクフロー(taskflow)** ビジネス・プロセスの自動化を指します。手続きのルールに従って、あるタスクフロー参加者から別の参加者にタスクが渡されます。

**タスクフロー・インスタンス(taskflow instance)** タスクフローの単一のインスタンスを示します。タスクフローの状態と関連データが含まれます。

**タスクフロー管理システム(taskflow management system)** タスクフローの定義および作成し、その実行を管理します。定義付け、ユーザーまたはアプリケーションのやりとり、およびアプリケーションの実行可能ファイルが含まれます。

**タスクフロー参加者(taskflow participant)** 手動ステージおよび自動ステージの両方について、タスクフローのステージのインスタンスに関連付けられているタスクを実行するリソースです。

**タスクフロー定義(taskflow definition)** タスクフロー管理システムのビジネス・プロセスを示します。ステージとステージ間の関係のネットワークから構成され、タスクフローの開始と終了を示す基準、および個別のステージに関する情報(参加者、関連アプリケーション、関連アクティビティなど)が含まれます。

**タスク・リスト(task list)** 特定のユーザーについて、タスクの詳細ステータスを示すリストです。

**タブ(tabs)** Strategic Finance で、勘定科目とレポートのナビゲーションを行うことができるビューです。

**タプル(tuple)** MDX 構文の要素です。セルは、各次元からのメンバーの交差として参照されます。次元が削除されている場合、最上位のメンバーが示されます。たとえば、(Jan)、(Jan, Sales)、([Jan], [Sales], [Cola], [Texas], [Actual])といったタプルがあります。

**単項演算子(unary operator)** アウトラインのメンバーに関連付けられている算術インディケータ(+、-、\*、/、%)です。単項演算子では、データベースのロールアップ中のメンバーの計算方法が指定されます。

**代替階層(alternate hierarchy)** 共有メンバーの階層です。代替階層はデータベース・アウトラインの既存の階層に基づきますが、次元に代替レベルを持ちます。代替階層により、異なる視点(POV)から同一データを表示できます。

**ダッシュボード(dashboard)** 業務の要約を対話的に示すメトリックと指標の集まりです。ダッシュボードにより分析アプリケーションを構築して配置できます。

**置換(replace)** データ・ロードのオプションの1つです。データ・ロード・ファイルに指定された期間のすべての勘定科目からの既存の値を消去し、データ・ロード・ファイルからの値をロードします。ロード・ファイルに勘定科目が指定されていない場合、指定された期間に該当する値が消去されます。

**チャート(chart)** スプレッドシート・データをグラフィカルに表したものです。視覚的な表示により、分析、カラー・コーディング、および比較の手助けとなるビジュアル・キューの効率が上がります。

**チャート・テンプレート(chart template)** ワークスペース・チャートに表示するメトリックを定義するテンプレートです。

**抽出コマンド(extraction command)** Essbase レポート作成コマンドの 1 つです。データベースから抽出される RAW データの選択、向き、グループ分け、および配列を処理します。小なり記号(<)から始まるコマンドです。

**調査(Investigation) ドリルスルー(drill-through)**を参照してください。

**調整(adjustment) 仕訳(JE)(journal entry(JE))**を参照してください。

**調整勘定科目(plug account)** 会社間勘定科目の消去プロセスで均衡しない差額が保管される勘定科目です。

**重複する別名(duplicate alias name)** 別名テーブルに複数存在し、データベース・アウトラインの複数メンバーに関連付けられている可能性のある名前です。重複する別名は、重複メンバーのアウトラインでのみ使用できます。

**重複メンバーのアウトライン(duplicate member outline)** 重複メンバー名を格納しているデータベース・アウトラインです。

**重複メンバー名(duplicate member name)** データベース内に異なるメンバーを表して重複して存在する同一のメンバー名です。たとえば、ニューヨーク州を示すメンバーとニューヨーク市を示すメンバーが存在する場合、データベースに New York という名前のメンバーが 2 つ含まれることがあります。

**直接レート(direct rate)** 為替レート・テーブルに入力する通貨レートです。直接レートは通貨換算に使用されます。たとえば、残高を日本円から米ドルに変換する場合、変換元通貨を日本円、変換先通貨を米ドルとして、為替レート・テーブルに期間またはシナリオのレートを入力します。

**通貨(monetary)** 金銭的な値です。

**通貨換算(currency conversion)** データベースの通貨の値を別の通貨に変換するプロセスです。たとえば、1 米ドルをユーロに変換するには、ドルに為替レート(たとえば、0.923702)を乗じます( $1 \times 0.923702$ )。変換後のユーロの額は 0.92 になります。

**通貨の上書き(Currency Overrides)** 入力期間で、選択した入力メソッドを上書きして、デフォルト通貨/アイテムとして該当期間の値を入力できます。入力メソッドを上書きするには、数値の前または後にシャープ(#)を入力します。

**通貨パーティション(currency partition)** アプリケーションでの定義に従って、基本通貨から現地通貨メンバーを隔離する次元タイプです。通貨タイプ(実績、予算、予測など)を特定します。

**通常仕訳(regular journal)** 特定の期間に一度かぎりの調整を入力するための機能です。貸借一致、エンティティごとに貸借一致、貸借不一致のいずれかになります。

**通知ガジェット(Notifications gadget)** 他のユーザーやシステムから受け取った通知メッセージの履歴を表示します。

**定義済ドリル・パス(predefined drill paths)** データ・モデルでの定義に従って次の詳細レベルにドリルするために使用されるパスです。

**適応状態(adaptive states)** Interactive Reporting Web Client の権限レベルです。

**テキスト・メジャー(text measure)** メジャーの値をテキストとして表現できるデータ型です。Essbase では、メジャーが示されている次元で Text としてタグ付けされたメンバーを指します。セルの値は定義済テキストとして表示されます。たとえば、Satisfaction Index というテキスト・メジャーについては、Low、Medium、および High という値を含めることがあります。**型付きメジャー(typed measure)**、**テキスト・リスト(text list)**、および**導出テキスト・メジャー(derived text measure)**も参照してください。

**テキスト・リスト(text list)** Essbase で、数値の識別子にマッピングされたテキストの値を保管するオブジェクトです。テキスト・リストではテキスト・メジャーを使用可能にします。

**テンプレート(template)** 特定のデータを一貫して取得するように設計された定義済のフォーマットです。

**デフォルト通貨単位(Default Currency Units)** データの単位スケールを定義します。たとえば、千単位で分析を定義するように選択して 10 を入力すると、10,000 と解釈されます。

**データ関数(data function)** データを集約する関数です。データの平均、最大値、カウントを求めたり、他の統計値によりデータのグループを集約します。

**データ・キャッシュ(data cache)** 非圧縮データ・ブロックを保持するメモリー内のバッファです。

**データ・セル(data cell)** **セル(cell)**を参照してください。

**データ値(data value)** [セル\(cell\)](#)を参照してください。

**「データなし」ステータス(NO DATA status)** 集計ステータスの1つです。特定の期間と勘定科目のデータがこのエンティティに含まれていないことを示します。

**データ・ファイル・キャッシュ(data file cache)** 圧縮データ(PAG)ファイルを保持する、メモリー内のバッファです。

**データ・フォーム(data form)** Web ブラウザなどのインタフェースからデータベースにデータを入力でき、データまたは関連テキストを表示して分析できるグリッド表示です。一部の次元メンバー値は固定され、データが特定の視点から表示されます。

**データベース接続(database connection)** データ・ソースへの接続に使用する定義とプロパティを保管し、データベース参照を移動可能にして広く使用できるようにするファイルです。

**データ・マイニング(data mining)** Essbase データベースを検索して、大量のデータの中から隠れた関係やパターンを見つけるプロセスです。

**データ・モデル(data model)** データベース・テーブルのサブセットを示します。

**データ・ロック(data lock)** 指定された基準(期間、シナリオなど)に従ってデータの変更を防ぎます。

**データ・ロード位置(data load location)** FDM で、ソース・データをターゲット・システムに送信する報告単位です。通常、ターゲット・システムにロードされる各ソース・ファイルに対して FDM のデータ・ロード位置が1つあります。

**データ・ロードのルール(data load rules)** テキストベース・ファイル、スプレッドシート、またはリレーショナル・データ・セットからのデータをデータベースにロードする方法を判別する一連の基準です。

**透過パーティション(transparent partition)** ローカルのデータベースの一部であるかのように、リモート・データベースのデータにアクセスして変更できるようにする共有パーティションです。

**透過ログイン(transparent login)** ログイン画面を起動せずに認証されたユーザーをログインさせます。

**統合(integration)** Shared Services を使用して EPM System 製品間でデータを移動するために実行されるプロセスです。データ統合の定義によりソース・アプリケーションと宛先アプリケーションの間でのデータの移動が指定され、データの動きのグループ化、順序付け、およびスケジュールが決定されます。

**トップ・ラベルとサイド・ラベル(top and side labels)** 列と行の見出しです。ピボット・レポートの上部とサイドにそれぞれ表示されます。

**トラフィック・ライト(traffic lighting)** 2つの次元メンバーの比較、または一定の制限値に基づいて、レポートのセルまたはピンを色分けする機能です。

**トリガー(triggers)** ユーザーが指定した基準に従ってデータを監視するための、Essbase の機能の1つです。基準に一致すると、Essbase はユーザーまたはシステム管理者にアラートを送信します。

**トレーサビリティ(traceability)** メタデータ要素を物理ソースまで追跡する機能です。たとえば Essbase Studio の場合、キューブ・スキーマをそれ自体の階層およびメジャー階層から次元要素、日付/時間要素、メジャー、そして最終的には物理ソースまで追跡できます。

**トレース・レベル(trace level)** ログ・ファイルで捕捉された詳細のレベルを定義します。

**トレース割当て(trace allocations)** Profitability and Cost Management の機能の1つです。財務データのフローに対する視覚的な追跡を可能にします。この追跡は単一の交差から、モデル内の前方または後方に実行できます。

**トークン(token)** 外部認証システム上の1つの有効なユーザーまたはグループの暗号化された ID です。

**トースト・メッセージ(toast message)** 画面右下の隅に表示され、現れたり消えたりするメッセージです。

**同期(sync)** Shared Services とアプリケーション・モデルの同期です。

**同期済(synchronized)** モデルの最新バージョンがアプリケーションと Shared Services の両方に存在する状態を指します。[モデル\(model\)](#)も参照してください。



**導出テキスト・メジャー(derived text measure)** Essbase Studio で、範囲として表現された定義済ルールによって管理される値を持つテキスト・メジャーです。たとえば、Sales メジャーに基づき、High、Medium、および Low という値を含む Sales Performance Index という導出テキスト・メジャーの場合、対応する売上が該当する範囲に応じて High、Medium、および Low が表示されるように定義されます。テキスト・メジャー(text measure)も参照してください。

**動的階層(dynamic hierarchy)** 集約ストレージ・データベースのアウトラインに限定して、取得時に値が計算されるメンバーの階層です。

**動的計算(dynamic calculation)** Essbase で、動的計算メンバー、または動的計算および保管メンバーとしてタグ付けされているメンバーについてデータを取得する場合にのみ実行される計算です。メンバーの値は、バッチ計算で事前に計算されるのではなく、取得時に計算されます。

**動的計算および保管メンバー(Dynamic Calc and Store members)** ブロック・ストレージ・アウトラインで、値を最初に取得したときにのみ計算が行われるメンバーです。計算された値はデータベースに保管され、2 回目以降の取得では計算を実行する必要がありません。

**動的計算メンバー(Dynamic Calc members)** ブロック・ストレージ・アウトラインで、取得時にのみ計算が行われるメンバーです。取得要求の処理が完了すると、計算された値は破棄されます。

**動的参照(dynamic reference)** データ・ソース内のヘッダー・レコードを指すルール・ファイル内のポインタです。

**動的時系列(Dynamic Time Series)** ブロック・ストレージ・データベースで、期間累計のレポート作成を実行するプロセスです。

**動的ビュー勘定科目(dynamic view account)** 勘定科目の種別の 1 つです。勘定科目の値は、表示されているデータから動的に計算されます。

**動的メンバー・リスト(dynamic member list)** システムにより作成される名前付きメンバー・セットです。ユーザーが定義した基準が使用されます。アプリケーションでリストが参照されるとき、リストは自動的にリフレッシュされます。次元メンバーの増減に応じて基準が自動的にリストに適用され、変更内容が反映されます。

**動的レポート(dynamic report)** レポートを実行するときに更新されるデータを含むレポートです。

**ドメイン(domain)** データ・マイニングにおいて、データ内での移動の範囲を表す変数です。

**ドライバ(driver)** ドライバは割当てメソッドの一種です。ドライバを使用する複数ソース間の数学的關係、およびこれらのソースがコストや収益を割り当てる宛先を示します。

**ドリルスルー(drill-through)** あるデータ・ソースの値から別のソースの対応するデータに移動することです。

**ドリルダウン(drill-down)** 次元の階層を使用してクエリ結果セット内をナビゲートすることです。ドリルダウンにより、ユーザーのパースペクティブが集約データから詳細に移ります。たとえば、ドリルダウンにより年と四半期の階層関係、または四半期と月の階層関係が明らかになります。

**名前付きセット(named set)** MaxL DML で、MaxL DML クエリーのオプションの WITH セクションに定義された論理を使用するセットです。名前付きセットはクエリー内で複数回参照することが可能です。

**入力データ(input data)** 計算されるのではなくソースからロードされるデータです。

**認証(authentication)** 安全対策としての ID の確認です。一般に、認証はユーザー名およびパスワードに基づきます。パスワードおよびデジタル・シグネチャは認証のフォームです。

**認証サービス(authentication service)** 単一の認証システムを管理するコア・サービスです。

**ネイティブ認証(native authentication)** サーバーまたはアプリケーション内で、ユーザー名とパスワードを認証するプロセスです。

**ネスト列ヘッダー(nested column headings)** 複数の次元からのデータを表示するレポート列の列ヘッダーのフォーマットです。たとえば、Year と Scenario のメンバーが含まれる列ヘッダーはネスト列です。ネスト列ヘッダーでは、ヘッダーの一番上の行の Q1(Year 次元)が、ヘッダーの一番下の行の Actual および Budget(Scenario 次元)で修飾されます。

**ノート(note)** ボックス、メジャー、スコアカード、またはマップ要素に関連する補足情報です。

**ハイパーテキスト・マークアップ言語(HTML)(Hypertext Markup Language (HTML))** Web ブラウザでのデータ表示を指定するプログラミング言語です。

**ハイパーリンク(hyperlink)** ファイル、Web ページ、またはイントラネット HTML ページへのリンクです。

**ハイブリッド分析(Hybrid Analysis)** リレーショナル・データベースに保管された下位のデータを、Essbase に保管された要約レベルのデータにマッピングする分析です。リレーショナル・システムの大規模スケーラビリティと多次元データを組み合わせます。

**ハイライト(highlighting)** 構成に応じて、チャートのセルまたはズームチャートの詳細がハイライトされ、値のステータス(赤色は不正、黄色は警告、緑色は良好)が示されます。

**範囲(range)** 上限と下限、およびその間に含まれる値のセットです。数字、金額、または日付を含むことが可能です。

**反復タイム・イベント(recurring time event)** ジョブの実行開始点と実行頻度を指定するイベントです。

**反復テンプレート(recurring template)** 各期間に対して同一の調整を行うための仕訳テンプレートです。

**汎用ジョブ(generic jobs)** SQR Production Reporting または Interactive Reporting 以外のジョブを指します。

**凡例ボックス(legend box)** 次元のデータ・カテゴリを特定するためのラベルを含むボックスです。

**バックアップ(backup)** アプリケーション・インスタンスの重複コピーです。

**バッチ POV(batch POV)** ユーザーの POV において、バッチに含まれる各レポートおよびブックのすべての次元の集合です。バッチのスケジュールを立てる際は、バッチ POV で選択されたメンバーを設定できます。

**バッチ計算(batch calculation)** データベースにおいてバッチで実行される計算です(計算スクリプト、すべてのデータベース計算など)。動的計算はバッチ計算とはみなされません。

**バッチ処理モード(batch processing mode)** サーバー管理や診断のルーチン・タスクを自動化するために使用できるバッチやスクリプト・ファイルを記述するために、ESSCMD を使用するメソッドです。ESSCMD スクリプト・ファイルは複数のコマンドを実行でき、オペレーティング・システムのコマンド・ラインから実行したり、オペレーティング・システムのバッチ・ファイルから実行したりすることが可能です。バッチ・ファイルを使用すると、複数の ESSCMD スクリプトを呼び出したり、ESSCMD の複数インスタンスを実行したりできます。

**バッチ・ファイル(batch file)** 複数の ESSCMD スクリプトを呼び出して複数の ESSCMD セッションを実行できるオペレーティング・システム・ファイルです。Windows システムの場合、バッチ・ファイルには BAT というファイル拡張子が付けられます。UNIX の場合、バッチ・ファイルはシェル・スクリプトとして記述されます。

**バッチ・ローダー(batch loader)** 複数ファイルの処理を可能にする FDM コンポーネントです。

**バージョン(version)** データのシナリオのコンテキスト内で使用される、起こりうる結果です。たとえば、Budget - Best Case と Budget - Worst Case では、Budget がシナリオであり、Best Case と Worst Case がバージョンです。

**パターン照合(pattern matching)** 条件として入力されるアイテムの一部またはすべての文字と値を照合する機能です。欠落文字は、疑問符(?)またはアスタリスク(\*)などのワイルド・カード値で表すことができます。たとえば、「Find all instances of apple」では apple が戻されるのに対して、「Find all instances of apple\*」では apple、applesauce、applecranberry など が戻されます。

**パフォーマンス・インディケータ(performance indicator)** ユーザーが指定した範囲に基づくメジャーおよびスコアカード・パフォーマンスを示すために使用されるイメージ・ファイルです。ステータス記号とも呼ばれます。デフォルト・パフォーマンス・インディケータを使用することもできますが、無制限に独自のパフォーマンス・インディケータを作成することも可能です。

**パブリック・ジョブ・パラメータ(public job parameters)** 管理者が作成する再利用可能な名前付きジョブ・パラメータです。必要なアクセス権を持つユーザーがアクセスできます。

**パブリック反復タイム・イベント(public recurring time events)** 管理者が作成する再利用可能なタイム・イベントです。アクセス制御システムからアクセスできます。

**パレット(palette)** JASCに準拠し、.PAL 拡張子を持つファイルです。各パレットには相互に補完し合う16色が含まれ、ダッシュボードの色要素の設定に使用することが可能です。

**パースペクティブ(perspective)** スコアカードのメジャーやアプリケーションにおける戦略目標をグループ化するために使用されるカテゴリです。パースペクティブにより、主要な利害関係者(顧客、従業員、株主、金融関係者など)またはキー・コンピテンシ領域(時間、コスト、品質など)を示すことができます。

**パーティション化(partitioning)** データ・モデルの間で共有またはリンクされるデータの領域を定義するプロセスです。パーティション化は Essbase アプリケーションのパフォーマンスとスケーラビリティに影響することがあります。

**パーティション領域(partition area)** データベース内のサブ・キューブです。パーティションは、データベースの一部からの1つ以上のセル領域から構成されます。複製パーティションおよび透過パーティションの場合、2つのパーティションが同じ形状となるために、領域内のセルの数がデータ・ソースとターゲットで同一となる必要があります。データ・ソース領域に18個のセルが含まれる場合、データ・ターゲット領域にも対応する18個のセルが含まれていなければいけません。

**「非アクティブ」ステータス(INACTIVE status)** エンティティの当期の集計が非アクティブにされていることを示します。

**非アクティブ・グループ(inactive group)** 管理者によりシステムへのアクセスが非アクティブにされているグループです。

**非アクティブ・サービス(inactive service)** 稼動が一時停止しているサービスです。

**非アクティブ・ユーザー(inactive user)** 管理者によりアカウントが非アクティブにされているユーザーです。

**非次元モデル(non-dimensional model)** Shared Services のモデル・タイプの1つです。セキュリティ・ファイル、メンバー・リスト、計算スクリプト、Web フォームなどのアプリケーション・オブジェクトが含まれます。

**日付メジャー(date measure)** Essbase で、メジャーが示されている次元で「日付」のタグが付けられているメンバーです。セルの値はフォーマット済の日付として表示されます。メジャーとしての日付は時間次元を使用して示すことが困難なタイプの分析に役立つことがあります。たとえば、一連の固定資産の取得日をアプリケーションで追跡する必要がある場合、取得日の範囲が実現可能な時間次元モデリングの範囲を超えて長期にわたってしまうことがあります。**型付きメジャー(typed measure)**も参照してください。

**表示タイプ(display type)** リポジトリに保存された3種類の Web Analysis フォーマット(スプレッドシート、チャート、ピンボード)のいずれかを指します。

**標準仕訳テンプレート(standard journal template)** 各期間に共通する調整を転記するために使用する仕訳の機能です。たとえば、共通する勘定科目 ID、エンティティ ID、または金額を含む標準テンプレートを作成すると、これを多数の通常仕訳の基準として使用できます。

**標準次元(standard dimension)** 属性次元以外の次元です。

**ビジネス・プロセス(business process)** 集合的にビジネス上の目標を達成するための一連のアクティビティです。

**ビジネス・ルール(business rules)** 期待される一連の結果値を生成するためにアプリケーション内に作成される論理式または式です。

**ビジュアル・キュー(visual cue)** 特定のタイプのデータ値をハイライトする、フォントや色などのフォーマットが設定されたスタイルです。データ値は、次元メンバー、親メンバー、子メンバー、共有メンバー、動的計算、式を含むメンバー、読取り専用データ・セル、読取りおよび書込みデータ・セル、またはリンク・オブジェクトのいずれかになります。

**ビュー(view)** 年次累計または期別のデータを示すものです。

**ピボット(pivot)** 取得したデータのパーспекティブを変更する機能です。Essbase では、まず次元が取得され、データが行に展開されます。その後、データのピボット(並べ替え)を行うことにより、異なる視点を得ることができます。

**ピン(pins)** ピンボードと呼ばれるグラフィック・レポート上に配置される対話型アイコンです。ピンは、基盤となるデータ値や分析ツールの基準に基づいて、イメージやグラフィック・ライトの色を変更できます。

**ピンボード(pinboard)** 3種類のデータ・オブジェクトの表示タイプの1つです。ピンボードは、背景およびピンと呼ばれる対話型アイコンから成るグラフィックです。ピンボードを使用するにはグラフィック・ライトを定義する必要があります。

**ファイルの区切り文字(file delimiter)** データ・ソース内のフィールドを区切る文字です(カンマ、タブなど)。

**ファクト・テーブル(fact table)** スター結合スキーマの中心のテーブルです。外部キー、および次元テーブルから取得した要素により特徴付けられます。通常、このテーブルにはスキーマの他のすべてのテーブルに関連する数値データが含まれます。

**フィルタ(filter)** データ・セットで、特定の基準に従って値を制限する制約です。たとえば、特定のテーブル、メタデータ、または値を除外したり、アクセスをコントロールしたりする場合に使用されます。

**フィールド(field)** データ・ソース・ファイル内のアイテムです。Essbase データベースにロードされません。

**フォルダ(folder)** 他のファイルを含んで階層を形成するファイルです。

**フォーマット(format)** ドキュメントやレポート・オブジェクトの視覚的な特性です。

**フォーマット文字列(format string)** Essbase で、セルの値の表示を変換するメソッドです。

**復元(restore)** データベースが破損または破壊された場合にデータおよび構造の情報を再ロードする操作です。通常、データベースをシャット・ダウンおよび再起動した後で実行されます。

**複製パーティション(replicated partition)** パーティション・マネージャにより定義されるデータベースの一部です。あるサイトで管理されるデータの更新を別のサイトで保管されているデータのコピーに伝播するために使用されます。ユーザーは、ローカルのデータベースと同じようにデータにアクセスできます。

**負債勘定科目(liability account)** 一定時点における会社の負債残高を保管する勘定科目の種別です。未払費用、買掛金勘定、長期借入金などが負債勘定科目に含まれます。

**フッター(footer)** レポート・ページ下部に表示されるテキストまたはイメージです。ページ番号、日付、ロゴ、タイトル、ファイル名、作成者名など、動的な関数や静的なテキストが含まれます。

**フリーフォーム・グリッド(free-form grid)** 動的計算のために、複数のソースからのデータを提示、入力、および統合するためのオブジェクトです。

**フリーフォーム・レポート作成(free-form reporting)** ワークシートに次元メンバーまたはレポート・スクリプト・コマンドを入力することにより、レポートを作成することを指します。

**フレーム(frame)** デスクトップ上の領域です。ナビゲーション・フレームと Workspace フレームが2つの主要な領域となります。

**フロー勘定科目(flow account)** 期別と年次累計の符号なしの値を保管する勘定科目です。

**ブック(book)** 類似する Financial Reporting ドキュメントのグループを含むコンテナです。ブックには、次元セクションまたは次元の変更が指定されていることがあります。

**ブックの POV(book POV)** ブックが実行される次元のメンバーです。

**ブックマーク(bookmark)** ユーザー個人のページに表示されるレポート・ドキュメントまたは Web サイトへのリンクです。ブックマークには、マイ・ブックマークとイメージ・ブックマークの2つのタイプがあります。

**ブロック(block)** プライマリ・ストレージ・ユニットです。多次元配列であり、すべての密次元のセルを表します。

**ブロックされた勘定科目(Blocked Account)** 手動で入力する必要があるために集計ファイルの計算に含めない勘定科目です。

**ブロック・ストレージ・データベース(block storage database)** 疎次元に定義されたデータ値の密度に基づいてデータを分類および保管する、Essbase のデータベース・ストレージ・モデルです。データ値はブロック単位で保管され、ブロックは値を含む疎次元メンバーについてのみ存在します。

**ブロードキャスト・メッセージ(broadcast message)**

Planning アプリケーションにログオンしているユーザーに対して管理者が送信する単純なテキスト・メッセージです。メッセージには、システムの可用性、アプリケーション・リフレッシュの通知、アプリケーションのバックアップなどのユーザー向けの情報が表示されます。

**分離レベル(isolation level)** データベース操作のロックとコミットの動作(コミット・アクセスまたはアンコミット・アクセス)を判別する Essbase カーネルの設定です。

**プライマリ・メジャー(primary measure)** 企業および事業のニーズにとって重要な、優先度の高いメジャーです。コンテンツ・フレームに表示されます。

**プランナ(planner)** プランナは、大多数のユーザーから構成されます。データの入力と送信、他のプランナが作成したレポートの使用、ビジネス・ルールの実行、タスク・リストの使用、電子メール通知の使用可能化、および Smart View の使用が可能です。

**プランニング・ユニット(planning unit)** シナリオ、バージョン、およびエンティティの交差におけるデータ・スライスです。プラン・データの準備、確認、注釈付け、および承認のための基本単位です。

**プレゼンテーション(presentation)** Web Analysis ドキュメントのプレイリストです。レポートの分類、整理、並べ替え、配布、および確認を行うことができます。リポジトリ内のレポートを参照するポインタを含みます。

**プロキシ・サーバー(proxy server)** セキュリティを保証するために、ワークステーション・ユーザーとインターネットの間で仲介を行うサーバーです。

**プロジェクト(project)** 実装でグループ化された EPM System 製品のインスタンスです。たとえば、Planning プロジェクトには Planning アプリケーション、Essbase キューブ、Financial Reporting サーバー・インスタンスが含まれることがあります。

**プロセス監視レポート(process monitor report)** FDM データ変換プロセスにおける、場所のリストとその位置を表示します。プロセス監視レポートを使用して、決算手続のステータスを監視できます。レポートにはタイム・スタンプが付けられるので、時間データがロードされた場所を判別するために使用できます。

**プロット領域(plot area)** X 軸、Y 軸、および Z 軸で囲まれている領域です。円グラフの場合は、その周りに表示される長方形の領域です。

**プロパティ(property)** アーチファクトの特性です(サイズ、タイプ、処理手順など)。

**プロビジョニング(provisioning)** ユーザーおよびグループに対して、リソースへのアクセス権を付与するプロセスです。

**並列エクスポート(parallel export)** Essbase データを複数のファイルにエクスポートする機能です。並列エクスポートは、1つのファイルにエクスポートした場合に比べて時間を短縮できます。また、1つのデータ・ファイルでサイズが大きくなりすぎた場合の、オペレーティング・システムでの操作上の問題を解決できます。

**並列計算(parallel calculation)** 計算オプションの1つです。Essbase では計算がタスクに分割され、一部のタスクは同時に計算されます。

**並列データ・ロード(parallel data load)** Essbase で、複数プロセスのスレッドによりデータ・ロードのステージを同時に実行することを指します。

**ヘッド・アップ・ディスプレイ(head up display)** Windows デスクトップの上に、背景イメージを含むロード済 Smart Space デスクトップを表示するモードです。

**変換(transformation)** (1)アプリケーションの移行後も宛先環境で正しく機能するように、アーチファクトを変換します。(2)データ・マイニングで、キューブおよびアルゴリズムのセルの間で(双方向に)流れるデータを変更します。

**変換先通貨(destination currency)** 残高の変換後の通貨です。為替レートを入力して、変換元通貨から変換先通貨に変換します。たとえばユーロから米ドルに変換する場合、変換先の通貨は米ドルです。

**変換元通貨(source currency)** 為替レートを使用して変換先通貨に変換される前の、値の元の通貨です。

**「変更済」ステータス(CHANGED status)** 集計ステータスの1つです。エンティティのデータが変更されたことを示します。

**別名(alias)** 代替名です。たとえば、列をより簡単に特定する記述子として、メンバー名のかわりに別名を表示できます。

**別名テーブル(alias table)** メンバーの代替名を含むテーブルです。

**ページ(page)** グリッドまたはテーブルでの情報表示の一種です。しばしばZ軸により示されます。ページには、1つのフィールドからのデータ、計算により得られるデータ、またはテキストを含めることができます。

**ページ・ファイル(page file)** Essbase のデータ・ファイルです。

**ページ見出し(page heading)** レポートの現在のページで表示されているメンバーをリストした、レポート見出しの一種です。ページ上のすべてのデータ値には、ページ見出し内のメンバーが共通属性として適用されています。

**ページ・メンバー(page member)** ページ軸を判別するメンバーです。

**保管階層(stored hierarchy)** 集約ストレージ・データベースのアウトラインのみで使用される用語です。アウトラインの構造に従ってメンバーが集約される階層を指します。保管階層のメンバーには、式を含むことができないなどの一定の制限があります。

**ホスト(host)** アプリケーションとサービスがインストールされているサーバーです。

**ホスト・プロパティ(host properties)** ホストに関するプロパティです。ホストに複数の Install\_Home が含まれる場合は、いずれかの Install\_Home に関するプロパティとなります。ホスト・プロパティは CMC から構成されます。

**保存された仮定(saved assumptions)** ビジネス上の主要な計算を推進するための、Planning でのユーザー定義の仮定です(事業所の床面積 1 平方フィート当たりのコストなど)。

**棒グラフ(bar chart)** 1 から 50 のデータ・セットを含むことができるグラフです。各データ・セットには任意の数の値を割り当てることができます。データ・セットは、対応する棒のグループ、上下に積み上げた棒、または別々の行に個別の棒として表示されます。

**マイ Workspace ページ(My Workspace Page)** 複数のソース(ドキュメント、URL、その他のコンテンツ・タイプ)からのコンテンツを使用して作成されるページです。Oracle およびその他のソースからのコンテンツを集約するために使用可能です。

**マイニング属性(mining attribute)** データ・マイニングにおいて、一連のデータを分析する際の係数として使用する値のクラスです。

**マスター・データ・モデル(master data model)** 複数のクエリーによりソースとして参照される独立するデータ・モデルです。このモデルが使用される場合は、「クエリー」セクションのコンテンツ・ペインに「ロック済データ・モデル」と表示されます。データ・モデルは「データ・モデル」セクションに表示されるマスター・データ・モデルにリンクされています(管理者によって非表示になっていることがあります)。

**マップ・ナビゲータ(Map Navigator)** 戦略、責任、および因果関係の各マップに現在の位置を示す機能です。赤色のアウトラインで示されます。

**マップ・ファイル(Map File)** 外部データベースとの間のデータの送信や取得のための定義を保管するために使用されます。マップ・ファイルの拡張子は、データ送信用が.mps、データ取得用が.mpr となります。

**マルチロード(multiload)** 複数の期間、カテゴリ、および場所を同時にロードすることを可能にする FDM の機能です。

**マージ(merge)** データ・ロード・オプションの1つです。データ・ロード・ファイルで指定された勘定科目の値のみを消去し、データ・ロード・ファイルの値で置換します。

**密次元(dense dimension)** ブロック・ストレージ・データベースで、次元メンバーのすべての組合せのデータを含んでいる可能性のある次元です。たとえば、時間次元はすべてのメンバーのあらゆる組合せを含んでいる可能性があるために、しばしば密な次元となっています。疎次元(sparse dimension)と対比してください。

**ミニスキーマ(minischema)** データ・ソースからのテーブルのサブセットをグラフィカルに示したものです。データ・モデリングのコンテキストを表します。

**ミニレポート(minireport)** レポートのコンポーネントの1つです。レイアウト、コンテンツ、ハイパーリンク、およびレポートのロード用の1つ以上のクエリーを含みます。各レポートには、1つ以上のミニレポートを含めることができます。

**耳折れ(dog-ear)** 折り曲げられたページの角です。チャートのヘッダー領域の右上の隅に表示されます。

**メジャー(measures)** OLAP データベースのキューブに含まれる数値で、分析に使用されます。メジャーには、利益幅、売上原価、売上数量、予算などがあります。**ファクト・テーブル(fact table)**も参照してください。

**メタアウトライン(metaoutline)** 統合サービスで、OLAP モデルから Essbase のアウトラインを作成するための規則と構造を含んだテンプレートです。

**メタデータ(metadata)** データベースに保管された、またはアプリケーションにより使用されるデータのプロパティと属性を定義および説明するデータ・セットです。メタデータには、次元名、メンバー名、プロパティ、期間、およびセキュリティなどが含まれます。

**メタデータ・セキュリティ(metadata security)** ユーザーにより特定のアウトライン・メンバーへのアクセスを制限するための、メンバー・レベルのセキュリティ・セットです。

**メタデータのサンプリング(metadata sampling)** ドリルダウン操作で次元に含まれるメンバーのサンプルを取得するプロセスです。

**メタデータ要素(metadata elements)** データ・ソースから算出されるメタデータ、および Essbase Studio で使用するために保管され、カタログが作成されるおよびその他のメタデータです。

**メトリック(metric)** ビジネス・データから計算される数値測定単位です。ビジネス・パフォーマンス評価や企業トレンド分析に役立ちます。

**メンバー(member)** 次元内の個別のコンポーネントです。メンバーにより、類似する単位の集まりが個別に特定および区別されます。たとえば、時間次元には Jan、Feb、および Qtr1 などのメンバーが含まれることがあります。

**メンバー選択レポート・コマンド(member selection report command)** 兄弟、世代、レベルなどのアウトラインの関係に基づいて、メンバーの範囲を選択するレポート・ライター・コマンドの一種です。

**メンバー専用レポート・コマンド(member-specific report command)** レポート・ライターのフォーマット・コマンドの1つです。レポート・スクリプトで現れると実行されます。このコマンドは関連するメンバーにのみ影響し、メンバーを処理する前にフォーマット・コマンドを実行します。

**メンバー・リスト(member list)** 次元のメンバー、関数、他のメンバー・リストを示す名前付きのグループです。システムまたはユーザーにより定義されます。

**メンバー・ロード(member load)** 統合サービスで、次元およびメンバー(データを含まない)を Essbase のアウトラインに追加するプロセスです

**目標(target)** 指定された期間(日、四半期など)についてメジャーに期待される結果です。

**持株会社(holding company)** 法的エンティティ・グループの一部であるエンティティです。グループ内のすべてのエンティティに対して直接的または間接的に投資しています。

**モデル(model)** (1)データ・マイニングで、アルゴリズムにより検査されたデータに関する情報の集合です。より広範なデータ・セットにモデルを適用することにより、データに関する有用な情報を生成できます。(2)アプリケーション固有の方法で示したデータが含まれるファイルまたはコンテンツの文字列です。モデルは Shared Services により管理される基本データであり、次元と非次元のアプリケーション・オブジェクトという2つの主要なタイプがあります。(3)Business Modeling で、検査対象の領域からの業務および財務上のフローを示し、また計算するために接続されたボックス・ネットワークです。

**役割(role)** リソースへのアクセス権をユーザーおよびグループに付与する際に使用される手段です。

**ユーザー定義属性(UDA)(user-defined attribute (UDA))** アウトラインのメンバーに関連付けられ、メンバーの特性を説明します。UDA を使用すると、指定された UDA が関連付けられているメンバーのリストが戻されます。

**ユーザー定義メンバー・リスト(user-defined member list)** ユーザー定義による、特定の次元に含まれるメンバーの静的なセットです。

**ユーザー・ディレクトリ(user directory)** ユーザーおよびグループの情報を集中管理する場所です。リポジトリまたはプロバイダとも呼ばれます。

**ユーザー変数(user variable)** ユーザーのメンバー選択に基づいて、データ・フォームを動的に配置し、指定されたエンティティのみを表示します。たとえば、Department というユーザー変数を使用すると、特定の部署および従業員を表示できます。

**要約チャート(Summary chart)** 「調査」セクションで、同じ列内で下に表示される詳細チャートをロール・アップし、各チャート列最上位の要約レベルにメトリックを描画します。

**予算管理者(budget administrator)** アプリケーションの設定、構成、維持、および制御の担当者です。アプリケーションのすべての権限およびデータ・アクセス権を持ちます。

**ライトバック(write-back)** 取得を行うスプレッドシートなどのクライアントが、データベースの値を更新する機能です。

**ライフ・サイクル管理(life cycle management)** アプリケーション情報をライフサイクルの最初から最後まで通して管理するプロセスです。

**ライフサイクル管理ユーティリティ(Lifecycle Management Utility)** アプリケーションとアーチファクトの移行に使用されるコマンドラインユーティリティです。

**ライン・アイテムの詳細(line item detail)** 勘定科目で最も下位の詳細レベルです。

**リソース(resources)** システムにより管理されるオブジェクトまたはサービスです(役割、ユーザー、グループ、ファイル、ジョブなど)。

**リポジトリ(repository)** ビューおよびクエリーに使用するためのメタデータ、フォーマット、および注釈の情報を保管します。

**領域(area)** メンバーおよび値の定義済みのセットであり、パーティションを構成します。

**履歴平均(Historical Average)** 多数の履歴期間にわたる勘定科目の平均です。

**リレーショナル・データベース(relational database)** 関連する2次元テーブルにデータを保管するデータベースです。[多次元データベース\(multidimensional database\)](#)と対比してください。

**リンク(link)** (1)リポジトリ・オブジェクトへの参照です。リンクはフォルダ、ファイル、ショートカットなどの参照に使用できます。(2)タスクフローで、あるステージのアクティビティが終了して次のアクティビティが開始するポイントです。

**リンク条件(link condition)** タスクフローのステージを順序付けるためにタスクフロー・エンジンにより評価される論理式です。

**リンク・データ・モデル(linked data model)** リポジトリのマスター・コピーにリンクされたドキュメントです。

**リンク・パーティション(linked partition)** データ・セルを使用して2つのデータベースをリンクするための共有パーティションです。ワークシートのリンク・セルをクリックすると、リンク・データベースの次元を示す新規シートが開きます。これにより、表示される次元をドリルダウンできます。

**リンク・レポート・オブジェクト(LRO)(linked reporting object (LRO))** セル・ノート、URL、テキスト、オーディオ、映像、画像を含むファイルなどの外部ファイルへのセルベースのリンクです。Financial Reporting では、Essbase LRO 向けにサポートされるのはセル・ノートのみです。[ローカル・レポート・オブジェクト\(local report object\)](#)と対比してください。

**隣接する四角形(bounding rectangle)** Interactive Reporting ドキュメントのセクションを個人用ページに埋め込む場合に、Interactive Reporting ドキュメントのコンテンツをカプセル化する必須のパラメータです。高さと幅を表すピクセル、または1ページ当たりの行数により指定されます。

**レイアウト領域(layout area)** Workspace ページで、コンテンツを配置可能な領域を指定するために使用されます。

**例外(exceptions)** 事前定義済みの条件を満たす値です。フォーマット・インディケータを定義したり、例外が生成されたときに登録ユーザーに通知したりできます。



**レイヤー(layer)** (1)階層構造内で横並びにメンバーを含む場所です。世代(上から下へ)またはレベル(下から上へ)により指定されます。(2)他のオブジェクトに対して相対的なオブジェクトの場所です。たとえば、Sample Basic データベースでは Qtr1 と Qtr4 は同じ年に含まれるので、世代が同一であることとなります。しかし、不均衡階層を含むデータベースの場合、Qtr1 と Qtr4 は同一世代であっても同じレイヤーに位置しないことがあります。

**レコード(record)** データベースで、1つの完全な入力項目を形成するフィールドのグループです。たとえば、顧客レコードには、名前、住所、電話番号、および販売データのフィールドが含まれることがあります。

**列(column)** グリッドまたはテーブルで縦方向に表示される情報です。列には、特定のフィールドからのデータ、計算により得られたデータ、またはテキストの情報が含まれます。

**レベル(level)** 階層ツリー構造において、データベース・メンバーの関係を定義するレイヤーです。レベルは一番下の次元メンバー(レベル 0)から上位の親メンバーへと並べられます。

**レベル 0 のブロック(level 0 block)** 疎のレベル 0 メンバーの組合せに使用されるデータ・ブロックです。

**レベル 0 のメンバー(level 0 member)** 子の存在しないメンバーです。

**レポート・エクストラクタ(Report Extractor)** スクリプトの実行時に、Essbase データベースからのレポート・データを取得する Essbase コンポーネントです。

**レポート・オブジェクト(report object)** レポートの設計において、テキスト・ボックス、グリッド、イメージ、チャートなどの動作や外観を定義するプロパティを持つ基本要素です。

**レポート・スクリプト(report script)** 1つ以上の運用レポートを生成する、Essbase レポート・ライター・コマンドを格納したテキスト・ファイルです。

**レポートの通貨(reporting currency)** 財務諸表を準備するために使用される通貨です。現地通貨からレポートの通貨に変換されます。

**レポート・ビューア(Report Viewer)** レポート・スクリプトの実行後に完全なレポートを表示する Essbase コンポーネントです。

**ログ・アナライザ(Log Analyzer)** Essbase ログのフィルタ、検索、および分析を行うための Administration Services の機能です。

**ロケーション別名(location alias)** データ・ソースを特定する記述子です。ロケーション別名により、サーバー、アプリケーション、データベース、ユーザー名、およびパスワードが指定されます。ロケーション別名は、DBA のデータベース・レベルで管理サービス・コンソール、ESSCMD、または API を使用して設定されます。

**ロケール(locale)** コンピュータで使用される言語、通貨、および日付フォーマット、データのソート順、文字セットのエンコード方式を指定するコンピュータ設定です。Essbase ではエンコード方式のみが使用されます。[エンコード方式\(encoding\)](#)および [ESSLANG](#) も参照してください。

**ロケール・ヘッダー・レコード(locale header record)** スクリプトなど、一部の非 Unicode でエンコードされたテキスト・ファイルの先頭で、エンコード・ロケールを特定するテキスト・レコードです。

**ロック済(locked)** ユーザーやプロセスがデータを変更するのを防ぐために、ユーザーが呼び出すプロセスです。

**「ロック済」ステータス(LOCKED status)** 集計ステータスの 1 つです。変更できないデータがエンティティに含まれていることを示します。

**ロック済データ・モデル(locked data model)** ユーザーが変更できないデータ・モデルです。

**論理グループ(logic group)** FDM で、ソース・ファイルが FDM にロードされた後に生成される 1 つ以上の論理勘定を含みます。論理勘定はソース・データから導き出される計算済勘定です。

**ローカル結果(local results)** データ・モデルのクエリー結果です。ローカルの結合で結果を使用する場合は、結果をデータ・モデルにドラッグして挿入できます。ローカル結果を要求すると、カタログに表示されます。

**ローカル・レポート・オブジェクト(local report object)** Explorer で Financial Reporting レポート・オブジェクトにリンクされていないレポート・オブジェクトです。[リンク・レポート・オブジェクト\(LRO\)](#) ([linked reporting object \(LRO\)](#)) と対比してください。

**ロールアップ(roll-up)** [集計\(consolidation\)](#) を参照してください。

**ワイルド・カード(wild card)** 検索文字列で、任意の 1 文字または文字グループを示す文字(\*)です。

**割当て(assignment)** 割当てモデルでのソースと宛先の関連付けです。Profitability and Cost Management で、割り当てられたコストや収益のフローの方向を制御します。

**ワーク・フロー(work flow)** FDM でデータを最初から最後まで処理するために必要なステップです。ワークフローは、インポート(GL ファイルからのデータ・ロード)、検証(すべてのメンバーが有効なアカウントにマッピングされていることの確認)、エクスポート(マッピングされたメンバーのターゲット・アプリケーションへのロード)、およびチェック(ユーザー定義の検証ルールを使用してデータを処理することにより、データの精度を確認)から構成されます。

**ワークブック(workbook)** 多数のワークシートを含むスプレッドシート・ファイル全体です。

# 索引

## A - Z

### Business Modeling

役割, [173](#)

### Business Rules

プロビジョニングの概要, [211](#)

役割, [172](#)

役割、説明, [212](#)

役割と権限, [211](#)

ユーザーの Shared Services への移行, [212](#)

### DNS 検索, [64](#)

### EPM System の配置場所, [44](#)

### ERP Integrator の役割, [176](#)

### Essbase

Shared Services Console の起動, [179](#)

クラスパスへのカスタム・モジュールの追加, [60](#)

役割, [165](#)

### Essbase Studio

役割, [166](#)

### FDM の役割, [175](#)

### Financial Management

クラスパスへのカスタム・モジュールの追加, [61](#)

役割, [169](#)

### HSS\_Home, [45](#)

Hyperion Business Rules。「Business Rules」を参照

### Hyperion\_Home, [45](#)

### JVM エラー, [48](#)

### Kerberos

SSO の使用可能, [38](#)

WebSphere を使用した SSO の使用可能, [39](#)

認証の使用可能, [33](#)

### LDAP, [14](#)

### LDAP ベースのユーザー・ディレクトリ

Shared Services の特定, [22](#)

構成, [65](#)

### MSAD

### DNS 検索, [64](#)

グローバル・カタログ, [64](#)

グローバル・カタログのベース DN, [67](#)

グローバル・カタログ・ホスト, [67](#)

グローバル・カタログ・ポート, [67](#)

構成, [65](#)

ホスト名検索, [64](#)

### NTLM

Remote Authentication Module, [81](#)

SSO のサポート, [81](#)

UNIX アプリケーション環境のサポート, [81](#)

### NTLM 構成の変更, [83](#)

### OpenLDAP

root パスワードの変更, [123](#)

インストール先, [110](#)

停止, [111](#)

デバッグ・モードでの開始, [111](#)

データの回復, [125](#)

ネイティブ・ディレクトリとして, [110](#)

標準モードでの開始, [111](#)

プロシージャのバックアップ, [124](#)

### OpenLDAP の開始

デバッグ・モード, [111](#)

標準モード, [111](#)

### Oracle Access Manager

シングル・サインオン, [26](#)

認証の使用可能, [26](#)

### Oracle Application Server

シングル・サインオンの使用可能, [26](#)

### Oracle Internet Directory

管理, [108](#)

ネイティブ・ディレクトリとして, [108](#)

ネイティブ・ディレクトリとして設定, [51](#)

ネイティブ・ディレクトリの管理, [109](#)

### Performance Management Architect

役割, [169](#)

### Performance Scorecard

役割, [174](#)

Planning, 205  
 Business Rules との役割, 209  
 Essbase 書込みアクセス役割, 209  
 Essbase とのアクセス権, 210  
 Essbase との接続タイプ, 210  
 ID の移行, 208  
 Shared Services Console との同期, 208  
 Shared Services Console の起動, 208  
 アクセス権の概要, 205  
 役割, 171  
 役割について, 209

Profitability and Cost Management  
 役割, 173

Provider Services  
 役割, 217  
 ユーザー・プロビジョニング, 217

Provider Services 役割, 175

Remote Authentication Module, 81

Reporting and Analysis  
 Shared Services Console の起動, 185  
 組合せ, 189  
 クラスパスへのカスタム・モジュールの追加, 61  
 役割階層, 187

Reporting and Analysis 役割, 167  
 集約  
     コンテンツ・マネージャの分岐, 188  
     スケジュール・マネージャの分岐, 189  
     ジョブ・マネージャ, 167

root パスワード, 123

root パスワードの変更, 123

SAP  
 Enterprise Portal からのシングル・サインオン, 43  
 キーストア・タイムアウト, 89  
 シングル・サインオンの前提条件, 45  
 ネストされたグループ, 44  
 ライブラリ, 45

Shared Services  
 OpenLDAP データの回復, 125  
 SAP キーストア, 89  
 役割, 163

Shared Services Console  
 概要, 48  
 起動, 47  
 ツールバー・ボタン, 48  
 デフォルト・ログイン情報, 47

メニュー, 48

Shared Services Console の起動, 47

SiteMinder  
 Web エージェントの構成, 33  
 シングル・サインオン, 31  
 認証の使用可能, 33  
 ポリシー・サーバーの構成, 32

WORLD, 108

**あ行**

アクセス権, 96  
 Business Modeling, 173  
 Business Rules, 172  
 ERP Integrator, 176  
 Essbase, 165  
 Essbase Studio, 166  
 FDM, 175  
 Financial Management, 169  
 Performance Management Architect, 169  
 Performance Scorecard, 174  
 Planning, 171  
 Profitability and Cost Management, 173  
 Provider Services, 175  
 Reporting and Analysis, 167  
 Shared Services 役割, 163  
 トランザクション・マネージャ, 174

アクセス権の割当て, 96

アプリケーション, 44  
     アプリケーション・グループからの除去, 94  
     アプリケーション・グループへの追加, 94  
     既存のアプリケーション・グループへの追加, 94  
     削除, 97, 98  
     定義済, 93  
     プロビジョニング情報のコピー, 97

アプリケーション・グループ  
     アプリケーションの追加, 94  
     削除, 95  
     作成, 94  
     名前変更, 94

アプリケーションレベルのアクセス, 96

移行  
     コーポレート・ディレクトリ, 142  
     ネイティブ・ディレクトリ, 126

移動  
     OU 間のユーザーとグループ, 140

委任された管理

Shared Services 管理者, 99  
 委任された管理者, 100  
 階層, 99  
 管理者の作成, 101  
 使用可能, 100  
 プロビジョニング, 101  
 委任された管理のプランニング  
 委任プラン, 101  
 ユーザー・アカウント, 101  
 委任されたユーザー管理モード, 87  
 委任されたレポート, 106  
 委任プラン, 101  
 委任リスト  
 削除, 105  
 作成, 102  
 変更, 104  
 インストール先, 110  
 インポート/エクスポート・ユーティリティ(プロ  
 ビジョニング・データ), 137  
 オブジェクトレベル・セキュリティ, 96

## か行

階層  
 委任された管理, 99  
 カスタム認証モジュール  
 API, 55  
 Essbase クラスパスへの追加, 60  
 Financial Management クラスパスへの追加,  
 61  
 Reporting and Analysis コア・サービス・クラ  
 スパスへの追加, 61  
 Shared Services クラスパス, 62  
 アーカイブの準備, 58  
 概要, 55  
 共通の場所への追加, 58  
 サンプル・コード, 56  
 前提条件, 57  
 配置手順の概要, 57  
 監査レポート  
 アーチファクト・レポート, 135  
 構成レポート, 135  
 セキュリティ・レポート, 135  
 管理  
 検索順, 85  
 ネイティブ・ディレクトリ, 107  
 ネイティブ・ディレクトリ・グループ, 115

ネイティブ・ディレクトリとしての Oracle  
 Internet Directory, 109  
 ネイティブ・ディレクトリの役割, 120  
 ユーザー, 111  
 概要  
 カスタム認証の配置手順, 57  
 カスタム認証モジュール, 55  
 グループ, 19  
 SAP からネスト, 44  
 削除, 120  
 作成, 21, 116  
 ディレクトリ間の移動, 142  
 名前変更, 118  
 ネイティブ・ディレクトリの管理, 115  
 ネストされた, 116  
 プロビジョニング, 130  
 プロビジョニング解除, 131  
 変更, 118  
 グローバル・カタログ  
 使用, 64  
 ベース DN, 67  
 ホスト名, 67  
 ポート, 67  
 検索順  
 管理, 85  
 除去, 87  
 追加, 86  
 変更, 86  
 検索順の除去, 87  
 検索順の変更, 86  
 検索順への追加, 86  
 構成  
 LDAP ベース, 65  
 MSAD, 65  
 Oracle Internet Directory, 65  
 SAP プロバイダ, 74  
 SiteMinder Web エージェント, 33  
 SiteMinder ポリシー・サーバー, 32  
 ユーザー・ディレクトリ, 22  
 リレーショナル・データベース・プロバイ  
 ダ, 76  
 構成レポート, 135  
 さ行  
 削除  
 アプリケーション, 97, 98  
 アプリケーション・グループ, 95

アプリケーション・グループのアプリケーション, 94  
 委任リスト, 105  
 グループ, 120  
 集約役割, 123  
 ユーザー・アカウント, 115  
 ユーザー・ディレクトリ, 85  
 作成  
   アプリケーション・グループ, 94  
   委任された管理者, 101  
   委任リスト, 102  
   グループ, 21, 116  
   集約役割, 121  
   ユーザー, 21, 111, 112  
 「参照」タブ, 48  
 集約役割, 19, 120  
   削除, 123  
   作成, 121  
   変更, 122  
 使用可能  
   委任された管理, 100  
 シングル・サインオン  
   Kerberos, 33  
   NTLM の使用, 81  
   Oracle Access Manager, 26  
   Oracle Application Server, 26  
   SAP から, 43  
   SiteMinder から, 31  
   概要, 23  
   信頼済のログイン情報の使用, 16  
   ダイレクト, 15  
   ネストされた SAP グループ, 44  
   シングル・サインオン・サポート, 87  
   信頼済のシングル・サインオン, 16  
 事前定義済役割, 19  
 情報  
   ネイティブ・ディレクトリ, 107  
   ネイティブ・ディレクトリの更新, 139  
 製品固有のアクセス, 96  
 セキュリティ  
   OpenLDAP, 14  
   シングル・サインオン, 15, 16  
   製品固有, 96  
   セキュリティ API, 14  
   認証, 13  
   認証コンポーネント, 13  
   認証シナリオ, 15, 16

  ネイティブ・ディレクトリ, 14  
   ユーザー・ディレクトリ, 14  
 セキュリティ・エージェント  
   シングル・サインオンの概要, 23  
 セキュリティ・オプション  
   委任されたユーザー管理モード, 87  
   シングル・サインオン・サポート, 87  
   トークンのタイムアウト, 87  
   ロギング・レベル, 87  
 セキュリティの役割  
   Profitability and Cost Management, 197  
 セキュリティ・レポート, 135  
 設定  
   ネイティブ・ディレクトリとしての Oracle Internet Directory, 51  
 前提条件  
   SAP シングル・サインオン, 45

## た行

タスク・タブ, 48  
 デフォルト  
   パスワード, 47  
 デフォルトのユーザーおよびグループ  
   ネイティブ・ディレクトリ, 108  
 データベース  
   OpenLDAP データの回復, 125  
   OpenLDAP のバックアップ, 124  
 特殊文字, 89  
 トランザクション・マネージャ役割, 174  
 トークンのタイムアウト, 87

## な行

内部 OU の移動, 140  
   移行に関する考慮事項, 140  
 名前変更  
   アプリケーション・グループ, 94  
   グループ, 118  
   ユーザー, 113  
 認証, 14  
   概要, 13, 17  
   グループ, 19  
   グローバルな役割, 18  
   コンポーネント, 13  
   シナリオ, 15, 16  
   集約役割, 19  
   事前定義済役割, 19  
   ディレクトリの管理, 107

役割, 18  
 ユーザー, 19  
 ネイティブ・ディレクトリ, 14  
 OpenLDAP, 110  
 Oracle Internet Directory, 108  
 Oracle Internet Directory の管理, 108, 109  
 Oracle Internet Directory の設定, 51  
 移行, 126  
 エクスポート, 137  
 グループ, 115  
 グループの削除, 120  
 グループの変更, 118  
 コーポレート・ディレクトリ間で移動するハ  
 ンドル, 142  
 集約役割の更新, 122  
 集約役割の削除, 123  
 集約役割の作成, 121  
 情報, 107  
 デフォルトのユーザーおよびグループ, 108  
 データの回復, 124  
 非アクティブなアカウントのアクティブ化,  
 114  
 役割の管理, 120  
 ユーザー, 111  
 ユーザー・アカウントの非アクティブ化,  
 114  
 ユーザー・アカウントの変更, 113  
 ユーザーの作成, 112  
 ネイティブ・ディレクトリ・データの回復,  
 124  
 ネイティブ・ディレクトリの更新を実行するオ  
 プション, 146  
 ネイティブ・ディレクトリの更新のインストー  
 ル, 144  
 ネイティブ・ディレクトリの更新の実行, 145  
 ネイティブ・ディレクトリの更新  
 アクション, 144  
 インストール, 144  
 オプション, 146  
 開始, 145  
 コーポレート・ディレクトリの変更, 142  
 情報, 139  
 製品情報, 147  
 ログ, 146  
 ネストされたグループ, 44  
 継承ポリシー, 116

## は行

配置場所, 44  
 バックアップ  
 OpenLDAP データベース, 124  
 表示  
 委任されたレポート, 106  
 ビュー・ペイン, 48  
 ブラウザの問題  
 JVM エラー, 48  
 ポップアップ・ブロック, 47  
 プロビジョニング  
 OpenLDAP データの回復, 125  
 委任された管理者, 101  
 概要, 17  
 グループ, 19, 130  
 データのインポート, 137  
 データのエクスポート, 137  
 ユーザー, 19, 130  
 プロビジョニング解除  
 グループ, 131  
 ユーザー, 131  
 プロビジョニング情報のコピー, 97  
 プロビジョニング・データのインポート, 137  
 プロビジョニング・データのエクスポート,  
 137  
 プロビジョニング・レポート, 134  
 変更  
 アプリケーション・グループ, 94  
 委任リスト, 104  
 グループ, 118  
 集約役割, 122  
 ユーザー, 113  
 ユーザー・ディレクトリ設定, 80  
 ホスト名検索, 64  
 ポップアップ・ブロック, 47

## ま行

命名ガイドライン  
 グループ, 116  
 役割, 121  
 ユーザー, 112

## や行

役割  
 Business Modeling, 173  
 Business Rules, 172  
 Data Integration Management, 175

ERP Integrator, 176  
 Essbase, 165  
 Essbase Studio, 166  
 FDM, 175  
 Financial Management, 169  
 Performance Management Architect, 169  
 Performance Scorecard, 174  
 Planning, 171  
 Profitability and Cost Management, 173, 197  
 Provider Services, 175, 217  
 Reporting and Analysis, 167  
 Shared Services 役割, 163  
 管理, 120  
 グループへの割当て, 130  
 グローバル, 18  
 集約, 19, 120  
 集約の更新, 122  
 集約の削除, 123  
 集約の作成, 121  
 事前定義済, 19  
 定義, 18  
 トランザクション・マネージャ, 174  
 ユーザーへの割当て, 130  
 割当ての除去, 131  
 ユーザー, 19  
 アカウントの非アクティブ化, 114  
 削除, 115  
 作成, 21, 112  
 ディレクトリ間の移動, 142  
 名前変更, 113  
 認証, 13  
 認証コンポーネント, 13  
 認証シナリオ, 15, 16  
 ネイティブ・ディレクトリでの管理, 111  
 非アクティブのアクティブ化, 114  
 プロビジョニング, 130  
 プロビジョニング解除, 131  
 変更, 113  
 命名ガイドライン, 112  
 ユーザー・アカウント  
 委任された管理, 101  
 ユーザー・アカウントのアクティブ化, 114  
 ユーザー・ディレクトリ  
 LDAP ベースの構成, 65  
 MSAD の構成, 65  
 NTLM 構成の変更, 83  
 Oracle Internet Directory の構成, 65

SAP の構成, 74  
 関連する操作, 63  
 グループの作成, 21  
 検索順から除去, 87  
 検索順の管理, 85  
 検索順の変更, 86  
 検索順への追加, 86  
 構成, 22  
 削除, 85  
 セキュリティ・オプション, 87  
 設定の編集, 80  
 接続のテスト, 79  
 定義, 14  
 特殊文字の使用, 89  
 ユーザーの作成, 21  
 リレーショナル・データベースの構成, 76  
 ユーザー・ディレクトリ設定の編集, 80  
 ユーザー・ディレクトリのテスト, 79  
 ユーザーの非アクティブ化, 114  
 ユーザー・プロビジョニング  
 別のアプリケーションへコピー, 97  
 ユーティリティ  
 ネイティブ・ディレクトリの更新, 139

## ら行

リレーショナル・データベース・プロバイダ  
 構成, 76  
 レポート  
 委任されたレポート, 106  
 監査  
 アーチファクト・レポート, 135  
 構成レポート, 135  
 セキュリティ・レポート, 135  
 プロビジョニング, 134  
 ロギング・レベル, 87  
 ログ  
 ネイティブ・ディレクトリの更新, 146